
救世主 メシア

マサムネ・ナルタキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救世主 メシア

【Nコード】

N0799W

【作者名】

マサムネ・ナルタキ

【あらすじ】

かつて、日本という国を恐怖のどん底に叩き落としたテロリスト集団、《未知》。

しかし、《名も無き子供たち》と呼ばれる十四人の天才を抱えていたその組織は、現代において英雄と謳われる二人の兄弟によって二年前、壊滅を余儀なくされた。そして。

大乱の英雄、樋浦京一郎が創設した特別戦後処理室 通称、『特室』に、《殺戮兵器》と呼ばれる、もう一人の英雄にして樋浦京一

郎の弟、樋浦宗次は在籍していた。

高校生という若さでありながら、死を振り撒く戦闘の天才。彼は兄が行方不明になった後も、戦いの傷跡が残る日本で戦い続けてきた。そして、戦乱から二年が経ったこの日に、新たな戦が幕を上げる。

それぞれの想いを抱いた天才たちの因果が交わり、少年は銃を握る。罪と贖い。戦の後を語る、SFファンタジー。

序章「特別戦後処理室」（前書き）

【特別戦後処理室】

名も無きテロリスト集団、《未知》 《アンノウン》の残党狩りのため、二年前に創設された組織。

元々は大乱の英雄、樋浦京一郎が創ったもので、治安維持局と呼ばれる対テロリスト組織の一角。構成員はわずか五名で、樋浦京一郎が行方不明である今、副室長の真田和人が指揮を執っている。

国際連合に設置される、特別暴力主義対策機関……通称、《イージス》直属の機関で、室長の樋浦京一郎や副室長の真田和人にはかなりの権限が与えられている。

二年が経った今は、主に残党を捕らえることと、論理の通じない凶悪犯たちを対象に活動している。暴力に対して暴力を。国が認められた暴力を持つ組織である。

樋浦宗次【誰もやらない。なら、俺たちがやるしかないだろう】

序章「特別戦後処理室」

—

ファンファンと、サイレンが鳴る。いつもなら静かなはずの場所も、今は騒音で騒がしくなっている。囲まれている建物は、廃墟だ。鉄骨とコンクリートがほとんど剥き出しになった、建設途中で放り出されたビル。

近隣住民からの苦情はない。まあ、機動隊まで出張っている上に頑強な護送車まで用意されているのだ。事がどれだけ大きいか、見たらおおよそ見当はつく。これだけ物々しい状況で苦情を言う奴は、流石にいないだろう。

そして、その現場では怒号が飛び交っている。

「特室の奴らはまだ来ないのか！」

「連絡によれば、今向かっていると……」

焦れた上司が怒鳴るのに、若干怯えながら部下が健気に答える。だが上司の思っていることはこの現場の誰もが思っていることなので、誰も異は唱えない。

こういうことを請け負うべき者たち。そいつらの到着を、誰もが待っている。

そして、一台のバイクが現場に現れる。

「……………」

誰もが、息を呑んだ。大型の二輪自動車だ。大排気量を誇る巨大な

エンジンが詰め込まれた車体は、車のようにも見える。安定感のある重い機体ゆえに鈍重そうな印象があるが、その気になればどのようなバイクにも速度では負けない特注品だ。

そしてこのバイクは、とある人物専用の特注品でもある。このバイクが来る時、一人の男が現れる。男は、バイクを降りて地面に降り立った。

「……………」

鬱陶しい。樋浦宗次ツルギノムネジツは現場に着いた途端、そんな感想を抱いた。ヘルメットを取り、周囲を見渡す。誰も彼もが、期待するような目で自分を見ている。

いつものことではあるが、どうにも慣れない。だがまあ、仕事はするべきだろう。

この仕事は、自分たちにしかできない仕事だ。

宗次は朝からの寝癖をそのままにしてある黒髪を一度掻き分け、近くの指揮を取っている刑事に話しかけた。

「遅れて申し訳ありません。状況はどうなっていますか？」

「ああ。犯人が人質を取って立て籠もっている。犯人は一人だが、拳銃を持っていて、迂闊に手を出せば人質が危ない」

「犯人の特徴は？」

宗次の簡潔な問いに、年配の刑事は頷いて答えた。

「金髪に、サングラスをかけたラフな格好の男だ。派手な金色のピアスをしている。人質の方は高校生だ。学生服を着ている、黒髪の少年。間違えることはまずないと言っていい」

「高校生、ですか」

「ああ。近隣の高校に通っていた学生でな。運悪く巻き込まれたよ
うだ」

どこか苛立たしげに、刑事は告げる。こんな血生臭い事件に高校生
の子供を関わらせるのが嫌なのだろう。それは、宗次も同意見だ。
まあ、宗次自身、学生であるのだが。

そして、だからこそ、と思う。自分のように血生臭い経験を、子供
にさせるべきではないと。心から、そう思う。

「わかりました。人質の安全は、命を懸けて守ります」

頷き、そう言つてまとめると、宗次はバイクに備え付けられたケー
スを開け、そこから二丁の拳銃を取り出した。弾倉も、しっかりと
上着の中に備えておく。

普通なら、二丁も拳銃を用意することはありえない。多少改正され
た法律でも、警官の持つ銃は一丁だけしか認められていない。
だが、誰も不審には思わない。

樋浦宗次。その怪物とまで呼ばれる実力を、誰もが認識している。
二年前まで起こっていた一種の戦争に参加していない者でも、警察
か軍隊に関わる者なら、誰でも知っている。
その異名と、戦歴を。

「一時間」

「は？」

銃の作動確認を手早くしながら、宗次は刑事に告げた。だが刑事は
意味がわからず、首を傾げている。

「一時間だけ任せてください。もし一時間経っても解決しなければ、

自分は死んでいるものと思って突入をお願いします」

「……ああ、わかった」

宗次のその物言いを半ば予測していたのか、刑事は頷いた。宗次の性格は広く知れ渡っている。このようなことはいつものことだ。

だが、年配である刑事は宗次に言い聞かせるように言った。

「だが、高校生であるキミが無茶をする必要はないぞ。必要なら、我々を頼って構わん。ここにいる全員が、高校生に頼りきるのを心苦しく思っているのだしな」

宗次はそれを聞き、無表情を微かに変化させたが、すぐに返答した。

「お気遣いはありがとうございます。ですが、これが自分の仕事ですので」

銃をそれぞれの手に持ち、歩き出しながら宗次は言う。

「自分にできることは、武力を持って武力を潰すこと。それだけしか、できません」

そう言っただけ現場の中心へと向かう宗次の道を遮る者は、誰もいない。そして、宗次が現場に向かうのを見送っていた刑事に、一人の若い警官が質問をする。

「彼は何者ですか？」

その質問に、刑事は若い警官に振り向かぬまま答えた。

「キリンゲ・ウエボシ『殺戮兵器』……二年前まで起こっていた、日本とテロリストの

戦争を終わらせた英雄、樋浦京一郎ひりゅうけいいちろうの弟だ。そして、彼は中学生の時、テロリスト集団《未知》アンノウンの幹部たちとたった一人で渡り合ったという伝説さえも残っている」

「そんなことがあり得るのですか？」

「信じるか信じないかは、キミの自由だ。だが、今から彼がすることを見れば、信じざるをえないだろう」

「それは」

「どうんっ!!」

若い警官の声は、轟く銃声によって掻き消された。戦闘の、始まりだった。

二

「なんなんだよ！ てめえはあああっ！」

完全に錯乱した金髪の男は、その手に持った銃を乱射し、決して広くない廃墟の中を動き回る宗次を撃とうとする。だが、当たらない。

宗次の動きは速い。人間にこんな動きができるのかと、疑いたいくらいだ。

そして、銃を持っただけの素人では、宗次の動きを捉えることはできない。銃弾を避けるように動きながら 実際には視線から外れるように動いているだけだが、金髪の男にはそう見えた 宗次は静かに告げる。

「何と言われても、高校生としか答えられないが」

宗次は銃を一切撃たず、射線から外れながら徐々に男に近付いていく。男は銃を撃とうとするが、すぐに弾が切れた。元々ただの拳銃である。そう弾が持つはずがない。

男は撃てなくなった銃と宗次を交互に見ると、尻餅をついて後ずさりを始めた。

「ひっ………！」

「弾切れか。拳銃を持ってきた意味はあまりなかったらしいな」

「くっ、来るな！」

「そう言われても、俺はお前を逮捕する必要がある。近付かないわけにはいかない」

淡々と、銃撃戦をしておきながら 一方的に金髪の男が撃つていただけだが 少しも感情を交えず、宗次は近付く。

だが、男は恐怖で後ずさりしながら、側で震えている少年を見つけた。

「ッ！」

男は、飛びつくように少年へと手を伸ばす。だが
だんっ！！

轟いた銃声が金髪の男の動きを止め、割り込むように銃弾が二人の間に突き刺さった。

「悪いが」

右手に持った拳銃の銃口から煙を吐き出させながら、宗次は淡々と告げた。

「人質に手を出した場合、生命の保証はしない。死にたくないなら、

大人しくしている」

「ひ……っ！」

金髪の男は、完全に戦意を喪失してこくこくと頷く。宗次はポケットから手錠を取り出すと、男を拘束し

「ああ、忘れていた」

顔を、殴り飛ばした。

「がつ……っ！」

突然のことに、金髪の男は全く反応できず、無様に顎を打ち抜かれ、昏倒する。その際に口を切ったのか、血を吐いていた。そこに運悪く居合わせることになった高校生の少年は、突然のことに目を白黒させる。

「これで勘弁しておいて欲しい」

床に転がった金髪の男を一瞥し、高校生の少年に宗次は視線を移した。突然のことに、少年は戸惑うだけだ。

宗次は銃を懐にしまいながら、淡々と告げた。

「キミを巻き込んだことも、この男は裁かれる。だが、銃刀法違反に加えてここに来る前にこの男は子供一人、射殺している。気に入らない話ではあると思うが、キミのことは置き去りにされる可能性が高い」

「え……っ？」

「生きている人間よりも、殺された人間の方が検察側においては必要ということだ。罪を重くするためにキミの事が上がることもある

だろうが、キミの事はすぐに忘れられる」

そこでようやく宗次の言っていることを理解したのか、少年は表情を変えた。だが、宗次の表情は相変わらず無表情なままだ。

この事件は、殺人犯の立て籠もりというものだ。

今日の正午。一人の男が五歳の男の子を拳銃で射殺した。理由は不明。ただその男は警官が駆けつける前に、補習で高校に出向いていた男子生徒一人を人質にし、廃墟へと立て籠もりを始めた。

だが何時間経つても犯人に動きはなく、人質がいるために突入もできなかった。

そこで呼ばれたのが特別戦後処理室、通称『特室』の構成員である宗次だ。宗次はその指示通りに現場に入り、制圧した。今回の顛末は、こんなところだ。

「だからと言ってはなんだが、これで水に流して欲しい。キミが望むというのなら、この男の顔面をキミが殴ってもいいが」

言いながら、宗次は寝転がっている男の首筋を掴んで片手で持ち上げる。宗次の体は細身だ。どこにそんな力があるのかと少年は思ったが、言わないことにした。

金髪の男は完全に白目を剥いていて、手錠で手を拘束されていて、口から血を滴らせていて、何というか……哀れだった。

「い、いいです」

首を振って少年が言う。いつの間にか、少年の心から恐怖は消えていた。

「そうか、キミがそれでいいなら構わない」

言つて、宗次は男を後方へ投げ捨てる。男は鈍い音と共に、顔面からコンクリートの床に激突した。……そこはかとなく、哀れである。宗次はそこから一切金髪の男に視線を向けず、ズボンのポケットから携帯電話を取り出し、外部と連絡を取り始めた。

「任務は完了しました」

『ご苦労。尋問については雄平ゆっへいが担当する。お前は一応、護送車に付いて万一に備えておけ。それが終われば、帰宅しても構わん』

いつも通りの口調、だが、いつもとは少し違う指令。普段なら、護送車に付いていけなどとこの男は言わない。そこは、自分たちの管轄ではない。

つまり、これは例外ということだ。自分たちの管轄だということを示している。

「了解。……それで、この男は黒なんですか？」

『それは尋問の結果次第だが……。雄平によると、そろそろ動くところらしい』

「そうですか……。なら、準備を進めておきます」

『そうしておけ。詳しいことは明日にでも雄平から聞いておくとい
い』

「はい。お疲れ様でした」

業務的に最後は締め括り、宗次は携帯電話を切った。そして男の首を掴んで引き摺りながら、少年に声をかける。

「とりあえず、今回の事件はこれで終わりだ。キミも少し話を聞かれるだろうが、すぐに解放されるよう手は打っておく。せっかくの

春休みだ。遊んでおいたほうがいい」

「あ、はい……」

やはり少年は気後れしている。まあ、当然のことだが。

宗次は廃墟を出る前に一度だけ振り返り、少年に言った。

「今日のことは忘れるといい。覚えていても、ろくなことになりはしない」

帰れる日常があること。それがどれだけ素晴らしいか、宗次は理解している。

平和からは程遠い場所で生きてきた宗次にとって、日常とは特別なものだ。もう二度と手に入らないくらいに、大切なものである。

宗次は男を引き渡し、少年の保護を頼むと、バイクに跨った。

護送車が発車する。話は聞いているのだろう。運転手は、一度宗次に手で合図を送り、車を走らせた。

宗次はその後を追いながら、小さく呟く。

「……いつになったら、俺は武器を捨てられる……？」

どこか、諦めたように。

序章「特別戦後処理室」（後書き）

主人公である樋浦宗次は、正直最強です……が、相手も相応の力を
持っており、同時に主人公の力を理解しているため、その本領が発
揮できない状況を用意することを考えていったことを覚えていきます。

続けて第一章を上げるので、よろしければそちらもご覧ください。

それなりに長くなるかと思いますが、お付き合いいただけると幸い
です。

ありがとうございました。

第一章「名も無き子供たち」（前書き）

【名も無き子供たち】（ネームレス・チルドレン）

二年前まで二年間日本で破壊活動をしていたテロリスト集団《未知》の幹部たちの総称。

第零番から第十三番までの十四人がおり、全員が当時十八歳以下だったことから、この名称が付けられている。日本の警察や軍隊と何度も衝突しているが、第零番の名前を除き、誰一人として正体は掴めていない。全員が異名で呼ばれている。

特別戦後処理室の任務は彼らの逮捕だが、公式的には誰一人として捕まっていない。

彼らは誰一人の例外なく、何かの能力に秀でていると言われている。重火器の扱い方、爆薬の扱い方、戦略的頭脳、高度な知能、異常なまでの身体能力など、天才としか思えない実力を誰もが有しており、それ故に日本も世界も彼らを恐れた。

大神美鈴【敵であったからこそ、どんな人たちだったか理解しています】

第一章「名も無き子供たち」

零

そこはどこかの、研究室だった。時間は既に夜の十時だというのに、まだ明かりが点いている。

真っ白な壁に、研究室にありがちな黒板と机。素人目には何のため
の道具なのか皆目見当も付かないような機械。だが、大量にあるそ
れらは綺麗に並べられていて、数が多い割には狭い印象はない。

本来なら数人の研究員がいる部屋なのだが、今ここに研究員はたっ
た一人しかいない。

「お茶、飲む？」

「……遠慮します」

「そう」

断られるのを予測していたのか、女性研究員は大して反応をみせな
かった。美しい女性だ。まだ二十ぐらいにしか見えないが、着てい
る白衣には『主任』という、実質この研究室でトップの地位にいる
ことを示す身分証がある。

身長はそこまで高くないのだが、メガネをかけた知的な印象が、ど
こか近寄りがたい雰囲気を醸し出している。黒髪を団子状に頭の後
ろでまとめていて、正にできる女といった風貌だ。

対して、来訪者は高校生ぐらいの少年だ。

髪の毛は全部真っ白で、癖のある髪だ。微妙に努力の後が窺えるが、
無駄だったらしい。もう四月で、学校は新学期となる時期だとい
うのに蒼いコートを羽織っている。身長は高く、百八十ぐらいはある。
鋭い眼光は、お茶を淹れている女性に向けられている。

「座つたら?」

「……遠慮します」

「そう」

お茶を入れながらのやる気なさげな女性の言葉に、少年は同じような返答を返す。女性も予測していたらしく、それ以上勧めることはなかった。

女性は自分の分だけお茶を淹れると椅子に座り、湯飲みを机の上に置いた。

沈黙が、二人の間に流れる。聞こえるのは、女性がお茶を啜る音だけ。

「今日は」

沈黙を心地よさそうに女性は享受していたが、沈黙に耐え切れず、少年は口を開いた。

「折り入って、相談があつて来ました」

「相談、ね。何かしら?」

どこか楽しそうに言い、女性は湯飲みを置いた。まるで、悪戯を思いついた子供のようだった。

少年はその瞳に飲まれまいとしながら、頷く。

「自分はもう一度、変えようと思います」

「もう一度?」

「あの人が変えようとして、果たせなかった悲願。この世界そのものの変革を、やろうと思っています」

「ふうん……」

曖昧に頷きながら、女性は湯飲みの茶を啜る。

これもまた予測できたことだ。この少年ならそう言うと思っていた。もう終わったことだというのに、哀れなくらいに繋がれているこの少年なら。

まあ、ついこの間までは自分もそうだったのだから、人のことは言えないのだが。

そして、だからこそ一応、無駄だと知りつつ説得を試みる。

「でも、この国は変わったわよ。愚かな政治家たちはわたしたちが一掃したし、腐った政治体制も法律も、脅したことによって変えたわ」

「ですが、それはこの国だけです。それにこの国はまた、腐り始めているじゃないですか」

「まあ、ね」

その言葉を聞いて、女性は苦笑した。実に、的を得ている。

そう、この国は再び腐りかけている。この国の人間は学習能力というものが欠如しているらしく、悪政、悪法はどうかしたが、根本的なものは変わらないのだ。

そういう意味では、この少年は真実を述べている。

(まあ、わたしは口下手だから)

説得してみようと思って一分弱。すぐに諦めた。自分にこのようなことは似合わない。

「だから自分は、世界を変えます。力を貸してください」

「……ま、昔の馴染みだしね。いいわ、これをあげる」

即断即決。最後まで予測できていた展開だったため、予め用意しておいた、袋に入った小瓶を女性は白衣のポケットから取り出した。

「感染率九八%、死亡率八七%……どれだけ試算しても、それ以下の結果は出ない、狂ったウイルスよ。作る気なんてなかったんだけどね。出来ちゃったものはしょうがないわ」

「でもこれ、液体じゃ……？」

袋を用心しながら摘み上げ、少年は言う。そう、中に入れられた小瓶は嚴重に密封されているが、液体なのだ。流石に、ウイルスが液体というのは中々聞くようなものではない。

だが女性はそんなことは当たり前とでもいうように、お茶を啜りながら言った。

「封じてるのよ。液体にして、ウイルスが沈黙するようにしてるの。まあ、常温で気化するからあんまり意味ないけど、そうしておけば瓶の中にある間は安心よ」

「そんなこと、可能なんですか？」

偶然出来上がったウイルスを封印するために、無理に液体化する。どんなタイプのウイルスかはわからないが、生物であるウイルスを死滅させないように液体化するなんてこと、普通にできることではないはずだ。

「可能か、ですって？」

だが女性は、その驚愕を嘲笑うように言った。

「このわたしに、ウイルス如きどうにもできないと思ってるのなら、それは侮辱よ。」
《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第十二番、ゆしきりみやび夕霧雅に対

する、ね」

かつて日本を恐怖のどん底に叩き込んだ、伝説の子供たち。その一角にして、医療方面において最も有能だったこの女性に、ウイルス如きどうにもできないわけがない。

それを理解し、少年が押し黙る。そして、ウイルスを受け取ると、一礼をして部屋を出て行こうとした。

「ああ、そうそう」

その背中に、雅は一つだけ伝え忘れていたことを伝える。

「そのウイルスの名前だけど ……」

ボタンと、扉が閉じられる。雅は一度背伸びをすると、急に鳴り出した携帯電話を手を取った。

「はい？」

『お、雅さん。今日暇ですか？』

「雄平くんじゃない。どうしたの？」

最初は面倒臭そうだったが、その声を聞いた途端、雅の表情が明るくなった。ここまで露骨だと、いつそ清々しい。

『デートのお誘い。どうです？ 今日？』

「嬉しい話だけど、今日呼び出されてるんじゃないの？ なんか、犯人が立て籠もってるとかってニュースがあっただけど」

思い出したように、雅は聞く。あの来訪者が来る前に見ていたニュースで、現場中継の女性がそんなことを言っていた。殺人犯が人質

を取って、廃墟に立て籠もっているとか。
ああいう凶悪な事件は、彼らの担当のはずだ。だが、雄平という少年は、軽い調子で切り返した。

『それはもうすぐ解決しますよ。うちのエース送り込んだんで』
「あー、なるほど」

エース。それが誰なのかは聞くまでもない。確かに彼らのエースの実力は圧倒的だ。それを思い出し、雅は苦笑した。
きっとあの犯人はただでは済まないのだろう、と思つて。
そして、その予測はおおむね当たっている。
相手は和やかに、言葉からもわかるくらい嬉しそうに話しかけてくる。

『なんで、デートをと。最近会えてませんでしたし』
「どっちも忙しいからね。ところで、プライベートと仕事の割合は？」
『残念ながら、八対二つてところです』

どこか残念そうに、彼は言う。きっと、彼としては十割プライベートがいいのだろう。自分としても、その方がいい。
だが、自分たちの立場から考えると、それは難しいと言わざるを得ない。

この国に牙を剥いた、自分たちでは。
そこで雅は暗くなりかけた思考を中断し、相手に聞いた。

「じゃあ、どこで？」

『貧乏学生にフランス料理とかは厳しいんで、例の居酒屋で』

「高校生がお酒飲んでいいの？」

『ウーロン茶で我慢します』

他愛の無い、いつも通りのやり取り。雅自身、高級料理は苦手なので 同僚によく誘われるのだが、いつも断る 雄平が誘ってくるような、気安いところのほうがいい。

雅は白衣を脱ぎ捨て、私服になる。地味ではあるが、雅自身がかなりの美人であるため、地味であることがそれを際立たせている。

電話の相手はそれを聞いて全部察したのか、楽しそうに告げてきた。

『ではでは、いつも通りの場所で』

「ええ。しっかりとエスコートしてね」

『無論です』

そう言うと、相手は電話を切った。雅も通話を切り、少し弾んだ気持ちで鞆に携帯電話と私物をしまつ。と、そこで、

「あれ？ 夕霧さん。お帰りですか？」

同僚の、若い研究員の男性が入ってきた。おそらく、調べものでもしていたのだろう。

「ええ。これからデートです」

「羨ましいですね。相手は？」

「秘密です」

悪戯っぽく笑い、雅は部屋を出ようとする。その背中に、若い研究員の男が質問を飛ばしてきた。

「夕霧さん。これ、何でしょうか？」

そう言って男が手にしているのは、先程来訪者にあげた、袋入りの

瓶と同じものだった。

雅はそれを見ると、微笑を浮かべて言った。

「例の殺人ウイルスです。まあ、完全に死滅させてありますが」

そして今度こそ、雅は研究室を出た。

その後から、テレビの音が聞こえた。例の犯人が、捕まったという内容だった。

—

春の陽気が心地よい。風も暖かく、一気に眠気を誘ってくる。

時折、風に乗って体育館で行われている始業式の声が聞こえるのだが、校長先生の話というのはどの学校も総じて長いのだろうか。

まだ終わりを見せない。

もともと、参加せずに屋上で昼寝をしている樋浦宗次（トウプツグジ）には関係なかったが。

「ん……くあ……」

体を起こすと、思わず言葉が漏れる。そして、宗次は立ち上がった。ある程度寝れたことで、疲れが取れた。宗次は体の状態の確認をし、背伸びをする。

寝癖をそのままにした、ぐちゃぐちゃの髪型。『日替わりヘアースタイル』とかいう、わけのわからない異名を授けられる黒髪は、今日も元気に飛び跳ねている。

百七十半ばといった身長。眠たそうな黒い瞳。腕章が示すのは、三年生。しかも腕章の中には、『生徒会』というマークも入っている。

新三年生の十七歳。見た目だけならどこにでもいそつな少年だ。

「一時間ぐらいか」

立ち上がり、チャイムの音を聞きながら宗次は腕時計で時間を確認する。寝ていたのは一時間ぐらいらしい。まあ、終業式など毎年同じことしかやってないから、別にどうでもいい。

今日は終業式の後、クラス替えが発表される。その後は、生徒会の会議があつたはずだ。

(面倒だな)

そんな感想を漏らしながら、宗次は屋上から降りていく。飛び降りたところで、四階分ぐらいの高さなら死にはしないが、そんなことをする意味がないのでしない。

階段を降り、中庭へと向かう。全校千人強の生徒を抱える学校だ。一クラス四十人弱で十クラス。そのクラス分けが、中庭に張り出されている。

宗次が着くと、既にそこには全学年の生徒が集まつており、様々な感想を漏らしていた。

『やったあ！ あたしたち、また同じクラスだね！』

『うん！ よろしくね！』

『ド畜生！ 丹羽さんとクラスが違うじゃねえか！』

『諦めろつて。お前如きじゃ、丹羽さんは落とせねえから』

『そうそう。丹羽さんには、樋浦宗次つて彼氏が』

……………ん？

なんだろう。今、俺の名前が出た気がしたが。

『でもお前、樋浦の野郎には足立あたちがいるじゃん？ 幼馴染とかいう』

『あ、そういうやそうだな』

『だろ？ 二股か？』

『そんな器用な奴には見えねえけどなあ……』

……どうして、本人がいないところで勝手な憶測を飛ばしまくるのだろうか。

宗次はため息を吐いて、話し込んでいる男子生徒の側まで歩いていく。知らない顔もあったが、知っている顔もあった。

「げ！ 樋浦！」

「げ、とは何だ。それより、俺の名前が出ていた気がしたが、気のせいかな？」

「気のせい気のせい。てか、お前何組だった？」

誤魔化すように笑いながら、話題を逸らそうと男子生徒の一人が聞いてくる。追求してやろうかと思ったが、面倒臭くなりそうなのでやめておいた。

「いや、まだ見ていない。見てくる」

「おう」

適当にそんな会話を交わして、宗次はクラス替えの紙が貼られているところまで歩いていく。樋浦宗次は有名人だが、嫌われているわけではない。

校内を歩いていけば大抵の奴らが声をかけてくるし、教師も向こうから声をかけてくるぐらいだ。別段何かをしたわけではないが、誰も彼も宗次の経歴を知っている。

そして、だからこそ生徒会なんてものに関わらされているので、本人としては鬱陶しいことこの上ない状況なのだ。

「さて、どのクラスだ？」

別にどんなクラスでも、やることは変わらない。この学校、実は大
学もエスカレーター式の私立校なのである。大学の敷地はすぐ側に
あり、合同のイベントも多い。

そのため、一部の者たちを除けば受験勉強という勉強をする者は少
ないのが現実だ。

ただ、この学校の勉強のレベル自体が結構高いので、留年したくな
ければそれなりに頑張らなければならない。

なので結局、『やることは変わらない』のである。

宗次は人垣に入り込みながら、張り出された紙を遠目に視認する。

「……D組か」

A組から順番に見ていくと、そこで自分の名前を発見した。ついで
に、クラスメイトの名前も頭に叩き込んでいく。この学校は完全に
ランダムにクラス替えをするため、知らない名前が結構多い。

「……それにしても」

自分のクラスメイトたちの名前を確認し、宗次は呟く。

「三年生の生徒会メンバーが全員揃ってるのは、陰謀か何かか？」

この学園、弥生学園は勉学以外に関してはかなりの放任主義が目立
つ学園である。学校行事のほとんどは生徒会に一任されていて、宗
次はその生徒会の一員である。

厳密に言えば、生徒は学園にいる以上必ず生徒会に所属しており、
宗次が所属する組織は生徒会本部と呼ばれるわけだが、まあそれは

どうでもいい。

この学園にある生徒会は、僅か六名で活動をしている。三年生が三人と、二年生が三人だ。宗次は、三年生三人のうちの一人になる。そして、三年D組には他の二人の名前があるのだ。

(まあ、別に問題視するようなことでもないか)

別にそれぐらい、偶然で済ませられる内容だ。高いわけではないが、ありえない数字ではない。まあ、生徒会長が手を回した可能性もあるのだが。

まあ結局はどうでもいい。宗次がそう結論付け、歩き出そうとした時。

『自分のクラスを確認した生徒は、教室に向かいなさい。HRが始まります』

拡声器を使った教師の声が聞こえてきた。生徒指導部の体育教師、太田教諭だ。『雷神』と呼ばれる、熱血教師。

実際、怒った時の説教は雷みたいだから、的を得ている。

『面倒くせ〜』

『だるいな〜』

口々に文句を言いながらも、結局教室を目指すのは真面目だと思う。宗次も、頭を掻きながらその列に紛れ込む。

「あ、宗次〜！」

「見つけた」

だが、やたらとハイテンションな声とその逆、かなり冷静な声でそ

の足を止めざるを得なかった。

「千里と鏡花か。そういえば、同じクラスだったな」

声が出た方を振り返り、宗次は二人の許に近付いていく。

ハイテンションで、活発そうに黒い髪を短くしている少女は、足立千里。宗次にとっては幼馴染であり、幼少時から知っている相手だ。常に元気一杯で、男女両方から人気がある。成績は少々難ありだが、運動神経はいい。身長が百七十前後もあり、運動系の少女だ。

その隣にいる、身長が百五十後半ぐらいの長い髪をした小柄な少女は、丹羽鏡花。常に冷静沈着で、宗次とは仕事を共にする仲間の一人である。成績優秀で、実は運動能力も高いのだが、学内でそれを発揮することはまずない。生徒会の一員である。

この二人が宗次に声をかけるのはいつものことなのだが、宗次は二人の側に行く途中、多くの男子生徒に睨まれた。

『見る。二股じゃねえか』

『ありえねー。セレブかあいつ？』

『どんなセレブだ？ それ？』

……とりあえず、無視。面倒なので。

「宗次、始業式サボったでしょ。後で呼び出されるかもね」

楽しみに千里が言う。宗次は、顔を押しさえて呻いた。

「……何故そんな面倒臭いことになっているんだ？」

「宗次は有名人だから。先生たちもつい探そうとする」

独特の話し方で補足してくれるのは鏡花だ。宗次は、それで納得し

た。

樋浦宗次の名は、この学園においては異常に有名だ。仕方ないといえど仕方ないのだが、入学したばかりの頃はそのせいで色々絡まれることが多かった。

今は大分マシになったが、それでも、樋浦宗次という人物の名は大きい。

当時中学生だった彼が成し遂げたことは、それだけ大きいものだから仕方ないといえば仕方ないのだが、本人からすれば鬱陶しいことこの上ない。

それを察してか、千里がバンバンと宗次の背中を叩いて快活に笑った。

「まあ、宗次なら適当な理由つけて許してもらえらるって！ 大丈夫大丈夫！」

「うん。そう思う」

鏡花も頷く。この二人に言われると、なんだか安心できるから不思議だ。

「ありがとう」

苦笑しながら、宗次は礼を言う。二人が言っていることは本当のことだ。校内で生徒を殺したとしても、宗次はきっと停学程度で済むだろう。

それぐらい、この学園は宗次を溺愛している。いや、恐れているというべきかもしれない。宗次に何かがあれば、被害を被るのはこの学園になるのだから。

「面倒だ」

それを改めて確認し、宗次は二人に聞こえないように呟いた。このしがらみを、鬱陶しく思うことが何度もある。だが、捨てられない。捨てることはできない。これは、自分にしかできないことから。

「……いつか、俺は」

その先の呟きは、言葉にならず、宗次の口の中で消え失せた。

二

「つーわけで、昨日はお疲れ。おかげでおれは雅さんと気持ちよくデートできた」

開口一番、この部屋の主である茶髪の少年はそう言った。同時に、入ってきた宗次と鏡花の二人に昨日の事件の資料を渡す。

「……まさかとは思うが、昨日現場に俺だけを行かせたのはデートのためか？」

「当たり前だったの。まあ、鏡花は睡眠不足になったらヤバイし、お前さんみたいな足も持つてない。それに、昨日の事件はお前さん一人で十分だっただろう？」

「まあ、そうだな」

同意し、その後どうなったのかを確認する。あの程度の犯罪者、わざわざ特室の兵隊二人を向かわせる意味はない。あの場面では、狙撃手は必要なかった。

必要だったのは、人間兵器ただ一人だけ。

そして、それを確認してからこの学園の生徒会長は言葉を続ける。

「つつても、プライベート十割ってわけじゃないんだけどな。おれとしちゃあ、是非そうしたいんだけどさ。まあ、変な話。おれは特室の一員って言っても、《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンだから。おれも、雅さんも」

「ああ、その通りだ。俺は三人とも信用しているんだが、国のお偉い方はこれっぽっちも信用していない」

「そうなんだよ。ま、しゃあねえけどさ。おれたちがやったことは、相当酷いことだったし、おれはそれを自覚してる」

そう言つて、元《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンの頭脳は苦笑する。そちらから視線を移し、宗次は鏡花を見るが、俯いていて、表情を読めなかった。

弥生学園生徒会長、高岡雄平。たかおかゆうへい元《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン第二番。公式的には、テロリスト組織《未知》アンノウの幹部であった《名も無き子供たち》チルドレン十四人は、誰一人として捕まっていない。だが現実には、三名が見つかつていて、その内二名は特別戦後処理室の構成員として活躍している。

《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン第二番、《指揮者》コンダクター高岡雄平。
《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン第八番、《射手座》サジタリアス丹羽鏡花。

二年前まで、日本で破壊活動を行っていたテロリスト集団の幹部であった二人は、二年前、もう一人の《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンと共に組織を裏切った。理由は二人とも語らないが、それがきっかけで大規模な戦闘に発展し、組織は壊滅した。

向こうにとっては裏切り者でも、こちらにとっては味方だ。だが、未だに二人は厳しい監視下にある。知る者は極少数だが、恐怖の対

象には違いない。

「ま、いいや。そのうち何とかなるだろうってことで、おれは我慢するさね」

「仕方ない。自分たちで、起こしたこと」

「そーいうことだな。……ほんじゃ、二年の奴らが来る前にとつとと説明すんぞ」

そうやって、雄平は資料から一枚の紙を取り出す。そこには、宗次が昨日の夜に捕らえた男の写真と、細かな記述がされていた。それをひらひらと振りながら、雄平は言う。

「お前さんが捕らえたこのポケナスなんだが……かなーり重要な人物だった」

「俺が相對した時には、とてもそうは感じなかったが」

昨日のことを思い出しながら、雄一は言う。自分が出て行っただけであんなに錯乱するような奴が、とても重要な人物とは思えない。だが雄平はいや、と付け加えて続きを話し始めた。

「人間的には文字通り、ヘタレだよ。ま、重要っても使い走りだ。おれたちに向けた、宣戦布告の文を持ってやがったってだけ」

「宣戦布告……どこかの、テロ組織？」

鏡花が質問する。特別戦後処理室は元々、《未知》^{アンノウ}という組織の一掃のために作られた組織だ。だが今は、その様相を変えてきている。警察が対処し難い、凶悪犯の掃討。二年前より急激に増えてきた、テロ組織の活動。

元々の役目自体が先の見えないものであり、成果も中々上がらないものだったため、仕事内容はこれらに対抗することに変更された。

そのため、特別戦後処理室はテロ集団の目の敵とでもいうものになっているのである。

雄平は鏡花の言葉に頷き、紙を机に置きながら言う。

「まあ、そうといえはそうだな。つっても、今回はいつもの雑魚とは話が違う」

「雑魚ではない、なら」

呟くように宗次が言い、視線を雄平に向ける。雄平は、薄く笑った。

「そうだ。《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンを名乗ってる。おれたちの名を名乗ることは、本物以外では禁忌だ。偽者が名乗った時、殺される」

「ああ。知っている」

「世界最悪の天才たちの集団だ。更に言えば、日本で公式上、初めてテロ活動を行った集団だからな。神聖視されてんだろっさ」

肩を竦め、雄平は苦笑する。《未知》アンノウンと《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンは、消えた今でさえ、それだけの影響力を持っている。その名を騙った者が偽者だった時、裏側で殺されるぐらいに神聖視されているのも事実だ。

そして雄平は、こうなることを予見していたらしい。宗次は、それを確認するために問いかけた。

「雄平。予測していたと聞いたが、どうしてだ？」

「聞いたって……ああ、真田まなたのおやつさんか。まあ、正直そろそろだと思ってたさ。仲間内にやり直そうと思ってそうな奴は何人かいるだろうし、準備期間も考えれば壊滅して二年経った今ぐらいだろ」
「その予測が当たったということか」

感心しながら、宗次は言う。《指揮者》コンダクターなどと呼ばれているこの男

は、その辺の大人数百人分の演算速度を持っている。圧倒的なまでの頭脳故に、戦闘能力が一番低いにも関わらず、第二番の席に着いていた。

だが雄平はいや、と手を左右に振り、謙遜するように言った。

「これぐらいはまあ、予測できることだよ。ただなあ……誰が出てくるかは見当がつかないんだなー、これが」

「わからないのか？」

宗次がそう返すと、肩を竦めて雄平は頷いた。

「おれと鏡花は結構恨み買ってるはず。裏切り者だしな。まあ、そうとわかって裏切ったわけだし、自分のしたことは自分で後始末するさね。いつも通り、刃を持たぬ戦いつてやつをやってやるさ」

そこで初めて、雄平の笑みの種類が、劇的に変化した。

さっきまでは苦笑やら、いつも通りの愛想笑いばかりだったはずなのに、今の雄平の笑顔は、違った。

凶悪な、残酷な笑みだった。

その頭脳の回転と、僅かな動き。惨劇の指揮をその二つだけで執ってきた男に相応しい笑みだ。この男なら、銃に囲まれても生きて生還するだろう。

高岡雄平という男は、口三味線だけでどんな戦場でも生き抜いた男なのだから。

「私も、戦う。私たちは間違ってるって、みんなに教える」

鏡花も、強い意志を持って呟く。口数の少ない、この少女にも勿論理由がある。

戦場で何十人、何百人と殺してきた少女。何を思っただけでそのようなこ

とを繰り返し、何を思っただけで裏切ったのか。それはわからない。だから、宗次にできることは二人を信じることだけだ。雄平は鏡花の言葉を聞き、楽しそうに笑う。

「久しぶりだな。鏡花が感情を表に出すところは」

「……………」

「睨むなって。別に变だと思ってるわけじゃないしさ。俺は雅さん一筋だから、手え出すつもりもないし」

両手を挙げ、降参のようなポーズをとり、雄平は言う。平気な風にあざむきながら、鏡花の眼光の鋭さは半端ではない。普通なら萎縮するところだ。

だが雄平はもちろん、宗次も慣れてるので別に問題はない。

そして雄平は仕切り直すように手を叩くと、今度は宗次へと視線を向けた。

「だがまあ、こちらの方は予想できるんだ。裏切りをどうこう言いそうな奴は、心底あの人に陶醉していた第七、十、十一あたりの三人ぐらいしかいないはずだしな。第零、一、四、十三なんかはありえないと断言できる」

うんうんと頷き、雄平は続ける。

「でもこっちはお前さんがいるんだな、これが」

「俺に何かあるということか？」

予想外のことだったため、宗次は思わず聞き返す。雄平は、苦笑した。

「お前さんは、おれたちを潰した男だ。理由は様々だが、あの場所

でしか望みを叶えられないからこそ、おれたちはあの場所にいたわけだ」

そこで雄平は、右手で銃の形を作り、宗次の額に突きつける。

「必要だったものを壊されたんだ。恨まれても仕方ないさね。そう思うだろ？」

「ああ。思う」

宗次は、即答した。流石に雄平も予想外だったようで、驚きの表情を見せる。

「だから、そういうことなら受けて立とう。俺の全身全霊、全武力を持って、返り討ちにしてやる。それがせめてもの手向けだ」

ずっと抱いていたことを、宗次は告げる。雄平の目に、凶悪な色が宿った。

「……いいな。それはいい。味方であるのが残念だよ。是非敵になりたいと思うくらいに、今のお前さんは敵として魅力的に思える」
「ならそうなるか？」

二人の間に、一触即発の空気が漂う。鏡花は、ただ冷静な目で二人を見つめていた。

そして、先に動いたのは雄平だった。だが、戦おうとしたわけではない。手をどけて、宗次から少し離れた。

「是非って言いたいつちゃあ、言いたいんだけどな。おれは絶対に雅さんを巻き込むつもりはない。お前さんを敵に回せば、雅さんの今の生活にも支障が出る。それはおれとしちゃあ一番避けたい」

「そうか。だが、裏切る時は用心しておいた方がいい。裏切り者には、容赦しない」

「肝に銘じとくよ」

楽しそうに笑いながら、雄平は頷いた。鏡花は、呼吸を止めていたことにそこで初めて気付いた。二人の間に漂っていた空気に、知らず知らずのうちに怯えていたらしい。

宗次は相変わらずの無表情で、先を促す。

「それで結局、宣戦布告の内容は」

『遅れてすいませーん!』

だがその言葉は、遅れてきた二年生の生徒によって掻き消された。雄平は指を一本立てて口の前に持つてくると、宗次と鏡花に目配せする。

宗次は頷き、広げていた資料をまとめ、シュレッダーに叩き込んだ。鏡花の分もまとめやっておく。既に資料の内容は、頭に叩き込んであった。

「あれ？ 今の資料、何です？」

流石に不審に思い、二年生三人組のうちの一人が聞いてくる。雄平は笑って、

「おれが作った学年別、モテる男ランキングだ。門外不出の超極秘事項だからな。お前たちの目には晒せない。勘弁しといてくれ」

「うわ、めっちゃ気になるじゃないですか」

「いずれ見せてやるから、今は会議だ。さっさと予算決めるぞ」

雄平はそう言うと、手招きして二年生たちを座らせる。程なくして、

生徒会の会議が始まった。
そして、その数分後。

会議が終了した時、一本の電話が宗次の携帯電話に入った。

三

「あ、宗次！ 何してんの？」
「時間潰しだ」

駆け寄ってきた千里に、宗次は無愛想に応じる。一部の女子からクールととられる宗次の無愛想さだが、これは仕方なく身に付いたものだ。戦場でいちいち感情を表しては、命が持たない。そのため、宗次は感情を封じ込めるようになった。

昔はよく笑う子供だったが、十年前、自らの兄に人間兵器となるように教育を施され始めてから、感情が表情から消え始めた。そして千里は、そうなる前の宗次を知る数少ない人物でもある。

「時間潰しって、どうして？」
「副室長のお達しだ。俺のバイクを届けるから、それまで学校で待っておけとのことらしい。一体、何をさせるつもりなんだろうな」
「……そっか、まだあの仕事してるんだ」
「あそこにしか、俺の居場所はない」

隣で俯く千里に、宗次は淡々と答える。そう、あそこにしか、《殺^{キリ}戮兵器^{シゲ・ウエボン}》と呼ばれる人間兵器のいられる場所はない。
対《名も無き子供たち^{ネムレス・チルドレン}》用決戦兵器、樋浦宗次。それが、宗次に課せられたものだ。

圧倒的な力を有する個人に対して、常識を超えた訓練で手に入れた

規格外の力を持つ怪物をぶつけることが、一番合理的だと宗次の兄は決め、宗次はそうあるように訓練された。

宗次の兄は、弟を兵器へと育て上げた。

己の邪魔をする者たち、それらを自らの手を汚さずに退けるために、己のためだけに、宗次の兄は弟を兵器にした。

「俺は兄貴を恨んではない。むしろ、感謝しているくらいだ」

自分の掌を見ながら、宗次は言う。皮が剥け、治ることを繰り返した皮膚は、ボロボロだ。服で覆っている体にも、いくつもの傷がある。

「俺が一人で生きていくために、力を残してくれた」

「でもさ、宗次はもう少し自分の体を労わったほうがいいよ」

いつもの元気を失くして、千里はか細い声で言った。

「昨日の事件だって、解決したの宗次でしょ？ 無茶ばかりしてるじゃない」

「……あれぐらいで無茶と言われたら、俺は何もできないが」

冷静に宗次は言う。実際、あの程度のことはいつものことだ。

銃を持った奴の相手をするには、宗次にしてみれば日常の延長線上でしかない。それだけ、戦場というものに長く関わり過ぎた。日常を送ることが、怖くなるくらいに。

だが千里はその言葉が納得できないらしく、宗次の頬を両手で思いつきり両側に引っ張り始めた。

「……いひゃいんはが（痛いんだが）」

「うるさい！ この朴念仁！ いいから無茶しないで！」

「ひよのひゃあい（この場合）、むひゃをしてるのはおまへひゃ）無茶をしているのはお前だ」

どこまでも無愛想を通す宗次と、喚くように叫ぶ千里。

そんな微笑ましいやり取りは、実は校門前で展開されていたりする。だが、二人は自分たちのやり取りに必死で、周囲が笑っていることに気付かない。

仲の良いカップルのような雰囲気二人は醸し出していたが、不意に、宗次の体が大きく傾いた。不意を衝かれて、宗次の頬を引つ張っていた千里の手が離れる。

「宗次苛めるの、ダメ」

そこにいたのは、鏡花だった。宗次の腕を、斜め後ろから引つ張っている。

「鏡花か。どうし」

「鏡花ちゃん。これは苛めてるんじゃないの。教育してるのよ」

「抜け駆け、許さない」

宗次が鏡花の方を向き、何かを言おうとしたが、二人の言葉に遮られた。

「抜け駆けって……人のこと言えた立場なの？ この間、三日間も二人つきりで張り込んだって聞いたけど？」

「何の話かわからない」

宗次も、何のことを言っているのかわからない。そういえば、鏡花と三日間ほど張り込みの仕事をした記憶があるが……それと関係あるのだろうか？

……などと思考している間に、宗次の体が痛みを訴えてきた。

「ちょっと待て二人とも。左右から引つ張るな」

「渡さないわよ！」

「渡さない」

「いや、何をだ？」

冷静な宗次のつつこみは、またしても無視される。一体、何が起きているというのだろうか？

「おお、面白いことになってるな」

とそこで、騒ぎを聞きつけたのであろう更にややこしい男が現れた。

「雄平。助けてくれ。手がもげる」

冷静な口調で宗次は助けを求める。表面上は余裕が見て取れるが、その額には脂汗が浮かんでいる。実は結構痛いのだ。

「んー、だが楽しそうだし。邪魔しちゃ悪いさね」

「お前……悪ノリしているだろう」

「いつものことだって。……とは言ったものの、校門でこれ以上騒がれるのもなんだしな。生徒指導の雷神あたりが出てくる前に止めておくか」

何かを確認するように周囲を見渡しながら、後半部分を小声で言っ
て雄平は一人で頷く。そして、二人の許に歩んで行った。
そして、声をかける。

「あー、お二人さん」

その声を聞き、二人は雄平を睨む。普通なら気後れしてしまいそうだが、全く意に介さない雄平はニヤニヤと楽しそうに二人に言った。

「周り、見てみ？」

「あつ……………」

「う……………」

それedyouやく、二人は気付いたらしい。自分たちを見つめる、数多くの視線に。

「気持ちはわからんでもない。だがま、場所を選んだ方がいい。いつものことだけどな」

「……………」

「……………」

二人とも、ほぼ同時に手を離す。正直危なかった。これ以上やられていけば、宗次の体は二つに分かれていたところだ。そんな風に宗次が体の感触を確かめっていると、

「今回は引き分けね」

「次は、負けない」

そんな声が聞こえてきた。……………まだ何か争うつもりだろうか？

それにしても、この二人がライバル関係なのはいつも争っているから知っていたが、いい加減巻き込むのは勘弁して欲しいと宗次は思う。普段は仲がいいのに、突然自分の近くで争いを始めるのだからたまったものではない。

その宗次に、雄平が楽しそうに話しかけてくる。

「いやいや、大変さね。お前さんも」
「何がだ？」

からかうように雄平は言っているのだが、何が大変なのかわからない。確かに巻き込まれたことは大変だったが、偶然だろう。雄平は、そんな宗次の様子を見て驚きながら言った。

「いやまさか、こんだけ露骨なのに気付いてない？」
「だから何の話だ？」

「あー、いやいや。これだけ露骨なのに気付かないとかありえんな。あの二人も苦勞するさね。こりゃ大変だ」

ま、俺の知ったことじゃないけどな。そう言い残して、雄平はどこかへ行ってしまった。相変わらず、よくわからない男だ。

宗次はその背中を見送り、外へと目を向ける。しばらく待つと、ようやく到着した。

大型トラックだ。背にはそれこそ車でも入りそうなぐらいのコンテナが積んであり、少なくとも学校の前に来るような車ではない威圧感を持っている。

その運転席から、一人の男が降りてきた。作業衣を着た男だ。

「真田副室長より、言伝がある」

「何ですか？」

「今すぐ、指定の場所へ向かえとのことだ」

言って、その男が白い封筒を手渡ししてくる。宗次はそれを受け取ると、コンテナの方へと歩き出した。

特別戦後処理室 特室には、異常と言ってもいいほどの権限が与えられている。その中の一つが、『所属部署にかかわらず、強制的に協力させることを許す』。つまり、警察関連の人材なら、誰で

も使えるというものがある。

だから、今回のようなことはいつものことだ。強制的に使い走りをさせられた男たちは少し可哀想だが、まあ別にどうでもいい。

「……………」

封を破り、中に入っていた一枚の紙を見る。簡単なことしか書かれていなかったが、それで十分だ。宗次はコンテナの中から既に出されていたバイクに跨り、ヘルメットを装着する。

「おい、宗次」

「ん？」

エンジンを動かし、いつでも発進できるようにしたところで、再び雄平が現れた。先程どこかへ行ったはずのくせに、神出鬼没な男である。

「今回の件は、結構ヤバイ。いくらお前さんでも、手を抜けば死ぬからそのつもりでいろ」

「お前がそれだけ言うのは珍しいな」

「できれば友人の死体回収なんてことは勘弁したいからな」

肩を竦め、雄平は言う。……本当に、読めない男だ。

「俺が死ぬと思うのか？」

だから宗次は、いつも通り問いかける。

「いんや、全く」

雄平も、いつも通り頷いた。

「宗次！ すぐに帰ってきなさいよ！」

「待ってるから」

千里と鏡花の二人も、宗次を見送ろうとしている。学校から直接仕事に行く時の、いつもの光景だ。

「ああ。行ってくる」

片手を挙げ、短くそう言ってから、宗次はアクセルをひねった。

爆音を響かせ、常識外の馬力を持つバイクは、一瞬で速度を上げる。その後姿を、三人は見送っていた。

西暦2032年4月10日。

その日に、日常は姿を変えた。

だがそれをまだ知らぬ少年は、ただただ、前を向いて未来を夢見る。

四

その質量に相応しい音を響かせるバイクが、壊れた市街を駆け抜ける。

うるさいわけではない。普通の都会を走っているなら、その車体を見て驚かれることはあれど、騒音にはならないであろう程度の音だ。だが、廃墟と呼んでもいいようなその場所では、その音が嫌に響き渡る。

「……………」

宗次は、ただ無言でバイクを走らせる。この廃墟を作り出した者の一人ではあるが、そんなことは今更のことだ。

二年前の、最終決戦とも呼べる戦い。そこで生まれた廃墟たち。

静かなその場所をしばらく進み、宗次はバイクを止めてエンジンを切った。そして指定された廃ビルの中へと入っていく。昨日の夜の廃墟と同じ雰囲気だ。コンクリートと鉄骨がところどころ剥き出しになっている。

だが、一部窓ガラスが残っているところを考えるとまだマシンように思える。

宗次は非常階段の扉を慎重に開け、ゆっくりと外に出る。拳銃はいつも通り二丁持って来ているが、抜く前に殺されては何の意味もない。

気配はない。屋上から微かに一人分感じるくらいだが、用心に用心を重ねた方がいい。

もっとも、宗次が気付かないような相手などそうそういないのだが。

「……………」

不意に、宗次の足が止まる。音を立てぬように階段を上っていた宗次の耳に、音色が届いたのだ。

「歌……………」

思わず、宗次は呟く。そう、それは歌だった。

哀しく、虚しく、寂しい旋律。まるでこの廃墟に向けた、もしくはこの場所で死に絶えた者たちへ捧げるような、鎮魂歌のような歌だった。

宗次はただ黙して、その歌の歌い手がいる場所を目指す。

まるで、誘われるように。宗次は、ゆつくりと歩を進める。

……

……

今はただ遠くにいる貴方へ

私を置いていった貴方へ

私は弱く 愚かです

だから貴方と共にありたい

だというのに それは許されぬことですか

……

……

その旋律は、ひどく懐かしいものだった。

心の奥底に封印されていた、淡い記憶。それが戻ってくるような気がした。

宗次は、屋上へと足を進めていく。

……

……

この手は血に この体は罪に塗れて

もう帰らぬ日々がただ懐かしく

嗚呼 どこまで行けばよいのでしょうか

どこまで歩けば私は許されるのでしょうか

失われた過去へ

失われた現在へ

もう訪れぬ未来へ

手に入らぬものばかりが美しく

我が手に何も無きは何かの罪でしょうか

……

……

それは、すべてに絶望した戦士の歌だった。

戦い、傷つき、それでも尚未来を夢見ながら戦った戦士が、己の掌に何一つ残っていないことに気付き、もう返らぬ日々と大切な人を想い、嘆く歌。

その姿が己と重なって、宗次は、無意識のうちに拳を握り締めた。

「……………」

屋上へと続く扉を、音を立てずに宗次は開ける。風が、宗次の体を撫でた。

夕日に照らされた屋上で、一人の少女が、歌っていた。

……………

嗚呼 どんなに強き力があれど

どんなに気高き誇りがあれど

ただ独りであるならば この力に意味などない
だから望もつただ一心に

私は

……………

……………

「修羅の道をも歩んでくれる、気高き貴方を」

最後のフレーズを、宗次は小さく呟いた。だが相手にはそれで聞こえたらしく、こちらを振り返ってきた。私服の上に着込んだ白衣と胸にある銀色のペンダントが、夕日を反射して眩しく輝く。

腰まで届く金色の髪に加えて、目の色は青。髪の色と目の色はイギリス人とのクォーターであるためだ。だが身長が百六十ないためか、

日本人になく外国人によくある大人びた雰囲気はない。髪の色と目の色を除けば、ごく普通の小柄な少女にしか見えない。

だが流石に二年も経てば、雰囲気は変わるらしい。宗次は、少しだけ戸惑った。

そして何を言うべきか数瞬黙考した後、当たり障りのない言葉を口にした。

「久し振りだな。美鈴^{みすず}」

相手はそれで笑みを浮かべて、楽しそうに応じた。

「はい。宗次さんはあまり変わってないようです。安心しました」

「二年前から進歩なしと言われると、少し堪えるな」

「あつ……！ そういう意味じゃありませんよ？ いい意味で、変わっていないと言ったわけです……！ えっと、その……！」

美鈴という少女は、宗次の受け答えに対して慌てふためく。久し振りに見る友人のその姿に、宗次は苦笑した。

「わかっている。そう慌てるな」

「あつ……」

早速やらかしたため、美鈴は頭を抱えて唸っている。この少女、見た目だけなら優等生タイプのだが、一度不測の事態に陥るとパニックになる癖がある。……どうやら、それも変わっていなかったようだ。

宗次は微笑を浮かべながらその様子を眺めていたが、ふと先程の歌のことを思い出した。

「歌」

「え？」

「歌、やめてなかったんだな」

宗次は、確かめるように言った。

先程聞いた歌は、かなり懐かしいものだった。二年振りに聞いたのだが、やはりこの少女の歌は素晴らしいと思う。

美鈴は照れたように笑うと、頬を掻きながら言った。

「歌手になるのが、夢ですから」

「そうだったら、俺は一番に聞きに行く」

「本当ですか？ 嬉しいです！」

「美鈴の夢を知っているのは、俺だけだ。見届ける義務があるだろう」

まんざらでもない様子で宗次は言う。十年前からの付き合いだ。あの意味、最も近い人物でもある。その夢の実現には是非力を貸したい。

歌は上手い。プロと比べても差はない。むしろ、下手な者たちよりも格段に才能はある。

だが、別の才能と現実が、彼女をそうさせない。

(……いつか、胸を張って言えたらいいんだがな)

心の底からそう思い、宗次は手を差し出した。

「改めて……今日から、俺が護衛を担当する。よろしく頼む」

「はい。よろしくお願ひします」

握手を交わし、二人は笑顔を浮かべる。

だがその笑顔は、再会の喜びと、悲痛な現実を前にした、ぎこちな

いものだった。

その日が、新たな始まりだった。

五

「始まるぞ」

男のその言葉に、何がとは聞かなかった。聞かずともわかることだ。

「なら、私はどうすればいい？」

どんな指示をされようが結局自分のしたい方法で動くのが私という人間だ。だからあまり命令というのは意味がないのだが、相手は指示をした。

「あいつは平和ボケしている。何とかしなければならぬ」

「それは同意しよう。だが、あの絶対者を相手にどんな手を打つ気だ？」

この男のことだから、何かしら手があるのだろうが……それが私には全く予想がつかない。まあ、作戦なんかは常に人任せだったから考えるのは得意ではないのだ。

男は無表情に、私の中に常にいる『彼』のように言った。

「キミが何かをする必要はない。キミはあくまで事後処理を行うだけだ。あいつがその気になるまで、することはないよ」

「わかった。とりあえず、見守ればいいんだな？」

「そういうことだ。頼んだよ」

男が言う。その姿はやはり、どこか『彼』に重なった。でもこの男は『彼』とは違う。似ていても、決定的に違う部分がある。

「私は行くぞ」

そう言い残し、私は部屋を後にした。多分、ここに戻ってくることはない。

私は気ままに、一人で生きていくから。

男はただ、無表情に私の背中を見送るだけだった。

第一章「名も無き子供たち」(後書き)

最初は、日常編からです。次回からは、結構急展開になっていくと思います。

頑張って投稿していきますので、よろしければ「」読んでください。感想、ご意見お待ちしております。

ありがとうございました。

第二章「OS」（前書き）

【OS】（Original Sin）

原罪^{げんざい}。アダムの子孫たる人が持つ生まれながらの罪。また、二足歩行型起動兵器の総称。

全長約3m～4m。機体差があるが、最高速度は時速百キロを超え、人のように手足と胴体があり、視界を確保するための頭部が存在する。機械兵士と呼ぶに相応しいもので、胸部のコクピットに人が乗り込み、操縦する。

何十年の昔から日本で極秘に開発がされていた兵器。だが上手く研究は進まず、二十年前に一人の女性が現れるまでは完成まで百年かかると言われていた。

だが一人の女性が二十年前に一人で完成させ、実戦配備が行われることになった。戦車や武装ヘリを遙かに凌駕する能力を持っており、数は少ないが現代最強の兵器である。

足立千里【アニメに出てくるロボットみたいで、凄いなだね

〜】

第二章「OS」

零

発達したようで発達しない文明。それはおそらく、少し前の経済の暗黒期によるものだ。

当時世界の実質的中心にあったアメリカ合衆国。その市場の株価が暴落し、それをきっかけに世界恐慌が再来した。

当初、世界中のマスメディアが深刻そうに事態を訴え、様々な国が政権交代を果たした。毎日のように経済政策を様々な政治家が打ち出し、そのためにどの国の国民も深刻に事態を捉えていなかった。

どうせ後一年もすれば何とかなるだろうと、高をくくっていた。

だが、現実には冷たく、無慈悲に世界へと襲いかかった。

一年経ち、二年経ったが、経済の復興は見られない。石油資源も底を見せ始め、より一層残酷な現実が世界に牙を剥いた。

そして、ある国が、遂に内部崩壊した。

経済大国、日本。かつてそう呼ばれた国は、世界恐慌を引き金とした内乱状態に入った。

当時は政権が何度も交代したが一向に景気が回復せず、国民は苦しみ、食糧問題も浮上していた。それを憂いだ当時の陸上自衛隊大佐、かんざきしゅうりん神崎劉蓮が若い将校たちと共に決起し、首相官邸を襲撃した。

当時の首相は銃口を突きつけられながら、かつての犬養毅首相のように説得を試みたが、劉蓮大佐によって殺害されてしまった。

しかし、軍部全員が賛同したわけではない。劉蓮大佐の上司や、海軍、空軍などの自衛隊本隊は劉蓮大佐一派を止めようとし、武力を持って彼らの拠点たる首相官邸を襲撃した。

武装ヘリ、戦車、陸戦砲、特殊部隊……劉蓮大佐一派が抱える兵たちの約五倍の戦力が揃っていた。誰もが問題なく制圧できると確信

し、万が一を起こさぬために包囲しながら全戦力を叩き込んだ。しかし、敗北したのは劉蓮大佐一派ではなかった。

自衛隊本隊と劉蓮大佐一派には、圧倒的な戦力差があった。戦車や武装ヘリなどは勿論のこと、銃火器に関しても数という点において劉蓮大佐一派は圧倒されていた。兵の数も、何千という差があった。だが一つだけ、劉蓮大佐一派側だけが持っていた兵器があった。

当時、数十年前から製造研究こそされていたが実践には程遠いとされていた、二足歩行型起動兵器？オリジナル・シン？……通称、OS。当時は二足歩行さえおぼつかないようなものだったが、一人の女性が劉蓮大佐のクーデター直前に完成させていた。

誰も軍部の者が相手にしない中、劉蓮大佐のみが興味を抱き、OSを三機、手に入れた。

そして試運転もせぬまま実戦に投入した結果、たった三機で本隊を壊滅させた。全武力を注ぎこんだ上での敗北は、事実上の軍隊の敗北を意味した。

政府は要人を仙台へと移動させ、緊急の政府を作った。だが、誰もが保身に走ったため、議員の割しか臨時政府には集まらなかった。圧倒的な力を持つ兵器、OS。現代最強の兵器が劉蓮大佐一派の力の源だった。たった三機だったが、力は圧倒的でただ一人を除いてどうにもできなかった。

だがそのクーデターは、起こってから一月で終わりを迎えた。

劉蓮大佐一派の使用していたOSが、新たなOSによって破壊されたのだ。天才と呼ばれた女性技術者がその能力のすべてを捧げて完成させた究極のOS クライム……『罪』の名を持つOSが、すべてを終わらせた。

劉蓮大佐は戦死し、クーデターに加担した者たちは大半が処刑された。だがそれがきっかけで政治のあり方も変わり、劉蓮大佐は結果として目的を果たした。

究極のOS クライム は、日本政府だけでなく世界中の軍隊が手に入れようとしたが、製作者であり操縦士であった女性が何処かへ

と隠したため、見つけることはできなかった。

今でも搜索がなされているが、見つかっていない。

OSを罪と呼び、完成させた女性技術者の名は

おおがみまゆみ
大神真由美。

今ではもう、二十年前の話である。

—

カツカツと、床を歩く音が響く。気持ち悪いほどに白い内装は、慣れていなければ気分を害してしまうだろう。

だが雄平は最初こそ辛かったもののその内慣れ、今は平然と歩いている。

服装は制服のままで、肩にスポーツバックを下げている。瞳はどこか眠たそうで、疲れているのがはっきりとわかった。

ここは東京都の新宿だ。クーデターとそれを止めるための戦闘で八割以上が焦土と化した東京で、唯一と言ってもいい復興が進められている場所だ。軍事機関と行政機関の中心となる建物があるのだが、政府自体はここにはない。

政府は今も仙台にある。関東に政府機関を戻そうという案もあったのだが、新宿には主要機関が集められ過ぎているため、万一を考えて議会は仙台に置かれている。

そしていま雄平が歩いているのは、特別戦後処理室が設置されている行政庁と呼ばれる建物の中だ。警察と軍事、両方に指示を出す庁である。

「……………」

無言のまま、雄平は扉の前で立ち止まる。白い扉だ。その隣には、指紋認証のための装置と暗礁番号の装置が備え付けられている。

一見ぶち破れそうに見えるが、実はこの扉は鋼鉄製だ。しかも監視カメラがあるので、宗次でさえ見つからずに不法侵入はできないらしい。

雄平はまず、指紋認証の装置へと手をつける。

「指紋認証……高岡雄平ト判断シマス」

機械的な声がそう告げ、一つ目のロックが解除される。続いて雄平は、暗証番号を打ち込んでいく。

カタカタと、十六桁の暗証番号を即座に打ち込むと、ピーツと機械音が鳴った。

「暗証番号、確認。入室ヲ許可シマス」

「さーんきゅ」

機械に対して適当に雄平は返事をする。普通なら答えてくれないのだが、

「イエイエ」

機械は、無機質な声で返事をしてきた。この機械は、ある程度会話機能を備えているのだ。実験の一環として、どこぞの研究室が取り付けたらしい。

もつとも、雄平としては面白いのでいいのだが。

ガチャリと音がして、扉の鍵が外れる。重い扉を少し力を込めて雄平が押すと、扉はゆっくりと内側に開いた。

「おやつさん、呼びましたか〜っ」と

扉が閉まるのを確認してから、雄平は室内にいる人物へと声をかけ

た。廊下とは違い、壁の色が白過ぎない部屋は、少し落ち着く。六人分のデスクが置いてあり、副室長というプレートが置かれた机にだけ、今は人が座っている。

四十を少し過ぎたぐらいの年齢の、一人の男性。黒い髪は適度に整えられていて、見た目というなら紳士といった風貌だ。黒いスーツを着ている。

さなだがすひと
真田和人。今年で四十七を迎える、特別戦後処理室の副室長だ。

ちなみに『おやっさん』というのは人の名前を覚えるのが苦手な雄平が勝手につけたもので、雄平だけが使用している。

和人は雄平を確認すると、少し厳しい口調で言った。

「遅いぞ。何をやってたんだ？」

「ちよーっと、調査をね。確認したい事があつたもんで」

「確認したいこと？」

ぴくりと眉を動かし、和人が反応する。雄平は頷きながら自分の机に座らず、来客用の机を挟む形で設置されているソファに座り込んだ。

「二十年前のこととちよいと、確認したいことがあつたんですよ」

「二十年前というところ……東京崩壊のクーデターか？」

「ご名答。といつても、本当に確認しただけさね。ま、詰めとくとこは詰めとかないと、後々苦労しますんで。経験上」

背伸びをし、緊張を緩めながら雄平は言う。その雄平に対して和人は更に疑問をぶつけていく。

「何を調べていたんだ？」

「んー、OSですかね。現代最強の兵器が生まれたのは、二十年前でしたし」

「なるほど。それなら納得できるな」

言って、和人は自分の机の上に置いてあったお茶を飲み干す。なくなったのを確認すると、和人は新しいお茶を淹れに行った。

「おれの分も頼みます」

「ああ。わかっているよ」

雄平の軽い言葉に、苦笑するように和人は頷いた。この部屋の隅に備え付けられた給湯設備はかなり簡素なもので、ポットぐらいしかないのだが、お茶は沸かせる。

和人は自分の分と雄平の分を持って来客用のソファへ行くと、雄平の正面に座った。

そして湯飲みを渡してから、和人は小さく呟いた。

「原罪か……」

「ん？」

お茶を啜りながら反応する雄平。その雄平に、和人は問いかけた。

「お前は、原罪の意味を知ってるか？」

「意味って……あ、いやあ、人の罪でしょ？ アダムの子孫である人間という存在が必ず持っている、絶対に消えない原初の罪」

「ああ、そうだ。そして、二足歩行型起動兵器OSはその名を冠せられている」

「まあ、何を好き好んでそんな重いもん背負わせてるのはわからないうけど」

肩を竦めて、雄平は口にする。兵器に罪の名を名付けるなど、普通では考えられないことだ。大神真由美という天才は、何を思ってそ

んなことをしたのか。

それはもう、永遠にわからない。二十年前、OSの基礎理論のみを残して大神真由美は自殺しているのだから。

罪の名を名付け、その罪で一つの戦を起こした女性。

新たな罪を生み出して、三つの罪を壊した女性。

何を思い、何を願い、どうして死に至ったのか。それを知る者は、いない。

「でもまあ、仕方ないさね。兵器は人を殺すためのものなんですから」

言いながら、雄平は一人の少年のことを思い浮かべた。

《殺戮兵器》キリング・ウエポン 人でありながら、人として扱われない存在。必要

だったからこそ生み出され、必要だからこそここに存在。

人の死を誰よりも知るあの少年ならば、もしかしたら知ることができるのかもしれない。

一瞬、本気でそんなことを雄平は考えた。だが、すぐにありえないと考え直す。

(人の心は、そいつにしかわからない)

感覚で知ることではできるかもしれない。想像はできるかもしれない。

だが、理解はできない。それが心だ。

そして。だからこそ、人間は面白いのだ。

「さて、と」

手を叩き、いつものように深みに入りかけた思考を雄平は中断する。人の数倍以上の演算能力を持つと謳われる雄平の脳は、たまにこうして思考が深みに入る。一人の時ならいいのだが、会話中にこうな

ることもあるので困りものだ。
もっとも、いつもこうして自主的に思考を切れるから問題はない。
雄平は持ってきた鞆から、封筒を一つ取り出す。

「じゃあ本題に入ろうか。あの殺人犯、実刑だそうっすね？」

「ああ。確定している罪状は速やかに処理するのが基本だ。殺害を本人も認めているのだから、実刑で当然だな」

「ま、あの野郎は刑務所の方が安全だと思ってるんでしょう。《名も無き子供たち（ネームレス・チルドレン）》相手に安全な場所なんてないのに、可愛いもんさね」

「……全くだ」

苦々しく頷きながら、和人は封筒の中の資料を取り出し、表情を変えた。

「……これは」

「宗次が護衛を担当する天才技術者、おおがみ みすず大神美鈴の資料ですよ。流石のおれでも、本名までしか辿り着けなかつたですけどね」

驚く和人に対し、雄平は少し不満そうに言う。だが、その資料の中身はかなりとんでもないものであった。

世界各国が、OSの開発に力を入れており、日本は其中でも最先端を進んでいる。大神真由美という天才の死から十二年後……今から約八年前に、突然新型のOSをいくつも生み出したのだ。

その裏には一人の天才がいるとされているが、真偽は定かではなかった。

だが雄平は突き止めた。もう一人の、大神真由美の後継者の存在を。雄平は唇の端を吊り上げ、笑った。

「そりゃあ、政府も隠そうとしますよね。なんせ、母親以上の天才

と謳われる娘。今作られてる量産型の原型を創ったのは、その子
んでしょ?」

「……………」
「隠さないでくださいって。別にどうこうしようとは思わないさね。
知的好奇心ですよ。大体、おれたち《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》には専用
機がありますし」

黙りこんだ和人に、雄平はそう告げた。別にこの少女には大して興
味が無い。宗次に護衛を依頼してきた上に、政府からも宗次並の重
要人物扱いをされているというから気になっただけだ。

今は許可なく使用できないが、雄平と鏡花、雅にも専用のOSがあ
る。本人のためだけに創られた特注品だ。そしてそれは、《名も無
き子供たち（ネームレス・チルドレン）》の一人が製作した。

二十年経った今でさえ、OSの基礎理論はほとんど理解されていな
い。だが、天才たちはそれを理解できる。日本以外で作られている
OSも、そういった異端の天才たちが製造の指揮を執っている。た
だ、後継者たちには敵わない。

「《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第十三番、おおがみせいしん大神清心……あの人
が、おれは唯一の後継者だと思ってたんすよ。だから、宗次のOSが現れた時
から怪しく思ってたました」

樋浦宗次。彼もまた、専用のOSを所有している。二年前の戦で十
機の専用機と衝突したため、今は大破しているらしいが、その機
体の力は、異常だった。

それぞれの能力に合わせ、組み立てられたOSはそれこそ圧倒的な
力を持つ。だが、宗次のそれは《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》のそれと同格
の力を有していた。そしてその時から既に、もう一人の後継者のこ
とを雄平は考えていた。

それを端的に説明すると、雄平は真剣な表情になり、口を開いた。

「さて、こつからが問題。大神美鈴はこの国にとって最重要人物の一人です。だから人目から隠してたんでしよう。でもどうして、今更表に出てきたんです？」

「……………」
「表に出ざるを得なかったんじゃないですか？ 例えば、開発中の新型が奪われて、その身柄を狙われている……………」とか」

雄平の言葉を聞いて、一瞬だけ、和人の眉が動いた。普通なら気付かないほどに些細なものだったが、雄平は気付けた。

かかった。

そう内心で笑みを浮かべながら、雄平は言葉を続ける。

「そこで出てくるのが、例の宣戦布告。確か、『我らは《ネームレス名も無き子供たち》なり。この国を再び、変革せん』……………でしたっけ？ まあいいや。とにかく、その宣戦布告の根拠がこれで推測できるわけですよ」

「……………なるほど、ならその推測とやらを聞こうか」

押し包むような威圧感を込めた声が、和人から発せられた。思わず萎縮してしまいそうな声だ。だが雄平は少しも動じず、それどころか笑みを浮かべた。

「《ネームレス名も無き子供たち》であるのなら、おれたちが専用機のOSを所持していることぐらい知っているはずですよ。それなのに、わざわざ宣戦布告してきた。それはつまり、勝てる自信があるってことを示しています」

「勝てる自信……………。お前たちにか？」

「ええ、そうです。宗次のOSは使えないから、おれたちに勝てればいいということになりますし。多分、その戦力を手に入れたんで

しょう」

そうやって、雄平は資料の中から一枚の紙を抜き出し、和人の前に置いた。細かい字と数字が所狭しと並んでいる紙だった。そしてそれを見て、和人は今度こそ表情を変えた。

「お前、これをどうやって手に入れた？」

微かに上ずった声で、和人は雄平に尋ねた。表情を読まれぬようにと努力していたその顔には、完全に驚きの色が宿っている。

雄平はやはり、笑みを浮かべたままだ。和人の反応を楽しんでいるようにも見える。

「国家機密の情報をどうやって手に入れた？」

繰り返し、和人は問う。その表情から驚愕は消え、いつの間にか厳しく冷たい表情を浮かべている。その和人を見ながら、雄平は少しだけ後悔のようなものをしていた。

(ここまで驚かれるとはな……。ちよいとやり過ぎたかね?)

和人が驚いた資料は、確かに国家機密だ。一応、戦争をしないと誓っているこの国が他国に秘密でOSを製造しているという資料なのだから。

現在製造されているOSの能力と、そのために必要な経費。OS専用の兵器。また、そのために必要な人員。資料の中にはすでに製造され、自衛隊で配備されているOSの種類と数も事細かに記されている。

その内容が本物であるならば、これは国家機密というものだ。そしてほとんどが、現実として正しい。だからこそ、和人は驚いて

いるのだが

(実は全部、俺が演算したんだけど)

そう、この資料はすべて、雄平の頭脳が弾き出した数字を載せたものだ。

無論、必要最低限の情報は集めた。国防のためという形で実際に自衛隊が所持しているOSの数はハッキングで調べ上げたし、確認もした。また、国家予算の中から巧妙に隠されたOS製造用の資金も調べ上げた。

そしてそこから精密に計算し、何とか見つけた大神美鈴の名と共に確認しようと和人のところへ持つてきたのだ。

だがどうやら、計算が合い過ぎたらしい。雄平は仕方なく、真実を話すことにした。

「全部、おれの演算さね。半分も合ってればいいと思って持つてきたんだけど、どうやら相当数一致してみたいでびっくりです」

流石に空気が重くなってきたので、雄平はできるだけおどけて見せた。和人は数瞬考え込むように目を閉じると、ため息を吐いた。

「……演算とは、恐ろしいな。《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》というのは、誰でもそんなことができるのか？」

「いや、おれだけさね。一応、頭脳はあの中で一番だった自負もありますし」

大分温くなったお茶を飲み干して、雄平は言った。本当のことを言ったのは、和人ならそれで納得するだろうと判断してのことだ。

真田和人。かつて彼は、真田大佐と呼ばれていた。

二年前の、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》を抱えたテロ組織《アンソウ未知》との戦

いにおいて、軍人として彼は戦っていた。当時全国の軍部合わせて百強しか配備されていなかったOSに騎乗することが許された、優秀な軍人だった。

だが彼は己の限界を、二年前に思い知らされた。

樋浦兄弟と、《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンたち。己より二十も三十も若い者たちに、彼は圧倒された。そして彼は軍を辞め、戦後に樋浦京一郎という天才に誘われ、特別戦後処理室を立ち上げた。

だから知っているのだ。《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンの恐ろしさを。和人は、再び息を吐いてから口を開いた。

「まあいい。機密ではあるが、話してやろう。ここまでの資料を見せ付けられて、黙っているわけにもいかんしな」

「お、さっすが。話がわかる」

手を叩き、口笛を吹いて雄平は言う。和人は真面目な顔で「茶化すな」と注意すると、意を決したように今回のことを話し始めた。

「お前が推測した敵戦力だが、ほぼ正解だ。今回のテロ活動は、今までの比ではない。間違いなく、OSによる戦闘が市街で起こる」「じゃあ、おれたちの出撃はあるんですか？ はっきり言うけど、《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンの専用機の力は圧倒的です。生み出した奴が生み出した奴だから量産は不可能だし、おれたちにさえ作り直すことはできないが、修理はできますし」

雄平は、確認するように事実を口にする。《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンの専用機を生み出せるのは、OSのすべてを理解する大神兄妹だけだ。だがパイロットである彼らには、事前に修理法や必要な情報は与えられている。

《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンというのはいくつも知能が高い。ましてや、創るわけではなく修復のための知識だ。基礎理論と合わせれば、製作

者なしで修復することはできる。

そして、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の専用機は、特室に所属する三人の物以外、一つも回収できていない。

雄平は、冷たい表情で残酷な現実を告げる。

「それに比べて、自衛隊のOSはどうです？　ただ乗って扱えるっただけで、おやっさんみたいに理解しようとしてる奴なんて皆無でしょう？　そんなんじゃないやあ、勝てはしない。己の武器がどんなものかも知らない奴に、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》は負けはしません」

「そうだろうな。私も勝てなかった」

「いやいや。おやっさんは凄かったですって。おれたちの間では、結構評判良かったさね。『まともな奴が一人だけいる』って感じで」

苦笑しながら、雄平は言う。これは嘘でもなんでもない。事実だ。
《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の間だけでなく《アンソウ未知》の間でも、真田和人という名前はかなり有名だった。

機体性能の差があり過ぎて結果的に和人はOSの戦いで何度も敗北したが、彼は一度も《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》以外に敗北したことがないのだ。

《アンソウ未知》が抱えていた、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》以外のOS部隊。諸事情からこちらは大神清心による量産型の改良型を使用していたのだが、和人は性能が劣る機体でありながらこの部隊を自らが指揮を執った戦いで何度も打ち倒している。

彼は、一介の軍人としては優秀過ぎるのだ。そしてだからこそ、昇進が大佐で止まってしまったといえる。優秀過ぎる故に、実戦に出ない將軍になれなかったのだ。

そのことを思い出したのか、和人は僅かに苦笑した。

「どれだけ一兵卒を倒そうと、幹部を倒さなければ意味がない。そ

ういう意味で、私は役立たずだった」

「そんなことはないと思いますけど。……まあいいや」

とりあえずそう言って話を切ると、雄平は横道に逸れた話を元に戻した。

「OSという罪が生まれて二十年経って……。でも、大神美鈴が生み出したものはあくまで初期のものを改良した程度に過ぎません。

それでも出力数字は相当なもんですけどね。戦車の砲弾でも、一発二発なら耐えられますし。ミサイルは無理ですけど」

「それはそうだな。だがそれがどうした？ OSという存在自体が規格外 いや、そういうことか。お前が言いたいことは」

言葉の途中で雄平が言いたいことに思い至ったらしく、和人は頷いた。彼も伊達に特室の副長をしているわけではない。頭の回転は速いのだ。

それに対し雄平は微笑を浮かべて、頷き返した。

「そう、この国の軍隊には、OSを扱いきれないんですよ。もっとも、例外はあるさね。おやっさんなんかはおれたちと同じような性能の機体を使っても問題ないだろうし、おれたちや宗次なんかは強力な兵器を使いこなせてますから」

「だが、誰もがそういうわけではない。OSというのは奇跡の兵器だ。能力が高過ぎれば、扱いきれなくなるということだろう？」

「ご名答。強過ぎるものは、使い手を選ぶんですよ。いきなりバカみたいに強いもの創ったら、絶対にどこかで崩れちまいます。だから大神美鈴も、小出しに創ってるんですよ。実際、本気で創ったであろう宗次の専用機はそれこそ死神みたいな力を持っていますし」

言いながら雄平は肩を竦める。《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の専用機十機

と正面から戦い、全機体を退けたような化物だ。死神という評価は間違っていない。

「だがま、あれは今使えないし……。おれたちがやるしかないですよ」

「ああ。だが今回、お前と鏡花、雅の出撃はない」

「はあ？」

流石の雄平も、その言葉には表情を変えた。無茶苦茶だ。常識がないのだろうか？ この国の者たちは？

和人はやはり淡々と、断言する。

「上の決定だ。覆らんぞ」

「はあ……アホらし」

仕方ないか そんな調子で雄平は頷き、小さく呟いた。

「この街気に入ってるのにな」

ため息まで吐いて、大げさに雄平は呟く。そして最後に、物騒なことを口にした。

「この街、跡形もなく消えてしまっさね」

いつも通りの、軽い口調で。

和人は頷くでも否定するでもなく、ただ黙ってそれを聞いていた。どんよりと曇った空は、不安定なこの国を表しているようだった。

夕焼けが綺麗だった空も、今は雲が出始めて少し景色が悪くなっている。

その様子を見、雨が降る可能性を考えた宗次は美鈴に提案した。

「積もる話もある。とりあえず中に入ろう。狙われているんだろう？」

「あ、そうですね」

美鈴はあっさりと言き、宗次と共に廃墟の中へと階段を降りていった。今考えれば恐ろしい話だ。この少女、狙われているというのにさっきまで堂々と歌っていたのだから。

宗次は廃墟の中に人がないことを確認すると、美鈴と向かい合った。

「状況は一応聞いている。施設が襲撃されたらしいな？」

「はい。相手は数十人の武器を持った方々と《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン》の二人でした。その二人とは面識がありますので、間違いないと思います」

戦場での面識なんて、嫌ですけどね。そう言って、美鈴は苦笑する。宗次はそれに頷きながら、次の情報を聞いた。

「誰だったんだ？ その二人は？」

「ええと……名前はこちらとわからないんですけど、異名は覚えます。確か《^{ジエノサイド}虐殺者》と《^{フレッド}鉄砲玉》だったと思います」

思い出しながら、美鈴は言う。《名も無き子供たち》《ネームレス・チルドレン》というのは秘匿性が高い者たちで、彼らの所属して

いた組織、《未知》^{アンノウン}の中でさえ、本人たちと首領を除けば彼ら全員の把握はしていなかった。

その秘匿性を高めたのが、異名だ。彼らの異名は首領が個々につけたもので、本名を知られないことと本質をわかりやすく表すために使われたという。

宗次と美鈴は《名も無き子供たち》^{ネームレス・チルドレン}全員と顔を合わせているが、名前を知らないのがほとんどだ。だから美鈴は、名前だけでなく異名で敵を告げた。

そしてその方が、宗次としてはわかりやすくもある。下手に名前を言われるより、戦場で聞いてきた異名の方が自分の中の人物像と一致するのだ。

宗次は頷くと、多少苦々しい表情を浮かべた。

「三番と十一番か……。両方とも、生身での戦闘能力が圧倒的だ。だが妙だな。あの二人がどうやって施設の場所を知ることができたんだ？」

「それがわからないんです。宗次さんも知らないことですし、政府の人たちでも相当上の人たちしか知らないことです。研究員たちは外部への連絡が一切禁止されていましたし、知りようがないはずなんですけど」

「……未だ表に出て来ない、黒幕がいるということか」

宗次は呟き、思考を働かせる。《名も無き子供たち》^{ネームレス・チルドレン}の番号は、それぞれに意味がある。雄平によると、三と十一は完全な戦闘員。策略とは無縁の者たちらしい。

だからおそらく、今回の件には黒幕がいる。そのことを心に留めると、宗次は口を開いた。考えるのは彼ではなく、雄平の仕事だ。下手なことをする必要はない。

「とりあえず、新宿に戻る。まずはそこまで俺が護衛をさせてもら

うことになっているが、何か不都合はあるか？」

「いえ、ありません。宗次さんなら、心強いです」

「そうか、なら」

行こう、そう言いかけた口は途中で止まった。代わりに

「伏せる！」

怒号のようなその声が、響き渡る。美鈴はただ流されるままに、宗次に抱えられて床を転がった。それと同時に、いくつもの耳を切り裂くような音が響き渡る。

ガガガガガガガッ！

機関銃　俗に言う、マシンガンの銃弾が宗次と美鈴のいる部屋へと降り注ぐ。コンクリートを壊し、床を砕く銃弾の嵐は、数十秒の間続けられる。

床を転がり、美鈴を抱きかかえながら壁際にまで宗次は移動すると、その視線を外へと向けた。銃弾が来る方向は一方向のみ。おそらく、この建物の向かい側から乱射しているのだろう。最近のマシンガンは、相当な距離、銃弾を飛ばせる。

宗次は舌打ちをしながら、抱いた状態の美鈴を更に強く抱きしめ、室内にあった盾となってくれる壁を目指した。そこに行けば相手にとって死角となり、壁を砕かれるまでは持ち応えられる。

普段の彼なら、常識など遙かに凌駕したその身体能力で簡単に銃弾の嵐の中でも移動できただろう。だが、今回は違った。

荷物などとは一瞬たりとも彼は考えてはいなかったが、そこには重荷があった。

宗次は、走った。滑り込むようにして目的の場所を目指す。数瞬後、彼は目的の場所へと転がり込んだ。

「つつ……」

「大丈夫か？ 怪我は？」

呻き声を漏らす美鈴に、宗次は問いかける。あの状況では、安全のことを留意している余裕はなかった。下手をすれば、頭を打ったかもしれない。

だが美鈴は目を開いて頷き、そして、彼女自身の手を見て驚愕した。

「えっ……？」

そこにあつたのは、大量の血。彼女の白衣を紅く染めてしまうほどの血だ。

美鈴の血ではない。護衛をすると決めた以上、宗次が抱きかかえた状態の対象を怪我させることなどない。

だからこれは 宗次の血だ。見れば、腹からかなりの出血をしている。

「宗次さん！」

「二発喰らっただけだ。腹筋を締めたからもう出血はない。後で銃弾を抉り出せば、大して問題にもならない」

無表情にそう言うと、宗次は懐から二丁の銃を抜いた。宗次の肉体は常人のそれを遙かに超えている。それこそ、完全に壊さない限り死にはしない。

それを美鈴は誰よりも知っている。だが、それでも納得はできない。しかし、彼女もわきまえている。今ここでは、何も言うべきではないと。

「……………」

宗次は無言のまま、屈んだ状態で銃を持った手をだらりと下げ、目

を閉じている。

いつのまにか、銃弾の嵐は止んでいた。

そして数瞬後、いくつもの乱暴な足音が、部屋にある唯一の扉を蹴り飛ばした。

ダンッ！

そして響き渡る、一つの銃声。だがそれは入ってきた男たちのものではない。それは、人間兵器の銃弾だった。

ダンッ、ダンッ！

撃たれた男が倒れる前に、更に銃弾が鳴り響く。分厚い防弾チョッキの僅かな隙間を狙って撃ち抜くその技術は、一種の神業でもあった。

ダンッ、ダンッ、ダンッ！

極度の緊張状態によって瞬間的に強化された感覚器官。その中で、宗次は突如乱入してきた集団の中に飛び込むようにして銃を乱射する。敵が前にいる場合、銃は確かな力を発揮する。だが、混戦の場合は邪魔にしなければならないのだ。

「くっ、う、撃つな！ 味方に当たる！」

おそらく指揮官であろう男が、叫んだ。宗次が薙ぎ倒すように味方を撃っているのを見て、これ以上混乱を招くのを避けたかったのだらう。

だがその判断は、大きな間違いだった。

確かに彼らの持っている銃は、マシンガンタイプの強力な銃だ。一世代前の型ではあるが、防弾チョッキも何も着けていない宗次ならば、いくら頑丈でも流石に倒れる。

だが逆に、彼らは最新鋭の防弾チョッキを装備していたのだ。宗次が鮮やかに間接部分などの薄い場所を狙い撃っているから倒れていくだけで、普通に撃たれば少々の衝撃だけで済むはずだった。だからこの時は、指揮官の判断ミスが問題だった。

そしてその隙を、宗次は見逃さない。

「うあつ！」

「がっ！」

体のどこかを撃ち抜かれ、次々と倒れていく兵たち。普通の人間は、どれほど鍛えていても撃たれば動けなくなる。ましてや、自分の武器をも同時に銃弾で破壊されれば、反撃する気さえ起きなくなる。一人、また一人と敵は倒れ、指揮官と思しき男に宗次は迫る。

「殺しはしない」

部下を全員戦闘不能にした男は、そう言って武器を叩き潰した。

「だが責任は負ってもらう。覚悟しろ」

宗次の銃が、二丁とも男の方を向く。そこで男は理解した。

これが、《殺戮兵器》キリング・ウェポンと呼ばれる英雄なのだ。

その瞬間、男の体に衝撃が走る。そして、男は意識を失った。

「……………」

周囲を見渡し、全員の動きが完全に止まっていることを確認してから、宗次は窓へと疾走した。宗次の銃は、すべて麻酔入りの特別弾だ。当たるところによるのだが、すぐに処置でもしなければすぐに意識を失う。

全員に銃弾を叩き込んだことは覚えている。武器であるマシンガンも破壊したから、ここにもう敵はいない。

残っているのは、正面の建物にいる敵だけだ。

「！」

声を殺し、息を止めて宗次は窓から飛び降りる。

地上三階からの飛び降り。普通なら、筋肉が壊れているところだ。だが宗次には、そのようなことは起こらない。

再び 銃弾の嵐が降り注ぐ。

だが宗次はジグザグに移動し、的を絞らせない。予想外のことであったため、敵の統制が取れていなかったことも幸いした。

宗次は二丁の銃を携え、全力で制圧に向かった。

三

先程まで騒がしく銃撃戦が行われていたにも関わらず、ここは静かだ。今響いているのは、一人の少年が携帯で連絡をとっている声だけである。

「ああ、そうだ。全部で二十一人。武器を奪って縛ってあるから、後で回収しておいてくれないか？」

『おっけ、任せといてくれ。適当に警察の人間動かすさね』

宗次の言葉に、どこか適当に答えている相手は雄平だ。今彼は特室の本部にいるらしく、宗次の電話を取ったのだ。本来なら雄平は和人に代わるべきなのかもしれないが、参謀は雄平なのだ。結局話が行くなら、手間を省いた方がいい。

宗次が美鈴と接触したことを含め、とりあえず儀礼的な報告をする。雄平はそれに頷き、口を開いた。

『そっちは問題ないみたいで安心した。とりあえず、できるだけ速

くこつちに戻って来い。大神美鈴に聞きたいことがあるし、こつちの状況も良くない』

「どういうことだ？ 何かあったのか？」

『これから起こる、って感じさね。例の宣戦布告の裏が取れてしまった感じだよ。まあ、この辺は大神美鈴に聞いといた方がいい。最悪の場合、東京都が今度こそ消える』

最後の言葉は、かなり本気の口調だった。この男がこれだけ言うのだから、現実としてそれほどのことになっているのだろう。

宗次は一度息を吐くと、確認をした。

「俺はどうすればいい？」

『お前専用のOSの復活を急ぐように大神美鈴に頼め。お前が言う二人が敵に回ったんなら、確実におれたちの出番がある。おれと雅さん、鏡花で何とかしようにも、専用機二機に加えて量産型二十機が相手じゃきついな』

「二十だと？ それほどの数が奪われたのか？」

『お偉いさんの話じゃ、そうなってるさね。この国にあるOSの合計数が二百ちよつとだから、相当数になる。しかも全部、新世代型。ありえないな、この状況。最悪だ』

それを聞いて、本当の意味で宗次の中に危機感が生まれた。OSとというのは、現代最強の兵器だ。そんなものが二十機も奪われたとあっては、下手すれば戦争のやり直しになる。

無論、OSは扱おうと思っただけで扱えるような可愛い兵器ではない。相應の訓練が必要だし、体にかかる負荷も並ではない。宗次は専用機にこそ乗っているが、かなり過酷な訓練を経験している。

だから二十機すべてが有効な兵器となるとは思えないが、それでも危険だ。

宗次は拳を握り締め、雄平に聞いた。

「東京都民の避難はどうなっている？」

『できるわけがないさね。攻めてくる証拠も何もないんだから。大体、そんなことをすればおれたちがテロリストに屈服することになる。おやつさんとはかく、お偉いさんがたは絶対にそんなことはしない』

「……そうか」

宗次は、頷くしかなかった。二年前と全く同じだ。政府はテロに屈しないなどと口にして、結局東京を見捨てた。自分たちはのうのと、仙台へと逃げたくせに。

もつとも、当時重鎮だのなんだのと呼ばれていた政治家はほぼ全員殺されている。国会会議中の襲撃で、東京都に議員が集まっていたからだ。

そして、だからこそ利権問題が発生せずにテロとの戦いが始まり、宗次は最前線に中学生でありながらも出ていたのだから、皮肉といえば皮肉だが。

宗次は長く息を吐き、口を開いた。

「とりあえず、俺はこれからそっちへ向かう。それでいいな？」

『問題なし。しっかりと護衛しろ』

バイバイ　最後にそう言って、雄平は電話を切った。宗次は携帯電話をバイクの中にしまいこむと、後ろのいる少女の方を振り向いた。

「正直、気は進まない」

「はい」

「だが俺はどうやら、もう一度戦わなければならぬらしい。《名も無き子供たち（ネームレス・チルドレン）》の専用機にこの国の

軍隊が勝てないことは、美鈴、お前が一番知っているだろう?」

「はい。お兄ちゃんが創った機体が相手では、量産型は敵いません」

美鈴は頷き、肯定する。美鈴が生み出した現代のOSが弱いわけではない。専用機と呼ばれる特別型が、あまりにも強過ぎるのだ。

だから、宗次には必要だ。量産型ではない、現代の天才がもう一人の天才のために創り上げた、至高の芸術品と呼ぶに相応しい機体が美鈴はしばらく沈黙を保っていたが、意を決したように口を開いた。

「……宗次さん。私は罪人です」

ポツリと、呟くように。

「母が己の生み出した兵器を罪としたのは、戦争の引き金になると考えたからです。そして現実にならなくなって、だから新たな罪で罪を壊しました」

「より凶悪なる罪で罪を消す、か」

「誉められた方法ではありません。ですが、そうすることしかできませんでした。そして私は、あの人の娘だというのに罪を生み出し続けました。人を殺す兵器を、いくつもいくつも創り続けました」

淡々と、ただ台詞を読んでいるように美鈴は語る。だがそれが虚構のものであると、宗次は気付いた。

「だから私は地獄に堕ちましょう。汚れたこの身を地獄の業火へ差し出しましょう。だから私は、貴方に罪を授けます。貴方を地獄へと道連れにします。よろしいですか?」

この言葉を宗次が聞くのは、二度目だった。

初めて聞いたのは、二年前の戦いで今までの量産型ではなく、専用

機を宗次が美鈴に譲られた時だ。あの時、宗次はこの言葉に即答した。

だから今回も、二年前と同じ言葉を口にする。

「俺の中には、数え切れない罪がある。それが一つ増えたところで、変わりはない」

幾人もの命を屠ってきたのだ。今更、戻る道などありはしない。

この身が朽ち果てた時、地獄に堕ちることは覚悟している。天国になど間違っても逝けないことは、とつくの昔に理解していた。

宗次は自らの答えを口にする、ヘルメットを美鈴に投げ渡した。

「美鈴、乗れ。面倒な客が来たようだ」

「……はい」

宗次の言葉を理解してか、美鈴はヘルメットを被ってバイクに跨った宗次の後ろに乗った。宗次もヘルメットを装着すると、アクセルを捻る。

大排気量を誇るバイクのエンジンは一気に過熱され、そのエネルギーを解放する。

爆発音のような音と共に、宗次のバイクが走り出す。一瞬で時速は百キロを超えた。そしてそれとほぼ同瞬
どおんっ！

先程まで宗次たちがいた場所のすぐ側が、吹き飛ばされた。バズーカ砲か、ロケットランチャーか。人間が使った兵器であるならば、この二つと予測できるような破壊力だ。だが、これはそのどちらでもない。

「OS………！」

宗次に後ろから抱きつく形でバイクに乗っている美鈴が、振り返って呟く。宗次も今、バックミラーで確認した。

青い光沢を放つ機体。重厚な鎧を全身に纏ったような外見をしている。コクピットがある胸部は突き出ている。手足はそれこそ人間のよう、今は両手で巨大なアサルトライフルを構えている。

人間では決して扱えない威力を持つ銃弾が、嵐のように宗次たちを狙う。だがどうやら殺す気はないようで、弾丸は二人が乗るバイクの周囲に着弾している。おそらく、余波で攻撃するためだ。

(数は二機。逃げられるか……?)

ジグザグに移動し、廃墟の大通りを驚進しながら、宗次は必死に策を練る。今襲ってきている機体は、見たことがない型だ。おそらく、美鈴が創り出した新型だろう。

慣れていないのか、動きに少し無駄がある。だがそれでも十分過ぎるほどの腕だ。最近開発されたばかりの新型を扱えるパイロットなど、そういない。

そして　だからこそ厄介だ。一世代違えば、OSというのは性能差がはっきりと出てしまう。今の自衛隊では、これが二十機もでてくればどうしようもない。

大体、東京都には専用機を除けばOSも五十機ないはずだ。しかも、全部が奪われたものに比べれば一世代前の旧型である。

(これはいよいよ危険だ)

確信した。新型を扱えるパイロットが二十人もいるとは思えないが、もしいるとするならば、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の専用機二機を加えての圧倒的な力が顕現する。

宗次はアクセルを捻り、更にバイクの速度を上げる。

「美鈴。口を閉じている。舌を噛むぞ」

そう口にし、宗次は返事を待たぬまま速度を上げる。それと同時に、右手で備え付けられた無線の通信スイッチを押す。即座に宗次のヘルメットが反応し、回線が繋がる。特別製のヘルメットだ。通信機能を用意してある。

少ししてガガツと無機質な音が雄平の耳元で鳴り、相手が出た。

『はい、どした宗次？』

いつも通りの、のんびりとした口調で雄平が出た。

「OS二機に追撃されている。応援を頼む」

バイクのハンドルを切り、小さな小道に入る。大通りとは違い、完全に荒れた道であるため衝撃も強く、美鈴が悲鳴を上げたが気にしない。それどころではない。

地図は宗次の頭の中に完全に入っている。だから小道に入って逃げようと思ったのだが、甘くない。建物を破壊しながら、二機のOSが追撃してくる。

それに舌打ちしながら反応を待っていると、ため息でも吐きたそうに雄平は言った。

『是非そうしたいとこなんだけど、無理さね。おれたちのOSは使用許可が下りんし、東京都のOSは全部出払ってる』

「どういうことだ？」

『どうもこうも、じきに戦闘が始まるってことさね。さつき宣戦布告があった。今は東京都民に避難勧告を出して、戦闘準備中ってこと』

「……わかった。それならそっちに戻らないほうがいいな。しばらく

く身を隠す」

『そうだな。あちらさんも一応、目的は大神美鈴の捕縛と特室の破壊を謳ってる。近付かない方がいい。ああそれと』

そこで、それまでのんびりとした雄平の口調が、通信機でもわかるほどに大きく変化した。重く、冷たい声が宗次に届く。

『誰も信じるな。認めるな。油断するな。お前一人の力ですべて切り抜ける。おれや雅さんや鏡花、おやつさんであつても信じるな。』

『そうしないと、死ぬ。今の状況は、そういう状況だ。いいな?』

「なっ　?」

ブツンと、無機質な音が宗次の耳に届いた。

もう一度通信スイッチを押すが、応答はない。どうやら、向こうで通信を完全に遮断しているらしい。

(どうということだ！　何を言っている！)

ここで初めて、宗次は自分の感情を揺らした。二十人強の敵に襲われても、二機のOSに追撃されても冷静だった男は、ここで初めて動揺してしまった。

だがそれでも、逃げることを放棄したりしない。ハンドルを切り、宗次は建物の中へと入り込んだ。

美鈴は何も言わない。黙っていた方がいいと言ったのだから当然といえば当然だし、会話も聞かれていない。だが今は、その沈黙が宗次にとって不安だった。

しかし、それで任務を放棄するわけにはいかない。

どうするか　そう考えた時、宗次の手元で黒く光る一丁のショットガンが目に入った。

まだ、敵のOSによる攻撃は続いている。状況打破の方法は、これ

しかありえない。

「美鈴。目を閉じていろ」

大きめの声でそう言うと、宗次はバイクを外へと踊り出させた。熱感知システムをつけているらしい機体は、建物から出てきた一つの熱物体を正確に捉えた。

それを確認しながら、宗次はショットガンを構える。時速百五十キロだ。普通なら、銃など持てるような状況ではない。だが宗次は銃を構え、それを前方に向かって連射した。

カンッ、カンッ、カンッ！

ショットガンにしては少々小さめの音を響かせ、弾丸が撃ち出される。その弾丸は正確に前方の建物に直撃し、だが何も起こらなかった。

そこで宗次はショットガンをしまうと、更に加速する。

流石に慌てたのか、背後のOS二機も速度を上げた。時速百キロの速さを常に出せるような兵器である。その速さは並ではない。

しかし、二百キロ近くの速さを出している宗次には追いつけない。距離を徐々に離されていく。

だがそれでも、二機のOSは追いつこうと必死になる。そして、一つのこと集中し過ぎれば、自然と他のことに気が回らなくなるのが現実だ。

「チェックだ」

小さく宗次は呟き、ハンドルの側面のスイッチを押した。その瞬間、彼らの背後で連続して爆発が起こった。

OSの足下がまず爆発し、それによって動きを止めさせられた。更に、周囲の建物の土台までもが同時に破壊され、崩れた建物の残骸が降り注いでいく。

「そしてこれで チェックメイトだ」

突然のことに対処できなかった二機のOSが、瓦礫の山に飲み込まれる。

現代最強の兵器と謳われていても、素材は基本として金属なのである。土砂崩れにでも巻き込まれれば簡単に押し潰されるし、それがコンクリートの山というなら尚更だ。

「美鈴。もういいぞ」

それを目で確認し、近くの建物の中へと入ると、宗次はバイクから降りた。同時に、美鈴も降りようとするのだが、足が震えていて上手く立てなくなっていた。

ヘルメットを取り、建物の中から惨状を見ると、美鈴は感嘆の息を漏らした。

「OS相手に爆弾だけでなんて、相変わらず凄いですね」

頼りなくなった足のため、バイクにもたれかかりながら、美鈴は言った。開発者の彼女としては、この状況は異常としか思えないのだろう。

美鈴を庇い、逃走を試みながら、結局倒してしまふなどというのは。

「パイロットが未熟だったただけだ。動きに無駄があったし、新型を扱えきれていなかった。俺でなくても、切り抜けようと思えばできることだ」

謙遜する風でなく、心からのように宗次は言い切る。幼少時代から規格外の戦闘能力を宿している宗次は、どこか常識が欠けている。

それを思い出して、少しだけ美鈴は笑った。でもその笑みはどこか、悲しげだった。

宗次はそれを少し怪訝に思ったが、結局何も言わなかった。二年間も離れていたのだ。変わっていて当然とも言える。

ただここで、そのことを問い詰めていれば、この先の悲劇には発展しなかったかもしれない。だが今の宗次はそうせず、だからこそ未来は残酷になった。

宗次がバイクの燃料の確認をしていると、不意に美鈴が口を開いた。

「ご両親は、どうされていますか？」

「両親、か」

作業の手を止めて、宗次は呟いた。彼には家族がいる。兄は行方不明だが、血を分けた両親というのは確かにいるのだ。

「今何をしているかさえ、知らないな。息子二人を捨てて海外に逃げたような親だ。今更会おうとも思わない」

「……そうでしたね」

聞いてはいけないことを聞いた。そんな様子で、美鈴は呟く。だが別に宗次としては既に決着を着けたことだ。

借金苦から逃げるために息子二人を日本に残し、海外へ逃げた親などどうでもいい。

ただ、いずれ顔を殴るくらいのごとはしてやるうと思っただけ。

「とにかく今は、俺のOSだ。二年前、大破してしまっただが……あれは今どうなっているんだ？ 美鈴が修復を担当していたんだろう？」

「うん、それなんですけど」

カチャリと、何かはめ込まれたような音がした。同時に、パンという乾いた音も。

先端から煙を吐き出す黒光りする銃が、宗次に向けられていた。

「……信じるなどは、こういう意味か。雄平」

動かずに、宗次は呟いた。その銃弾は、正確に宗次の体を貫いていた。麻酔弾らしい。意識が朦朧としてきた。

宗次の体は、銃弾程度では壊れない。頭を撃たれば別だが、体を撃たれた程度なら、動くことはできる。だから、麻酔弾は非常に有効だ。宗次の動きを、完全に奪うことができちゃう。

「すみません。私はこれ以上、貴方に背負って欲しくないんです」

そう言った美鈴の瞳からは、涙が流れていた。

そこで、宗次の意識は完全に闇に堕ちた。

四

深夜零時を迎えようという時、急遽東京都の行政庁に設置された指令本部。特室の隣の部屋を使っているその部屋で、雄平は戦場の様子を映すデスクを見ながら、空中に浮かぶいくつもの画面で連絡を取っていた。画面に映る彼らは今回の作戦の主役である。

「配置できましたか？　じゃあ前線の指揮は岡村少佐に任せますね。こちらからも指示は出しますが、前線のほうが状況を見極めやすいでしょうし」

『承知した。敵戦力は新型OS十二機と考えればいいのか？』

鋭角的な顔つきをした男が、そう確認する。三十を超えている男で、日本のOS乗りではかなり名の知れた男だ。今回の作戦では、彼岡村少佐が前線の指揮を執る。

「その中に特別製の二機含まれてるということも、忘れないようにしてください。それと、無理は控えてできるだけ時間を稼いで。攻めるでなく守るのならこっちもいくらか楽だし、おれたちがすべきなのは都民が安全に避難できるようにすることですので」
『承知しました。他に特別な命はありますか？』

そう聞いてきたのは、副将の巻中尉だ。女性でありながら東京都のOS部隊でエースを張る女傑。岡村少佐と並び評される、東京都の二強が一角。

巻中尉のその言葉に雄平は頷き、真剣な表情で命を下した。

「生きて帰ってくるように。殉職は、恥とってください」

普通なら、言われないであろう命令。軍人の彼らにとって、殉職とは名誉なことだ。少なくとも、彼らはそう教えられてきた。今回の作戦で、殉職を覚悟している者もいただろう。だが雄平は、きつぱりと言い切る。

「全員が生きて帰って、初めて任務成功になるさね。おれからは以上。何かあります？」

十八になる前の少年とは思えないほど、堂々とした口調。それにしばらくOS部隊の二十八名は言葉を失っていたが、最初に岡村少佐が敬礼した。

『承知した』

それに習い、全員がOSのコクピット内で敬礼する。雄平は頷くと、彼にとってはお決まりの言葉を紡いだ。

「武運を」

ただ一言。だがそれが、戦場の《指揮者》コンダクターたる彼が演奏者たる兵士たちへ贈る、せめてもの言葉だ。

雄平は回線を切ると、やれやれといった調子で背伸びをした。

「相変わらず、疲れるさね。慣れない」

「だが、お前しかやれる奴はいないんだ。やってくれないと困る」

「ま、やらせてはもらいますよ。できる限りはね」

後ろの人物には振り返らず、手をひらひらと振りながら雄平は応じる。ここを引き受けたのは自分だ。ならば、やることはきっちりやらねばならない。

たとえ勝機がほとんど見えずとも、やらなければ。

「ところで、宗次はどうなっているんだ？ さっき連絡があっただろっ？」

後ろから、和人が当然の疑問をぶつけてくる。雄平は「ああ」と頷いてから、きつぱりと断言した。

「今頃撃たれてるはずですよ。大神美鈴に。多分、麻酔弾さね。間違いない、今回の戦いには間に合わないでしょうね」

「なんだと！ どういうことだ！」

「言葉通りですよ。大神美鈴は、おそらくですがある男の手先です。」

証拠なんてないですから、全部推測ですけど」

言いながら、雄平はテーブルに置かれた湯飲みでお茶を啜った。和人は、わけがわからず困惑している。その和人に、雄平は更に言葉を続ける。

「色々、冷静に考えれば矛盾があるんですよ。最初からね。この状況下で今更何を言っても遅いんですけど。もう戦いは始まってしまっし。……シナリオとしては、樋浦宗次は撃たれ、戦闘に間に合わず、東京都は火の海になるってところですね」
「どういうことだ？ 宗次が撃たれるだど？」

まだ事態が把握できていないらしい和人が、呻くように言う。当然といえば当然だ。樋浦宗次という怪物は、それだけ倒れるということが想像し辛い男なのだ。ましてや相手は技術者。撃たれるところなど、考えることさえできない。

そんな風に表情で語る和人に、雄平は冷やかに答えた。

「樋浦宗次の弱点は、自分の日常を大切にしていること。ひとたび戦争が始まればすべてを失うことを知っているから、あいつは日常を大切にしている。でもそれは、時として弱点になる。おれだつて、狙うならそこから狙うさね」

肩を竦め、和人を落ち着かせるために冷静な声で言う。まあ、こんな胸くそ悪い事実を信じたくないという気持ちもわかる。実際、雄平とて信じたくない。だが、彼が集めた情報を整理すると、どうしてもその結論に至ってしまう。

そして、そこで彼は初めて自身の頭脳を呪った。こんなことを考え

てしまう、自らの能力を恨んだ。
ズウウウン……………！
遠くから、砲撃の音が届く。

「……………始まったさね」

どこか寂しげに、雄平は呟く。そして、手に持った携帯電話で連絡を取り始めた。

「…………準備は？ 了解。じゃあ、出勤の際はこっちから連絡するんで。…………いや、ギリギリまでそっちでお願いします。…………できれば、そうならないようにしたいですが。…………はい。よろしくお願いします」

会話は数十秒だけ。それを和人は怪訝に思ったが、すぐにその思考を切り捨てた。

すでに戦闘が始まり、新型のOSたちが侵攻を始めていた。

「戦闘開始」

小さく、雄平は呟いた。

五

「包帯と消毒液を早く！ それが済んだら、この患者を奥へ運んで

！」

「はい！」

「夕霧先生！ 腹部に銃弾を受けたと！」

「時間がない！ 麻酔なしで銃弾を摘出するわよ！」

戦闘が始まり、二時間が経過した。OSによる大規模な戦闘こそまだ起こっていないが、局地的な歩兵部隊の戦闘が起こっており、後方の病院に設置された緊急の救護施設は文字通りの戦争状態だった。空気は血に塗れ、周囲には呻き声が蔓延し、救護にあたる者たちは全員が全身を血で濡らしている。真っ白な白衣など、もうどこにもない。

最初、周囲の病院から有志を募って医者を集め、医者の数は二十人。看護師の数は四十人にもなっていた。だが、実際に惨劇を目の当たりにして体が動かなくなった者たちが半分以上いたため、人員不足になっている。

だが、半分残っているだけでも十分賞賛に値するだろう。流石に二年前、戦争と呼ぶべき戦いを経験しているだけのことはある。

その急場造りの病院の一角で、耳を引き裂くような悲鳴が上がった。

「があああっ！」

「我慢して！ 男なら耐えなさい！」

麻酔もなしで一人の女性が、兵士の体から銃弾を引き摺り出す。その額にはいくつもの大粒の汗が浮かんでいて、疲労が溜まっていることが容易に読み取れる。休む間など数秒もなく、走り回りながら怪我人の相手を二時間だ。普通なら、倒れていてもおかしくない。だが、彼女は類稀なその集中力と体力で、ずっと働き続けている。医者と看護師の両方に脱落者が続出し始めている中、彼女だけは決して休もうとしない。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第十二番《スカラ研究者》、夕霧雅。

かつて、二年もの月日の間、この国を恐怖のどん底に叩き落したテロリスト集団の幹部。四年前、当時十五の若さでありながらその集団の医療系最高責任者だった女性。十九となり、精神的にも肉体

的にも成長している今の彼女に、この程度のことは苦にならない。雅は患者に鎮静剤を強引に打ち込んで眠らせると、すぐに隣の患者へと移動した。

「止血帯を早く！ できるだけ出血を抑えて！ 倫理がどうのこうの言ってる場合じゃないわ！ 救える命は全部救うわよ！」

この混乱の中、唯一輝きを失わぬ女性が叫ぶ。こういう状況において、必要なのは後押しをしてくれる何かだ。たった一人の女性がこれほど必死になっている。それだけで、ここにいる者たちは少しだけ力が入った。

疲れて休息を取っていた医師や看護師たちも、互いの顔を見合わせ、立ち上がる。

負傷者はまだ運ばれてくる。終わる気配はなく、むしろ残酷な結末に向かって加速しているように思える。

（雄平くんによると、敵の数は百を越えるって話だから……。まだまだ、荒れそうね）

目の前の惨状を視認しながら、雅は小さく呟く。その瞬間、

「うわっ！」

「きゃあっ！」

爆音が響き渡り、同時に地響きが院内を襲った。この独特の地響きに対して、雅は覚えがあった。

雅が唇を噛む。すると、その隣で一人の少女が呟いた。戦闘部隊に加わらず、雄平の采配によってこちらに配備された、鏡花だ。その隣には、千里もいる。

「……始まった」

いつも通り、言葉は少ない。だがその瞳には、何か激しいものが宿っている。その隣の千里は少し怯えていた。

千里は二年前に特別救護団体に所属しており、そのこともあつてかこういう場合の緊急治療にも当たれる。学生だが、人手不足のために呼び出されているのだ。

鏡花は本来なら、狙撃部隊にでも組み込まれるべき人員だ。だが、彼女は正規の軍人ではない。また、万が一の時も考え、彼女専用のOSに騎乗することも考慮されて今は雅の補佐という形でここにいる。

もつとも、これは建前で、実際はこの護衛が主要任務だ。負傷者を運び込む病院を狙うなどという非道をする可能性は低いが、相手が相手である以上、仕方がない。

宗次の情報により伝えられている敵の二人。その片方は倫理など関係ない男なのだから。

雅は一度手を止めると、小さく呟いた。

「OSの戦闘が……始まったわね」

独特の爆音と、振動。それが伝えるのは、OSの戦闘だ。

そして、この状況に至ったならば彼女にはすべきことがある。

「……鏡花ちゃん。千里ちゃん。ここを任せてもいい？」

「えっ？」

「どういうことですか？」

「珍しく、雄平くんがやる気になってるのよ。わたしが協力しないとね」

その言葉を聞き、鏡花はしばらく考え込む。千里はどうすべきか分

からず、鏡花を見る。そして、すぐに鏡花は頷いて結論を出した。

「ここは、任せてください」

「……わかりました。任せてください」

千里も頷く。千里は一般人だが、二人は違う。そのことを考えての行動だ。

「ええ。頼むわよ」

軽く二人の頭を撫で、雅は走り出す。雄平の作戦を実行するためだ。そしてその途中、一組の医者夫婦と出会った。緊急で配備された医師たちのまとめ役である、足立夫婦だ。雅も幾度か面識がある相手で、千里の両親でもある。

「あ……っ」

雅の足が止まる。本職ではないとはいえ、医師が一人いなくなるのは痛手だ。そのことぐらい雅も承知している。だが二人は雅の姿を見ると、微笑んだ。

「行つてきなさい。君にはすべきことがあるんだろうっ？」

そして、その言葉で雅は踏ん切りをつける。

「はい！」

そして彼女は、走り出した。

あるいは、ここに彼女がいれば何かが変わったのかもしれない。

だが現実というのは取り返しがつくものではなく、結果として人を

引き裂く。

心も、体も、時には人生さえも。

だが、今の彼女はただ走る。それが、己にできる最上だと信じて。

|||||

戦場に展開されたOSの数は、両軍合わせて五十三機。市街戦とは思えないほどの数だ。これほどの数のOSが正面衝突すれば、被害は計り知れない。

自衛隊のOSは、全部で三十九機。未だ避難を続けている東京都民を守るようにして、半円型の陣を構築している。迷彩模様のその機体は、第四期型OS クラフト だ。アサルトライフルによる中、長距離戦と剣やトンファーによる接近戦両方をバランスよくこなす機体である。

特に秀でた何かがあるわけではないが、他の同世代OSに比べると格段に扱い易く、自衛隊などの軍隊で非常に少なかったOS乗りが、クラフト の登場によって格段に増えた。現在、ほとんどの国の軍隊がこれを採用している。

だがその後方に、二機だけ毛色の違う機体が存在している。迷彩柄ではなく、純粋な緑の体をしたそれは第三期型OS レイヴン。格闘性能が次世代型である第四期型を含めても群を抜いており、その代わりに非常に扱い辛い。現在、日本で扱っている者は僅か四名しかいない。

しかし レイヴン は確かに扱い辛い機体ではあるのだが、その分扱えれば比類ない力を発揮する。製作者である大神美鈴も、今のところ量産型でこれに勝てる機体はないと言いつつた代物だ。そして、岡村少佐と巻中尉はこの レイヴン の乗り手だ。

『報告します!』

睨み合いが続く中、後方で両手にOS用の巨大なガンライフルを持つ機体の乗り手、岡村少佐に部下たちから報告が次々と入る。

『敵影確認! 数、およそ十四機!』

『情報どおりです! 尚、後方には例の専用機と思われる機体が二機!』

「わかった。地の利はこちらにある。全員、持ち場を離れるな!」
『はっ!』

画面に映る部下たちが全員敬礼し、返事をする。それを確認してから、岡村少佐は画面の中心に映る巻中尉へと視線を移した。

「巻中尉。いけそうか?」

『問題ありません。実際に戦闘を試してみないことにはあの新型の力はわかりませんが、レイヴン ならば十分対処できるものと思います』

「そうか。期待しているぞ。 む?」

頼もしい部下の言葉を聞き、頷いた瞬間、岡村少佐の目にそれが映った。彼は気付かなかったが、それはちょうど日付が変わった瞬間のことだった。

『敵影、動きました!』

『専用機二機を残し、左右に展開していきます!』

部下たちが伝えてくる。そう、急に大将機から十二機のOSが離れていつているのだ。左右に別れるように。

その様子を見て、巻中尉が通信で岡村少佐に言葉を投げかける。

『挟撃するつもりでしょうか？』
「いや、それはないだろう。数の差があり過ぎる状態でそのような下策は弄すまい。おそらく、誘いだ。手薄になった大将機を私たちに攻撃させ、突撃部隊を挟撃するつもりだろう。攻め入るよりも誘い出す方が、実行は難しいが成功すれば戦い易い」

おそらく、相手の作戦はそうだろう。数の差をどうにかするには、着実に数を減らしていくのが常套手段だ。大将が囷になるというのはいささか常識が欠けているが、成功すれば見返りは大きい。第一、乗ってくる可能性も高くなる。

巻中尉は自分のOSの両手で長い剣　グランドセイバーを持つと、岡村少佐に話しかけた。

『少佐』

「駄目だ。あからさま過ぎる」

部下が言わんとしていることを悟り、岡村少佐が首を横に振る。巻中尉の本領は、普通なら両手で持つような剣を片手で扱い、変幻自在な戦いをする事だ。確かに、突撃などには向いている。だがしかし、敵の策がわかっていいる状態で突撃させるわけにはいかない。

『しかし、罨であったとしてもこれは好機です。両翼が戻る前に突撃を成立させます。私に五機、お貸し頂きたい』

そう、巻中尉の言うことも正論だ。誘われているのなら、その策を打ち破ればいい。巻中尉ならそれも不可能ではないだろう。だが何故か、不安になる。

二年前、たった一機のOSに当時の部隊が壊滅させられたあの時の

ような、妙な不安が纏わりつく。

(何を馬鹿な。今回の敵は、あれではない)

が、その思考を岡村少佐は切り捨てた。《ネムレス・チルドレン名も無き子供たち》の専用機ではあるが、あれは第零番ではない。ならばまだ抗える。そう結論に至ると、岡村少佐はゆっくりと口を開いた。

「十機連れて行け。ただし、危険と判断したら即座に退け。いいな？」

『はっ！』

巻中尉が頷き、身の丈ほどの長さを持つ斬るではなく、薙ぎ払うことを目的とした武器、グランドセイバーを構え、十機のOSを率いて戦線に出る。

この時、岡村少佐は賢明な判断をした。実質、敵将の首を彼らが狙えたのは、この時だけだったのだから。

だが彼は見誤った。そしてそれが、惨劇を生む。

巻中尉の突撃より、二分後。

巻中尉のレイヴンより、偶然敵との通信が自衛隊の面々に届いた。

『ヒヤハハッ！ 大したタマだけ、あんたはよお！ まさか俺様に十機程度で挑んでくるとはなあ！ でも残念！ 手駒がカスだらけだった！ ヒヤハハハハハハハハハッ！』

機体の局部を貫かれ、どう考えても絶命した巻中尉。そのコクピットから、そんな笑い声が聞こえてきた。震える声で、部下たちが呟く。

『と、突撃部隊……全滅……！』

『嘘だろ……？ 十一機対二機だぞ……？』

『なんなんだよ、あのOS……？』

恐慌状態に陥った部下たちが、口々に呟く。それだけ、目の前の状況は悲惨だった。

両翼に別れた十二機の新型OSは一切動かず、大将機二機の周囲には巻中尉の部下たちが乗っていた クラフト が十機、完全に壊されて転がっている。

そして、毒々しい紫色をした《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》専用機は、巻中尉の愛機である レイヴン の胸部を槍で完全に貫き、串刺しのように レイヴン を宙に浮かべている。

そしてその隣には、先端に刃の付いた、いわゆる銃身の長いマシンガンであるアサルトライフルを両手に持つ灰色のOSがいる。

巻中尉の突撃部隊は、一矢を報いることすらできず、この二機に蹂躪された。

その現実を受け止められず、岡村少佐は沈黙する。その目に映る画面の中で、彼の部下たちが騒ぎ始めた。

『少佐！ ここは突撃しましょう！』

『馬鹿者！ 策もなくぶつかってどうするー！』

『こ、ここは退却してみても……？』

『馬鹿野郎！ どこに退くんだよ！』

完全に恐慌状態に陥り、兵たちが騒ぎ始める。岡村少佐にはそれをどうにかする義務があったが、今の彼にはできなかつた。

どうしたらいいの。それがわからない。

巻中尉は間違いなく、この部隊では最強のOS乗りだった。だとい
うのに、結果はこれだ。こんなバケモノたちを相手に、いつたいど
うすればよいというのか？

『しよつ、少佐！ あれを！』

だが、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》たちは彼の思考を許さない。

部下に促され、視線を上げた先に岡村少佐が見たものは、紫のOS
が見せ付けるように手に持った、真つ二つにされた胸部から晒
される巻中尉の死体だった。

『聞こえてるかあ？ こうなりたくなかったら、潔く逃げろよ。ま
あ、逃がしゃあしねえけどな！ ヒヤハハハハハハハハハ！』

正気じゃない。岡村少佐は、確信した。

『さあさあさあ！ 始めようぜえ！ 殺戮ショーだ！ 主役は俺様
！ やられ役はためえらだあ！ 精々無様に逃げ回れ！ ヒヤツハ
ツハツハツハツハ ツ！』

わざわざ外部スピーカーを使用して、紫色のOSの乗り手が叫ぶ。
そして、正面から突っ込んできた。その側に灰色のOSが続き、両
翼のOSたちも動き出す。

『少佐！ 下知を！』

恐怖に震えるような声で、部下が叫ぶ。だが、彼は応じない。

すでに、兵士たち全員が恐怖していた。ただ、退くことができない
から留まっているだけだ。この状況では、どんな作戦をも意味を成

さない。

人は、恐怖には勝てない。一度恐れてしまえば、立ち向かうことは難しい。

『どいつだどいつだ！ 俺様に殺されてえ奴は！ 歓迎するぜえ！
ヒヤッハッハ！』

紫色のOSが、全力で突進してくる。岡村少佐は、その姿を見て言葉を発した。

「私は奴らを迎え撃つ。各々の判断で行動せよ」

事実上の撤退命令を。彼の部下を守るために。

「あああつ！」

両手の銃を握り締め、レイヴンが特攻を仕掛ける。部下たちが通信で叫んでいたが、すべて遮断した。紫色のOSが迫り、嬉しそうに叫ぶ。

『ゾクゾクするぜえ！ この二年間、人殺しができずに退屈だったんだあ！ 喜べ！ てめえは俺様に殺されることで俺の役に立つんだからよお！』

「誰が！」

叫び、レイヴンが疾走する。その途中で、アサルトライフルとガンライフルの引き金を引いた。

だが、弾丸は敵OSに触れる直前に何かに触れ、弾かれる。

エナジーシールド。机上の空論と呼ばれる、防御用の兵器だ。OSを動かすシステムである『オリジン』の電子操作を用い、空中に電

子の防御膜を張る兵器。

「なっ………!!」

岡村少佐にはそれが何かわからなかったが、その異常さは理解した。即座に後退する。

それを見て、紫色のOSは高々と笑った。

『残念無念つかあ！ ヒヤハツ！ レイヴン 使いい！ 一応名乗れよ！ 気が向いたら覚えておいてやるぜえ！ ヒヤハハハハハハハハツ！』

相手の嘲笑に、岡村少佐は努めて冷静に返した。

「自衛隊、東京地区守備部隊前線司令官、岡村友也！ 地位は少佐だ！」

それを聞き、もう一度相手は笑うと、宣言した。

「《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第三番、《ジェノサイド虐殺者》たかおかじゅんぺい高岡潤平！ びびったか？ びびったならもういいや 死ね！」

それが、この戦いの始まり。

残酷な世界で起こった、二度目の戦争の始まりだった。

六

私が望むのは、私を救ってくれる人。

それが儂い希望だということ、わかっている。私を救える人は、世界を敵に回せる人だ。だが、そんな人はどこにもいない。ただ一人だけ、私の胸を締め付けるその影を除いて。

「お前は、共に歩んでくれるのか？」

私の中のその人へ、私は問いかける。だがその人は、その少年は無表情にこちらを見るだけだ。だがそこか、その瞳は温かい。

変だ、と思う。気ままに生きていくのが、私の流儀のはずなのに。一人で生きていくのが、私の矜持だったはずなのに。

なのに私は、一度共に過ごしただけの『彼』をこうして望んでいる。

私は、誰だ？

その問いに答えは、ない。

第二章「OS」（後書き）

というわけで、第二章です。戦闘開始ですね。

第三章も近いうちに投稿したいと思います。というか、第一話ではきるだけ早く全部投稿したいな、と思っております。

一話一話が相当長くて鬱陶しいかもしれませんが……すみません。感想など頂けると、うれしいです。

どうもありがとうございました。

第三章「オリジン」（前書き）

【オリジン】（Origin）

起源、及び起点の意。また、OSの核であるシステムの総称。万国共通の名称。

二足歩行型起動兵器、OSをOSたらしめているシステム。OSの全身を神経のように伝っている靱帯に電子信号を送り、これを操作する。操縦桿を操作することで電気信号を送るのだが、電気信号は使い方によっては外部への干渉も行える。

OSは自由に動けるロボットと勘違いされがちだが、実際はそう生易しいものではない。熟練者でなければ戦闘などまず無理な兵器である。しかし、特殊な訓練を経たパイロットというパーツを得ることによってこの兵器は最強の兵器となる。

尚、四年前に『搭乗者が機体と同調する』システムが開発されたという噂もある。

丹羽鏡花

【私の分身を動かすための、力】

第三章「オリジン」

零

そこは、深淵の暗闇だった。

目の前にはいつも、自分より先に生まれた男がいて。そいつの背中ばかり見て、ずっと、ずっと追いかけていた。

でも、気付いていたんだ。

俺は、永遠に兄を超えられないと。

直接手を汚すことはなく、ただ論理を組み立てるだけですべてを解決する。すべてにおいて絶対的だった。

両親は自分たちが作った借金のことと精一杯だったから、俺の世界は兄だけだった。

前を向けば常に兄がいた。生きるために必要なことも、戦い方も、すべて兄が教えてくれた。だから、尊敬している。劣等意識などは別れない。

あの兄に対しては、そんなことを抱く気さえ起こらない。

だがその兄も、一年半前に姿を消した。

二年前の戦いの時、敵の首領を論理だけで追い詰め、自殺させた。

結局、最後まで兄が直接手を汚すことはなかった。

心配する必要はない。あの兄のことだ。生きて帰ってくるに決まっている。

だが、わからないことが一つだけある。

すべてを理解し、すべてを予測し、すべてを望みのままにできる存在。そんな存在は、一体何を考えて生きているのだろうか？

もしかするとそれは、想像を絶する地獄なのではないか？

だとしたら、兄はきつと不幸なのだろう。

誰もが羨む兄は。あの、天才は

「う……?」

目を覚まし、宗次は体を動かす。その瞬間、体は条件反射のように起き上がった。

「　　ッ！」

だが、ジャラリという音共に足を引つ張られ、宗次は再び地面に倒れ込む。両足には、いつの間にか鋼鉄の錠が付けられていた。見ると、手にも頑丈な手錠が付けられている。

宗次はその状況を確認すると、周囲を見渡した。どこかの牢屋のような場所だ。壁は白く、どこか圧迫感を与える構造になっており、目の前の柵は一見普通の鉄柵だが電流が流れていることは間違いない。

とそこで、同じ牢の中にいる少女を見つけた。ただこちらは拘束されておらず、壁に寄りかかっている。

「美　　」

「ごめんなさい……」

少女　美鈴の名を宗次が呼ぼうとした瞬間、美鈴は涙を流しながら宗次に頭を下げた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい！　ごめんなさい……！」

泣き叫ぶように、美鈴は宗次に謝り続ける。その姿を見ながら、宗次は拘束具を引き摺り美鈴の側に行く。

「私、は……宗次さんに……！ とんでもっ、ないことを……！」
嗚咽を交えて、弱々しく、美鈴は謝る。顔は上がらない。

「じゅめ」

「もういい」

まだ謝ろうとする美鈴の言葉を、宗次は遮った。美鈴が顔を上げ、絶望したような表情になる。見捨てられた　そんな表情だ。宗次は美鈴の側に座り込むと、いつも通りの無表情で言った。

「俺を撃つたのには、お前なりの理由があつたんだろう。俺は責めない。大体、俺はいつ撃たれたっておかしくないようなことをしてきている」

美鈴を責めるどころか、自分を責めているような口調だった。美鈴は、その言葉で複雑な表情になる。

「贖いの時は、前を向いてきちんと裁かれてやる。この手で殺した命に対する罪を、全部背負ってみせる」

握り締めた両手を見つめて、宗次は呟く。

戦争時の英雄など、所詮は大量殺人者だ。いくら美化しようとも、結局はその結論に至ってしまう。

だから、きつといつか英雄は死ぬ。

ここにいる、英雄の皮を被った殺人者はいずれ　裁かれる。

だからその時は、両手を広げて受け入れよう。

「ただそれは、責任を果たしてからだ。俺はこの国を変えてしまっ

た。その行き先を見極めるまで、俺は死ねない」

宗次は言う。誰に対しても口にしたことがないことを。

この国を変えようとした者たちは、確かに敗れた。だが、結果的にこの国は変わってしまった。そして宗次は、それを引き起こした張本人だ。だから、責任がある。

変革者の夢を打ち砕いた者として、この国を見届ける義務がある。美鈴はただ黙って、それを聞いていた。宗次は立ち上がると、最後に言った。

「それに、どうせ兄貴が後ろにいるんだろう？ 何を吹き込まれたのかは知らないが、あの男のやりそうなことだ」

「！」

宗次の言葉に対し、美鈴が驚愕の表情を浮かべる。宗次は構わず続けた。

「人を駒としか思っていない外道。それが兄だ。……それに、美鈴。お前は俺を撃った時、泣いていただろう？」

そこで、宗次は初めて微笑を浮かべた。美鈴は呆然と宗次を見上げた後、顔を紅くして俯いた。宗次はその反応に首を傾げながら、続きを口にする。

「憎悪の目を向けてくるならともかく、涙を流されては、俺は怒ることなどできない。だから気にするな。こうして生きているわけだからな」

微笑を苦笑に変えて、宗次は美鈴に言った。美鈴は俯いたまま、微かに頷いた。

だが、宗次の言ったことは、普通なら考えられないことだ。

人は、理不尽を憎む。理があればよいというわけではないが、最も人が許さないのは理不尽なことだ。だから、今回の件においても普通なら宗次は美鈴に少しいたであろうと疑念と憎悪を覚えるはずである。しかし、そうならなかった。

それだけで、宗次がこの美鈴という少女をどれだけ信用しているかが窺える。

そして宗次は牢屋の鉄柵の外へと、声をかけた。

「いい加減に、出て来たらどうだ？」

敵意を、その言葉に乗せる。

「それとも、これも貴方が言う策か？」

嫌悪を、その言葉に乗せる。

「だとしたら、墮ちたものだ。自身を神と名乗っているくせに、俺程度に読まれるようではな。そうは思わないか？」

誰かが、鉄柵の外で笑った。同時に、靴の音が響き渡る。

達人の動きではない。素人の動きだ。宗次もそうだが、一定の訓練を受けた者は普段の足運び一つに当たって素人とは違う。だがこの足音は、紛れもない素人のものだった。

そして、その人物が鉄柵の前に立つ。

すらりとした、百八十はある長身。髪は宗次とは違い、サラリと流れている。平均よりも少し長くくらの黒髪が、少しだけ動く。

「一年半の間、何をしていた？ 上はお前を探して大慌てだぞ？」

純白のスーツを着た男は、その言葉を聞いて笑った。唇を吊り上げ、本当に可笑しそうに。声を出さずに。

そこで、宗次は気付いた。すでに、この男が盤面を支配しているということに。

この男が自分たちの元から消えてから、もうすぐちょうど一年半になる。後一分で深夜零時を迎え、その時にこそこの男が去ってちょうど一年と半年が流れる。

男は腕時計で、時間を確認する。おそらく、待っているのだろう。らしいといえばらしい。この奇怪な行動こそが、この男の専売特許なのだから。

そして、時計の針が、零時を指し示す。

朝なのか、夜なのか。その境界が曖昧になる時間を。

「さて、時は満ちた」

仰々しく両手を広げ、男は言った。

「平穏にして、退屈な時はここで終わりを告げる。我が名において、終わらせる」

その者、《神》を名乗りし盤上の支配者。

二年前に樋浦宗次という己の弟と共に、直接一度も手を汚さず、人を殺した男。

その者は、神の意志。

神の代行者 樋浦京一郎（ヒノハラキョウイチロウ）

その日。俺は、悟った。

銃を捨てたいという願いが、果たされることがなき理由を。

世界はただ、崩壊へと突き進む。

—

司令本部の時計は既に、零時を越えている。一応、午前とされる時間だ。

司令本部には、たった一人の男しかいない。和人だ。彼は戦場に存在する敵と味方の位置を映すデスク　俗に戦略盤と呼ばれるものを睨むように見ていた。

青い点が味方を示し、赤い点が敵を示す。正体不明の際は黄色の点となるのだが、今回は黄色い点は存在していない。

「何だ……！　この戦力差は……！」

睨むようにして戦略盤を見ていた和人は、唸るように呟いた。デスクの端を握り締めるその手は、今にもデスクの一部を？ぎ取ってしまいそうだ。

だが、その怒りのようなやるせなさは理解できることだ。

深夜零時ジャスト。その瞬間に、十四の赤い点の内、十二個が動いた。六個ずつ固まり、左右に展開した。それを隙と思い、十一個の青い点が正面にあつた二個の赤い点に突撃した。だが、たった二分で十一個の点すべてが消えた。

更にここからは通信で知らされたことだが、敵の行った残虐な行動のせいで兵のほとんどが恐慌状態になった。そして、隊長機が敵を単騎で迎え撃っている。だがそれも長く持たないだろう。

「たった一世代違うだけだぞ！　何故ここまで圧倒されている！」

バンとデスクを叩き、和人が怒鳴る。こんな姿を彼が見せることは珍しい。普段人の目がある時、彼は冷静を装っているからだ。特別戦後処理室。今となつてはテロリストの天敵でもあるこの組織は、もちろん様々な人々に敵視されている。同じ行政庁の中でさえそうなのだから、外から見れば推して知るべきである。だから彼は、弱点を晒さぬようにした。冷静に振舞い、すべてを隠し、副室長として生きてきた。だが、今ここに人の目はない。だから彼は、思う存分鬱憤を晴らせる。

「二機喪失……！ 早過ぎる！ まだこちらは四機しか倒せていないというのに……！」

唸るように言い、和人は指示を出していく。手元のキーボードに文字を打ち込み、転送する。戦闘中である以上、熟練者でもなければ通信は死に繋がる。そのための措置だ。

戦略盤に映る青と赤の点。その数は、同じだった。

赤い点の内、大将機と思われる二機の片方は後方で指示を出している、もう片方は岡村少佐のレイヴンと戦闘している。僅か数分で、ここまで減らされた。

双方の合計は、僅か二十。

つまり、相手は四機を失っているのに対し、こちらは二十九機の損害を出しているのだ。歩兵部隊のことも計算すればすでに死者、負傷者合わせて百名を越えている。

「岡村少佐がどれだけもつか……！」

戦略盤を眺めながら、和人は唸る。実際、ここで巻中尉に続いて岡村少佐を失えばこちらの敗北は決定したものだ。今は岡村少佐が《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンの一人を相手に何とか踏ん張っているから

士気も保たれているが、それさえ危険だ。

岡村少佐の レイヴン は、隊長機ということもあって多少改造されている。格闘性能を少し下げ、その代わり装甲を厚くしているのだ。だから、簡単には打ち破れない。

しかし、すでに、岡村少佐の レイヴン は右腕しか残っていない。

紫色のOSの槍に、先程左腕は崩された。槍が腕を貫いた瞬間、そこがまるで腐ったかのように崩れたのだ。正体不明の武器。それがまた、兵たちの恐怖を煽る。

『本部！ 指示を！』

『岡村少佐が危険です！ 本部！』

「駄目だ動くな！ また繰り返すつもりか！」

戦闘を行っている部隊からの通信に対し、和人は怒鳴る。先程、岡村少佐を独断で救助しようとしたOSが十機、蜂の巣にされたばかりだ。性能差がある上に数でまで負けては、本当にどうしようもなくなる。

和人は次に、岡村少佐へと通信回線を開いた。

「少佐！」

『真田さん……！ 駄目です！ 相手が弄んでいるから生きていられるだけで、本気になられたらどうしようもありません……！』

「くっ………！」

切羽詰まった様子で、岡村少佐が答えてくる。通信画面に映った顔には酷い疲労の色が見て取れる。長くもちそうにない。

和人は唇を噛んだ。この状況で、自分に指示できることなど一つもない。

(急げ、雄平……！)

本来ならここで指揮を執っているはずの少年に、祈るような気持ちで和人は心中で告げた。あの少年は戦局が悪くなると見るや、奥の手を出すことを決断したのだ。

だから今はここで時間稼ぎを和人は任せられている。しかし、それも限界が近い。

和人が祈るように両手を合わせた。その瞬間、

ピピピッ！

電子音が響き、本部と味方のOS全機に通信が入った。

『遅れてすまんさね。おやっさん、出動許可を』

待ち侘びた、切り札からの通信だった。だが和人はすぐに出撃命令を下さず、確認をする。切り札である以上、相応の働きをしてもらわねばならないのだから。

「いけるのか？」

『もちろん。試運転なしのぶっつけ本番だからちよいと不安ですけどね。ま、おれと雅さんの共同開発です。万に一つのミスもありえない』

「そうか、ならば許可を出そう」

言って、和人は息を大きく吸い込む。

「特別戦後処理室副室長、真田和人の権限により特例を認める！

高岡雄平、夕霧雅の両名は新型OSに騎乗し、迅速に敵を殲滅せよ

「！

『あいよっ！』

『はい！』

雄平と雅が、通信で返事をする。それに頷いてから、和人は大声で叫んだ。

「出撃！」

それと同時に、地面が大きく揺れる。爆音のような音と共に、地面が揺れる。戦場の様子が、変わり始めていた。

『特異型試作OS オーケストラ、発進！』

雄平の叫び声と共に、それが戦場に降り立つ。戦場の様子が、これによって一変した。

二

「ふふ……見事なものだね」

空中に現れた画面。戦場を映すそれを眺めながら、京一郎は賞賛の言葉を送った。送られた相手は、今東京都のOSたちを蹂躪している二人の《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンだ。

宗次はそれを鉄柵越しに眺め、二機のOSを見て無表情に言う。

「あれは　　ダイケイと　回天　か？　迎え撃っているのは自衛隊のようだが、これはどこの映像だ？」

「言っておくけれど、録画した映像じゃあない。これはリアルタイムの映像だよ」

「リアルタイム？ いったいどこで まさか！」

どこでこの戦闘が行われているのか、それを悟り宗次が表情を変える。京一郎は、心底愉快そうに頷いた。

「そう これは東京都での戦いだ。レイヴン が二機いるのがわかるだろう？ 日本で レイヴン に乗れる者は四人しかない。同じ都市に二機いるのは、東京都のみだ」

微笑を浮かべ、画面を見ながら京一郎は言う。その顔は、戦争を心の底から愉しんでいるように宗次には見えた。宗次は拘束された手で鉄柵に掴みかかり 電撃に弾かれた。

「ぐっ！」

「無茶をするな。宗次、いくらお前でもその高圧電流は突破できないよ。お前専用を用意したんだから」

どこか呆れたように言って、再び京一郎は視線を画面に移す。瞬間、凶悪な笑顔がその顔に張り付いた。

一機の レイヴン が十機の クラフト を従え、突進したのだ。宗次はそれを見た瞬間、声を張り上げる。

「馬鹿野郎！ そいつらに手を出すな！」

普段冷静な宗次にしては珍しい大声だった。だが、戦場にいない彼の言葉が届くことはない。

そして、惨劇が起こった。京一郎は、嬉しそうに笑う。

「ふふ、やはり素晴らしいね。潤平くんは。私の期待通りに動いてくれる」

「ッ！」

その映像を見た美鈴が、目を背けた。宗次は、目の前の惨劇をしつかりと見据えている。

そこには、死体を晒される一人の女性の姿が映っていた。やったのは、デイケイを操る潤平だ。勝ち誇るように、自らが殺した女性を晒している。

たった二機に、十一機のOSが蹂躪された。

「どうだ？ 宗次？」

やはり楽しげに聞いてくる京一郎。あのような行為を見せられて笑っているなど、普通ではない。宗次は、拳を握り締める。瞬間、

がしゃんっ！

鋼鉄製の鉄柵が軋むほどの力で、宗次が両の拳を叩き付けた。遠心力を使って振り子のように叩き付けたのだ。だが、やはり鉄柵は壊れない。宗次の拳からは血が滲み、鉄柵から宗次の体へと電流が流れ込む。

だが宗次はそれに耐え、京一郎を睨み付けた。

「俺を、ここから出せ」

声を荒げず、冷静に言葉を紡ぐ。普通なら萎縮しそうな眼光だが、京一郎は全く意に介さない。

「出せと言った。聞こえていないのか？」

言って、今度は蹴りを叩き込んだ。再びの大きな音と共に、鉄柵が軋む。宗次はその反動で少し後ずさった。

京一郎は宗次の怒気を喜ぶように笑い、画面を指し示す。

「ほら、見てみるといい」

宗次と美鈴がその画面へと視線を移す。そこには、単機で ディケイ に挑む レイヴン の姿があった。

「なっ！ やめろ！ そいつらに手を出すな！ 死んでしまっ！」

再び、宗次が叫ぶ。だが遅い。戦闘が始まる。

宗次は、東京都の自衛隊の者たちと親しい。荒事になれば自衛隊は狩り出されるため、同じ理由でよく狩り出される宗次とは仕事場であつことが多いのだ。

みんな、良い人たちだ。宗次のことを尊敬している人もいるし、目標にしている人もいるし、ライバル視している人もいる。戦場を知っているから、彼らは宗次と話が合う。特室としても、自衛隊とは付き合いがある。

ましてや、OSの部隊だ。演習などに宗次はよく招かれるため、全員と顔見知りだ。名前も覚えている。

そして、それを知っているはずの京一郎は、笑いながら言った。

「そら、愚か者たちが出たぞ。良い的だ」

京一郎の視線の先。そこには、レイヴン を援護しようと無用心に前へ出る クラフト の姿。十機のOSが、愚直に直進する。

「やめろ！ 殺されるぞ！」

その姿に絶望を感じながら、宗次は叫ぶ。どの機体に誰が乗っているのか、それが宗次にはわかる。顔も浮かぶ。みんなを知っている。だが だからこそ、心が引き裂かれる。

「やめろ！ 殺すな！」

届くはずのない叫びを、宗次は敵の者たちへと紡ぐ。今出て行っている十機のOSが、丘の上から地上に降りた瞬間、アサルトライフルとガンライフルの的にされた。

「ッ！」

美鈴が、再び画面から目を逸らす。宗次は、叫び続けた。

「やめろ！ やめてくれ！」

なす術なく、蹂躪されるOSたち。宗次はぶつかるたびに両の手から血を撒き散らしながら、鉄柵を叩き続ける。

「頼む！ 殺さないでくれ！」

みんな、家族がいる。大切な人がいる。守りたい人がいる。それなのに！

みんな笑っていたのを覚えている。演習の時だって、何度も何度もみんなは向かってきた。高校生に負けていられるかと言って、宗次に向かってきた。みんな使命感があって、好感が持てる人たちだった。

「俺を出せ！ 出してくれ！」

ガンガンと、何度も何度も宗次は鉄柵を叩き続ける。京一郎は、笑ったままだ。

コクピットを撃ち抜かれ、倒れていくOSたち。足を壊されてもア

サルトライフルを構えようとして、無残に爆発するOSたち。
あの場所には本来、宗次がいるはずだ。そしてそうなっていたなら、
こんな風に一方的な戦いにはなっていない。

「俺がいれば！俺がいればあんなことには！出せ！出してくれっ！」

あまりにも必死な宗次の姿。それを見て、美鈴も立ち上がった。

「京一郎さん！話が違います！出して下さい！」

悲痛な叫び声を美鈴があげる。美鈴とて、自衛隊の者たちとは無関係ではない。二年前、彼女は宗次が戦場に赴いている間、護衛をしてもらうために自衛隊と行動を共にしていた。主戦場は東京都であったのだから、ある意味宗次よりも彼らを知っている。

東京都の自衛隊員。それは、二人にとっては戦友だ。
バケモノであるはずの自分たちを支えてくれた人たち。しかし、彼らは今、死という逃れえぬ運命の中にいる。

「頼むから……出してくれ……！」

「お願い、ですから……！」

二人の声が、しぼんでいく。十機のOSすべてが、完全に破壊された。二人は、崩れ落ちるように座り込む。

「頼むから……！」

もう力が入らなくなった手で、鈍く宗次は鉄柵を叩く。電流など、もう感じなくなっていた。

あの場所に自分がいれば。手を汚せば。守れたのに。

それなのに、今の自分はこんなところで何をしている？
仲間から信じるなど言われたにもかかわらず、撃たれて、無様にも
捕まって。何も、何一つできてはいないではないか。
宗次は、自責の念に押し潰されそうになっていた。
そして、その姿を見た京一郎は、笑った。

「ふふふふ……！ はははははっ！」

牢屋の中の二人を見下すように。惨劇を、喜ぶように。
新たな戦闘の様子が、画面に映る。ディケイが、レイヴン
の左腕を槍で貫き、腐敗させた。ギリギリでレイヴンは左腕を
切り離れたようだが、あれでは勝ち目はなくなったも同然だ。
京一郎は自分の顔を押しさえ、凶悪な笑みを浮かべる。
そして、京一郎は二人に背を向けた。同時に、画面も消える。

「そつだ。面白い事実を教えてあげよう」

足を止め、京一郎が振り返った。

「キミたちは戦闘が終わると同時に解放される。ついでに言つと、
戦闘の終わりとはある建物の崩壊と同時だ」

「……………？」

言っている意味がわからず、宗次は顔を上げて疑問の表情を浮かべ
る。どこかの建物が崩壊すれば解放するということらしいが、どの
建物だ？

とそこで宗次は勘付き、表情を変える。だが、京一郎は首を横に振
った。

「安心したまえ。この建物じゃあない。お前たちを今殺すことには

何のメリットもない。敵がいなければ、ゲームはつまらないのだからね」

そして、京一郎はまた笑顔を浮かべる。

「なあ、宗次。ああいう大規模な戦闘が起こった際、一番人が多く集まるのはどこだ？」

「……………!!」

そこで宗次は答えに行き当たり、目を見開く。京一郎は、見下すように笑った。

「そう、それが正解だ。理解力があって助かる」

「……………この、外道が……………!!」

再び憎悪の炎を目に宿らせ、宗次は京一郎を睨む。京一郎は振り返り、再び歩き出しながら言い切った。

「私を殺すか？　だが、今のお前には不可能だ。私を殺すことも、惨劇を止めることも。お前には誰一人として救えない」

ガシャンと、再び鉄柵が軋んだ。宗次が殴ったためだ。だが今度は京一郎も反応を見せず、立ち去っていく。

「ああああ……………ああ……………!!」

宗次は、呻き声を上げる。戦えないことが、こんなにも苦しいとは知らなかった。

戦いが起これば、誰かが死ぬ。それはわかっていたことだ。宗次とて、二年前に嫌というほど教え込まれている。

だが、それでも。彼の心は、認めない。
死はいくらでも見てきた。戦場には死が溢れていた。
だけど、彼が戦闘に加わった時、味方の死者はほとんどいなかった。
それは歴然たる事実であり、だからこそ彼は恐れられている。
なのに今。彼は、戦うことさえできない。
ただ、殺されていく人たちを見ていることしかできなかった。

「俺は、やはり……」

小さく、消え入りそうな声で呟く。
どうして、自分が銃を捨てられないのか？ 人殺しであることをやめられないのか？
ずっと、ずっと考えてきた。

そして今日。その答えの一部に、辿り着いた。

俺が銃を捨てられないのは、俺が弱いから。
誰かが傷つくのを、見ていられないから。
そして。

兄を、止めたいからなのだ。

三

薄暗い、非公式に作った格納庫。入れるのは特室のメンバーと雅だけという場所。
そこに突如、灯りが点いた。OSを三十機近くは収納できるほどの広さを備えた空間だ。かつて地下鉄があった場所を改造し、広い造りになっている。

その広い空間にあるのは、中心に聳え立つように屹立している巨大な茶色のOSと、そこから延びているコードが付けられた数多くの機材。周囲には、おそらくそのOSのものと思われる金属部品が転がっている。

他にも、三機ほど布を被ったOSが奥の方に立っている。倉庫のようだ。

「まさか、本気でこれを動かすことになるとは思わなかったさね」

重厚な扉が自動的に開き、そこから現れた人影が呟く。先程司令室を後にした雄平だ。彼は手近な機材へと近付くと、流れるような動作でキーボードを叩き始めた。

瞬間、十を越える機械が同時に電源を入れ、動き始める。OSの正面を残して取り囲むようにして設置された機械たちは、すべてが別々の数字を刻み始めた。もの凄い速さで演算を開始し、雄平の目の前にある画面へとその数字を転送する。

「シンクロニティ・システムは上々。エネルギー量は……一時間か。ま、試作機だし仕方ないさね。これは後で増やせる。装備も問題ないようだし、電子濃度も安定してる」

画面を見て確認の言葉を呟きながら、雄平はキーボードを叩いている。

OSの燃料は、エナジーと呼ばれる液体だ。二十年前に偶然生み出された、電子を異常なまでに含んだ物だ。OSの発明者である大神真由美はその電子に目をつけ、エナジーの作り方を完成させた後、OSを作った。

全身を流れる黒い液体、エナジー。人の血のような働きをするそれらの電子を利用して、全身へと命令を下す理論を彼女は完成させた。だがこれは常識的に無理がある理論であり、だからこそその異端の理

論なのだ。

そしてそれを、雄平は十年がかりで理解した。《ネームレス・チルドレン名も無き子供たちになる前から独自に研究を続け、二年前に理解した。僅か六歳の頃から考えると、恐ろしい話である。だが、だからこそ彼は異端の天才なのだ。

雄平がキーボードを叩く。すると、機械の声が彼の鼓膜を震わせた。

『エナジー流動率、十二、二十八、五十九、八十八……。内臓砲、各種状態確認。……確認完了。飛行ユニットヲ含メ、問題ナシト判断シマス』

「ご苦労さん。ほんじゃ、最終チェックに入つて。せっかくの初陣。派手にいかないと面白くないさね」

『了解シマシタ』

機械が答え、再び凄まじい量の数字の羅列が表示される。雄平は真剣にその数字を見ると、小さく呟いた。

「完璧」

普通なら確認は数時間かかりの作業だ。だが雄平は、すべて頭の中で済ませてしまう。

そして、確認が終わると同時に重厚な扉が再び開いた。雄平が振り向くと、息を切らした雅が微笑んだ。そして、雄平の隣で茶色のOSを見上げる。

「雄平くん。これを出すのね？」

「為政者というのは、色んな策を用意しておくものですからね。樋浦宗次という最強の切り札が使えなくなることは予測してたんで、これを含めていくつか策は用意しました。ですが敵の力を考えると、これ以上の手はないのが現実です」

「許可はどうしたの？」

雅が雄平を見て聞いてくる。メガネの奥にある黒い瞳が、雄平を射抜いた。雄平は肩を竦め、首を振る。

「これから貰います。とりあえず、乗り込みましょう」

「ええ」

その答えを予想していたのだろう。少し微笑んでから雅はコクピットに乗り込む。この機体はOSとしては本来ありえない二人乗りで、雅が前に、雄平が後ろの座席に座った。雅の方は手足を入れるOSの操縦桿があるのだが、雄平の席にそれはない。

雄平の席にあるのは、目の前に展開される巨大なキーボードだけだ。雄平は流れるようにそれを叩き、雅に声をかける。

「雅さん。いきますよ？」

「ええ」

雅が頷き、目を閉じる。瞬間、雄平の手が凄まじい速さで動き出した。

この機体の開発は、一応秘密になっている。開発者は雄平と雅の二人。一応日本は国防以外の戦力を持たないことを公言しているため、OSの開発を表立ってできないのだ。それに、この機体に積まれているのは本当の意味での新技術だ。

シンクロニティ・システムと呼ばれる、機体と搭乗者が同調するシステムを備えている。日本政府は秘密裏にこれの開発をしているのだ。

雄平は目の前の数字を見ると、雅へと声をかけた。

「同調率……八六%。雅さん。無理になったら言うてください」

「ええ。わかつてるわ」

目を開き、雅が答える。雄平は頷き、司令部へと通信を飛ばした。

「遅れてすまんさね。おやつさん、出勤許可を」

そこには、自分たちにとって直接の上官である男がいた。珍しく、苦々しい表情をしている。どうやら、戦況は良くないらしい。和人は雄平の言葉を聞くと、確認するように聞いた。

『いけるのか？』

「もちろん。試運転なしのぶっつけ本番だからちよいと不安ですけどね。まあ、おれと雅さんの共同開発です。万に一つのミスもありえない」

それは、己と目の前の女性に対する絶対の自信だった。和人は頷くと、二人へと指令を下す。

『特別戦後処理室副室長、真田和人の権限により特例を認める！
高岡雄平、夕霧雅の両名は新型OSに騎乗し、迅速に敵を殲滅せよ』

雄平はその言葉で微笑み、雅は表情を引き締めた。

「あいよっ！」

「はい！」

『出勤！』

そして、機体が目覚める。二人の天才が生み出した新たな罪が、その体に血とも呼べるエネルギーを流し始める。

ゴウンという鈍重な音を響かせ、二人が乗るOSの上が開く。見上げたそこは、満天の星空だった。そして、その夜空を切り裂かんばかりの轟音が、響き渡る。

「特異型試作OS オーケストラ、発進！」

雄平の叫び声に応じるように、茶色のOSが飛び立つ。背中に搭載された、翼のような飛行ユニットの為せる業だ。普通のOSとは一線を画した機体が 空を飛ぶ。そして、戦闘が始まる。

|||||

その機体は、圧倒的な存在感を放っていた。空中に佇み、だらりと両腕を下げている。

一見何もしていないようだが、実際には行動を起こしている。先程まで激化していた戦闘が止まっているのも、そのためだ。

そして、オーケストラ と名付けられた機体の中で、雄平は通信で指揮を執る。

「急いで岡村少佐を後方に。安心するといい。こいつのエネルギーフィールドはそう簡単には破れんさね」

『は、はっ！』

雄平から通信を繋がれ、命令を下された男は頷いて岡村少佐の機体、レイヴンの許へと向かった。そこには、ディケイ がいるのだが、ディケイ の放つ槍の攻撃は不可視の壁によって阻まれている。そしてそれは、自衛隊に攻撃を仕掛けている敵の場合も同じだ。

空気中の電子を集め、盾を構築する。それがエナジーシールドだ。電子を構築し、物理干渉を行える盾を作る技術。そしてその範囲を広げたのが、エナジーフィールド。オーケストラが装備する防御装備の中では、最強のものだ。

電子を使うOSという兵器だからこそ可能なのだが、これは現段階ではまだ机上の空論と呼ばれているはずのものだ。だが、現実にはオーケストラは使っているし、デイケイは先程岡村少佐に対してエナジーシールドを使用した。

紫色の機体、デイケイは岡村少佐への追撃を諦め、空中に浮かぶオーケストラを見上げる。

『いいとこだったのによぉ……！ 邪魔してくれてんじゃねえぞ！
あぁ！』

外部スピーカーの音量を最大にして、デイケイのパイロット、潤平が叫ぶ。だが雄平はこれを無視し、雅へと声をかけた。

「雅さん。いったん降りましょう。その方がフィールドを展開しやすいですから」
「わかったわ」

雅は頷くと、オーケストラを下降させる。ゆつくりと、ふわりという表現が似合うような動きで巨大な機体が地に降り立つ。

ずしんという音を響かせ、地面をいくらか砕きながらオーケストラは降り立った。

周囲の者たちは、突如現れた新型に言葉を失っている。クラフトは大きさでいうなら真ん中ぐらいだ。三・四メートルの全長を持つ。だが、オーケストラはそれを遥かに凌駕していた。

全長、四・八九メートル。既存の機体で最高の大きさが四メートルなのを考えれば、この機体の大きさは圧倒的である。だがこれは本

来、ありえない大きさだ。

OSの大きさが三〜四メートルであるのには理由がある。どれだけ工夫を凝らしてもそれ以上の重さには鉄などの素材が戦闘時の動きに耐えられないのだ。だが オーケストラ は開発途中の飛行ユニットと電子操作により、戦闘中は自身の機体重量を下げている。

無論、長くは戦えない。現時点で行える戦闘時間は一時間。機体が起動しているだけでエナジーを消費するのだから、それだけ動けるだけでも相当なものだ。

「岡村少佐。本部へ向かってください。ここはおれと雅さんで食い止めます。本部にいるおやっさ 真田副室長と共に、後方から指示を」

通信を用い、雄平は岡村少佐へと回線を繋ぐ。雄平の目の前には、味方全員との回線がつながれていた。

岡村少佐は味方のOSに運ばれ、オーケストラ の隣まで運ばれてくると、機体を見上げながら言った。

「高岡くんか。その機体は何だ？ 新型か？」

「そうですね。特室が国の許可を受けて秘密裏に創っていたものです。今おれたちの前に立ち塞がっている青いOSは第五期型OS スカイ …… 万能型の機体です。クラフト は同じタイプであるが故に、次世代のあれには勝てません」

キーボードを叩き、敵OSの映像を味方全員に送りながら雄平は言う。

両翼に展開された、八機の青いOS。クラフト の性能を底上げした機体 スカイ だ。万能型は接近戦、中・長距離戦両方ができるため便利だが、逆に特出した部分がない。レイヴン のように格闘能力が圧倒的であれば戦えるが、クラフト では難しい。

無論、OSの戦闘は何も機体性能で決まりはしない。演習では最初期の型の ユン が クラフト を倒すこともある。

だがこの場合、パイロットの能力は互角だ。そうなると、どうしても機体性能の差が出てきてしまう。

そのことは岡村少佐も理解していたらしく、頷く。だが、疑問を述べてきた。

「だがどうするつもりだ？ その機体が相手の次世代、第六期型だとしても相手は十機だ。キミが今展開している防御障壁も、そう長くは持たないだろう？」

「エナジーフィールドはまあ、あと三十分ぐらいもちますけど……そうですね。確かにこれが第六期型で、常識の範囲内の機体であったならば難しいです。ですがこれは、第六期型でもなければ常識に囚われてもいない機体です」

「何？」

岡村少佐が声をあげ、同時に他の兵たちも騒ぎ出す。雄平は、ゆっくりと口を開いた。

「こいつは《指揮者》^{コンダクター}が戦場で指揮棒を振るうため、《研究者》^{スカライ}と共に創り上げた機体。一人ではなく二人で、それこそオーケストラを指揮する指揮者とコンマスのように。おれと雅さんが乗り込んだ特異型OS オーケストラ に、敵はない」

雄平が不敵に笑い、雅が微笑を浮かべる。特異型OSというのは、あるシステムを乗せた機体の総称だ。そしてそのシステムを前に、それ以前の機体は玩具も同然。

雄平は、自信に満ちた顔で言った。

「負けはしませんよ。たとえ相手が、かつての仲間《名も無き子供

ドレン

ネームレス、チル

たち』であろうともね」

その言葉を受け、雅が機体を動かす。翼のように背中にある飛行ユニットが光り輝き、ゆっくりとオーケストラは宙に浮く。そして、ある程度の高度に差し掛かった瞬間、オーケストラが敵のOSへと突進を始めた。

「レーダー起動。敵OS十機捕捉」

淡々と口にしながら、まるでピアニストのように雄平はキーボードを叩いていく。彼の眼前のモニターから通信画面は消え、代わりに戦略盤とすべての敵OSの映像が映し出される。そして敵のOSには、戦闘機のような照準が合わせられていた。

突進してくるオーケストラを感知し、スカイがアサルトライフルを構える。だがその前に、オーケストラが動いていた。

「補足完了。発射！」

雄平が叫び、キーボードを叩く。瞬間、オーケストラの各部が開き、そこから十発のミサイルが吐き出された。大きさはそれほどではないが、威力は十分。それらがすべて、スカイとディケイ、回天へと向かっていく。

先程までオーケストラを狙っていたスカイたちは急遽照準を変え、ミサイルの迎撃を行う。だが、当たらない。

「どーん」

敵OSたちが背中に装備していた盾を構えたのを見た瞬間、雄平が呟いた。その数瞬後、敵OS十機にミサイルが着弾する。

爆発音と共に煙が上がり、敵OS全機の視界が奪われる。そして、

敵OSが視界を確保しようとした瞬間、右翼のスカイ 四機の背後に、そいつがいた。

『なっ ？』

あまりの非常識な機体性能の差に、スカイのパイロットが驚愕する。ミサイルが放たれた時、距離はかなりあった。アサルトライフルの射程外ギリギリだ。だというのに、この茶色のOSは一瞬で背後をとった。

茶色のOS、オーケストラが右手に持った十字型の剣、クロスレインを振り抜く。一機のスカイのコクピットが砕かれ、爆発した。更にオーケストラは左手のガンライフルの引き金を引いた。銃弾は原形を残さない威力で、スカイを砕く。

『うっ、撃てっ！』

目の前で仲間が二人殺され、ようやく正気を取り戻したパイロットがアサルトライフルを構える。だが、遅い。

オーケストラが右手のクロスレインを突き出し、左手のガンライフルの引き金を一度引く。ただそれだけで、右翼にいた四機のOSは全滅した。

と、そこでオーケストラは急に振り向くと、右手のクロスレインを収納し、右手を突き出した。すると、そこからエナジーシールドが生まれ、降り注ぐ弾丸を受け止めた。

『あいつを近づけるな！』

『撃ちまくれ！』

左翼の敵OSの叫び声が届く。ガンライフルの射程は威力がある分、短い。ここからでは届かない。

オーケストラ はエナジーシールドを展開し、防御を続ける。そこに、一本の通信が入った。

『援軍を送るぞ！』

本部に着いた岡村少佐のものだった。背後には和人の姿もある。雄平はそれに対して首を横に振り、言い切った。

「必要ない」

雄平が言い切り、雅を見る。雅は振り向いて頷くと、左手のガンライフルを収納して左手も前へと突き出した。

「準備いいわよ」

「了解」

雄平が応じ、キーボードを叩く。瞬間、膨大なエネルギーが左手に収束し、金色の光を放った。音速で放たれる、破壊光線とでもいうべき砲撃が、直線上にいた四機の スカイ を消滅させる。

電子砲 OS に流れる電子を組み合わせ、一時的に膨大なエネルギーを生み出し、射出する兵器だ。これも一応開発途中の兵器なのだ。が、上手く動いてくれた。分子間の結合を破壊する兵器だ。機体への影響の心配があった。

だがその綱渡りは渡りきれた。雄平は顔に笑みを刻み、キーボードを叩く。雅は己の判断で機体を動かし始めた。

特異型試作 OS オーケストラ は、史上初の二人乗りの機体だ。基本的に前の座席の者が機体を動かし、後ろの座席に乗る者が通信や戦略盤を含めた、圧倒的な情報量を操作する。機体に直接装備された兵器の八割を操作するのも、後ろの座席の者だ。

一人でも扱えないわけではない。後ろの座席のキーボードに操作の

意味も与えてやれば、扱えないこともない。だがそれをすればどうしても動きが鈍くなる。

これは以前より考案されてきたもので、前線で雄平が戦いながら淀みなく指揮を行うために創られた。雄平の能力はすべてにおいて秀でているので、後方の司令部で指示を出すだけでは無駄が多かったのだ。

だが一度戦闘に入ると、基本的に他のところへまで目が届かなくなる。それを解消するため、二人乗りにされた。そして実際、その試みは成功している。

「おれたちは右翼より攻撃する。全機、一体となって左翼より攻撃せよ！」

雄平が通信で指示を飛ばし、雅が オーケストラ を走らせる。最早、敵の中に残っているのは デイケイ と 回天 のみだった。そして、通信の先で他の兵たちが敬礼した。その顔には全幅の信頼がある。

『はっ！』

先程までは圧倒的な戦力差で臆していたが、今は違う。 オーケストラ の力をその目で見て、彼らは確信した。

あの機体と共になら、勝てる、と。

そしてそれを後押しするように、岡村少佐が叫ぶ。

『全軍、突撃いっ！』

『うおおおおおおおっ！』

大地を揺るがさんばかりの咆哮が響き、 クラフト が戦場を駆け

人は、熱に弱い。人は理屈ではなく、感情に支配される。雄平も岡村少佐も、それを良く心得ていた。だから、気持ちが高ぶった瞬間に命を下したのだ。

だがその中でも、雄平は微かに不安を覚えていた。

（何だ？ この妙な感じ。何か見落としてるような感覚は？）

長年戦場を指揮していた直感が告げている。何かを忘れていると。だが、その何かがわからない。そして、考える時間もない。

「雄平くん！　　デイケイ　よ！」

雅が、眼前に迫る紫色のOSを見て叫ぶ。雄平は叫んだ。

「正念場です！　　迎え撃ちますよ！」

眼前には、毒々しい機体が迫っている。その手にあるのは、禍々しい槍。

雄平はキーボードを叩き、兵器を動かす。

だが彼は気付いていなかった。惨劇はこの時既に、動き出していたということに。

四

病院の中でも、その映像は映し出されていた。

突如現れた、茶色のOS　オーケストラ。鏡花もその存在を知っている機体だ。もう完成していたとは知らなかったが。

だが、あれが出たということは決着は近い。鏡花は、病院に映し出

された映像を見上げながら呟いた。

「やっと、終わる」

先程まで、この病院内には絶望しかなかった。敵との差があり過ぎて、どうしようもなくなっていた。

だが、オーケストラが敵のOSを八機。一瞬で蹂躪した瞬間、この病院内の空気が変わった。おそらく、それをわかっているから単機で雄平と雅は特攻したのだろう。圧倒的な力は味方にとって、何よりもの勇気になる。

まだ専用機　デイケイ　と　回天　が残っているが、もうすぐ援軍が到着する。そうなれば、いくら《名も無き子供たち（ネームレス・チルドレン）》でも勝てはしない。

そこまで考えて鏡花が振り返り、怪我人の救護を続行しようとした時、

「わっ！」

「あっ……」

医者の一人与つつかってしまった。鏡花は慌てて頭を下げる。

「すみません。不注意でした」

「いやいや、こちらこそ悪かった。　　っと、キミはもしかして鏡

花ちゃんかい？」

「え？」

立ち上がった医者の方に自分の名を呼ばれ、鏡花は驚く。表情は相変わらず冷静なままだが、内心では結構な驚きがあった。

男は快活に笑うと、嬉しそうに言った。

「驚かせてすまないね。私は足立勇助といってね。千里の父親だ。いつも娘が世話になってるみたいで、一度会ってみたかったんだよ」
「こちらこそ。千里には、いつも助けられています」

そう言つて、鏡花は頭を下げる。実際、正体を知っていながらも仲良くしてくれる千里には助けられているのだ。

勇助は微笑を浮かべ、頭を下げた。

「こちらこそ。私たちは両方とも忙しくてね。中々構つてやれなかった。千里は家でいつもキミたちの話をする。親としては嬉しい話だよ」

とそこで、鏡花は真剣な表情になった。

「……貴方は知っていますよね？」

「何をだい？」

惚けるように勇助が聞き返す。雅は掌を握り締めた。

「私たちが《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》だということを」

小さく、勇助以外には聞こえない声で鏡花は言った。勇助は思案するよりに顎に手を当てると、首を傾げた。

「ふむ、だからどうしたというんだい？」

「え……？」

驚く鏡花に、勇助は言葉を紡いでいく。

「医者なんてしていると、それこそ色々な人たちに会う。みんな事

情があつて傷を負う。キミたちは今、私たちを助けてくれている。その行動だけで十分だよ」

「でも、それが真実という証拠はありません」

「いや、キミに限ってそれはない」

首を振り、勇助は言った。朗らかな笑顔だった。

「人を助けるということは、偽善じゃできないんだ。ましてやここは、呻き声と負の思いが溢れる場所だ。普通なら正気を保つことさえ辛いんだよ。本当に、心の底から誰かを助けたいと思っていない限りはね」

その言葉を聞いて、鏡花は珍しく笑った。どうやら考え過ぎていたらしい。この人は、出自のことなど全くにしていない。

世の中の人々がみんなこんな人ならば、自分はテロリストにならなかつたかもしれない。そんなことを、鏡花は考えた。そんな二人に、大声が届いた。

「お父さん！ 鏡花も！ 油売ってないで働いて！ 忙しいのよ！」

千里の声だ。彼女は一般人であるはずなのに、この状況でも明るさを失っていない。正直、凄いと思う。

勇助は苦笑し、鏡花に言った。

「娘に怒られてしまった。戻ろうか」

「はい」

鏡花も頷き、血塗れの白衣を翻して一種の戦場へと向かう。

画面に映る戦闘は、終わりに近付いていた。それを鏡花が一瞥した瞬間、信じられない言葉が映像から鏡花の耳に届いた。

『これで勝てたと？ ヒヤハハハハハッ！ 甘えよ、クソ兄貴！
俺様にはまだ、切り札があるっ！』

『やかましい。お前はきつちりと潰して』

雄平の言葉と共に、茶色のOS オーケストラ がガンライフルを
向け、 デイケイ を撃とうとした。その刹那、 オーケストラ
の足下が爆発する。

『ヒヤハハッ！ 地雷だぜえ！ 目晦ましにはなんだろっ！』

『く、お前』

『おーっと、忘れてた。これを押さねえとなあ？』

言つて、 デイケイ が後方に跳躍した。突然のことに視界を奪わ
れた オーケストラ は、 デイケイ を補足できない。
そして、 デイケイ のパイロットが声を張り上げる。

『殺戮シヨーだ！ 殺して潰して焼いて壊しておしまいさあ！』

そこで、鏡花は敵の狙いに気付いた。あの醜悪な男の狙いに。

「みんな！ 病院から退避して！」

珍しく大声をあげ、鏡花が叫ぶ。だが、間に合わない。
空を切り裂く爆発音が、夜明け前の戦場に響き渡った。

戦場から少し離れた場所。闇夜に紛れるようにして、その機体はあった。少し離れた病院があった場所からは、黒い煙と紅い焰が上がっている。

新型OS オーケストラ にじりじりと追い詰められていた デイケイ のパイロットが、病院を爆破したのだ。そして驚愕の隙を衝き、彼らは退避した。倫理的な問題を完全無視すれば、良い作戦と呼べるだろう。

「……………」

そして、その闇夜に紛れ込むように黒い衣を纏った紅のOSが、無言で遠くの戦場を見下ろしていた。既存の機体とは明らかに違う、異質な機体だった。

(私は、何をしている?)

戦場を見つめながら、彼女は自らに問う。叫び声と怨嗟が、彼女の耳へと届く。あらゆる負の感情が、彼女を襲う。

だが、彼女にはそれが少しだけ心地よかった。虚無である胸の内が、他者のおかげで埋まっていく。いつか壊れてしまうこの心が、あることを教えてくれていた気がした。

でも　それだけだ。

どれだけの苦しみが彼女の心を襲おうと。どれだけの想いが彼女に届こうと。

彼女の表情が変わることは、ない。

(お前なら、私を救えるか?)

心に浮かぶはやはり、『彼』の姿。

私の心を占める、少年へ。

ただ、問いかけた。
だがやはり、答えはない。
答えてくれる存在は、いない。

「やはり、行くしかないのか」

機体との同調を外し、彼女はコクピットで手を伸ばす。やはり彼女自身には何も無い。何も無いことが、『ある』のだ。
彼女の心に浮かぶのは、暗い闇。

救いがないくらいに深く、重い闇。
だけど、どこか安らげる。

彼女は両手を伸ばし、そこで初めて気付いた。
感情というものを失って久しい彼女にとって、『彼』に対する想いだけは本物なのだ。
掌を、握り締める。

何故か、手は震えていた。

百聞は一見にしかず。千聞も、また然り。
開かれた彼女の瞳に映る世界は、残酷にして醜悪。
されど人は、救いを求めてただ歩む。
彼女もまた、何かを望む。

夜明けが訪れても、何一つ解決はしなかった。

現実には醜さを増し、
眞実は人の心を蝕む。
世界が望む答えは、

今は一人の少年の中に。

世界が彼に望むのは、何か。

第三章「オリジン」（後書き）

連続投稿すみません。第三章です。第一話は、あと二章で終わります。

結構、説明くさい部分が目立ちますね……精進しなければ。

質問、感想、アドバイス、ご意見、いつでもお待ちしております。

ありがとうございました。

第四章「シンクロニティ・システム」(前書き)

【シンクロニティ・システム】(Synchronicity System)

特異型OSに搭載される、搭乗者と機体を同調させるシステムの総称。

表向きは四年前に登場した《名も無き子供たち》専用機と樋浦宗次の専用機が最初とされているが、実際は二十年前に創りだされたクライム が最初にこれを搭載した機体とされている。既存のOS理論を完全に無視した、常識外の理論。

大神兄妹と高岡雄平のみがこの装置を生み出すことができる。搭乗者との同調率が高めれば高いほど異常な動きを見せるが、高過ぎると搭乗者の精神にまで傷が及ぶ。現時点では九十%が限界とされている。

尚、これは公式上まだ机上の空論であり、研究中である。

樋浦京一郎【正に人間兵器。人が兵器そのものになるんだからね】

第四章「シンクロニティ・システム」

零

目を覚ました先にあつたのは、残酷な現実だった。

『……以上、百五十二名の死を悼み、黙祷』

長々と読み上げられた、百五十二人の名前。その中には、知っている名前がいくつもあつた。そして、級友の両親の名前も。

周囲から啜り泣きが聞こえてくる。そしてそれは、俺のせいだ。

参列した人たちは、悲しみと怒りをその胸に抱いている。そして、その怒りの一部は確実に俺へと向けられていた。

どうして、いなかったんだ？

どうして、戦わなかったんだ？

どうして、助けてくれなかった？

みんながこちらを見て責めたててくる。普通ならここで反論でもすべきなのだろう。でも、できなかった。

俺が戦えなかったのは、事実。

ただ見ていることしかできなかったのも、事実。

英雄のくせに。

英雄のはずなのに。

白い目が、俺を見ている。俺の隣では、金髪の少女が涙を流していた。彼女もまた、責任を感じているのだろう。

雨が、頬を打った。

冷たい雨が、心をどん底へと突き落とす。

『尚、殉職された軍人の方は二階級特進を行います。順に』

重苦しい口調で、みんなの前に立つ特室の副室長が口にする。彼も無念を感じているはずだ。避けられたかもしれないことなのだから。そして、棺が運ばれていく。だがその数は、百五十二もない。爆破された病院。負傷者が数多くいたその場所で亡くなった者は百五十二名。生存者は十名足らず。無傷の者は、誰もいない。墓地へと葬られる、いくつもの遺骨。その内のある二つが葬られた時、一人の少女が泣き叫んだ。

「お父さんっ！ お母さんっ！」

崩れ落ちて泣き叫ぶ少女。いつも快活で元気一杯の少女が、目から大粒の涙を流して叫んでいる。

「……………」

そしてその少女の隣にしゃがみ込み、一筋の涙を流すいつもは滅多に感情を見せない少女。その光景は、胸を締め付けるには十分だった。

そして、血が滲むほど強く掌を握り締める少年と、その隣で目を当てて涙を流す美しい女性。軍服を着た三十ぐらいの男性も、体を震わせている。

その光景すべてが、俺を責めているように感じられた。だって俺は、何もできなかったのだから。

お前が悪いんだ。

そんな声が、聞こえてきた。

お前が、ぶち壊した。

認めざるを得ない現実を、突きつけられた。俺は、ただすべてを見て、すべての責める目を受け止めることしかできなかった。雨はまだ、止まない。

遠くで、誰かが自分を見ている気がした。

—

「何で、何で宗次はいなかったのっ！」

両手と頭に包帯を巻いた少女は、泣き叫びながら宗次の胸倉を掴んだ。宗次は逆らわず、壁に押し付けられる。

拘束具と牢屋は時限式で開放されるものだったようで、宗次は美鈴と共に急いで外に出た。そしてそこで見たのは、爆破された病院とそれに巻き込まれた人たちを助けようとする人たちだった。

宗次はただ全力でそこに加わり、千里や鏡花を助け出した。そして治療を待つ間に雄平に事情を聞き、彼は今、千里に問い詰められている。

「宗次がいたら！ 宗次がいたなら、助けられたんでしょ！ お父さんもお母さんも、死ななかつたはずでしょ！ 何で、何でよおっ！」

彼女の両親である医者夫婦は、既に発見されていた。死亡という、

最悪の形で。

千里とて理解している。宗次は神様ではないし、万能でもない。彼にだって事情があり、だからこそあの場にいなかった。彼でも、それでも納得できないことがある。

「お父さんとお母さんが！ 何をしたっていうのよ！ みんなを助けてたのに！ 悪いことなんて、何もしてないのに！」

「千里。駄目」

右足を骨折し、松葉杖をつきながら鏡花が千里の腕を引く。それを聞き、千里はその場に座り込んだ。目からは大粒の涙が溢れている。

「何で……！ 何でよお……！」

座り込んだ状態で千里は宗次の服の端を掴み、泣き続ける。宗次はただ一言しかいえなかった。

「すまない」

「……………っ！」

千里の目から、更に涙が溢れてくる。彼女が謝って欲しいわけではないことぐらい、宗次にもわかる。だが彼には、こうする以外に他の方法が浮かばなかった。

そうして千里がしばらく泣き続けていると、その頭に手を置く人が現れた。

「千里ちゃん。休みましょう。鏡花ちゃんも」

白衣を着、メガネをかけた美女が二人に言う。千里はただ手を引かれるままに、その女性……雅についていく。その後を鏡花もついて

いった。

「宗次さ」

その後ろにいた金髪の少女美鈴が、俯く宗次に声をかけようとする。だが
どんっ！

宗次が左手で壁を殴り、砕いたことと言葉が詰まった。目に涙を溜め、美鈴が俯く。今回の責任の一端は、彼女にもあるのだ。

「くそ、がつ……！」

珍しく、感情を露にして宗次は呻く。

「くそつ、たれがああつ！」

叫び、宗次が壁を粉碎する。拳によって砕かれた壁は、彼の血によって赤く染まった。

その後ろでは、美鈴も涙を流していた。愚かにも京一郎の甘言に乗り、このような惨劇を招いたことを悔やんで。

そして、せつかく治療してもらった宗次の手が再び血塗れになった時、面倒臭そうな声がかかった。

「いい加減にしとくさね。自分を責めたところでどうにもなりはしないし、不毛だ」

茶色の髪を掻きながら、雄平がこちらに歩いてくる。宗次は雄平を睨みつけた。

「おー怖い。でも、俺に対して怒ったところで仕方ないさね。もう

起こることは起こってしまった。後は、それに対してどうするかだけだ」

肩を竦め、雄平は言う。いつも通りの飄々とした口調だが、どこか無理をしているようであった。

だが宗次はそれに気付かず、雄平に詰め寄る。

「人が死んでいるというのに、何故そんなに冷静になれる？」

「人が死ぬことぐらい、今更のことさね。おれに言わせてもらおうなら、そんなことでいちいちつかつかつてくるお前さんがわからない」

雄平がそう言った瞬間、だん、という音が響いた。宗次が雄平を壁に叩き付けた音だ。

「人の命は、足し算や引き算じゃない！ そうだろう！」

「やかましいっ！」

宗次が叫んだ瞬間、雄平も声を張り上げた。

「お前さん一人で背負った気になるな！ 今回の件の全責任は、指揮を執っていたおれにある！ お前さん一人が悔しがってると思うな！」

そこで、宗次は気付いた。雄平が微かに震えているということ。

この男も、今回の件で自分を責めているのだ。病院を攻撃するなどという、倫理を無視した行為……だがこれは、以前《未知^{アンノウン}》が一度だけ用いた手段だ。それを知っていながら止められなかった自分を責めていてもおかしくない。

雄平は宗次の腕を振り解き、言った。

「できの悪い弟はおれが必ず始末する。完膚なきまでに殺して、晒してみせる。手を出すな。これはおれの戦いだ」

普段の軽薄で飄々とした口調からは想像できないほど、殺気が込められた言葉。だが宗次も負けてはいない。

「お前こそ、俺の邪魔をするな。敵討ちは俺がする」

二人の間に一触即発の空気が流れる。二人とも譲れない。

片や、救えなかった無念をぶつけようとする者と。

片や、弟を兄として叩き潰そうとする者と。

二人の想いが退くことはない。場合によっては、二人の間で戦闘が行われることもあった。だが、そうはならなかった。

「ふふつ。こんなところで争っていてもいいのかい？」

不意に聞こえてきた声。美鈴を含めた三人は驚き、その中で宗次は反射的に二丁の拳銃を構えた。相手はその姿を見て、笑みを深くする。

「……京一郎か。やっぱり、あんたが今回の黒幕だったようさね」

目を細め、睨むようにして雄平が突如現れた京一郎を見据える。宗次は二丁の拳銃の照準をそれぞれ頭と心臓に向けた。そして、美鈴を庇うように前に立ち、雄平に続いて口を開く。

「何をしにきた？ 返答次第では、この場で撃ち殺す」

普通なら身震いしそうなほど冷たく、低い声だった。だが京一郎はやれやれと肩を竦めるだけで、気にした様子はない。

「どうせ撃てないだろうに。まあいい。まず雄平くんの言葉だが正解だよ。今回の黒幕は私だ。私がすべてを画策し、この惨劇を引き起こした。だから、策が至らなかつたといって悲しむ必要はない。私の策相手にあそこまでやれば、十分だよ」

パンパンと乾いた音を響かせる拍手をし、京一郎は言う。その目は完全に相手を見下した者のそれだった。宗次は銃を構えたまま、低い声で問う。

「目的は何だ？ 何故、このような事態を引き起こした？」

「言つたはずだよ。退屈な平穩を崩壊させるために私はいると」

宗次の問いを予想していたかのように、京一郎は即答する。微笑を浮かべてこそいるが、その目は全く笑っていないかった。

宗次が唇を噛み、新たな言葉を搜す。だがその前に、美鈴が口を開いた。

「嘘、だつたんですか……？」

微かな失望と怒気を含んだ声が美鈴から発せられる。宗次と雄平は美鈴の姿を視界に収めながら少しだけ後退した。

だが美鈴はそれに気付かず、両の掌を握り締めて呟く。

「宗次さんが戦わなくて済む世界にするっていうのは、少なくともこの国では血が流れないようにしてみせるというのは、嘘だつたんですか……？」

震えているような、美鈴の声。京一郎は、それを嘲笑った。

「嘘に決まっているだろう？ 宗次が戦わなくて済む世界？ 血が流れない国？ そんなものは理想論で、現実には起こりえないことだよ。こんなことを信じるとは、キミも愚かだね。美鈴くん」

両手を広げ、あからさまに嘲笑しながら京一郎が言う。その姿は、一種の悪魔のようにも見えた。

「ッ！」

美鈴が口元を押さえ、涙を堪える。宗次と雄平は、そこで完全にぶちぎれた。

「堕ちたな。京一郎」

「人を何だと思っているんだよ？ あんたは？」

二人が放つ、静かでありながら鋭い殺気で、空気が変わる。ちりちりと肌を焼くような感覚が、京一郎を襲っていた。

普通なら、騙された美鈴が悪いのだろう。確かに京一郎が言ったことは、実現など不可能も同然な事柄ばかりだ。相手にさえすることではない。

だが、言ったのが樋浦京一郎なら、話は違う。

僅か十八であった八年前から、この男の為してきた偉業は数知れず。四年前、鍛え上げた彼の弟が戦場で名を馳せる頃には、彼は既に神と呼ばれていた。

どれだけの銃弾が降り注ぐと、まさしく神の加護のような何かを彼を守った。

そして彼には、絶対性がある。不得手なものなど存在しない。ただ彼が望み、本気でそうしようとしたならば、世界さえも手にできただろう。それぐらいの力はあった。

だから、美鈴は責められない。責められるはずがない。

樋浦京一郎という男の言葉には、無条件でそれを信じさせる重みがある。

そして、それは宗次も同じだった。彼もまた、兄を無条件に『信じていた』。

「美鈴がお前の甘言に乗ったのは、樋浦京一郎ならそれができると思ったからだ。だというのに、それを愚かと吐き捨てるだと？ 希望を抱かせたのは、お前だろう！」

「それが愚かだという。いつ私が、誰かのために動いたと言っただ？ 私は私の利のためにしか動かない。今まで誰かが救われていたのはそうすることで結果として私の株を上げ、最終的に私が英雄になるためだよ」

淀みなく京一郎は言い切る。雄平は鼻を鳴らした。

「堕ちたもんだ。神とまで謳われる男がまさか、我欲の塊とはな。まあ、おれは元々敵だったから別にどうでもいいけどさ」

肩を竦め、挑発するように雄平は言う。だが京一郎は挑発に乗るところか、雄平の言葉に心の底からの驚きを見せた。

「堕ちた？ それは違うぞ、雄平くん。遠い昔、人は自ら堕ちたんだ。禁断の果実を口にし、自ら罪を背負った。そして神なき今の世界で、その座は空位のままだ」

「何が言いたいんだ？」
「つまりだ。今この世界に神はいない。ならば、誰かがその耐え難き空位の座を埋めるべきだ。そうは思わないかい？」

どこか子供のように無邪気な笑顔で京一郎は言う。普段の雄平ならばここで軽口の一つでも叩くところだが、そうしなかった。そして

その理由も、宗次にはよくわかる。

狂気。

京一郎の体からは、それが読み取れた。美鈴の体が、震える。だが宗次は退けない。弟として、止めなければならぬ。

「そんなくたらないことを考える必要はない。お前はここで、俺が止める」

これ以上、踏み込んではいけない場所へは行かせない。その想いと共に、宗次が銃を構える。かちりと、銃が作動する音が響いた。京一郎はその銃口と宗次をゆっくりと眺め、両手を広げて受け入れるかのようなポーズをとった。

「止められるのなら、止めてみるといい。本当に止められるのならだがね」

その言葉と共に、宗次が引き金を引く。二丁拳銃の両方が作動し、銃弾を放たんとする。

ダン、ダン！

二発の銃声。急遽作られたその病院内にその音は反響した。だが、それだけだった。

宗次たちに背を向け、京一郎が歩き出す。その顔には、余裕の表情が張り付いていた。

「ああそつだ。これを忘れていたよ」

振り返らず、懐から白い封筒を取り出し、京一郎が放り投げる。雄平はそれを空中で掴むと、疑り深い表情で問いかけた。

「これは？」

「招待状だよ。キミと雅くんが創ったあのOS…… オークストラ
だったかな？ あの機体を持つ情報集積力ならいずれ辿り着ける
ものだからね。どうせなら、こちらから招待して差し上げようとい
うことだよ」

振り向かず、足を止めて京一郎は言う。つまり、こういうことだ。

雄平と雅が開発した オークストラ は、戦場でも淀みなく指揮を
行うために様々な電子情報網が搭載されている。その気になれば、
他国の国家機密にさえ単機で侵入できるほどの能力がある。

だがそれを行えるのは、雅が機体と同調し、雄平が情報機械を操る
時のみ。雄平はこの後、それで敵の行方を炙り出すつもりだったが
手間を省いてくれたということだ。

「後悔するぞ。こちらの士気がこれでもかというくらいに高まって
いる時に、わざわざ戦場を教えてくれるなんてことをして」

「それを打ち砕くのも一興ということだ。キミがどれほど策を巡ら
せようと、私の掌からは逃げられない。すべては私の思うがままだ」

その言葉を聞き、珍しく雄平の頭に血が上る。だが表面上は冷静に、
雄平はその背中に言葉を紡いだ。

「上等さね。たっぷりと後悔させてやるよ。おれたちを見くびった
ことを」

「させてみたまえ。美鈴くん。キミもだ。私に対して何かをぶつけ
たいというのなら、宗次に託すといい。私に対して何かを届かせる
ことができるのは、今の時点において宗次以外に誰もいないのだから
ね」

京一郎に言葉を投げかけられ、美鈴の体が反応する。そして最後に、京一郎は呆然と自身の銃を見つめる宗次へと言葉を紡いだ。

「宗次。今のお前に、私を否定するだけのものはない。私を悪だと断じ、消すというのなら……相応のものを見せてみたまえ。神になる私を否定できるだけのものをだ」

そして今度こそ、京一郎は振り返らずに歩いていく。

宗次は再び、引き金を引いた。今度は、一度ではなく二度、三度とダンツ、ダンツ、ダンツ！

鼓膜を痺れさせるような音が響き、拳銃が銃口から火を噴く。だが、銃弾が吐き出されることはない。宗次の足下には、不発となった銃弾が転がっていた。

世界は、あの男を生かすことを選んだ。

だから、こんなことが起こる。撃ち出した弾丸すべてが不発で、詰まることもなく吐き出されるなど、偶然のこととは思えない。

宗次は銃を下ろし、天井を見上げて呟いた。

「……止めようと、思った」

なのに、世界は俺の邪魔をする。

この世界は俺に、これ以上何を望むのか？

何百という人を殺した俺に、何を ……

二

明かりは点いているのに、そこは闇夜のように暗かった。

部屋が広くないことも理由の一つだろう。そこは正に隠された場所

で、たった二人の人間のためにしか存在しない場所だった。

そして、そこに踏み入ることを許された二人が、ゆつくりとその部屋を中心に向かう。

明かりが点いた部屋が暗い理由が、宗次にはよくわかっていた。狭いとはいえ、四方七、八メートルはある部屋だ。天井も高く、五メートル近くある。

だがその中心に存在する巨大な陰とそれを取り囲む機材が、この部屋を狭く感じさせている。暗く感じるのも、その巨人が纏う黒い外装と、そこから微かに見ることが出来る黒い体躯のせいだろう。

「……これです」

美鈴は一步前に歩み出ると、近くのキーボードを数回叩いた。その瞬間、起動音と共に巨人が力を手に入れる。

外装をまるでマントのように羽織った、漆黒の体躯が前面に押し出される。両の腰にはガンライフルと日本刀のような形状をした剣、イーストブレイドがそれぞれ二つずつ装備されており、その他に武器は見当たらない。

そしてその胸部の中心は、黒い球状のものが埋め込まれているようだった。何らかの武器か補助装置かわからないが、その部分は宗次が今まで見てきたどの機体とも違っていた。

また、人の指のようにしつかりと関節があるその手。更に、普通の機体は腹部が大きくなって鈍重そうな印象を与えるのに、この機体にはそれがなかった。身軽で、素早い印象を受ける。だがその姿はどこか、死神のようでもあった。

「これが、俺の新しい相棒か？」

ただ淡々とそう口にする宗次に、美鈴は「はい」と答えた。

「二年前に、宗次さんのOS シンは大破してしまいましたから。最初はもう一度創り直そうと考えていたのですが、おそらく同じものを創ったところで宗次さんの能力に機体がついていけないだろうと判断し、新しく創り上げました」

「過大評価だ。 シン に振り回されていたのは俺の方だった」

苦笑し、宗次は首を横に振る。宗次が以前使っていた シン というOS。あれは正に暴れ馬とも呼ぶべき機体だった。シンクロニティ・システムの同調率が高過ぎて、過敏に反応してしまうのだ。戦闘の度にあれを操ることは苦勞させられたのを覚えている。だがそれを聞き、今度は美鈴がいえ、と首を横に振った。

「 シン はパイロットのことなど何一つとして考えていなかった機体です。軍の方でも誰一人として乗りこなせず、本来なら破棄されるべき機体でした。ですが宗次さんはあれを乗りこなし、その力を最大限まで引き上げてくれました」

そう言って微笑むと、美鈴は黒いOSを見上げた。このOSの高さはそれほど高くない。おそらく低い部類に入るだろう。

美鈴は、己の作品を見上げながら淡々と呟いた。

「OSこそが罪だというのなら、それを救う存在も必要です。私の母が作った罪に救いをもたらすために私のすべてを込めて生み出したこの機体の名は、特異型OS クライスト。ギリシャ語で、救世主の意味を持つ名前です」

「救世主か。俺とは最もかけ離れた存在だ」

自嘲するように笑い、救世主の名を与えられた死神のようなOSを宗次は見上げる。頭部の瞳が、光ったような気がした。

美鈴は宗次の言葉に対しては何も言わず、宗次の方を向いた。

二人の視線が、絡み合う。

「この機体は、使用者に負担を強いる機体です。実験では八八%が同調率の限界ですが、これは宗次さんのために生み出した機体です。下手をすれば、シンクロニティ・システムと同調率が百を超えることもありえます」

「超えればどうなる？」

表情を引き締め、宗次が問う。シンクロニティ・システムはOSと同調する究極のシステムだ。公式上は机上の空論で、実際にはどの国も研究中程度のものだが、実際にそれを搭載したOSはいくつも存在する。

だがその中でも常識はある。同調率は、九十%を超えてはいけないということだ。

それ以上先に踏み込んだ時。人の精神は機体と同調し過ぎてしまい、機体が傷を負えば精神も傷を負うことになる。

そして、傷を負い過ぎた精神はいつか壊れる。

しかし宗次は二年前までの戦いで、幾度も九十%を超える同調率を弾き出してきた。それによって負った傷は深いものだったが、宗次は耐え切れた。

しかし、百となると話は別だ。最早それは、同調ですらない。

美鈴は頷き、真剣な眼差しで宗次を見る。

「同調という理論において、百を記録することさえも本来はありません。同調はあくまで、『違う者同士が共鳴し合うこと』ですから」

「百を超えると、そうでなくなるといふことか？」

「はい。同調率が百を超えた時、それは同調でも共鳴でもなくなり、『同化』となります。機体の中に精神が溶け込み、ありえないほどの力を発揮できるでしょう。それこそ、今までの同調が見戯である

かのように」

そこで美鈴は言葉を切り、ですがと言葉を続けた。

「その分、精神が受ける苦痛も相当なものになります。九十%を超えた時でさえ、それこそ心が削り取られるような苦痛を与えられる。百を超えたとすれば、もう精神が修復できなくなることもさえもありません」

「ああ、そうだろうな」

宗次には経験がある。九十%を越えた先で機体が傷ついた時に受ける苦痛を。あれは、精神が壊れてもおかしくないほどのものだった。できるものなら、使いたくはない。死にたくはないのだから。だがどうやら、そうも言っていられない状況らしい。

「だが、使うしかない。樋浦京一郎のOS クライム を相手に戦うには、それぐらいの覚悟をしなければならぬ。そうだろうか？」

「……はい」

宗次の言葉に迷うように唇を一度噛み締め、美鈴は頷いた。美鈴の方が、あの機体の恐ろしさは知っている。

史上最強のOS クライム を蘇らせたのは、美鈴なのだから。

美鈴はコクピットを開け、宗次に視線を送る。

「私個人としては、これを使って欲しくはありません。 クライム でさえ、同調率の限界は九八%です。その先の領域は誰も知りません。先程言ったように精神が完全に壊れてしまうこともありえます」

「そう脅かすな。これに乗る勇気がなくなってしまうだろうか？」

苦笑し、宗次はコクピットを眺めながら言う。その内装は、宗次にとっては見慣れたものだった。美鈴はやはり真剣に、俯きながら言う。

「いくらでも言います。この機体に乗ることを踏み止まってくれるのでしたら、私はいくらでも宗次さんを脅かします。それが、私の職務に反することだとしても」

宗次はそれに対して何かを言いかけ、口を閉ざした。自分の身を案じてくれているのだ。下手な言葉は返せない。だが、美鈴の願いを受け入れられないのも事実だ。

宗次は一度息を吐き、美鈴の頭に手を置いた。サラサラの髪感触が宗次の掌に伝わる。

「仲間の俺の心配をしてくれるのは嬉しい。だが、俺がやるしかないんだ。誰かがやってくれるなら喜んで代わるが、俺以外の誰にも樋浦京一郎を止めることはできない」

美鈴の体が少し震える。宗次が手をどけると、美鈴は顔を上げた。

「だから英雄なんですよ。宗次さんは」

どこか諦めたように、寂しく美鈴は笑っていた。

「だといいな」

宗次も短く、小さく笑った。

それとほぼ同時に、宗次の携帯電話が鳴る。着信相手は 和人だ。

「はい」

『宗次か。今どこにいる？』
「例のOSのところですよ。いつでもいけますよ」

その言葉を聞き、和人が頷いたのがわかった。室長である京一郎ほどではないとはいえ、有能なこの男がこうして緊急の電話をかけてくる時は、任務の時だけだ。

ましてや今は、新たな組織との戦闘中だ。そうでない理由がない。そして案の定、和人はそのことを告げてきた。

『お前たちが手に入れた情報の裏が取れた。二時間前に諜報員からその連絡があり、本部に連絡したところ、命が下された』

「……………」

宗次たちが所属する特別戦後処理室には、大元となる機関がある。

国際連合直属の機関、特別暴力主義対策機関……通称、《イージス》。

今回の件には《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンが関わっているため、そちらへと連絡を入れて指示を仰ぐことになっていた。普通ならここまでしないのだが、《未知》アンノウンというテロ組織は、それほど世界でも危険視されているのだ。

その幹部の《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンもまた然り。彼らは世界でも恐れられている。

そして、だからこそ。

『《イージス》の名において許可する。この案件、武力を持って治めよ。首謀者の生死は問わない。一刻も早く、世界に平穏と安穩をもたらせ』とのことだ』

こうして、人間兵器が望まれる。

「任務、了解しました」

世界が恐れた子供たち。それに抗うことのできる唯一の存在はそう
頷いた。

そして、戦いが始まる。

|| || || || || || || ||

遠くで、爆発が起こった。戦闘が始まったらしい。

「悲しいな」

紅蓮の機体の中で、少女が呟く。だが、言葉のような感情は少女の
表情に宿っていない。ただ無表情に。静かに戦場を見つめている。

少女はその白銀の髪を揺らし、機体进行操作する。

少女が少し目を凝らす。それだけで、戦場がより鮮明に映った。機
体と同調するシンクロニティ・システムの力だ。

「兄弟で争うとは、悲しいな」

少女は呟き、戦場を見つめる。すでに、戦いが始まっていた。

巨大な茶色のOSと紫色のOSが戦っている。少し視線を変えれば、
灰色のOSを圧倒する死神のようなOSもいる。

ここで、きっと誰かが死ぬだろう。

死は悲しい。それがどのような理由からのものであるとも、他者
に背負わせてしまうから。

だが、少女は表情を変えない。目にも感情は宿らない。

「哀れだな」

その言葉が誰に向けられたものなのかは、わからない。

三

「ここら一体は オーケストラ が支配した！ 敵に通信手段はない！ 連携を取って、各個撃破で動け！ 単機では戦うなよ！」
『はっ！』

最前線で敵の主力機と戦う雄平の声が味方のOSに届き、全員が頷く。

即席で編成された、自衛隊の クラフト によるOSの部隊。他府県から急遽招集したにもかかわらず、その動きは流石の一言だった。一系乱れぬ動きはまさしくプロのもの。しかし、その動きも最前線で戦闘を続ける二機と比べると見劣りしてしまう。

特異型OS オーケストラ。同じく特異型OS デイケイ。かつては仲間として、日本を恐怖のどん底に陥れた者たち。その者たちが今、刃を交え、互いを殺そうとしている。その内の二人は、血を分けた兄弟だというのに。

「鏡花。お前は後方から狙撃で部隊の援護を」
『わかった。そっちは大丈夫？』

通信画面の向こうに、言葉少ない少女が映る。雄平は頷き、指示を出した。

「宗次の方がどうなってるかはわからないが、まあ問題ないだろ。」

あれが負ける姿なんぞ、想像すらできないからな。それと、こつちを心配する必要もないぞ。単細胞のボケナスを倒すことぐらい、大した手間でもない」

『……それを信じる。二人とも、気を付けて』

「おつ。頼むぞ」

頷き、雄平は通信を切る。同時に、一度通信回線をすべて遮断した。ここから先を、通信で邪魔されたくはない。

「おつっ?」

その瞬間、雄平の体が傾いた。機体が斜めを向いたのだ。

「やあっ!」

そして、同時に雅が叫び、オーケストラを動かす。雅の意志を感じ取った機体は右手のクロスレインを直線的に突き出した。

しかし、デイケイはそれを槍で受け流し、後方へ跳躍する。

だが、オーケストラは諦めず、追撃のために左手のガンライフルの引き金を引いた。しかし、エナジーシールドで防がれる。

「なんて反応……!」

舌打ちでもしたそうな口調で雅は唸る。実際、今の反応は凄かった。機体性能だけではなく、パイロットの腕が相当なものだということだろう。流石に容易くはない。

オーケストラはクロスレインを杖代わりにして傾いた姿勢を元に戻すと、思い切り地面を蹴った。地面を揺らしながら、一気にオーケストラが距離を詰める。

『ヒヤツハア！ いいねえ！ 楽しいぜえ！』

外部スピーカーから聞こえる、品のない声。自分と似ている声なのが、少しだけ雄平の癪に障った。

雄平はキーボードを叩き、通信回線を開く。だが今度は味方ではない。

「よう」

雄平は、通信画面に映った相手に笑顔で挨拶をする。だが目は笑っていないかった。

相手はいきなりの通信に驚いたようだったが、相手を知ると笑い出した。

『ヒヤハハハハツ！ クソ兄貴イ！ いきなりだからびっくりしたじゃあねえか！ なんだなんだあ？ 命乞いでもするつもりになったのか？』

雄平と全く同じ茶髪の髪と瞳。顔も、雄平とほとんど同じだ。目つきが悪さが二人の差といえば差だが、それよりも大きな違いがこの二人にはある。

相手の 潤平の顔に額から斜めに右頬に流れる傷。

最早傷痕が消えることなき烙印のようなそれが、この双子を区別するに一番のものだ。

「いや、逆だよ」

自分の弟に対して挑発的な態度を取りながら、雄平は言う。

「お前が許しを請う姿が見れると思ったから、おれはわざわざ通信

を開いてやったんだ」

『てめえっ！』

その言葉を聞き、潤平は逆上する。我が弟ながらなんと扱いやすい
そう思いながら雄平は通信を切った。

それと同時に、オーケストラ が激しく揺れた。機体全身を覆う
ように展開しているエナジーフィールドに、デイケイ の放つア
サルトライフルの銃弾が連続して叩き込まれているためだ。
それを オーケストラ は建物の陰に隠れてやり過ごす。

エナジーフィールドは現時点では最強の防御兵器である。アサル
トライフル如きの銃弾では打ち破れない。だがこいつは急激にエナジ
ーを消費するため、長続きしない。

おそらく潤平の狙いは、エネルギー切れ。

オーケストラ は試作機であるために、稼働時間が短い。一時間
というのは、普通のOSに比べると四分の一程度ということになる。
無論、切れる前に燃料を入れ替えればそれ以上動かすことも可能だ
が、生憎と燃料のストックは二つしかない。

となると、こちらは短期決戦を仕掛けるしかない。

(それがあのポケナスの狙いの可能性もあるが、腐敗の槍とアサル
トライフルしかないのにそんなことをする意味もないか)

相手の装備を確認し、雄平は思考を巡らせ、結論を出す。その間、
僅か十秒。

雄平はキーボードを叩きながら、雅へと声をかけた。

「雅さん。稼働時間は後三十分ちよいです。動けなくなるとシヤレ
にならないんで、一気に片をつけましょう」

「わかったわ。じゃあ、リミッターを」

「それは駄目です」

雅の言葉を遮り、機体の出力を調整しながら雄平は言った。

「宗次のようなバケモノならともかく、おれは雅さんにリスクを背負わせる気はありません。確かにそれを使えば楽にはなりますが、絶対に必要というわけではありませんから」

厳しい口調だが、その中に相手を想う気持ちがあるのに雅は気付いていた。雄平は雅にに対してだけは、甘い決断を下すのだ。嬉しさと少しの反抗心を心に秘め、雅は頷いた。

「行くわよ。援護お願い」

「無論です」

雄平が返事をする。それと同時。

オーケストラが、地面を粉碎する威力で跳躍した。上にはなく前方にである。デイケイは先程まで隠れていた敵がとつもない速さで突進してきたことに反応し切れず、動きが少し鈍くなる。そしてそれを。雄平と雅は見逃さない。

デイケイがオーケストラを迎え撃とうとアサルトライフルを構え直す。先程とは違い、一点集中で突き破るつもりだ。確かに広範囲に作用するエナジーフィールドはその代わりに一点集中をされれば、時間と共に破られる。

だがそんなことを、オーケストラは黙って受け入れない。ガンライフルを構え、引き金を引く。一発だけ吐き出された弾丸は、正確にデイケイのアサルトライフルを粉碎した。

人が使う拳銃と対して照準性能は変わらないというのに、この正確さ。その技術は圧倒的というしかなかった。ガンライフルは軽くて扱い易い代わりに、狙うという行為が難しい。接近戦に向いた銃なのだ。

だから、ガンライフルはある程度以上の実力者しか使わない。
そして雅は、ある程度以上どころではない程の実力者だ。

『ちいつ！ 来いよお！ 返り討ちにしてやんぜ！』

アサルトライフルを投げ捨て、貫いたものを腐食させる槍を構え、パイロットである潤平が叫んだ。

雅は機体を走らせ、ガンライフルを連射する。それはすべて デイケイ に着弾する軌道だったが、腐敗の槍を回転させて盾にすることにより、銃弾を腐らせて デイケイ は防いだ。エナジーシールドを使わないのは、武器を持っているからだろう。

二機の距離が詰まり、オーケストラ がクロスレインを振り下ろす。

「やあつ！」

『甘えぜ！』

だが、それは デイケイ の持つ腐食の槍によって防がれる。同時に、

『腐らせてやるっ！』

潤平が叫び、自動的に腐敗の槍の能力が発動する。だが

『あ？ な、なに 』

クロスレインは全くその白銀の刀身に変化を見せず、そればかりか腐敗の槍のほうがちぎれ、砕け始める。

パキィィィィン………

澄んだ音を響かせ、腐敗の槍の刃が完全に砕け散った。

『ふっ、ふざけんなあ！ 何で碎けるんだよ！ おい！』

現実を受け入れられず、喚く潤平。その潤平に対し、わざわざ外部スピーカーを起動させ、雄平が口を開いた。

「その解析ぐらい、二年前に終わってる。クロスレインをそいつでは碎けない」

そして、余裕の口調で最後通告を下した。

「殺して晒してやるつもりだったが、面倒になったな。普通に死んどけ。お前は、やり過ぎたんだよ」

雄平は弟に対し、敵対心以外の感情は何も持ち合わせていない。家族の情など、こいつが親を殺した時にすべて消えたのだから。

『ぐっ……クソ、兄貴イイイイイツ！』

振り下ろされるクロスレイン。それが、潤平の辞世の言葉になった。

「チェックメイトだ」

そしてやはり淡々と、爆発するコクピットを見ながら、雄平は呟いた。

四

漆黒の機体が唸るように地面を駆け、目の前のOSを蹂躪する。当初 スカイ 八機だけだと予想されていた敵の兵力は、本当はそれ以上だった。

第四期型OS クラフト が十一機と第三期型OS クーロン が十八機敵側に存在しており、《イージス》の名で急遽招集したこちら側のOS クラフト 六十機には及ばずとも、数は相当なものだった。普通の規模ではない。

だが、そのほとんどは数による各個撃破と、死神のようなOSによって叩き潰されている。たった一機の特攻が、その状況を作り出した。

たった一機に敵の防衛陣は崩され、指揮は崩壊。そのような状況では、落ち着いている上に指揮もしっかりとした、数で勝る方が勝つに決まっている。

『きつ、来たぞ！』

『撃て！ 撃ちまくれ！』

宗次が駆る漆黒の外装を纏ったOSが来るのを見た瞬間、そんな言葉が飛び交う。迷彩から純粋な緑に塗り潰された二機の クラフト がアサルトライフルを構える。

瞬間、その二機は爆発した。

片方はイーストブレイドによって斜め下から真っ二つに切り裂かれ、もう片方はガンライフルの銃弾を的確に撃ち込まれて粉碎した。

宗次はその光景を一瞥すると クライスト を横っ飛びさせた。瞬間、先程まで クライスト がいた場所が狙撃される。

『酷いですね。単機特攻は自分の専売特許なのに』

外部スピーカーから声が届く。宗次は近くの建物の陰に身を隠すと、会話のために外部スピーカーを開いた。

「二年前、俺はお前たちと単機で戦っていたんだ。むしろ、俺の専売特許だろう？」

言いながら、宗次は各装置の状態を確認する。戦闘が始まってから三十分近く走り続けていたのだ。試運転もしていない今の状態では正直、不安がある。

問題なし。それを確認した瞬間、相手の声が届いた。

『樋浦宗次。あなたはこの世界を醜いとは思わないのですか？』

「どうだろうな。ただ、救いがあるとは思っている」

『……救いなんて、ありはしないんですよ』

苦々しい口調だった。宗次はレーダーによる位置の割り出しをしながら、その言葉を聞き続ける。

『惨くて、醜悪で、残酷で。人を数字のようにしか考えていない世界。こんな場所に、救いなんてあるはずがないんですよ。結局、誰も彼も夢に裏切られ、傷つき、醜悪な他人に利用されていく。くだらないです』

「世界を見限ったような口調だ。お前は世界を憎んでもいるのか？」

『ええ。そうですよ。自分は世界が嫌いです。憎悪してます。だから、自分は世界を壊す欠片を手に入れました。……史上最悪の、殺人ウイルスを』

その言葉を聞いて、宗次は一度動きを止めた。

ウイルス。細菌テロ。その手の事件に宗次は二、三度関わっている。すべて未遂だったが、その厄介さは身をもって知っている。

自然と手に力が入った。連動し、クライストも武器を強く握り

締める。

『人なんて、滅ぶべき生き物です。だから滅ぼします』

そして、その言葉が伝わってきた瞬間、灰色の機体が宙を舞った。ステルス性能を備えた機体だったため、クライストのレーダーもギリギリでしか反応できず、ただ銃弾を避けるように避けることしかできなかった。

だが次の反応は速く、クライスト避けながらはガンライフルを構えると、宙返りの体勢で正確に回天を撃った。

しかし、異常なまでに硬い外装のため、弾丸が届かない。宗次は体勢を立て直すと、右手のガンライフルをイーストブレイドに持ち替え、突進する。

正に一瞬。たった一步で、クライストは距離を詰めた。

圧倒的な機械性能。それを目の当たりにし、回天の動きが鈍る。そこを逃さず、クライストは両手の剣を交差させるように振り抜いた。

ガギンと鈍い音をさせ、回天の胸部の装甲が弾かれる。だが、致命傷には程遠い。

『邪魔を、するなああああっ！』

感情を爆発させ、回天が両手のアサルトライフルを乱射した。宗次はエナジーフィールドを展開しようとしてやめた。エナジーが足りない。

宗次が命を下すと同時に、クライストは横に飛ぶ。障害物を盾にし、アサルトライフルの攻撃をやり過ごす。

「直情型だな……」

一息吐ける状態になり、宗次は呟いた。《鉄砲玉》フレットなどという異名を誰が授けたのかは知らないが、非常に的を得ていると思う。

(さて、どうするか……)

相手の様子を窺いながら、宗次は思考を巡らせる。相手の名は既に知っていた。戦場で幾度も戦った相手だ。

《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン 第十一番、《鉄砲玉》フレット 細木康太。ほそぎこうた

その異名通り、誰よりも先に最前線へと突入し、敵を攪乱する。死にそうになるほどの戦場には幾度となく姿を現しているが、その並外れた身体能力でいくつもの死線を潜り抜けてきた男だ。

いふなれば、宗次と似たタイプである。単騎で圧倒的な力を持つ兵隊という点では。

もともと、宗次と康太の二人では天と地ほどの差があるのだが。それぐらい、宗次の能力は高い。

だが今回に限っては、相性の悪さが出てしまった。

宗次のOS、クライストは宗次との同調率を上げるため、運動性能を大幅に上げ、軽量の仕様になっている。そうしないと、宗次と機体の間に動きのずれが出てしまうからだ。実際、前の機体では宗次はわざと抑えて動いていた。

それに対し、回天は防御重視の超が付くような重量級OSだ。それこそ、皆か城壁が走っているような機体である。シンクロニティ・システムという機体を手足にするシステムだからこそまともに動いているが、普通の設計では立つことさえできないだろう。

今のクライストには、扱い易さと速さを重視した銃、ガンライフルと剣の中では最速を謳われる日本刀のような剣、イーストブレイドしかない。

普通のOSであるならば、これで事足りるのだが　今回は相手と

の相性が悪い。

あんな重装甲。どうやって削れば……

(……いや、ないこともないか)

そこまで考えた時、宗次の中に一つの選択肢が浮かんだ。それを使えば、この状況でも簡単に敵を潰せる。美鈴には悪いが、使わせてもらう。

やるう。

危険だが、やるしかない。そう決断し、宗次が出ようとした瞬間、

『なぜ、あなたは自分の邪魔をするのです?』

そんな言葉が聞こえてきた。

『あなただって知っているはずですよ。この世界に救いなどないことを。英雄であるあなただって、いつ用無しにされるかわからない。それに、あなたは兄にも裏切られた』

それを聞いた時、少しだけ心が痛んだ。

見切りはつけた。けれど、兄であることには違いはない。強くなりたいたといった自分に強くなる術を教えてくださいたのは、他でもない兄だったのだから。

だが、自分が戦う理由と兄は、関係ない。

『だというのに何故、世界を守ろうとするのですか?』
「決まっている」

わかりきった事を聞くな。そんな口調で、宗次は言った。

「俺以外にやる者が誰もいないからだ。代わってくれるのなら代わる。だが誰も、遠巻きに見ているだけで代わるうとはしない。お前たちを止めた責任も、果たさなければならぬ。世界を見届ける義務が、俺にはある」

かつてこの国を本気で変えようとした、彼ら。

その彼らを、武力の面で叩き潰したのは紛れもない自分だ。だから、今の世界を肯定した自分には、見守らなければならない義務がある。

「悪いが、そういう理由で俺は止まれない。どいてもらうぞ」

言葉と共に、クライストが跳躍する。

宗次の目的は、後ろにいる、あの男を止めること。

兄を止めることが、今の彼の目的だ。目の前の敵など、少し厄介な壁に過ぎない。

『くっ』

クライストを視認した回天がアサルトライフルの銃弾を放つ。だが、縦横無尽に動き回るクライストを捉えられない。

「第一リミッター、解除」

ガンライフルの引き金を引き、回天の周囲を回りながら徐々に距離を詰める最中、宗次は呟いた。瞬間、クライストの右目が紅色に輝く。

そして、その動きが変わった。

『う、わ』

「遅い！」

呆けた声を出す相手にそう一喝し、イーストブレイドを振り抜かせた。先程は装甲を削る程度だったそれが、今度は右腕を斬りおとした。

宗次の目の前にある計器に記された同調率が跳ね上がる。その数字は 九八%。それが示された瞬間、一瞬だけ警告の文字が映ったが、すぐに消えた。

宗次の体が、クライスト そのものになったかのような錯覚に陥る。

全身を駆け巡るエナジーの力が増加し、明らかに力が増した。目に見えてわかるくらいに、そのOSは危険を主張する。

『糞ガツ！』

しかし 回天 は退くどころか、反撃してきた。残った左腕が持つアサルトライフルの先端に装備されたナイフを突き出してきたのだ。クライスト はそれをイーストブレイドで弾き、アサルトライフルをガンライフルで粉碎する。そして。

「第二リミッター、解除」

宗次が呟き、クライスト の左目が紅に輝く。

両の瞳が紅蓮の色を帯びたその瞬間、爆発的な力が吹き荒れる。計器が異常な力を次々と示し、大きく宗次の目の前に文字が現れた。

『危険』

それはおそらく、美鈴が抵抗のために入れた文字だろう。宗次はそれを見て軽く苦笑すると、その文字を自分の意志で消し去った。同調ではなく同化した今なら、この機体のことは自分の体以上に扱える。

そして、同調率が記される。

同調率　　百十二%。

「行くぞ」

宗次のその言葉と共に、クライストが尋常ではない動きを見せる。回天が足を振り上げようとする動作の間にその足を掴み、捻じ切る。さらに残った足を払うと、イーストブレイドを横薙ぎに振るって叩き付けた。

ほんの一瞬の攻撃。数秒の内に行われたことだ。回天は自分の体の損傷に気付かず、無様に地面を削る。

「なっ、何が」

「これはまだ未完成の兵器らしい。だから生き残れるかもしれない」相手の言葉を遮り、宗次は言った。今彼は目を閉じ、胸部に埋め込まれた兵器を作動させようとしている。

クライストの胸部に存在する、黒いガラス玉のような球体。それが、光を放つ。

グラビティ・キャノン
「重力砲」

そして、漆黒のブラックホールが吐き出された。

通過する地面を抉りながら、凄まじい速さで漆黒の球体が回天に迫る。だが、機体は反応する暇さえなく、その直撃を受けた。大地が、揺れる。

直撃の瞬間、凄まじいエネルギーを放出し、漆黒の球体は消滅した。残されたのは、バラバラに粉碎された回天と、巨大な地割れのみ。

「……周囲に敵影はないな」

その惨状を確認し、宗次は クライスト の作動を止めた。先程 クライスト が放った砲撃は重力操作というとてもない技術によるものだ。新技術であるため不安定で、一発放っただけで機体の動力部が異常に熱くなっていた。

まあ、あの技術こそが クライスト の真価なのだ。徐々に慣らし ていくしかないだろう。体が痛いのも、慣れていくしかない。

同調率百分を超えた領域。あの兵器を使うためにはそうなるしかないというから踏み越えてみたが、とんでもない領域だった。踏み込んでいたのはほんの十数秒だというのに、全身が不調を訴えている。

「これが代償か。仕方ないといえばそうだがな」

苦笑しながら呟き、宗次は二丁の拳銃を懐から取り出す。神に抗う代償だ。これぐらいでなくてどうする？

樋浦京一郎を止めるためならば、いくらでも耐えてやる。

あの男は、あまりにも危険なのだから。

だがその前に、やらなければならぬことがある。

「生きているか？」

砕け散った 回天 の瓦礫の山へ、宗次は問いかけた。

「ふっ、う……。こっ、こ……」

それに答えたのは、弱い呼吸音と声だった。宗次はその声があった方まで歩いていくと、康太の上に乗っていた瓦礫を蹴り飛ばした。高校生ぐらいの白い髪をした少年が、微かに呻き声を漏らす。

ガランと音を立て、瓦礫が地面に落ちる。宗次は銃を向けずに、康

太に話しかけた。

「お前は強かった。それは俺が保障する」

答える力など残っていないだろう相手に、宗次は言葉を紡ぐ。宗次は彼らの敵だ。だからこそ、見届けなければならぬ。

「だから、最期に言葉を聞こう。言い残したことはあるか？」

その言葉に、一瞬驚いたように康太は目を細め、そして微笑んだ。そしてそれはおそらく、この少年が久し振りに浮かべた笑顔だった。

「自分、は……あな、たを」

途切れ途切れの言葉を紡ぎ、康太は宗次を見つめる。

「憎悪します」

ただそれだけの言葉を、康太は紡いだ。

彼のいた場所《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》を壊したのは宗次。そして今、彼らの新しい計画を打ち壊したのも、宗次。

そして、その命を奪おうとしているのも、宗次だ。だから宗次はそれを聞き、受け止める。

「未来永劫、忘れはしない」

その言葉に康太が何を思ったのか、わからない。

ただ彼は目を閉じ、眠りについた。

宗次はそれを一瞥し、目を背ける。その瞬間、

「相変わらず、苦勞する生き方をしているね」

宗次が目的にしていた男が現れた。反射的に、二丁の銃を構える。相手はやはり、武器の一つも持たない丸腰だった。

「敗者の弁を聞いてどうする？ 所詮敗者は敗者だ」

「かもしれない。だが俺は、行動が間違いであつても信念までは否定できない。誰にも俺が銃を捨てる願いを否定させないように」

「そうか。ただお前が銃を捨てることは、私が許さないけどね」

そう言つて、京一郎は目を細めた。宗次は、その言葉に対して強い意志をぶつける。

「何故お前の許可がいる？ いずれ俺は必要なくなる存在だ。平和な時代の基盤が出来上がれば、俺のような人殺しは必要なくなる」
「詭弁だ。平和な時代など来ようはずがないことを、お前は誰よりも知っているはずだろう？ 違うかい？」

「違う。人は分かり合える。そして変われる。だから俺も、銃を捨てられる」

真つ直ぐに宗次は言い切つた。今はまだ捨てられない、戦う力。だがこれはいずれ捨てられるはずだ。

いつか、本当の意味で強くなれた時に。

だがそのためには、今この男が望んでいることを阻止しなければならぬ。

「だから」

「だから私を止める、かい？」

宗次の言葉を遮つて口にした京一郎の言葉に、宗次は眉を寄せる。

京一郎は楽しそうに笑った。

「いい信念だ。偽善ではなく、自分の意志が前面に出ている。なおかつ世界の平和も考えているのだから素晴らしい。やはり兄弟だね。自分のことを優先して考えるところはそっくりだ」

「それは同意する。だが、お前はやり過ぎだ」

「それを決めるのはお前じゃないぞ。宗次」

全く重なり合わない意志。それを言葉に乗せて、二人は想いをぶつけ合う。

そして。

この兄弟の会話も、終わりに近付いていた。

「お前はいてはいけない存在だ。いずれ、世界に災いをもたらす」

「それはお互い様だ。《殺戮兵器》^{キリング・ウエポン}、樋浦宗次。お前の方がよほど物騒だよ」

「だから俺は銃を捨てる。必要以上に人を傷つけないために」

「お前には無理だよ」

その言葉が、宗次の触れてはいけない場所に触れた。宗次は強く、銃を握り締める。

「お前は私が作った兵器だ。兵器が人を殺めるのをやめてしまえば、もう何も残らない。使えなくなった兵器など、必要ないのだよ」

「ふざけるな……!!」

低く、唸るような声で宗次は叫んだ。

「ふざけるな！ 確かに俺が力を望んで、俺は力をお前に貰った！
だが、その先のことは望んでいなかった！ 俺はただ、一人で生

きていく術を手に入れようとしただけだった！ それなのに！」

「甘えるな。人というのは利用し、利用されるものだ。お前が私を利用したように、私はお前を利用した。便利な兵器だよ。お前は」

「ッ！」

兵器。普段言われ慣れている言葉なのに、今だけは違った。心が抉られるような気がした。本当に自分は他人と違うのだと、認識させられたようで。

しかもこの男は、現在形で言った。まだ自分を利用する気なのだ。止めなければならぬ。本気でそう思い、宗次は引き金に指をかける。

そして

五

「ああ。第十一番だ。息はある。急いで助けてやってくれ」

宗次は携帯電話を用い、連絡を取っていた。戦闘も既に終わり、相手は相変わらず軽い口調で答える。

『おっけ、任せろ。こつちもポケナスは始末した。京一郎を捕まえられなかったのは残念だけど、ま、しゃあないさね』

「そうか」

雄平は弟を殺した。手を下したのが雅であろうと、追い詰める手を打ったのは彼だ。

だが、彼の中にそれを考える様子はない。

「なあ、雄平」

「ん？」

「俺は、撃てなかった」

あの時。引き金を引くべきだった。だが、宗次は引くことができなかった。

「京一郎を止めなければと思ったのに、無理だった。俺は情けないな」

「どーだろうな。人なんて、心で生きる生き物だ。要はお前が殺したくなかったんだろ。あんなのでも兄貴ってことだ」

「そうかもしれないな。……雄平、俺は銃を捨てられると思うか？」

唐突に、宗次は問うた。雄平は電話の向こうで驚き、そして答えてくれた。

「難しいんじゃないか？ できないとは言わないけどな」

「そうか。……それじゃあ、後は頼む」

そう言つて宗次は電話を切る。彼の頭に残るのは、去り際に京一郎が残した言葉だった。

？どうしてお前が銃を捨てられないか、わかるか？？

？お前自身が望んでいるからだよ。両手を血で染めることを。だからお前は銃を捨てられない。最後の最期まで、兵器であるだろう？

どうしようもない、馬鹿なのだと思う。

こんな言葉を、信じてしまう自分は。

でも、今は。
戦わなくて済む未来を、信じたい。

第四章「シンクロニティ・システム」(後書き)

第四章です。続けて、終章も投稿し、第一話を了、としたいと思いません。

また、お気付きかと思いますが、『シンクロニティ』は正しくありません。『シンクロニティ』が本来なのですが、こういう部分で少し、フィクションの雰囲気を出そうとわざと変えてあります。

高校時代、一番受けが良かったこのシリーズ、第六話まであります。お付き合いいただけると、幸いです。

ありがとうございました。

終章「樋浦宗次」(前書き)

【樋浦宗次】(ひうら そうじ)

特別戦後処理室構成員。弥生学園三年D組所属。通称、《殺戮兵器》。

圧倒的なまでの運動能力と戦闘能力を有する高校生。その知名度は高く、日本国内で彼を知らない者はいない。また、世界中とまではいかないがほとんどの国の軍隊は彼の名を知っている。

いずれ銃を捨てたいと願っており、そのために自分にできることを探している。ただ、彼以外に英雄的な活動をできる者がいないため戦っている。その行動こそが彼を英雄たらしめているのだと裏では囁かれているが、本人は知らない。

特異型OS クライスト のパイロットで、同調率100%を超えられる天才。

サクラ【畏怖と敬遠。英雄には、必ず付き纏うものだ】

終章「樋浦宗次」

零

無機質な白い天井を見上げ始めてから、どれぐらい時間が経ったの
だろう？

そして、それが終わるのはいつなのだろう？ 最近、そんなことば
かり考える。

ただ、近いことはわかる。この体はすでに、死に始めているから。
不意に、病室の扉が開いた。それと同時に、誰かが入ってくる気配
がする。

「細木康太だな？」

鈴を転がしたような声で、相手が口を開いた。目は見えないが、声
でわかる。相手は女性だ。そして、自分が知っている人物でもある。

「いきなりで悪いが、今の私はお前にとっては敵だ。かつての仲間
という甘えは捨てる」

だがその女性は、あっさりと自分を敵だと言い切った。まあ、元々
この女性と会話したことなど数回だけだったのだから、今更だが。ど
既に自分の目は見えなくなっている。だから、顔は動かさない。ど
の道、ベットに横たわるしかない自分にできることなど何一つとし
て存在しないのだ。

ただ言葉は話せる。だから、聞いてみた。

「じゃあ、あなたは宗次くんの仲間なんですか？」

「……今はまだ、と言うべきか。ただ今回は、傍観者として見守っ

てきた最後の務めとしてお前に会いにきた」

「自分に、ですか」

古風な話し方が懐かしい。そして、誰も訪れるはずがないこの病室に来てくれたことも嬉しい。……たとえ相手が、敵だとしても。

女性が何かを取り出す音が聞こえる。音から察するに、紙だ。

「まず、今回の顛末だ。組織名すらなかったお前たちの組織は壊滅。殲滅戦が行われたため、生存者はお前一人だ。ただ、樋浦京一郎の名も拳がつているが、この情報はすぐに抹消された」

「そうでしょうね。あの男がミスをする理由がありません」

自分たちを利用した、神を名乗る男。だが彼を恨んではない。かつての敵だった相手に騙され、利用された自分たちが悪いのだ。

だが、樋浦宗次 彼は違う。

世界が間違っていることを理解しながら、邪魔をしたあの男だけは許せない。

もともと、敗れた自分が言うことでもないが。

「そして、お前が持っていた殺人ウイルスだが、あれは使い物にならないものだった。ウイルスは完全に死滅していて、あの液体が撒き散らされたところで多少汚れる程度だっただろう」

「……何となく、そんな気はしていました。裏切った夕霧さんが、自分に協力してくれるなんておかしいと思っていたんです」

そう、そんな気はしていた。自分たちを裏切り、最期の戦いで自分たちの前に立ち塞がった彼女が、手を貸してくれるのはおかしいとでも、信じたかった。仲間だと。

しかし、それは、愚かな考えだったようだ。結局、裏切られたのだから。

「夕霧雅は、お前たちを止めようとしていた。裏切ったわけではない」

だが、相手はそれを否定した。自分は笑いながら、情けないと思いつつも反論する。

「実際に裏切られたじゃないですか。渡されたものは使えないもの。自分は、あの人の掌の上で滑稽に踊っているだけでした」

「なら何故、夕霧雅はそのことを誰にも話さなかった？ 事実、あの研究所から死滅したウイルスとはいえ危険なものが持ち出されていたことがわかり、夕霧雅は少しの間拘束されていた。高岡雄平が上層部を口で丸め込んでどうにかしたかな」

「え……？」

それは初耳だ。まさか、あの人はそうなることを承知であるのウイルスを……？

「あのウイルスには、夕霧雅からのメッセージが込められていた。テロリストとしての過去に縛られるお前に、光に生きる道を示すためのメッセージだ。ウイルスの名を、覚えているか？」

「……？アトウンメント？」

「それこそが、お前へのメッセージだ。彼女が今していることでもある」

そう言って、相手はその言葉の意味を教えてくださいました。

「？Atone?を名詞化した言葉、？Atonement?……
『贖い』、だ」

贖い……償い。それが、メッセージだといつのか？
相手は背を向け、この部屋を出ようとすする。

「道があった。それを教えたかったのだろう。信念は間違っていないけども、方法を私たちは間違えたのだ。夕霧雅や高岡雄平、丹羽鏡花はそう悟り、償うために、何より仲間を救うために裏切った」

「詭弁です。都合のいい言葉でしかない」

「そうかもしれない。だが、あながち間違ってもいないだろう？」

その言葉に、自分は反論できなかった。結局、彼らは仲間を逃がしたのだ。そして、樋浦宗次もそれを黙認していた。おそらく、雄平あたりが交渉したのだろう。

でも結局、自分はこうして間違えた。そして、贖う時間も残されていない。

「それでは、さらばだ。もう会うこともないだろう」

「さようなら。サクラさん」

自分が呼んだその人の名に、相手は振り返った。そして一言だけ、
咳く。

「私に名など無い」

そして、相手は病室のドアを閉める。

細木康太の心音を示す計器が止まったのは、それとほぼ同時だった。

白い病院。その前まで来て、宗次は立ち止まった。自らが相手をし、打ち倒した少年。彼がこの病院にいるという。だが、両目はもう二度と光を映すことはなく、命もあるのが不思議なぐらいの重体だそうだ。

「…………やはり、俺が行くべき場所ではないな」

呟き、宗次は病院に背を向ける。気がついたらこの場所に来ていた。学校にも行かずだ。一体何をしているのだろうと思う。そして、宗次が病院の敷地から出て行こうとした時。

「……………」

不意に、一人の少女と目が合った。銀色の髪と瞳をした、美しい少女だ。ベンチに腰掛け、何やら分厚い本を読んでいる。相手が軽く会釈し、それに対して宗次も会釈した。

それで少女は再び、本に目を落とす。宗次は気にせず、歩き出した。そして、その少女の側を通りかかった時、思いもよらぬ言葉を聞いた。

「細木康太は、今しがた死んだ」

「……………」

足を止め、宗次は少女を見る。その顔には、無表情が張り付いたままだ。少女は顔を上げず、本のページを捲りながら口を開いた。

「元々、あの者は永く生きられない体だった。お前も体験したことがあるであろう、体を作り変えるような修練。それに加え、本来なら手を出すべきではない人体改造薬にまで手を出していた。だからだろう。今回、急ぐように動いたのは」

「……俺の動きについてこれる能力は、薬か。二年前と比べて力が違うと思っただけだ」

「だがそれはあの者が望んだことだ。気に病む必要はない。お前が強過ぎただけだ」

淡々と、少女が語る。宗次の能力は圧倒的だ。事実、二年前の細木康太では宗次には手も足も出なかった。

だから彼は、修練によって手に入れた力の上を目指し、薬という手段に及んだ。

責められはしない。宗次を倒すためには、それぐらいの覚悟は決めねばならないのだから。だがそれでも、少しだけ思うところがある。

「俺のことを憎むと、あいつは言っていた。だから俺は忘れない」

「そうだ。お前は背負うべきだ。そして進め。兄になど、敗れるな」

力強い言葉を託し、少女が立ち上がる。そして宗次と背中合わせになると、最後に宗次へと問いを発した。

「樋浦宗次。お前は、神を倒せるか？」

「倒すわけではない。止めるだけだ」

迷いなく言い切り、宗次は歩き出す。その途中、振り返って一言だけ口にした。

「名前を覚えてくれ」

「私の名なら、知っているはずだ。三年前のあの日に、私はお前に教えただろうか？」

「もう一度、聞きたいんだ」

本人自身がわからない気持ちと共に、宗次が言った。少女は思案し、

「……サクラだ。お前にこの名を語った時から、私はサクラの名を名乗っている」

「やはりイクスの名は、偽名だったようだな」

「いや、それも私だ。《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン 第零番、《無》イクス

……二年前に捨てた名だが、私であることには間違いない。ただ、あの日、お前に教えたこのサクラという名前だけは、ただの記号ではない気がする」

どこか寂しげに、サクラは呟く。

二年前、何一つ持っていない状態で、《未知》アンノウン にいた少女。宗次に匹敵する力をどこで手に入れたのか、記憶なき彼女にそれはわからない。

ただ彼女は、己を探して生きるだけ。

だから、《未知》アンノウン 最後の戦いにも彼女は参加しなかった。イクスという名を捨て、姿を消した。

「いずれまた、会おう」

サクラは歩いていく。記憶なき少女は、そのまま振り返らずに歩いていった。

宗次もまた、振り返らずに歩いていく。

どちらも、振り返ることは無かった。

三

「久し振りだね。細木康太くん」

「……………」

「早速で悪いが、私に手を貸して欲しい。すでに高岡潤平くんも動いている。どうだい？」

そいつは、自分にそうやってきた。自分はただ、真意を聞くために理由を聞いた。

「どうして、英雄がそんなことをしようとする？」

その問いに、そいつはつまらなさそうに答えた。

「平穏が嫌いだからだよ。私は、平和が嫌いだ」

終章「樋浦宗次」（後書き）

とりあえず、第一話は終了です。ヒロインがようやく出揃いました……。

第二話ですが、過去の話になります。第一話でも出てきた、《未知》という組織と樋浦兄弟を中心とした日本政府の戦いです。時間軸的には、三年前くらいですかね？

できるだけ早く、投稿するつもりなので、お付き合いいただけると嬉しいです。

感想などもお待ちしております。

文章の一節、一言でも、あなたのこころに残るものがありますように。

序章「第一次テロ戦役」（前書き）

【第一次テロ戦役】（だいいちじてるせんえき）

西暦2028年四月七日に始まったテロリスト組織《未知》と日本政府の戦い。

始まりは、日本最高峰の国立大学の入学式を《未知》が爆破と虐殺という行為で大量に死者を出したことから始まる。その光景はちよつど生中継していたテレビによつて全国放送され、直後に出された声明文により《未知》^{アンソウ}は一気に知名度を広げた。

政府は戦争開始より一年後、戦争をしないと謳う国でありながら報復戦争を決意。その後、組織との国内戦争を繰り広げる。

戦いが始まつて半年後、《名も無き子供たち》が現れると同時に樋浦兄弟が現れる。劣勢だった政府側は、それによつて盛り返していた。

樋浦宗次【俺はただの人殺しだ。英雄は、人殺しじゃない兄だ
けだ】

序章「第一次テロ戦役」

—

周囲に満ちるのは、銃撃音と爆発音。耳が痛くなるような音だけだ。

オフィス街だ。周囲には、高過ぎるとさえ思えるビルが建ち並んでいる。オフィス街というのは夜は人通りが少ないところかいなと言ってもいいほどののだが、今は昼間だ。

故に、人が多過ぎる。

『危険です！ 直ちに避難してください！ 危険です！』

最早、落ち着けという言葉さえも紡ぐ暇がないほどに切迫した状況で、パトカーの拡声器を使って警官が吠える。戦いが始まって一年。人々は、《未知》^{アンソウン}がどれほどの組織かを理解してしまっていた。

悲鳴が轟く。人々が、空を見上げる。

中腹部を爆発によって破壊された高層ビルが、倒れ込んできていた。

そして生まれるのは、阿鼻叫喚の地獄絵図。呻き声と悲鳴。滴る血が集まることによって、血の海が出来上がる。

銃声は止まない。警察と《未知》^{アンソウン}の部隊の戦いはまだ続いている。

だが、明らかに警察側が圧されていた。《未知》^{アンソウン}は前方のビルに潜み、警察の部隊を見下ろすようにして戦っている。どちらに分があるかなど、論ずるまでもない。

敗色が濃厚となり、周囲に死が散乱していた時。

その二人が、現れた。

「どうやら、少し遅刻したようだね」

「……………」

大きなバイクに二人乗りをした兄弟。おそらく兄であろう、背の高い男は後ろに乗っているまだ中学生ぐらいの少年より先に降りると、ヘルメットを脱いだ。サラサラの黒髪が、風になびく。

「まあいい。私たちの目的は、この戦いに勝利することだ。正直、誰が死のうが誰が生きようが私には興味がない。敵も味方も等しい命。どちらも一つの生命だからね。だからどちらがどれだけ死のうが知ったことではない」

「随分な物言いだな」

バイクを降り、ヘルメットを取った癖のある黒髪の少年 樋浦宗次は、腰に装備した二丁の銃と弾倉を確認しながら兄、樋浦京一郎に言う。兄と共に戦いを始めて半年。この絶対者の思考は、未だに理解できない。

京一郎は振り返り、微笑を浮かべる。

「歴然たる事実だよ。何度も言っているが、この戦いは私にとっては望んでいたことだ。英雄となるための道具として、精々利用させてもらおうさ」

「……………俺にとってはどうでもいいことだな。俺はただ、戦っただけだ。」

京一郎 お前の代わりに

「ああ。よろしく頼むよ、《殺戮兵器》^{キリング・ウエポン}」

「……………」

自身に冠せられた呼び名。それに答えることをせず、宗次は歩き出す。

銃声は、鳴り響いている。

「やれやれ。相変わらずだ」

その背中を見送りながら、京一郎は呟く。

「私の代わり　そう言わなければ戦えないのか。困った奴だ。この半年間まではそれで良かったが、今日からは違うぞ」

銃声が激しくなり、警官たちが退却してくる。宗次の姿は、すでになかった。

「ここから先は、《名も無き子供たち》との戦いになる。彼らは強いぞ。《未知》^{アシノワン}最強の者たちだ。私に戦いの理由を依存している今のお前では、弾かれる。

さあ、どうする?」

京一郎がそう呟いたのと、銃声がビルから響いてきたのは、同時だった。

戦闘が、始まる。

二

圧倒的。その一言で、すべてが説明できてしまっほどの力だった。

樋浦宗次。半年前に突如現れた、今年で十五となる少年。その圧倒的な力は、単騎で悉く《未知》^{アンソウン}の思惑を破壊してきた。だが、所詮は中学生の子供。そう高をくくっていた《未知》^{アンソウン}の者たちは、死を撒き散らす暴風のように駆ける宗次に、ただ恐怖していた。

ある者は恐怖から銃を乱射し。

ある者は恐怖から逃げ出した。

最早、統制など取れていなかった。《未知》^{アンソウン}はテロ活動を行う際、必ず逃走ルートを用意している。だが今回、そこはすでに京一郎が割り出していた。あの、天才という呼び名さえ凌駕する絶対者の導いた答えは、必ず正解に辿り着く。

実際、それはそこにあつた。地下への秘密通路。破壊されたビルの一階にもあつたのであろうその進入ルートを、宗次は見つける。そしてそこに逃げ込もうとする、上の階から降りてきた十数人の男たち。

宗次が、彼らを撃とうと銃を構えた瞬間だった。

「Welcome to the battlefield」

そんな言葉が、宗次の耳に届いた。そしてその言葉の意味を理解する前に、宗次の目の前に白い閃光が走る。

ギャリン、と金属音を響かせ、宗次は後退。

顔を上げると、そこには日本刀を構えた一人の青年がいた。

「お前が樋浦宗次　　《殺戮兵器》^{キリング・ウエポン}やな？　一応、初めましてと挨拶しとこか」

微笑を浮かべながら、その青年は言った。彼の右手には、銀色に輝く日本刀が握られている。宗次は距離を取り、銃を構えた。

問答をする気など、もとよりのない。

相手が誰であれ、向き合うことになれば敵。ならば、余計な情など抱く前に刃を交えた方がいい。

その方が、苦しみも少しだけ和らぐから。

「……………」

短く息を吐き、宗次は引き金を引く。いつだって、この行為だけで何人もの人間を殺してきた。

だが今回は、例外だった。

「烏丸流、抜刀術。一の型、『幹竹』」

ほぼ一瞬。残像でしか捉えられないほどの速さで距離を詰めてきた青年が、そう呟きながら居合い抜きを放った。目の前で抜かれる白刃。宗次は、右手の銃でそれを受け流す。

そしてそのまま、左手の銃を青年に向け、引き金を引く。

ダン、ダンと二度銃声が響いた。しかし、青年は既に後退しており、当たっていない。

「期待以上、やな。俺の居合いを避けたんは俺らのリーダー以来や。なるほど、《指揮者》^{コンダクター}の言うとおった通りみたいやな。お前は、俺らの天敵になりうる」

「……………」

青年が言っていることは、宗次には理解できない。だが、一つだけ理解したことがある。

この青年が強いということだけは。

心が、加速する。高揚する。高揚しながらも、冷徹に研ぎ澄まされていく。

戦場に出ている時に常を感じる感覚が、いつもより激しい勢いで宗次の心に満たされていく。

青年が、銃を構えた宗次に見せつけるように刀を鞘に収める。そして、左腰の刀の柄に手を添えると、名乗った。

「折角やし、名乗ったるわ。大体、これが俺の役目やったしな。よう聞いとときや？」

再び、青年の姿が消える。だが今度は、宗次も焦ることはない。視線を動かさぬまま、宗次は右に飛ぶ。その一瞬後、宗次の左側面から向かって来ていた青年の刃が、床を切り裂いた。

「アンソウン《未知》幹部、ネムレス・チルドレン《名も無き子供たち》サムライ第一番《侍》、からすまいつせい烏丸一成。そつちも名乗りや？」

「……対アンソウン《未知》特殊部隊末席、樋浦宗次」

宗次が、引き金を引く。だが、その銃弾はやはり届かない。引き金を引く瞬間に、一成は着弾地点から移動しているのだ。

近付かなければ、届かない。信じられない話だが、それしかないという結論に至って宗次は駆け出す。

だがその足は、急に止まった。同時に、宗次の足下にライフルの銃弾が炸裂する。

「狙撃！」

一瞬で悟り、宗次は柱の影に移動する。一成が笑った。

「思った通りや。死の気配を感じた瞬間の直感。俺と同じもんをもつてる。人のこと言えんけど、それなりに苦労しとるゆづことか？」

宗次が近づけないとわかっているから、銃弾を当てられないとわかっているから、一成は余裕を見せる。そして、ゆっくりと背後の逃走ルートへと後退していく。

「それで、どやった？ うちの狙撃手、第八番《サジタリアス射手座》の腕は？」
「……………」

宗次は答えない。ここを狙撃したということは、おそらく向かい側のビルからということなのだろうが、それは警察の狙撃手ができなかったことだ。

警察の、鍛えられた狙撃手に不可能だったことを成し遂げる。それはつまり、相手の腕は尋常ではないということになる。

一成は、楽しそうに言った。

「この半年、お前の噂は何度も聞いた。最初はうちの参謀も無視しとったようやけど、そうもいかんようになった。それで、しゃあないから俺ら《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》十四人が、全力でお前を殺すことにしたんよ」

「十四対一とは笑えないな」

「光荣やる？ ま、今回は宣戦布告や。お前も準備不足やろうしなほなまた、戦場で会おうや」

一成が、背後へと飛ぶ。逃走用のルートに飛び込んだのだ。

宗次はそれを追おうとする。だが

「……………ッ！」

巨大な爆発音と共に、建物が揺れた。
そして、数秒後。

宗次の頭上に、破壊されたビルが落下してきた。

序章「第一次テロ戦役」(後書き)

ええと、第二話の序章です。楽しんで頂けたでしょうか？

今回から、少し文章の毛色を変えてみました。友人から読みやすいようにと言われてやってみましたが、どうでしょうか？

後々、前の方も修正するつもりです。

感想など頂けるとありがたいです。

ありがとうございました。

第一章「未知」（前書き）

【未知】（アンノウン）

未だ知られていないこと。日本最大のテロ組織の名称。

2028年四月七日に、『鮮血の入学式』と呼ばれる死者千人以上を出した凶悪事件の首謀組織。規模、人員、資金源、首謀者などが一切不明で、仙台に置かれている政府が全力を上げて捜査しているが、何一つとして有益な情報は手に入っていない。

国際連合に設置される、特別暴力主義対策機関……通称、《イージス》に真つ向から対立する意志を見せている組織。日本の《イージス》である対テロ特殊部隊を抱える行政庁と、警察の政府側にある二つの組織と今現在、衝突中。

幹部に、《名も無き子供たち》と呼ばれる十四人の天才たちがいる。

樋浦京一郎【彼らを悪だと断ずるのなら、この国はどうなんだろうね？】

第一章「未知」

零

使われなくなり、放置された廃工場に息を吐く音が響いた。日本全国を探せばいくらでも見つかるような工場だ。不景気の時代に、あちこちで工場は潰れ、残骸がのこっている。

天井に穴が開き、日差しが差し込んでくる。青年は、眩しさから目を細めた。

無駄な筋肉を一切省き、引き締められた肉体。風に乗って揺れる黒髪は、視界の邪魔をしない程度の長さで切られている。

組織アンソウン《未知》が幹部、《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン第一番《侍》サムライ、烏丸からすま一成いっせい。十四人の天才たちが集う場所で、一の文字を背負うことを許された青年だ。まだ未成年でありながら、大人を軽く凌駕するほどの身体能力を有している。

一成がもう一度息を吐き、壁にもたれかかった瞬間。

「お疲れさん、つと」

カツカツと靴の音を響かせ、茶髪の少年が歩いてきた。その姿を確認し、一成は壁から身を離す。

その一成に、少年が話しかける。

「で、どうでした？ 実際に刃を交えてみて」

「想像以上。その一言に尽きるで。《キリング・ウエポン殺戮兵器》の戦歴は正直半信半疑やったけど、あの雰囲気やとあながち嘘でもあらへんと思うわ」
「一成さんにそこまで言わせるとは、流石さね」

口笛を吹き、軽口を叩くように少年が言う。少年は青年より三つほど年下のはずだが、遠慮というものがない。

まあ、あってもらっても困るが。

「笑いごとやあらへん。俺の見立てでは、まだ本気を出したらんと見た。これは推測やけど、うちの姫さんと同等以上の実力があるはずや」

「……そいつは聞き流せませんね。本物の怪物ってどこか」

「せや。流石はあの樋浦京一郎が俺らに対する死神として用意したカードやで。あれは、姫さんと同じで盤上をたった一人で引っくり返せるだけのモンをもっとるよ」

真剣な表情で、一成は言う。少年は頷いた。

「了解。肝に銘じときます」

しかし、すぐにその表情は楽しそうな笑顔を浮かべる。

「といても、しばらくはあの怪物とぶつかり合う必要もないでしょうけどね。そうなるように手え打つときましたし」

「へえ、流石はうちの参謀。手が早いやんか」

「手が早いって、言い方が何となく卑猥ですね。……まあ、一成さんがそこまで評価するとは思ってなかったけど、あいつに悉く邪魔されてきたのは事実ですし。実力で排除できればそれが一番良かったけれど、それが無理なら物理的にどうにかするしかないさね」

そう言つと、少年は近くの廃材の上に腰掛けた。表情は、どこか
楽しげですらある。

「強いとわかつてる敵と正面から戦つて被害被るのは、ただの愚策。
戦わずに済むならそれに越したことはないさね。ま、いずれは戦わ
なければならぬでしょうけど」

「その時は、こっちも全力で当たるしかあらへん。《ネームレス・チル名も無き子供
たち》が何人か欠けることも覚悟の上で、や」

「できればそんなことは遠慮したいさね」

「同感や」

二人で頷く。そして、二人は歩き出した。自分たちの拠点へ向か
うためだ。その途中、少年が口を開いた。

「それにしても予想外です。予定が思いつ切り狂つてしまいますね」
「何でや？」

「正直、一成さんなら樋浦宗次に一騎打ちで勝てるかと予測してたん
ですよ。でも話聞いてると、厳しいみたいだし」

「……せやな。正直、甘く見積もつても五分には届かへん。甘く見
て四分六や」

「だからといってリーダーをぶつけて万が一が起こつたら目も当てら
れないですしね。それに、今はやらなければならぬこともありま
す。休む暇はないさね」

少年が、真剣な面持ちで言う。

一成も、頷いた。

「そうやな。やらなアカンことがある。平和ボケしたこの国に、今
の現状を伝えてやらなアカン」

「全くです。……いつになれば、この国の人間は理解するんでしょ

うね？」「

少年が、空を見上げる。この国で起こっていることが嘘であるかのように、空は真つ青に澄んでいて、綺麗だった。

「これが、戦争だということを」

その呟きに、一成は何も言わなかった。言う必要がなかったのだ。

|| || || || ||

「そういえば、姫さんはどこにおるんや？」

「ああ、リーダーならいつも通りさね」

「成程、散歩やな」

「そうそう。今度はいつ帰ってくるんでしょうかね？ この間は確か、丸一ヶ月姿消してたでしょう？ できれば、『計画』の時にいて欲しいんですけど」

「それは無理やろ。あれは気まぐれな猫みたいなもんやし」

「はあ……しゃーないさね。ちよつと不安だけど、やるしかないか」

「いざとなれば来るやろ。ああ見えて、必要な時には必ずおるから」「それじゃあ、それを祈るとしましょうか」

—

大排気量を誇る改造された大型バイクが、中学校の校門前に止まる。登校中の生徒たちは一度そちらへ視線を向けたが、二人のうち、

片方の姿を見た瞬間、視線を逸らして校舎の中へと急ぎ足で入っていく。

バイクを運転している方、長身の男性がヘルメットを取る。刈り上げにされた髪が、若々しさを醸し出している。歳は三十前後といったところだろう。首にとどころ黒くなっている銀色のネックレスをしている。

「余裕でセーフ。久し振りの学校だろ？ 楽しんでこいよ」

言いながら、男性は自分の後ろに座っていた少年を見る。ヘルメットを取った少年は、癖のある黒髪の下。額の部分に包帯を巻いていた。よく見れば、体のあちらこちらに包帯があるのが窺える。

その少年 樋浦宗次は、ヘルメットを男性に渡した。

「楽しめるわけがありませんよ。ここは、俺を恐れる人たちで満ちていますから」

自嘲するように、宗次は言う。《殺戮兵器》キリング・ウエポン 樋浦宗次。報道管制が敷かれているため、表のメディアにその名が出ることはないが、今の時代はインターネットというものがある。たった一人で宗次が今まで為してきたことを、インターネットは映像付きで教えてくれる。

だから、この国に宗次のことを知らない若者など存在しない。

「それにどうせ、また戦場に行くことになるんです。人殺しである俺に、楽しむ資格も権利もありませんよ」

自嘲を重ねる。こうなることは初めから覚悟していたことだ。そ

れに、奪っておいて何も失わないというのはあまりにも都合が良過ぎる。

その様子を見て、はあ、と男性 かめいとしひこ 亀井俊彦はため息を吐いた。

宗次も所属する特殊部隊に自衛隊から除籍して籍を置いている俊彦は、この半年、宗次のことを見てきた。

だから わかる。

この少年が、自分から死地に飛び込み、自分の体を自ら痛めつけるような生き方をする人間だということが。

だが、どうにもできない。宗次は不器用で、かなり頑固だ。一度決めた意志は、そう容易く折れはしない。

ヘルメットを座席の下にある荷物入れに入れながら、俊彦は言う。

「……ったく、ガキがごちゃごちゃといらんこと考えてんじゃねーつての。お前が戦わなければならなくなったのは、俺たち大人の責任だ。お前の責任じゃねー。お前が背負う必要なんて欠片もねーんだよ」

「いいえ。俺の罪は、俺のもの。俺が背負わねばならないものです」「頑固な野郎だな……」

俊彦が苦笑する。宗次と違い、俊彦はまるで百面相でもしているかのように表情がくるくると変化する。

「まあいいか。お前の好きなように生きりゃあいさ。後悔しなけりゃそれでいい。……っと、忘れてたぜ。これ渡しとくぞ」

そう言って俊彦はナップサックを取り出すと、宗次に渡した。その重量感を認識し、宗次は眉を顰める。

「これは……」

「ご察しの通り、お前の武器だ。昨日ぶった斬られてただろ？」

「確かに、そうですけど」

見た目からは想像できない重量を抱えるナツプサック。そこに入っているのは、間違いなく人殺しの武器だ。銃という、人から躊躇いの気持ちを奪った武器。

宗次は昨日、烏丸一成と名乗った男と交戦した。その際、一成の日本刀を受け止めた銃が斬られたのだ。そしてその後の爆破による崩落のせいで、重くはないが宗次は怪我を負わされた。

まあ、怪我など治る前に増えるような生活をしているから今更だが。

宗次はナツプサックを背負い、俊彦に軽く頭を下げる。

「ありがとうございました。送っていただいて」

「気にすんな。俺も上層部うへの許可があんまり下りねーせいで暇なんだよ。お前みたいな中学生を最前線に送り込んで俺は待機って、頭おかしいだろ。どう考えても」

「俺の場合は、兄が俺を最前線に出すよう裏で糸を引いてますから。それに、俊彦さんは今でこそ特殊部隊の隊員ですけど、元々は自衛隊の所属でしょう？ 元とはいえ軍人なんだから、ある程度は仕方ないと思いますよ」

「そうなんだよなあ」

つまらなさそうに、俊彦は言う。彼は今回の戦争に理由があつて進んで関わってきた。そして、宗次の兄であり、特殊部隊の隊長を務める京一郎が必要とした、ある特殊兵器を使える人材として彼が

望んだ通り特殊部隊に入隊することになった。

既に、日本政府の上層部から二十代の若者でありながら《神》とまで呼ばれる天才・樋浦京一郎。宗次の場合、その一声があるからこそ戦場にいることを許されている。

だがその京一郎でさえ、長く日本に根付いてきた『戦争放棄』のルールはそう簡単に覆すことができない。そのため、俊彦も数度しか戦場には出ていない。

「まあいい。あと少しもすりゃあ、俺の出番も増えるだろ。もちろん、お前もだ」

「心得てますよ」

宗次は頷く。まだこの国は理解していないが、今起こっていることは戦争だ。いずれ、国の存続をも関係する戦が始まる。

それは、《神》によって予言されたことだ。

「だから、楽しんでっけって言ってんだよ。どうせ、そんな余裕はじきになくなるんだ」

「俊彦さん」

「じゃーな」

そして、宗次の言葉を無視して俊彦はアクセルを捻る。ヘルメットを着けぬまま、明らかに法律を無視した速度で走り出すと俊彦は見えなくなった。

宗次はため息を吐くと、下駄箱に向かって歩き出した。久し振りの学校である。

(前に来たのは一ヶ月前だったか?)

苦笑する。ここ最近、《未知》^{アンソウ}の活動が活発になっていたせいで
作戦本部と自宅の往復しかしていなかった。義務教育だというのに
一ヶ月も通わないとは、我ながら大したものだと思う。

「ん?」

不意に違和感を感じて宗次は周囲を見渡す。見れば、誰もが自分
から距離を取っていた。

朝の登校風景。騒がしいはずなのに、それは遠くのもので。
手を伸ばせば届く距離に。
だが、絶対に触れられぬものがそこにある。

(ああ、そういうことか)

ここでは、自分という存在は異端でしかない。それを、ここに
いる者たちは理解しているのだろう。

(正解だ。みんなは、間違っていない)

自嘲するように、唇が歪む。そう、ここにいる者たちは誰も間違
っていない。

間違っているのは、俺だ。

こんなところへのこのこと顔を出している自分こそが、間違っ
ている。

(……帰るっ)

ここにいてはいけない。本気でそう思い、宗次は校舎に背を向けようとする。その時だった。

「おはよ！ 久し振りだね宗次！」

後ろから肩を叩きながら、宗次に声をかける少女がいた。

「……千里」

見覚えのある少女 足立千里が、楽しそうに笑っていた。今からもう七年前。宗次たちが親に捨てられる前からの、今の宗次が相手でも気兼ねなく話しかけてくれる人物だ。

「一ヶ月の間に勉強は大分進んだよ。頑張らないとね」

「……耳が痛いな」

「大体、宗次は勉強得意じゃないんだから」

隣で、千里が何やら説教じみたことを口にしてている。宗次はそれに曖昧に返事をし、二人は校舎へと向かっていく。

いつの間にか、ここから去るといふ意志は宗次の中から消えていた。

だが、現実はいつでも宗次に牙を剥く。

「樋浦」

「……先生？」

苗字と呼ばれ、宗次が反応する。そこにいたのは、久し振りに見

る担任だった。いつもは堂々としているくせに、今は何故か腰が引けている。

校舎の入り口の前だ。生徒たちが通り過ぎ様に不思議そうに見ている。

やがて、担任の教師が口を開いた。

「すまん。今すぐ職員室に来てくれ」

「どうしてですか？ 休学の旨は伝えてありましたし、呼び出されるようなことは」

「察してくれ」

宗次の言葉を遮り、担任が言う。目を合わせようとしないその態度を見て、宗次は文字通り、察した。

(……仕方がないことだな)

ふう、と息を吐く。そして、宗次は頷いた。

「わかりました。先生方を待たせるわけにはいきません。行きましよう」

「……そうか」

担任教師が頷く。そして、担任が職員室に向かって歩き出した。宗次はその後を追う前に、千里の方を振り返る。

「千里。どうやら俺は学校に通うことができなくなりそうだ」

「どういこと？」

「察してくれ この言葉の意味は間違いなくそういことだ。終始目を合わせなかったことといい、回りくどいことだな」

淡々と、冷静そのものの声で宗次は言う。この程度のことには予測していたことだ。予測通りになっただけ。だからむしろ、冷静になれる。

しかし、千里はそうもいかない。納得できず、声を荒げる。

「どうして？ どうしてそんなことになるのよ！」

「そうだな……いくつかの理由が重なっているだろうから一概には言えないが、おそらくは恐怖だろうな」

「恐怖？」

「ああ」

宗次は頷く。恐怖 生物が根源的に抱く本能。おそらくそれが、一番の原因だ。

「千里。お前も知っているだろう？ 俺の呼び名、キリング・ウエポン《殺戮兵器》を」
「……………うん」

躊躇いながら、千里は頷く。千里はこの話題をいつも避けていた。宗次自身あまり語りたいたいことでもなかったため、宗次もそうなるようにしていたが、今はそのことを抜きにしては語れない。

「俺は人殺しだ。進んでこの両手を血で染め上げてきた。そんな人間を、学校という機関は置いておこうと思うか？」

自嘲しながら、宗次は言う。どこか、空虚だった。

危険。ただそれだけで爪弾きにされることはよくあることだ。それに、担任のあの目。あの目に宿っていたのは、畏怖だ。

相手を対等と思わず、どこかで自分とは別のイキモノとして見ている目。

見飽きたその目を見せられれば、宗次とて察することはできる。

「それに、どうせPTAからもそつという話が上がっているんだろう。何ともわかりやすい話だ」

吐き捨てるように言い、宗次は歩き出す。千里はその背中に何かを言おうとして、言えなかった。何を言えいいのか、わからなかったのだ。

ただ宗次は、一度だけ振り返る。

「ありがとう。話しかけてくれて」

そして今度こそ、宗次は振り返らずに行ってしまった。

千里は、ただ立ち尽くすしかなかった。

二

大層な歓迎だ。

部屋に入って宗次が最初に抱いた感想がそれだった。全教師が、職員室の中にいた。事務員の人たちや保険医の先生までいる。

「……………」

宗次は無言で、遠慮なく歩を進める。そして、一番奥に座っている校長の前に来た。

「……………」

宗次は何も言わない。自分からは決して言わない。相手の口から、言葉が出るのを待っている。

数分の間、気まずい沈黙が流れた。宗次は冷めた目で、目を合わせようとしない校長を見据え続ける。

「……………用件は、わかるかな？」

そして、沈黙に耐えかねた校長が口を開いた。宗次は首を横に振る。

「皆目見当もつきません」

嘘である。だが、これは必要なことだ。薄汚いことを自ら口にする必要はない。

相手に言わせることこそが、重要だ。

「……………」

校長が、長く息を吐く。その様子を見て、近くに立っていた担任教師が口を開いた。

「俺が言おう。実はな、樋浦」

「黙れ」

敬意など欠片も感じさせない、絶対的な威圧感を持つ言葉が紡がれた。職員室にいた者たちは全員、息を呑む。

言葉を正せ そんなことを言える空気ではなかった。下手なことをすれば殺される。死から程遠い生活を送っている彼らでさえ、そう感じるほどの殺気を宗次が纏っていた。

「他人に言わせるな。自分の意志で、自分の口で、自分の言葉で告げる。その程度の度胸もなく、ここに座っているのか？」

絶対者。その言葉を体現しているようだった。

身体はまだ中学生のそれ。異常な鍛え方がされているとはいえ、見た目には平均程度の男子中学生の身体しかしていない。教員の中には、宗次より一回り以上身体が大きい者が何人もいる。

だと、いうのに。

誰一人として、宗次を直視できる者はいなかった。誰もが無意識の内の腰を引いている。

生物の本能が感じる、『恐怖』という感情を前にして。

「どうしたんだ？ 俺に、何を望む？」

「……………休学を、して欲しい」

絞り出すような声だった。宗次は頷いて、続きを促す。

「それは、どうして？」

「……………君が《未知》^{アンノウ}というテロ集団と戦っているのは知っている。そして、彼らから名指しで敵対視されていることもだ」

宗次は、黙ったまま話を聞く。一度話し始めたおかげで楽になったのか、校長の口調は徐々に確かになっていつている。

《殺戮兵器》キリング・ウエポン

《名も無き子供たち》ネムレス・チルドレン がそれぞれ冠する異名に對抗するかのように宗次に付けられた二つ名。その名は今や、ネットという世界で大きく広まっている。

そして、その《殺戮兵器》キリング・ウエポン が《未知》アンノウン から樋浦京一郎と共に直接

敵視されていることもまた、知られている。

「君を置いておけば、この学校も狙われるかもしれない。一年前の、『鮮血の入学式』のような事件がここでも起こるかもしれない」
「……そうか」

宗次はただ、頷く。『鮮血の入学式』 国内最高峰の国立大学の入学式が襲撃され、千人を超える死者を出した事件。一年が過ぎた今も、《未知》アンノウン の現実的な恐怖の代名詞としてそれは使われている。

それがここで起こる可能性は ある。

宗次がいるからではない。《未知》アンノウン の敵が、国そのものだからだ。今この国に、安全な場所など存在しないのだ。

だが、それを彼らは知らない。だから、宗次がいなければそれでいいと思っている。

それが間違いだったことを、彼らは近い将来に知ることになる。だが今はまだ知らず、故に間違いに気付かない。

宗次は、彼らに対して言葉を紡いだ。

「わかりました。その要請を受けましょう。どの道、満足には通えません。卒業させてもらえるのなら、それ以上は何も望みません」

望む権利など、ありはしない　最後の言葉だけは飲み込んで、宗次は背を向けて歩き出した。これ以上の問答は、文字通り時間の無駄だ。

玄関を出て、校門を横切っていく。遅刻寸前で誰もが急いでいるというのに、やはり宗次の近くを誰も通らない。

校舎へ入っていく者たちとは逆方向へ。逆らうように、宗次は歩いていく。

ただ、孤独だった。
孤立、していた。

|| || || || ||

「……ふむ。了解。予定通りさね。引き続き、監視を頼む。あと」

どこか楽しげに茶髪の少年は携帯電話でそんな会話をすると、最後に二、三の指示を出して電話を切った。

日本各地にある、《未知^{アンノウ}》のアジト。その中の一つ、ステルス機能を搭載した潜水艦の中に、少年はいる。日本の自衛隊も有していないような超が付くほど高性能なその潜水艦の中で、彼は微笑んでいた。

「何の報告やったんや、雄平？」

その彼に、いつの間にか部屋に入ってきた一成が尋ねる。音もなく一成が入ってくることはもう慣れたことなので、雄平と呼ばれた少年は日常会話をするかのような雰囲気です。

「大したことじゃありませんよ。こちらの予測通り、樋浦宗次が学校から追い出されたって話です」

「ふーん。せやけど、予測通りってのは何や？」

椅子に座り、タバコを銜えながら一成は言う。彼は武人でありながらヘビースモーカーだ。もつとも、最近は禁煙しているらしい。……まあ、彼は未成年なので吸わないのが普通だが。

火の点いてないタバコを銜え、こちらを見る一成に雄平は応じる。

「一年前、おれが指揮してリーダーと伊織さん以外の《名も無き子供たち》^{チルドレン} 武闘派七人で行ったこと覚えてますか？」

「ああ、入学式の大量虐殺やろ？ 第九番 《解体屋》^{スクラップ} が用意した爆弾でビビらせた後に、俺ら七人で自称エリートどもを千人ぐらい虐殺したあれか？」

「そうです。実はあれが効いてるんですよ。元々あれは政府に対する宣戦布告のつもりでやったんですけど、意外なところで結果が出たんです」

「結果？……ああ、そういうことかいな。一年前に学校を俺らが襲ったから、俺らが敵視している《殺戮兵器》^{キリング・ウエポン} がある学校も似たようなことになるかもしれへん、と、そう考えよったわけやな」

「1」名答」

なははと、楽しそうに雄平は笑う。彼の年齢は《殺戮兵器》^{キリング・ウエポン} と呼

ばれる少年と同じだ。だがその笑みには、彼の少年以上の凄みがある。

「黄色い嘴の雛鳥に、これは堪えるさね。この国の人間を守るために戦っているというのに、久し振りに訪れた日常という名の学校では『立ち去れ』という拒絶の言葉を投げかけられる。どれだけ腕が立とうと、疲れた精神（じゆん）で耐えられるものじゃないな」

「……ホンマ、救いがあらへん世の中やな。実にくだらんわ」

歪んだ笑みを見せる雄平から視線を外し、一成は天井を仰ぎ見る。そして、思い出したように聞いた。

「そっぴや、自分は何で《未知》（アンノウン）に入ったんや？」
「唐突ですね」

雄平は苦笑する。彼の圧倒的と呼ぶに相応しい演算能力を有した脳でさえ、一成の性格は捉えきれない。まあ、雄平が読み切れないからこそ一成は第一番にいるのだが。

「でも気になるで。自分ほどの頭があつたら、今頃天才とでも呼ばれてたやろ？ それがどうして、こんな危険なところにおるんや？」

一成は問う。《名も無き子供たち》（ネムレス・チルドレン） 第二番、《指揮者》（コンダクター） 高岡雄平。十五という若さでありながら、日本という一つの国家と互角以上に渡り合うテロ組織《未知》（アンノウン） の総参謀を努める頭脳を持った、純然たる天才。

彼は、絶対者たる《神》を名乗る樋浦京一郎と同格の頭脳を持つとまで謳われる怪物だ。

そんな怪物が、どうして？

だがその疑問に、雄平は思いのほか簡単に答えた。

「みんなと同じですよ。ここ以外に、おれがいられる場所はなかった。世界を知らないガキが生きるには、世界はあまりにも残酷過ぎたんです」

「……さよか」

一成は小さく頷く。《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》たちは、それぞれが《アンソウン未知》の指導者によって誘われた者たちだ。そして自ら、その手を取った者たちでもある。

それぞれに理由がある。無論、一成にも。

「……何にせよ、明日からは忙しくなるな。ここからが正念場や」「そうですね。もっとも、樋浦宗次は今回だけです。数える必要がありませんから大分楽だと思いますよ。それに、おれと一成さんに加え、第三、七、八番の《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》五人で出ます。バツクアップに第五番を入れますから、仕損じることはまずないでしょう」

「コンダクター成程、《サムライ指揮者》と《ジェノサイド侍》。更に《ジョーカー虐殺者》、《サジ切り札》、《タリアス手座》に加えて、バツクアップに《ノット・ジーニアス凡才》か。随分と羽振りがええことやな」

「頭目を連れて行くんです。万全に万全を重ねて当然。アーサーは勿論ですが、作戦後の戦闘では第十一番にOSを使ってもらいます。それに、それとは別に策も用意してある」

微笑む雄平。笑ってはいるが、彼が言っていることはとんでもないことだ。作戦の立てようがないほどの武力を叩き込むというのだから。

一成は、笑う。

「《鉄砲玉》^{フレッド}にOSをか。全く、そこまで念入りに息の根を止めに行く奴、他に知らんで」

「俺は臆病ですからね。慎重になるんです」

「嘘を吐けや、嘘を」

笑ってそう言い、ほなな、と一言だけ最後に口にすると、一成は部屋から出て行った。おそらく、自室で睡眠でも取るつもりだろう。訓練か昼寝。彼の基本行動はその二つだ。

その姿を見送った雄平は、うん、と背伸びをする。時計を見ると、到着まで丸一日ぐらいの時間があった。

「でき得る限りの手は打った。いかに樋浦京一郎といっても、手足がなければどうしようもないはずだ。樋浦宗次がない特別部隊など、雑魚も同然のはずだ」

確認するように、雄平は言葉を紡ぐ。抜かりはない。完璧のはず。なのに何故か、不安だ。

「……俺も寝るかな」

呟き、雄平は立ち上がる。

疲れているのか、少しだけ立ち眩みがした。

雨が、降り始めていた。天気予報では今日は曇りで雨は降らないと言っていたはずだが、あてにならない。

宗次は、体を打つ雨の中をゆつくりと歩いていく。既に全身がずぶ濡れだったが、気にならなかった。

ただ気になるのは、先程のこと。

『休学して欲しい』

この言葉が、何度も思い出される。考えないようにすればするほど、脳の中を駆け巡っていく。

あれは、畏怖。

あれは、拒絶。

人殺しである己を遠ざけようとする、『人』としての本能がさせたことだ。

「予想は、していたんだがな」

ポツリと、呟く。今日のことは、かなり前から予測して覚悟していた。

あの日。半年前に、常ではなく戦場という異世界に生きると決めたその時に。もう二度と後戻りはせぬと、そう決めた。

なのに ……

「……しんどいな」

足を止める。通勤の時間を過ぎていく上に雨だからだろう。車も、人の往来もほとんどない。今起こっているテロも無関係ではないはずだ。

そしてその中心に、樋浦宗次という人間兵器は存在している。

だがその歩みも、矛先を失おうとしていた。守っているはずの者たちにまで拒絶され、行く末を見失ったのだ。

「どうすればいいんだろうな？」

問いかけに答えはない。自分のことだ。それぐらいわかっている。

足を、再び前へと進める。その時だった。

「……………?」

体に走る、微かな違和感。いつもの、己の命を死が狙い撃つ時に感じる感覚とはまた別種の、薄くとも確かな警報。

宗次は、己の直感を信じて進む方向を変える。この本能的な感覚には幾度となく救われてきた。疑う余地はない。

歩道から、公園へ。宗次は雨に濡れながら歩を進める。

違和感が、加速する。心臓が、高鳴る。

それでも表情は微塵も変えず、宗次は歩いていく。そして、公園の中心。いつも子供たちが遊んでいる場所。

そこに、いた。

雨に濡れた、輝くような銀色の長い髪。腰まで届くその髪は雨に濡れて、艶を増している。そして、開かれた銀色の双眸。日本人離れした、美の一つの究極がそこにいた。

白い死装束をその身に纏い、裸足で雨の中に立つ少女。

その少女に、宗次は一瞬心を奪われた。無意識のうちに立ち止まり、少女を見つめている。何も、考えられない。

やがて、少女が宗次を見た。どこか寂しげな表情で、少女は言う。

「初めまして。……お前は、私が視えるのか？」

「視えるも何も、キミはそこにいるだろう？」

少女に声をかけられて一瞬戸惑ったが、宗次は反射的にそう答えた。少女の表情が綻び、微笑みに変わる。

とても、綺麗な笑顔だった。

「そうか。優しいのだな」

「……面と向かってそんなことを言われたのは初めてだ。それより、こんな場所でどうしたんだ？ ずぶ濡れみたいだが」

「人のことは言えないだろう？ お前もずぶ濡れではないか」
「確かに」

宗次は苦笑する。ずぶ濡れという意味では、宗次だってそうだ。ただ宗次は、濡れたかったという理由がある。

そう。この沈んだ気分を、洗い流して欲しかった。……結果は逆

効果だったが。

宗次は、空を見上げながら言葉を紡ぐ。

「俺は、濡れたかったんだ。ただ、単純に」

「変わっているな。……だが、その気持ちは私にもわかる。後悔せぬ道を歩んだつもりでも、後悔は必ずついてくる。今日もまた、私の中で是非かを定められなかったからこそ、ここにいる」

「何となくだが、わかるな。望んだ道であるはずなのに、覚悟していたことなのに、心に突き刺さる。そんな、現実が」

自分の胸に手を当て、宗次は呟くように言う。少女の口調は変わっていたが、宗次には何の違和感もなかった。

いつの間にか、体を襲っていた違和感も消えていた。

宗次は胸から手を離し、微笑みながら言う。

「俺は、樋浦宗次だ。……キミは？」

宗次に突如自己紹介されたためか、少女は酷く戸惑ったようだった。宗次自身、何故自己紹介などをしたのか自分でもわからなかった。

やがて、少女も言葉を紡ぐ。

「私は、サクラだ」

少女は、自らの名を口にしただけのはずなのに何故か戸惑ったままだった。

宗次は、手を差し出す。
サクラも、手を差し出した。

|| || || || ||

国会議事堂。今より約十七年前にクーデターが起こった際に捨てられた、国会がかつて行われていた場所。

そこに、十七年振りに議員たちが集っていた。そして、その中央には一人の若い男が立っている。

「……それが、あなた方の結論ということかな？」

まだ、大学を出たてぐらいの年齢にしか見えない男が、五百人近い年齢は自分の倍以上はある者たちに、堂々と告げる。敬語は使わない。むしろ、彼を取り囲む者たちが使わねばならないという暗黙のルールが存在している。代表者を除いて。

樋浦京一郎。何をするにしても絶対的な、《神》を名乗りし男。

その京一郎の言葉に対し、代表の議員　総理大臣が立ち上がって言葉を紡ぐ。

「こちらにも体裁というものがある。彼の実績は確かに素晴らしい。しかし、彼はまだ中学生だ。十五歳の少年に、あのようなことを強制させるのは心苦しい」

「誰も強制などしていないけどね。七年前、あいつは生きるためにその道を選んだ。あいつはあいつ自身の意志であの場所に立っ

る」

五百近い瞳に見下ろされながら、涼しい顔で微笑みさえ浮かべながら京一郎は言う。総理大臣は、苦虫を噛み潰したような顔で言葉を紡いだ。

「しかし、世論はそう見てはくれん。……報道規制も限界だ。今の時代、インターネットを代表とするマスメディアを完全に規制することは不可能に近い。彼のことはもう、日本全国の誰もが知ることとなっている」

「そのことは以前、話しておいたはず。樋浦宗次。まだ若いあいつを英雄とすることで国内のテロに対する抑止力にする、と」
「だが、しかし……」

総理大臣が口籠る。たったこれだけの問答だというのに、完全に押されていた。

自分の半分も生きていない若造に、国の長が気圧されている。

(だから、この国は駄目なんだ)

微笑みは絶やさず、しかし心の中は冷酷に。京一郎は現実を心の中で呟く。

きっと、この者たちはこれが戦争だということにさえ気付いていない。

(愚かの極みだ。だが、だからこそ利用価値がある)

愚か者ほど操りやすい者はいない。この者たちには権力と財力がある。利用できる間は、利用すべきだろう。

だからたまには、こちらから譲歩してもいいかもしれない。

「了解だ。あなた方にも外聞というものがある。普段無茶を聞いてもらっている立場から、ここはあなた方の顔を立てよう」

「そ、そうか！ ありがたい！」

本気で、総理大臣は歓喜の表情を見せる。国よりも、体裁が大事な者の反応だ。見れば、他の者たちも似たような反応をしている。その様子を微笑みながら眺め、京一郎は心中で呟く。

（腐った国だ。《未知》^{アンノウン}の……『彼女』の気持ちはよくわかる）

だが 国は、一方向からでは変えられない。だから

「それでは、あなた方の望み通り」

心の底に潜む己が闇を隠し、京一郎は言う。

「樋浦宗次を、最前線から外しましょう」

四

「あまり綺麗な場所じゃないが、勘弁してくれ」

そう言いながら、宗次は自分が暮らすアパートの自室のドアを開ける。兄は高級マンションに住んでいるが、宗次は一人でこの場所に望んで住んでいる。

その後ろに立つサクラが、どこか申し訳なさそうに言う。

「……いいのか？ 私は得体の知れない不審者のようなものだぞ？」
「本当に不審者なら、靴を受け取ったりしないだろう」

そう言っつて、宗次は裸足で歩いてきた足を玄関に置いてあるタオルで拭う。掃除が履いていた靴は、裸足だったサクラに貸していた。「ほら。とりあえず、拭いておけ」

宗次は、別の清潔なタオルをサクラに手渡す。サクラはおずおずと手を差し出すとそれを受け取り、自分の体を拭き始めた。その様子を見た後宗次は玄関に上がると、タンズからサクラが着れそうなジャージを取り出した。

その様子を見て、サクラが驚きの表情を見せる。それに構わず、宗次は言った。

「こんなものしかなくてすまないな。だが、濡れた服よりはマシなはずだ」

「……何故だ？」

「ん？」

「何故、見ず知らずの私にここまでしてくれるのだ？ 確かに名乗りはした。だが、私は名前以外を何も明かしていないのだぞ？」

「まあ、普通なら警戒するんだろうな」

苦笑し、ココアを入れながら宗次は言う。サクラの言うことは至極当然のことだ。ましてや宗次は《未知》^{アンノウン}に名指しで敵視されている身。素性の知れない者を招き入れるなど、正気の沙汰ではない。

だが、宗次はそのようなことは何も考えていない。

「だが生憎と、俺は普通の生活を送っているまっとうな中学生じゃない。いつ死ぬとも知れない身だ。キミを招き入れたことで死ぬなら、それはそれで天命だ」

宗次は、ただ微笑む。その姿は、一種の極地に在った。

死を望まず、しかし畏れはしない。幼き頃に戦いに生きること誓い、人間兵器と至る術をその身に刻み、孤独に戦場を駆け抜けたことよって辿り着いた境地。

才ある故に辿り着いた、死の克服という極み。

「だから、気にするな。これは俺のお節介だ。戻る場所がない、と言ったな？　なら、しばらくここにいればいい」

「……理由は、聞かないのか？　戻る場所がない理由を」

「話してくれるなら聞くさ。だが、人間誰しも話したくないことはあるだろう？　所詮これはお節介な男の気まぐれだ。気にするな」

シャワーはそのドアの向こうだ　そう言い残し、宗次は自分の部屋に消えた。サクラは、自分のが持っている受け取ったジャージとタオルを見つめる。

真新しい、おそらくは新品なのであるう黒いジャージ。清潔に、しっかりと洗濯された柔らかかなタオル。

そんな僅かな気遣いが、心に染みた。

シャワーをサクラが使っているので、宗次は自室で着替えていた。

サクラの後にシャワーを浴びるつもりだ。

制服を脱ぎ、普段着である黒を基調とした機能性を追求した地味な服装になる。そんな中で浮かぶのは、あの少女のことだ。

「サクラ、か」

あの少女が名乗ったのは、名前だけだ。嘘とは思えない。直感が、そう告げている。しかし、他はすべて不明だ。

別に問い質そうとは思わない。宗次の名を聞いた時の動揺も、気にしていない。

「……それよりも、もっと深刻なものがあるな」

呟きながら、宗次は傍らに置いた雨に濡れた鞆を見る。中学校という日常に向かうためのもの。それは、役目を果たさぬようになってしまった。

ふう、と息を吐き、天井を見上げる。

ゆっくりと、身体は座り込んだ。ずるずると、壁を背にして宗次は倒れ込む。

「……くそっ」

短い、悔しさの滲んだ言葉が紡がれる。頭を抱え、宗次は塞ぎこむようにして部屋の隅に座り込んでいた。

こうなる覚悟は、ずっとしていたはずだ。

今から、五年前。兄に強くなる術を教えて欲しいと願った時から。

一人で生きると、決めた時から。

そして、半年前。戦場に立ち、人の命を初めて奪ったあの日に。

なのに ……

「……………ッ！」

涙が出るわけではない。ただ感情が溢れて止まらない。
その、時だった。

ヴウヴウヴウ……………

宗次のポケットに入っている携帯電話が振動した。宗次は顔を上げ、携帯を取り出す。着信相手は 京一郎だった。

「……………もしもし」

『おや？ 学校にいるはずじゃないのかな？』

電話の向こうで、すべて理解しているであろうに、京一郎はそんなことを言う。宗次は、唇を噛み締めた。

「学校は……………休学することにした。こんなご時世だ。俺のような危険物を受け入れることはできないらしい」

『成程、それはその通りだろうね。去年の事件のこともある。学校側の考えは理解できる』

「だから、俺も話を受けた。……………それにどうせすぐ出勤することになる。結局は同じだ」

自らに言い聞かせるように宗次は言う。そう言わなければ、自分を保てなかった。

だが、京一郎から返された答えは望んだものではなかった。

『その話だが、お前はしばらくの間、戦場に出ることはできないよ』
「なっ……どうして！」

『理由を語ることが、必要な？』

電話の向こうで、京一郎が笑う。嘲笑するような笑いは、宗次の脳に響き渡った。

「……………」

宗次は答えない。ただ黙す。それを肯定の証と受け取ったのか、京一郎は言葉を紡ぎ始めた。

『やれやれ、すべてを話さなければ理解できないとはね。身体を鍛えるのもいいが、もう少し頭脳の方も鍛えた方がいいぞ。まあ、お前は必要としていないのかもしれないが』

そして、京一郎は理由を語り始める。

『キリンゲ・ウエボ《殺戮兵器》と呼ばれる少年が存在する 報道規制がかけられているとはいえ、この時代だ。最早日本中でお前の顔と名前を知らない者はいないだろう。人の口に戸は立てられないからね』
「だが、それがどうしたんだ？ 俺たちがしているのは戦争 そうですね、それがどうしたんだ。体面など気にしている場合じゃないだろう？」
『そこが、認識の差であり問題だよ。この国の人間は、我々特殊部隊の者たちと《未知アンノウン》以外、誰一人として戦争だと認識していないんだ。これはただのテロ活動。そう、誰もが信じていたんだよ』

宗次は、唇を噛む。京一郎が言ったことは、宗次も実感していることだった。

特殊部隊と、現場に派遣される近場の警官。その間にある戦争と考えているか否かの温度差が、どうしても連携を鈍くしてしまうのだ。

京一郎は、言葉を紡ぎ続ける。

『向こうの参謀は中々優秀なようだね。こうなるように意図的に情報を流していた節がある。まあ、予測してはいたけどね』

「予測していただと？ だったら、何故！」

『必要だったからだよ。お前が一度戦線から離脱することは必要だったんだ。今のままでは千日手となり、終わりはこの国が崩壊するまで訪れない。だから、飛車角を抜いてやる必要があったんだよ』
「どういうことだ？」

宗次が聞き返す。京一郎は電話の向こうでため息を吐いた。

『少しは頭を働かせたらどうだ？……つまり、こちらが《未知》^{アンノウ}と対等に渡り合っている要因を一時的に排除することで、《未知》^{アンノウ}に手を打たせるということだ。向こうは自分たちの策が上手くいっていると考えているだろうから、まず成功するよ』

京一郎の言っていることは、おそらく正論だ。宗次にも、京一郎が弄している策の概要が掴めてきた。だが

「理解はできるが、納得はできない。戦場に立たなければ、俺の存在には意味はないんだ」

『論理よりも感情。実にわかり易い回答だ。だがお前が何よりも理

解すべきなのは、これが命令だということだよ』

命令。その言葉一つで、反論はすべて押し潰された。

過去、幾度となく兄の言葉に逆らったことがある。そうすることが、より犠牲を減らせるとそう信じて。

だが、現実はより多くの犠牲を生んでしまっただけだった。だから、逆らえない。

戦争という現実の中で。犠牲者をより少なくするためには、兄に逆らうことは許されないのだ。

「……………わかった」

己の意志で動くことができない悔しさから唇を噛み締め、宗次は頷く。電話の向こうで、京一郎が笑った。

『悔しいと思うなら、私を超えてみせるといい。期待しているよ』

期待など全くしていないだろうに、京一郎はそんなことを言う。

そして、電話は切られた。

「くそっ！」

宗次は、携帯電話を投げ捨てる。耳障りな音と共に、携帯電話が床に転がった。宗次は座り込んだまま、笑う。

「は……………はっ……………」

日常から、拒絶され。
望み、身を置くと決めた場所に行くことさえ禁じられ。

一体自分は、何をしている？

誰かのために死のうと戦うことでしか、生きられない自分は

「……宗次？」

遠慮がちに開けられた扉。その向こうから、声が聞こえてきた。

宗次は顔を上げない。口を閉ざし、座り込んだまま下を向いている。

「大きな音がしたが、何かあったのか？」

「……大した、ことじゃない」

声を、絞り出した。寄る辺を失った人間はこうも脆くなるのかと、冷静な自分が自嘲している。

落ちていく心。荒んでいく精神。

放っておけば、取り返しのつかなくなる場所まで墮ちていったであろう。だが、それはサクラの言葉によって止められた。

「嘘を吐け。大丈夫なら、そんな悲しい顔をしているはずがないだろ」

「……そんな、ことはない」

「意地を張るのもいいが、たまには誰かに話してみるのもいいぞ。特にお前は、常に敵に囲まれているのだからな」

言いながら、サクラは宗次の側まで歩いてくる。そして、宗次の

前に腰を下ろした。

「何があったか、話してみないか？ 話を聞いて一緒に考えることくらいなら、私にもできるぞ」

少し苦笑して、サクラは言った。

そして、宗次は刹那の迷いの後、話し始める。

きつと、弱っていたからだ。奪われて、挫けてしまったから。だからきつと、この見ず知らずの少女に寄りかかりたいと、そう、思ってしまったのだと思う。

そして、すべてを話した宗次に、サクラは優しい声で言った。

「お前は、よくやっている」

その言葉が、ほんの一言が、胸に響いた。

戸惑う宗次。その宗次に、サクラは言葉を続けた。

「心をすり減らして、ずっと戦ってきたのだろう？ ここで一度立ち止まっても、罰は当たらないぞ」

「だが、俺は……戦わなければ……」

「だから、お前は駄目なんだ」

ふう、とため息を吐き、サクラは言う。

「お前は他人を思い過ぎている。誰かのために戦おうとし過ぎている。だが、『誰か』というのは見ず知らずの人という意味ではない。

自らの日常を取り巻く家族や友人を指すものだ。だがお前は、学校という日常を失って戦う理由を削り取られた。そのせいで、戦う理由を無意識のうちに見失った」

宗次は、言葉を返せなかった。それはおそらく、その通りだったからだ。

日常を失い、戦う理由を見失いかけ、そして、逃げるように戦場へ向かおうとした。だが待っていたのは、戦場に出られないという現実だけ。

「おまえはきつと、他人に戦う理由を預け過ぎていたんだ。そして、傷つきながら戦ってきた。自分のために戦わなかったから、お前はここまで傷ついてきた。自分を気遣わなかったから、ボロボロになつても戦ってきた。だから　もう休んでもいい」

「だが、俺は……」

「誰かのために。それを本当の意味で実践してきたんだ。お前は本当によくやってきた。ここで休んでも、誰も文句は言わないだろう」

休んでもいい　　言い聞かせるように、サクラはもう一度その言葉を紡いだ。

宗次は、小さく頷く。

五年間。ずっと駆け抜けるようにして生きてきた。ずっと、戦ってきた。

単純だと思う。出会ったばかりの少女の言葉で、簡単に説得されて。

でも、それでいいと思えた。

「そうだな。俺は……よく、やったな」

その時は、確かにそう思った。だが現実はどこまでも残酷で。いつだって、後悔だけをその身に残す。

だが、今は。

傷ついた心を癒す時間を。
彼へと、与え給え。

|| || || || ||

月夜の晩。空を見上げながら、一人の男が呟く。

「つまらないなあ」

他人を見下すような笑みを浮かべて、男は笑っている。

「すべて、私の思い通りじゃないか」

第一章「未知」（後書き）

第二話、第一章です。

ヒロイン登場。これで、第一話のラストの会話が成立した意味がわかってもらえたかと……え、無理？

……すみません。

ヒロインと、この作品最低の鬼畜外道、樋浦京一郎が活躍する第二話、楽しんで頂けると幸いです。

感想、アドバイス、ご意見など頂けると嬉しいです。

ありがとうございました。

第二章「OS」

零

コツ、コツと広大な空間に靴の音が響く。かなり広い空間だといふのに、そこにいる人影は三つだけだ。

そして、最後に入ってきた男　亀井俊彦の足音が止まる。そのまま俊彦は見上げないと全長が測れない巨大な人型の兵器を見上げると、口笛を吹いた。

「ヒュウ　こりや凄えっすね」

「全くだ。美鈴くんの技術には相変わらず感心するよ」

その隣に立つ、二つ目の人影　京一郎が、微笑を浮かべながら頷く。だが、三つ目の人影である少女は首を横に振って謙遜する。

「そんな、大したことじゃありませんよ。これは全部、母が残してくれたデータに私なりのアレンジを加えただけなんですから」

イギリス人とのクォーターであるための、金色の髪と蒼い瞳。白衣を纏うその少女は、どう見ても中学生ぐらいだ。

大神美鈴。OSと呼ばれる最強の兵器を生み出した女性の血を受け継ぐ少女であり、今現在は特殊部隊の特別技師として働いている少女だ。

その少女に、京一郎は微笑しながら言葉を紡ぐ。

「いや、OSという兵器の理論を理解し、解を導けるだけで十分尊敬に値するよ。世界中の自称天才たちが理解できない、謎多き兵器

それがOSなのだからね」

「ですがそれは、仕方がないと思いますよ。理解できぬままでも生み出せてしまう。これは、そういう兵器ですから」

「ふむ、成程」

眼前に沈黙しながら屹立するOSを見ながら、京一郎は呟く。世界の中で、公式上は誰一人として理論を理解できていない兵器。

そして現実的にでも、大神の血を引く二人 おがみせいしん 大神美鈴と、今は敵方の《未知》アンノウン側についている彼女の兄、大神清心おがみせいしんにしか理解できていない代物。

樋浦京一郎。神を名乗る彼でさえ、理解できない。

いや、むしろ神であるからこそ理解できないのかもしれない。創造主の意志を超え、人がその身に宿した罪。それこそが、? Original Sin? 原罪、なのだから。

考え込む京一郎、その京一郎に、遠慮のない声がかかった。

「難しい話はいつすよ。それで？ 俺はこれに乗り込めばいいんですか？」

親指で深い蒼で塗装された従来型とはあらゆる点で異なるOSを指差しながら、俊彦が言う。京一郎は思考をしながら、頷いた。

「そうだよ。それは元々、宗次の駆るOS シン と共に戦うことのできるOSとして美鈴さんに依頼したものだ。だがそのシステムの高度さから、扱える者は限られているらしくてね。そのためにキミを特殊部隊に引き入れたんだよ」

「なる。OSのパイロットを一人だけ特殊部隊についていうから不思議だったんすよね。しかも、一応エースパイロットであるらしい

俺を引き入れるし。辞めた直後の」

「ふふ、そうだよ。これは特別なOSでね。量産はできるが、使い回しはできないんだ。搭乗者の情報を読み込んでこの機体は動くからね。そうだろう、美鈴くん？」

京一郎に微笑まれ、美鈴は頷く。そして京一郎と俊彦に説明を始めた。

「この機体、フルートは従来のように操縦桿によって操るのでなく、搭乗者が機体と同調することによって操作する特異型です。そのため、搭乗者は一人に限定されてしまうこととなります」「えーと、どういうことだ？」

手を挙げ、苦笑しながら俊彦が問う。その問いには、京一郎が答えた。

「従来のOSは、複雑ではあるが普通の搭乗型兵器と同じように操縦桿を使用して操縦する。それは、現代最強の兵器OSであっても同じだ。だが、特異型と呼ばれるOSには操縦桿というものが存在しないんだ」

「はあ？ それでどーやって動かすんですか？」

「自分の意志だよ。文字通りね。兵器であるOSのシステムと自分の精神を同調。いわゆるシンクロをさせるんだ。そうすることで、まるで手足を動かすかのようにOSが操れるようになる。理論上はね」

「何すか、そのトンデモファンタジーは？」

いくら京一郎の言葉とはいえ、流石に信用できない様子で俊彦は言う。京一郎は笑った。

「信じられない気持ちはわかるよ。私自身、最初は信じられなかったからね。だが、キミも見たらどう？ 宗次が駆る、白銀のOSシン の動きを。あの動きは操縦桿を握ってできるようなものじゃないよ」

「それは、確かに」

宗次の駆る白銀のOS。まだ二度しか出動したことはないが、その動きと性能は圧倒的だった。十数機を一度に相手にして、傷一つ機体につけずに立ち回る姿はまるで舞を踊っているかのようでさえあった。

確かに、あの動きはOSの動きの常識を超えている。だがそれは、ネームレス・チルドレン《名も無き子供たち》が駆るOSだって

「……ちよい待ち。まさかとは思っけどよ、ネームレス・チルドレン《名も無き子供たち》のOSも」

「はい。彼らのOSは兄が創った特異型です。だからこそ、こちらも戦力を増強する必要がありました」

俊彦の言葉を、美鈴が肯定する。俊彦はため息を吐くと、頷いた。

「二人がこういうことで冗談言うような性格じゃねーことはよく知ってます。だから多分、同調……シンクロか？ それも本物なんでしょうよ。信じます」

「物分りがいいところは、キミの長所だね」

「無知は嫌ですからね。自分が知らねーからって、色んなこと否定すんのは嫌ですから。それに、ファンタジーなところがあつた方が世の中面白いでしょうよ」

「キミらしい。……では美鈴くん、続きを頼めるかな？」

京一郎が言い、美鈴は頷く。そして、改めて説明を始めた。

「また、システムにも適性があります。適性が高ければ高いほどより高い同調率を弾き出せ、同調率が高ければ高いほどシステムは強大な力を発揮します。ちなみに一般の人で十%前後ぐらいで、少なくとも六十%を越えられなければシステムは扱えません」

「それって、俺は大丈夫なのか？ 言つとくけど、俺は紛う事なき凡人だぜ？」

「いえ、大丈夫ですよ。自衛隊から取り寄せた血液データや身体能力データ値から、おそらくギリギリですが六十%を超えられるものだ」と判断しました」

「へえ」

俊彦が感嘆の言葉を漏らす。彼は自分を天才などとは微塵も思っていない。しかるべき手順を踏み、しかるべき方法で訓練してここにいるという自覚がある。

だから、常人を超えた数値を記録できるという言葉は半信半疑だ。

「まあ何にせよ、戦わせてくれるなら文句はありませんよ。俺の戦いはご存知の通り、完全な私怨です。己の身など、二の次三の次ですよ」

「だからこそ、キミを選んだんだよ。美鈴くんが新たに開発したシステムは、精神に反応するらしいからね。私怨という、人にとつて最も醜く激しい感情が何よりも最適だったんだよ」

「醜いとか、サラリと言いますね」

「事実だろう？」

「いやまあ、そうですね」

微笑む京一郎に、頭を掻きながら俊彦は返事をする。と、そこで、俊彦はあることに気付いた。

「そついや、宗次の同調率ってどんくらいなんだ？」

幼少時代より戦場を渡り歩いてきた生粋の兵士。《殺戮兵器》キリング・ウエポンとまで呼ばれる天才。あの少年ならば、どれくらいの数字を記録するのだろうか？

興味半分で聞いた質問だ。だが答えは、想像を絶するものだった。

「平均で八十九％。最大で九八％を記録しています。はっきり言いますと、これは異常以外の何ものでもありません」

「……いきなり数字が飛んでるせいでどんだけ凄えのか想像できねー……」

九十とか八十とか、基準がわからなくなってきた。一体、あの天才はどれだけ凄いというのだろうか。

「そうですね……機体を自分の体と同感覚で操れるといったところでしょうか。ただ、その代わり、操縦する機体がダメージを受ければほぼそのまま搭乗者の肉体に返ってくるでしょうけれど……」

「もの凄い危険だなそれ。メリットは？」

「普通のOSでは絶対に不可能な動きができ、機体の力を完全に引き出すことができるようになります。その状態ならば、相手と同じシステムを使用していない限りまず補足はされません。その上、任意で接続をカットし、手動操作にできるようにもしてあります」

言いながら、美鈴がマニュアルを俊彦に渡す。俊彦はそれを受け取り、パラパラとページを捲っていく。

「それなら文句はねーな。……おっそろしい機体だなオイ。無茶苦

茶じゃねーか。まあ、こんぐらいしねーと《名も無き子供たち》
「ムレス・チルドレン」には勝てないか」

彼とて、自衛隊のOSパイロットだ。基準の能力値は知っている。
だがこの機体は、それを遥かに凌駕していた。

そして、俊彦は最も気になっていたことを聞く。

「なあ、京一郎さん」

「ん？ どうしたんだい？」

ずっと黙っていた京一郎が、俊彦に声をかけられて微笑を浮かべる。
俊彦は、真剣な表情で問いかけた。

「もし、俺が単騎で《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンとぶつかった時の勝算って、どんくらいですか？」

「……相手が一人だとしても、今のままでは三割を切るだろうね。
向こうの同調率はおそらく、八十を超えている。二十も差があれば、それは決定的な差になるだろう」

「そっすか」

予測通り。いや、予測よりも少しマシな答えに対し、そう返事をする。
勝ち目など、一割も無いと思っていた。

「だが安心するといい。切り札がある。そうだね、美鈴くん？」

「……………はい」

美鈴が躊躇いながら頷く。その躊躇いの意味を、俊彦はマニュアルの中から見つけた。

京一郎が、言葉を紡ぐ。

「宗次が出られない今、すぐにキミの出番が来るだろう。その時におそらくキミが相對するのは、魑魅魍魎の天才たちだ。彼らを倒すためには、覚悟が必要だよ」

「それはつまり、壊れる覚悟ですか？」

俊彦の言葉に、美鈴がびくりと反応する。京一郎は平然と頷いた。

「そうだよ。今更私に躊躇などというものはない。幾千、幾万の人を殺してきた私にはね。キミにも、礎となってもらおうよ」

「俺は駒っすか。いいですけどね、別に。ぼかされるより、はっきり言ってくれた方がありがたい」

笑みを浮かべてそう言い、俊彦はマニュアルを片手に美鈴のところへ行く。説明を受けるためだ。

そして、京一郎はそんな二人に背を向け、歩き出した。その背中に、俊彦が声をかける。

「あれ、どっか行くんすか？」

「議事堂だよ。今回は全国中継で行われていてね。今日の昼間に引き続き、明日も行うのだそうだ。《未知》^{アンソウ}対策の会議だよ」

足を止めぬまま、そう言って京一郎は部屋を出て行く。

「無駄では、あるけどね」

最後の呟きは、誰にも届かなかった。

「……………」

「どうした？ 宗次？ こっちに来い」

「あっ、ああ」

突っ立っていた宗次にサクラが声をかける。宗次は思い出したように頷いた。だがその表情は硬い。

理由は単純。ここが、女性用の服の専門店だからだ。

しばらくサクラは宗次のアパートの使っていない部屋で暮らすことになったのだが、いつまでも宗次のジャージを着ているわけにはいかないということになり、服を買いに来たわけだが

「……俺は外で待っていたら駄目なのか？」

「それだと、私を選んだ服が良いか悪いか判断する者がいなくなるではないか。いってくれ」

「……………」

宗次は諦めの吐息を零す。周囲を見渡すと女性ばかりで誰一人として男がいない。何というか、異世界に迷い込んだ気分である。自分が異端分子のように思えてくる。

そんなことを考えていると、サクラが宗次の肩を叩いた。

「どうだ？ 似合うか？」

そう言ってサクラが自分の体に当てているのは、今風の可愛らし

い服だった。白い服のためか、サクラの銀色の髪とよくマッチしている。

「いいと思う。似合うかと」

「そうか！　なら、これにしよう」

パアツ、と明るい表情になり、そう決めるサクラ。宗次は思わず口を開いた。

「いいのか？　他にも色々あるみたいだが」

「ああ。これが気に入った。これを買っぞ、私は」

そう言っつて、それまでに選んでいた服と一緒にしてサクラはレジへと向かっていく。その様子を見ながら、宗次はあることに気付いた。

(……………目立っているな)

日本人離れた銀色の髪と瞳。それが、周囲から好奇の視線を集めている。気にしていないような素振りを見せていたが、サクラはそれを気にしているようだった。

「……………」

仕方ないかと思い、宗次は行動した。

サクラの買った服が入った紙袋を提げ、宗次が歩く。その隣では、五着ほど買った服の中の一つを着たサクラがどこか上機嫌に微笑ん

でいた。

「感謝するぞ。ああいう店には入ったことがなかったのな」

「そうなのか？」

「ああ。私がいる場所は、とてもそんなことができるような場所ではないからな。今の居場所は仲間もいて悪くはないが、何か足りないんだ」

「それで、あんなところにいたのか？」

「そういうことだ」

クスツと、サクラは笑う。その表情は、どこか寂しげだった。だがその表情も、一瞬で弾けるような笑顔に変わった。

「今日は楽しかったぞ。シヨッピングなんて初めての経験だったからな。こういった服は着たことも無かったから、嬉しい」

「ちよつと待て。なんだその微妙に辛い過去を暴露しているような言葉は？」

「そう、それだ」

呆れたように宗次が言うと、サクラは何故か笑いながら言った。

「その、過去というもの。私にはその記憶がないんだ」

「過去の記憶がないというのは……記憶喪失か？」

「おそらくはな。気が付いたら、今の場所にいた。何も知らないのに、そこが私の居場所になっていた」

「……………」

抽象的でわかり辛いのが、少なくとも笑顔で言うことではないだろう。宗次がそんなサクラに何と言ったらいいかわからずに悩んでいると、サクラが苦笑した。

「今の場所は、好きではないが嫌いでもない。私のことを気に掛けてくれる者も大勢いるからな。強がりでもなんでもなく、記憶がないことは特に辛くもない」

苦笑しながら言うサクラ。その表情から察するに、嘘はなさそうだった。

そんなサクラに宗次が声をかけようとした時、

『見て。あの子、銀色の髪よ』

『凄いわね』

『外国人かな?』

自分たちから少し離れた場所で、若いOLらしき人たちがそんな会話をしていた。見れば、周囲の人たちが二人にかなり注目している。

サクラもそれに気づき、呟くように言った。

「……宗次。人気の無いところへ行こう」

「ああ」

宗次は頷く。他人の好奇の目に晒される気分は、彼にもよくわかる。この半年、たった一人でそれに耐えてきたのだから。

二人は大通りを外れ、人気のない小道へと曲がる。そして辿り着いたのは、サクラと出会った公園だった。二人はベンチに腰を下ろす。天気は、あまりよくない。

「すまない」

「何故、謝るんだ？」

ベンチに荷物を置きながら、開口一番にそう言ったサクラに宗次は言葉を返す。そして、そのまま言葉を続けた。

「好奇の目に晒されることの辛さは、俺だって知っている。あれは辛いな。誰も側にいない。誰もこちらを見てくれていないのに、見られるのは」

見てくれていないのに、見られている。その矛盾が、辛い。

宗次の場合、他人は《殺戮兵器》キリング・ウエポンとしての宗次か、樋浦京一郎という絶対者の弟としてしか見ていない。誰も、樋浦宗次という一個人を見てはくれない。

最初は、それでいいと思っていた。すべては事実。人を殺したことも事実だからと。

だが、短い休暇の時に街に出る度、思い知らされた。

畏怖と侮蔑と敬遠。宗次の側だけは、どれだけ道が人で混んでいても誰もいなくなる。そんな経験を、幾度となくしてきた。

「難しいが、気にするな。どうせすぐに、興味を失う」

「そうかも、しれん」

自分に言い聞かせるかのように、サクラは呟く。その姿を見て、宗次は荷物からあるものを取り出した。

「だから、とりあえずこれで髪を隠すといい。気休めかもしれない

が

「これは、バンダナか？」

受け取ったサクラが、言葉を紡ぐ。それは、市販の赤いバンダナだった。

「さっきの店で売っていてな。似合いそうだったから買っておいた。いや、気に入らなかつたら着けなくてもいいが」

少しだけ気恥ずかしくなり、宗次は頬を掻きながら言う。サクラは首を横に振り、俯きながら言った。

「そんなことはない。……ありがとう」

「気に入ってもらえたなら、何よりだ」

宗次が微笑み、つられてサクラも笑う。そして、サクラは頭にバンダナを巻いた。

「……ど、どうだ？」

「ああ。似合ってる」

「そ、そうか」

素直な宗次の褒め言葉に、サクラが頬を赤らめる。そして、宗次が立ち上がるうとした時だった。

「……………」

宗次の視線の先。公園の入り口のところ、一人の若い男が立っていた。茶髪の、宗次と同じくらいの年齢であろう少年だ。右手に銀色に鈍く光る大きめのアタッシュケースを提げている。

普段なら宗次も気にしなかつただろう。だがその少年は、異質だった。

野獣のような鋭い目つき。着ている服はラフなシャツとズボンなのに、どこか危険な雰囲気漂っている。そして何よりも目を引くのは、顔の傷だ。

額から右頬に流れる深い切り傷。それが、少年の異質さを際立たせている。

「……………！」

サクラが息を呑むのが伝わってくる。宗次は膝を軽く曲げ、臨戦態勢に入った。拳銃は一応、上着のポケットに一丁だけ入れてある。だが、サクラを守りながらどれだけ戦えるかわからない。

緊張した空気が流れる。睨み合いの時間は精々一分程度だったはずだが、久遠にも感じられた。

そしてその均衡は、少年の笑いによってぶち壊される。

「ヒヤハハッ！ こいつぁ予想外だ！ クソ兄貴たちとの合流地点に気まぐれで早く来てみりゃ、随分と上等な玩具がいるじゃねえか！」

「なんだと？」

臨戦態勢に入りながら、宗次は聞き返す。相手は笑みを深くした。

「ああ、そうか。てめえは俺を知らねえのか。そいつはいけねえなあ。自分のことを名乗るのは礼儀だって、《侍》の奴も言ってたしなあ」

狂笑を浮かべながらそういい、少年は宣言する。

「ネームレス・チルドレン《名も無き子供たち》第三番、《ジェノサイド虐殺者》だあ！ 樋浦宗次！
てめえをぶつ殺す！」

そして、《ジェノサイド虐殺者》がアタッシュケースを開ける。そしてそこから、とんでもない武器を取り出した。

「手榴弾だとっ！？」

黒光りする、丸い物体。宗次には見慣れたそののピンを《ジェノサイド虐殺者》は一瞬の迷いもなく抜くと、宗次たちに投げつけた。

「くっ！」

宗次は投げられる瞬間に振り返り、両手を荷物とサクラに伸ばす。だが、荷物に伸ばした左腕は五つあった紙袋の内の一つしか手にできなかつた。

宗次は地面を全力で蹴り飛ばし、サクラと荷物を抱えたまま地面を転がる。常識を遙かに凌駕した肉体は、一度飛んだだけで手榴弾の爆発範囲から宗次とサクラを遠ざけた。

その爆風と閃光で、さすがに《ジェノサイド虐殺者》も一瞬だけ視線を逸らす。その際に、宗次たちは物陰へと隠れた。

そして、宗次は手に持っている荷物をサクラに渡し、頭を下げる。

「すまない。一つしか手にできなかつた」

あれだけ嬉しそうに買い物をしていたというのに、台無しになってしまった。だがサクラは、首を横に振って言葉を紡ぐ。

「何を、何を言っている！ そんなもの、また買えばいい！ 下手をすれば死ぬところだったんだぞ！ わかっているのか！」

「来れるのか？」

その言葉に、宗次は静かに反論した。

「来たことがない、と言っていたらどう？ その理由は何だ？ あの様子を見た限り、来なくなかったわけじゃない。来ることができなかったんじゃないのか？」

来たことがない。その理由を考えると、そういう結論にしか辿り着けない。来ることができなかった。だけど来ることができた。だから、あんな風に楽しんでいたんじゃないだろうか？

だがサクラは、首を横に振って否定する。

「いいんだ。私には望むべくもないことだ。こんな、普通の過ごし方はしてはいけなかったんだ」

無理に笑顔を作っけ言うサクラ。その表情は、今にも泣きそうだった。

宗次は、その額にコツンと拳をぶつける。

「……自分を責めるようなことを言っけな。そんなことをしたって、何も得なんかない。幸せにはなれない。人は誰だって幸せになれるんだ。その権利を自分から放棄してしまうことほど愚かなことはないだろう？」

宗次の瞳は、真っ直ぐだった。サクラは、濡れた瞳で宗次を見る。

「だが、私は……」

「俺のような人間でも、きついことはたくさんあるが幸せだと思えることは多い。こんな風になっても声をかけてくれる友達や、日常を失った代わりに手に入れた戦友。こうして、買い物と一緒に行くような友達に出会えたこと。全部、幸福の具現だ」

宗次は笑っている。一時期は、日常に捨てられた時は迷いもしたが、サクラに休んでいいと言われ、自分の周囲を改めて見直して自分はまだ幸福だと、そう思えた。

サクラは、そんな宗次に縋るように問いかける。

「私でも、幸せになっていいのか？ 私のような人間でも……？」「誰だって幸せになれる。俺は、そう信じている」

力強い言葉だった。何の根拠もない、夢想到に等しき言葉。だがそれでも、サクラの心には強く響いた。

「そしてそれは、俺が唯一守れたものだ。だから、せめてそれだけは持っていてくれ。サクラが初めて選んで、初めて買ったものだからな。そうだろう？」

宗次が微笑みながら言う。サクラは頷いた。僅かに微笑んで。

そして、宗次は立ち上がる。その宗次に、サクラが声をかけた。

「死ぬなよ」

その言葉に、宗次は微笑みながら応じる。

「大丈夫だ。俺は死なない」

そのまま、ゆっくりと物陰から出た。そして目にしたのは、マシンガンを手片手に持った《虐殺者》の姿だった。

「ようやく出てきやがったかあ。ヒヤハツ！ どうしたよ？ 殺気が微塵も感じられねえぜ！ てめえ、本当に《殺戮兵器》かよ？」
「それは、お前自身が確かめるといい」

銃はある。だが、抜かない。素手で戦う意志を見せる。

心はやけに静かだった。だが、鋭利なナイフのように尖っている。

「来い」

宗次が吐いたのは、短い台詞だった。だがそれに《虐殺者》は一瞬気圧され、マシンガンの引き金を引いた。

連続する銃声が響き、地面が抉られる。だが宗次は、一瞬で《虐殺者》の眼前まで近付くと、マシンガンを拳で粉碎した。

「なっ

！」

「正直、最初はやり合っつもりは無かった」

驚く《虐殺者》に、静かに宗次は言葉を紡ぐ。

「サクラを巻き込む危険があった上、準備も無かったからな」

突き出された拳を紙一重で避け、宗次は《虐殺者》の顎へと蹴り

を叩き込む。その口から血が噴き出した。

「だが、あんなことをされては黙っているわけにもいかない」

地面に輝が入るほどの力で踏み込み、肘を鳩尾へと叩き込む。鈍い音と共に、《ジエノサイド虐殺者》の身体はくの字に折れ曲がると地面を転がった。

「始めて訪れた場所で、本当に楽しそうにサクラは買い物をしていった。そして、買った服を純粹に喜んで着ていた。だがお前は、それを燃やした」

苛烈な怒りが、宗次の言葉には乗せられている。《ジエノサイド虐殺者》は起き上がると、血を拭いながら言葉を紡いだ。

「殺す気がよ？」

「殺す？ まさかと思うが 死ぬるとでも思っているのか？」

右拳を引くと共に右足を引き、左半身の体勢になる。宗次が素手で戦う時に多用する構えだ。

「お前は、苦しませる。生きていることを後悔するぐらいにな。ちよつどお前たちの情報を部隊が欲しがっていたところだ。ボロ雑巾のようにしてから、連れて行ってやる」

目で見てわかるほどに、《ジエノサイド虐殺者》の体が震えた。明らかに、恐怖している。

宗次は、鋭い眼光で威圧しながら言葉を紡ぐ。

「お前はやってはいけないことをした。俺は正直、お前たちの言い

分もわかるから戦いたくなかったが、こうなったら話は別だ」

静かだが、絶対的な言葉が紡がれる。

宗次がここまで怒る理由は一つ。そう、たった一つだけ。

いかなる状況でも冷静だと評価される彼が、怒る理由は一つだけだ。

「俺の友達を傷つける奴は、許さない」

いつの間にか、大切なものが増えていた。

二

「……………あのボケナスはどこに行ったんだ？」

「さあ？」

「……………」

雄平の言葉に対し、同行している一成はどうでもよさそうに答え、もう一人の、顔の鼻から上だけを覆う白い仮面をつけた、癖のある黒髪の少年は無反応で応じた。背は雄平と同じぐらいだが、仮面のせいで年齢が判別できない。

その仮面の少年と一成に、雄平が声をかける。

「大体、潤平のボケを野放しにすることがどれだけ危険かわかって

るだろ。あんたら二人は。あれは野獣さね。放つとくと、街一つ食
い尽しかねない」

「ゆーても、あいつが人の言うこと聞くわけがないやろ。兄貴に似
てな」

「同感です」

二人がそう返答する。雄平は顔をしかめた。

「俺とあいつのどこが似てるんだよ？ 全く違うだろ？」

「顔やな」

「顔ですね」

またしても二人の意見が一致する。最早、わざとやっているよう
にしか思えない。

雄平がはあ、とため息を吐く。その雄平に、仮面の少年が声をか
けた。

「それよりも、雄平さん。一つ質問してもよろしいですか？」

「ん？ なんだ宝来？」

「いえ、大したことではありません。どうしてボクを今回の作戦に
加えたのかをお聞きしたくて。ボクよりも光琳こうりんさんのほうが適任で
はありませんか？」

「《名も無き子供たち》ネムレス・チルドレン 第四番、《悪鬼》デーモン か。確かに大量殲滅能力
としては《切り札》ジョーカー であるお前よりは上さね」

「ならば、何故？」

宝来と呼ばれた少年が、雄平に問う。雄平は笑みを浮かべて答え
た。

「流石に核弾頭二本も同時には扱えないさね。光琳さんは強い。そ

れは重々承知。でもあの人は潤平のボケナスと違って自分から望んで狂気に捕らわれた人だ。ただでさえ潤平というところ狂ったボケを連れ出すんだ。流石の俺でも狂人二人は抱えきれない」

「だから、ボケを？」

「まあ、平たく言えばそういうことだ。それに、お前一度あいつに会ってみたいって言ってただろ？」

楽しそうに微笑みながら、雄平が言う。

「正直、出てこないように細工はしたけど最後は確実に出てくる。その時こそ、その目で見定めるチャンスだろ？」

「……そう、ですね」

自分の顔の上半分を覆う白い仮面に触れながら、呟くように宝来は言う。その宝来から視線を外し、雄平は誰にも聞こえないような声で言った。

「まあ、《悪鬼》^{デーモン}には別の任務があるから来られなかったんだけどな。まあいいか」

三人が再び歩き出す。そこで不意に、先程まで黙っていた一成が立ち止まった。その一成に、疑問符を浮かべながら雄平が声をかける。

「あれ？ どうしました一成さん？」

「手榴弾の音がしよった。おそらくやけど、潤平やで。これ」

「……どこですか？」

一瞬で雄平の表情が引き締まる。高岡潤平という、彼の弟が戦闘を始めた時、その場所は惨劇の劇場となる。戦争中とはいえ、無駄

に目立つ行動はすべきではない。

一成が頷き、音がしたのであろう方向を見る。

「音は一度だけやったけど、間違いはあらへん。ここからそう遠くもないさかい、急げばすぐにいけると思うので」

「わかりました。急ぎましょう」

「その方がいいでしょうね」

宝来も頷く。そして、三人は駆け出した。

三

勝負とは、最早呼べぬ戦いだった。

苦し紛れに《虐殺者》^{ジェノサイド}がアタツシユケースから取り出した銃火器はすべて宗次に素手で破壊され、今はお互い無手の状態となっている。

ただ、宗次は無傷で《虐殺者》^{ジェノサイド}は痣だらけという違いはあったが。

「周囲への被害を一切考えずに銃火器を乱射するか。話に聞いていた以上の外道のようだ。殺戮のためには手段を選ばない男、《虐殺者》^{ジェノサイド}」

周囲に視線を送り、宗次が言う。公園は既に、ボロボロの廃墟となっていた。《虐殺者》^{ジェノサイド}が笑う。

「ヒヤハハッ！ いやいや、俺は所詮ただの外道だぜ？ 数多いる

真正の外道どもに比べりゃ、矮小で卑小なただの雑魚だ」

「思い上がりだ」

はっ、とあからさまに嘲笑するように笑い、宗次は言う。

「上には上がいる。その言葉は正にその通りだ。だが、底辺は違う。底辺には有象無象、魑魅魍魎の外道がひしめいているんだ。自分より下がいるなどと、思い上がるな」

ピクリと、《ジェノサイド虐殺者》の眉が反応する。表情が変わった。

「気に入らねえな。てめえにそんなことを言えるだけのものがあんのかよ？」

「ないな。俺は、お前たちと同じ底辺にいる存在だ。だから」

膝を曲げ、宗次は足に力を溜める。

「俺以外の外道を、消し去るためにここにいる」

二人の距離は七、ハメートルほどだった。だがそれは、コンマ何秒という時間で縮められてしまう。

「ちっ
」

舌打ちをしながら、《ジェノサイド虐殺者》が後退する。だが、宗次はすぐにその眼前に肉薄していた。

「遅い」

冷静な言葉と、それとは真逆の激流のような衝撃が《ジェノサイド虐殺者》を

襲った。数秒という刹那の間に人体急所へと宗次が的確に拳打を叩き込んだのだ。

体を襲う衝撃に、《ジェノサイド虐殺者》が呻く。宗次は思い切り拳を握り締めた。

「はっ！」

気合の発声と共に、放たれる必殺の拳。正確に鳩尾を貫いたその一撃は、《ジェノサイド虐殺者》を沈黙させた。

地面に倒れ、動かなくなる《ジェノサイド虐殺者》。だが、宗次はあろう事かその胸倉を掴んで無理矢理に引き起こした。

「何を寝ている。起きろ」

文字通り、身の竦むような声だった。無条件に身震いするほどの、低く、重い声。

「俺を殺す。そう言っていたらどう？ あれは嘘か？」

圧倒的、だった。

相對していたのは、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》と呼ばれる、敵側の幹部だ。今まで万を超える人を殺してきた者たちである。その強さは、恐怖の代名詞となりつつあるほどのものだったはずだ。だというのに、宗次はそれを完全に圧倒していた。

「ヒヤハハ……」

不意に、《ジェノサイド虐殺者》が笑った。

「ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

高々と、壊れた人形のように。その瞬間、

「ぐっ！」

胸倉を掴んでいる右腕に、鋭い痛みが走った。宗次は反射的に手を離し、その場から退避する。

いつの間にか《ジエノサイド 虐殺者》が手にしていたナイフで、宗次の右腕が切り裂かれていた。

「ヒヤハハッ！ 油断してんじゃねえよ！ 隙だらけだったぜえ！」

「五月蠅い男だ。囀ることしかできないのか？」

服を破き、右腕の血を止血するために巻きつけながら宗次は言う。だが今度は向こうも挑発に乗ってこない。

「強がってんじゃねえよ。右腕の傷が深えはずだぜ？」

「だったら試してみる。この程度で俺の動きが縛れたと思うのならな」

「口が減らねえ野郎だ。死んでから後悔すんなよ！」

叫び、《ジエノサイド 虐殺者》が突進してくる。宗次は右腕を動かさず、左腕のみで迎撃を行う体勢に入る。

突き出されたナイフを、左腕でナイフを持つ腕を弾くことで避け、相手のナイフを持たぬ左腕の拳を屈んで避ける。

右腕を庇うように、《ジエノサイド 虐殺者》の攻撃を避けていく。

「避ける避ける避ける避ける避ける避ける避けるう！ いいぜえ！
もつともつと楽しませろよお！ ヒヤハハハハハハハハハハハハハ
ハハハッ！」

ナイフの白刃が迫ってくる。両手が使えればもつと楽に捌けるが、
宗次はそうしない。右腕を庇うようにして立ち回る。

そして、《虐殺者》^{ジェノサイド}の左腕に煌くものが現れた。あれは

「ズタズタに切り裂いてやるぜえっ！」

隠しナイフ！

体を襲う、二本の白刃。避けきれない。だがこれは、こちらの望
んだ展開だ。

「ふっ
」

短く息を吐き、目を細める。そして。
刹那の後、形勢は逆転していた。

「てめえ……！ 右腕動くんじゃねえか！」

「動かない、などと言った覚えはない」

ナイフを二本とも奪い取り、うつ伏せに倒れた《虐殺者》^{ジェノサイド}の首筋
にナイフを押し当てながら、宗次は言う。右腕を動かさなかったの
は、動かないと錯覚させるためだ。

相手を油断させ、武器を奪うために。

「さて、聞きたいことがいくつもある。答えてもらおうぞ」

「……………」

高圧的に宗次が言葉を紡ぐ。それに対し、《ジェノサイド虐殺者》は無言。だが、宗次は気にせず質問の言葉を紡いだ。

「まず、お前たちの指導者は誰だ？」

そう言っつて、ナイフを押し当てる力を少し強くした瞬間、

「その問いには、残念ながら答えられないさね」

第三者の声と、銃声が響いた。宗次はナイフを一本だけ手放し、その場を離れる。瞬間、鋭い金属音が公園内に響いた。

「よ、思ったよりも早い再会やな」

「烏丸、一成」

そこには、日本刀を宗次に向かって振り抜き、宗次のナイフと激突させた一成の姿があった。そして視線を変えれば、《ジェノサイド虐殺者》の側に立つ《ジェノサイド虐殺者》によく似た茶髪の少年と、両手に銃を構えた黒髪の、顔の上半分を仮面で覆った少年がいる。

そして、《ジェノサイド虐殺者》が自分の隣に立つ茶髪の少年へと低い声で呼びかける。

「クソ兄貴……………！」

「潤平、何だその目は？ お前がしたことは、重大な命令違反だ。勝手に姿を消したと思ったら、《キリング・ウエポン殺戮兵器》に手え出しやがって。

覚悟できてんだろっな?」

茶髪の少年はそう言つと、立ち上がるうとした《ジェノサイド虐殺者》 潤平を蹴り飛ばした。潤平は地面を転がった後に少年へと掴みかかるが、仮面の少年によって再び地面に押さえつけられ、気絶させられた後に両腕を縛られた。

仮面の少年が、半ば呆れたように少年へと言葉を紡ぐ。

「雄平さん。少々やり過ぎでは?」

「これぐらいでちょうどいい。ミジンコみたいな脳みそしている奴だからな。どちらが上にいるのかわからせておかないと駄目なんだよ」

二人がそんな会話をしている間に、一成は宗次から離れていた。宗次は二人と一人に挟まれる形になる。

そして、ようやく雄平と呼ばれた少年が宗次に向かって口を開いた。

「こんな形で出会うことになるとは正直思つてなかつたけど、一郎自己紹介ぐらいはしておこうか。おれは《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》コンダクター番 《指揮者》だ。初めまして」

そう言つて、雄平は頭を軽く下げた。雄平という名前が出ていても、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の本質である機密性は保つようにしているらしく、名前は名乗らない。一成は名乗ったが、それは彼なりの流儀だからだろう。事実、彼以外の名前は半年間で誰も割れていない。

そして、雄平は足下の潤平を見ると、少しだけ表情を引き締める。

「不肖のクズとはいえ、弟が申し訳ないことをしたな。こちらは今お前と争う気はないんだ。退いてもらえないか？」
「お前が俺の立場だとしたら、どうする？」

宗次が問いかける。その問いに、雄平は軽い口調で答えた。

「おれなら全力で退くさね。おれには《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》三人と同時にやり合う度胸は無いからな」
「賢明だな。だが生憎と俺は、賢明じゃない」

言つて、宗次は懐から一丁の拳銃を取り出す。それを見て一成と仮面の少年がそれぞれ構えたが、雄平がそれを制した。

「はい、ストップ。二人とも武器を収めてくれ。戦う気はないと言つたはずだ」

「どういうつもりだ？」

「どうもこうも、見たまんまさね。おれは今ここでお前と争う気はないって言ってるんだよ。お前とやり合うとなると、こっちも色々と覚悟決めないといけないしな」

肩を竦め、雄平は言う。宗次は二人が武器を下ろしたのを見て、自身も銃とナイフを持つ手を下げた。警戒はしたままだったが。

その様子を見て、さて、と雄平は間を繋いで言葉を紡いだ。

「ここで会えたのはおれにとってはある意味僥倖だ。樋浦宗次。お前は、おれたちの信念を知ってるか？」

「ああ。『日本という国を暴力と流血によって変える』……だったか？」

「正解だ。それじゃあ、質問一。その信念を、お前はどう思うよ？」

右手の指を一本立て、雄平が聞いてくる。雄平の表情には笑みが浮かんでいた。

宗次は数秒間考え、結論を出す。

「容認できないな。力による変革は、正しい変革をもたらさない。本当に変えたいのなら、力でなく言葉で変えていくべきだ」

「んー、教科書通りの答えだな」

ハハハと、雄平が笑う。どこか小馬鹿にしたような笑いだった。

宗次は不快感から眉をひそめる。

それを見た雄平は、手を振りながら言葉を紡いだ。

「いや、悪い悪い。正直、そんな答えが返ってくるとは思ってなかったからさ。お前はそちら側じゃなく、どう考えてもこっち側だと思っただからさ」

「どういう意味だ？」

「いや別に。その年齢で戦場に立ってるんだ。おれらと同じで、『残酷な世界に見捨てられた側の人間』じゃないかって思ったただだよ」

その言葉を聞いた瞬間、宗次の心臓が一度だけ大きく高鳴った。

宗次以外、気付けないはずのその音。だが、まるでその音を聞いたかのように雄平は笑った。

「どうやら、凶星のようさね。おまえはやっぱり、こっち側の人間だよ」

「そんなことはない。俺は……」

否定の言葉を捜す。だがそこで、宗次は気付いた。

心のどこにも、否定の言葉など無いことに。

「どうだ？ 否定するだけのものは見つかったか？」

宗次の心を見透かしたかのように、雄平が言う。宗次は言い返そうとして、やはり、言葉が出てこないことに気付いた。

雄平は、宗次に向けて淡々と言葉を紡いでいく。

「見つからないなら、それが答えだよ。それと、前から気になってたんだが、お前は どうして戦ってるんだ？」

「どうして、だと？」

「そうだ。 どうして、だよ。 おれたち《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》はそれぞれが戦う理由を持って戦場にいる。そしてその根底は、このくだらない世界への恨みや憎しみだ。だがお前は おれたちの側にいるべきなのに、そちら側にいる。その理由は何だ？」

真剣な問いかけのようだった。 真剣な表情で、雄平は問いかけてきている。

宗次は、即答することができなかった。

戦う理由。 自分の中に確固としてあると思いつ込んでいたものが、見つからない。

戦うと決めたのは、今から八年前。 戦場に初めて立ったのも八年前だった。ただ強い意志を持って、兄に『強くなりたい』と言ったのを覚えている。

そして、戦場を転々とするうちに《キリング・ウエポン殺戮兵器》と呼ばれるようになり、一年前に特殊部隊に入り、半年前に日本のこの戦いに参戦し、日本でもそう呼ばれるようになった。

だがこの経歴のハジマリに、答えが無い。

何故自分は強くなりたいと願ったのか。その理由が、見つからない。

「……俺、は……」

掠れた声が漏れる。答えなど、どこにも無かった。だが宗次は、歯を食い縛って銃を上げた。

「……」

一成と仮面の少年が素早く反応する。だが銃を向けられた本人である雄平は、つまらなさそうな目で宗次を見た。

「どついつつもりさね？ おれをここで殺したところで、その胸にある空白は埋まらない。その風穴は開いたままだ」

「……」

「シカトか。まあ、気持ちはわからんでもないけどな。今までそれこそ数え切れんような数の人間を殺してきて、その理由が見当たらなかつたんだ。落ち込むのも当然」

ダァンと、雄平の言葉を遮るように銃声が響いた。見れば、宗次の持つ銃の銃口から煙が出ていた。雄平の頬が薄く切られ、血が流れ出す。

「貴様っ！」

仮面の少年が叫び、両手の銃の照準を宗次に向ける。だがそれを、雄平が遮った。

「止めるさね。別に殺されたわけでもないんだからな」

「ですが」

「それに、殺す気だったらとっくにおれは脳天ぶち抜かれて死んでるさね」

二ツ、と挑戦的な笑みを浮かべ、雄平は言う。その通りだ。宗次がその気になれば、雄平は今頃死んでいた。だが宗次は、殺すことができなかった。

できるはずが、なかった。

「まあ、その辺のトチ狂った犯罪者なら間違はなく逆ギレして殺してただろうけどな。むしろ、そうしてくれた方が底が知れて対処し易かったが……。流石に激情に流されるような軟い精神はしてないみたいだな」

血を拭いながら、楽しそうに雄平は言う。その雄平に、宗次は威圧感のある声で言葉を紡いだ。

「口の減らない奴だな」

「それがおれの売りだからな。おれはお前みたいに武力を持ってないから、こうして舌先三寸、口八丁で立ち回るしかないんだよ。ま、そんなことはどうでもいい」

微笑を浮かべたまま、雄平は楽しそうに言う。

終始変わらない笑顔。銃弾を頬に掠らされても表情を変えないその姿が、宗次の中であの絶対的な兄と重なった。

その雄平が、少し考え込むような仕草を見せる。

「んー……正直タイミングがないと思ってたけど、ちょうどいいな。それに、このタイミング以外に引き入れることはできなさそうだし」

「何の話だ？」

「ん？ 単純明快な話さね」

宗次の問いかけに、まるで悪戯でも思いついたかのような表情をして雄平は言う。そして雄平は一步宗次に近付くと、改めて口を開いた。

「お前は本来、こちら側の人間だ。だが何の因果かそちら側に立ちおれたちと敵対している。だがな、キリンゲ・ウエボン《殺戮兵器》。おれたちと同じで常人の枠からはみ出したお前が、人の世で生きていけると思っているのか？」

「……………！」

雄平の言葉が、宗次の心に突き刺さる。それは、昨日の夜に宗次自身が抱いたものだったから。

雄平は、残酷に言葉を紡いでいく。

「バケモノにはバケモノにお似合いの戦場がある。そして、バケモノと異端はいつだって弾かれる。お前はその最右翼だ。どうせ、周困から畏怖と侮蔑と憐憫の目で見られてるんだろ？」

畏怖と侮蔑と憐憫。それは、宗次が常に感じているものだ。

あれだけのことをしてのける樋浦宗次を畏れる。あれだけの殺人を行う樋浦宗次を蔑む。あれだけのことをしなければならぬ樋浦宗次の境遇を、憐れむ。

それは、何よりも耐え難き苦痛。

そして、雄平はそれを受け続けてきた宗次に手を差し伸べる。

「仲間になれよ、キリンゲ・ウエボン《殺戮兵器》。なんだったら、おれの二番をくれ

「やってもいい」

手を差し出し、雄平は言う。

「おれたちと共に世界に大いなる悪事と復讐を為し、僅かな正義を為そう」

それはきつと、魅力的な言葉だった。手を掴むという選択肢は、確かにあった。

親に売られ、戦って生きること勝ち取るしかなかった幼少時代。戦いの最中で、誰も側にいない今。だが、仲間になれば少なくとも共に歩く仲間ができる。

本当に、魅力的だった。

宗次は、手を伸ばそうとする。その瞬間だった。

宗次の脳裏に、二人の少女の姿が過ぎった。

それは、友達。宗次自身でそう言った、銀色の少女と。

学校で唯一宗次の側に来てくれた、幼馴染の少女だった。

休んでいいと、よくやったと、誰かに言って欲しくて、誰一人としてくれなかった言葉。壊れかけた心を、繋ぎ止めてくれた人。

おはようと、普通に接してくれた人。切り離されているという思いを、少しだけ和らげてくれた人。

その二人の姿が脳裏に浮かんだ瞬間、宗次の体は動いていた。

パシィィィィィン……………

乾いた音が、公園内に響く。跳ね飛ばされた雄平の掌が、赤く腫れていた。

「これが、答えか？」

「残念ながら、な」

雄平の言葉に、迷いなく宗次は頷く。体は勝手に動いた。だが、悪くない気分だった。

赤く腫れた手を見、雄平はやれやれといった調子で大きく息を吐く。

「ある程度予想してたとはいえ、ちよいと残念だな。お前が仲間になつてくれれば、この戦も早急に終わらせられただろうに」

肩を竦め、残念そうに雄平は言う。そして、真剣な表情で言った。

「なあ、聞かせてくれ。どうして、おれの手を跳ね除けた？ 正直な話、お前には俺の手を取るという選択肢は確実にあつたはずだ」
「ああ。お前の手を取るとはきつと、俺にとっては魅力的なものだったんだろう。少し前の俺なら、手を取っていたかもしれない」

微笑さえ浮かべ、宗次は言う。心は、落ち着いていた。

「だが、こちら側も……この世界も、そう捨てたものじゃない。思い出したんだ。俺が欲しかった言葉をくれた友達と、こんな俺に未だに声をかけてくれる友達を」

サクラは、他者に理由を預けていると言っていた。そして『誰か』とは不特定多数の顔も知らない者たちではなく、日常の一部である

「お迎えが来たようさね」

雄平が呟くと同時に、巨大な武装ヘリが公園に向かって下りてきた。陸自でも中々お目にかかれなような兵器が、バラバラと音を立てて公園内に降りてくる。そして、着陸はせず空中に制止した状態となった。

漆黒の機体の胴体、その左右にはミサイルとガトリング砲らしきものが備え付けられている。収容人数は十人くらいだろう。少なくとも、公園に降りてくるようなものではない。

「なっ……っ？」

「武装ヘリ アーサー。うちの技師が生み出した、OSにも対抗できるステルスヘリさね。うちの主戦力の一つだよ」

驚く宗次に、雄平がそう解説する。ステルスヘリ そんなふざけたものを所有している軍隊は、今のご時世ではアメリカと中国ぐらいのはずだ。

そんな兵器を、あくまで一テロリスト組織が ?

「驚くのも無理がないさね。おれたちも、これは最後のとおきにしておくつもりだった。だが、この国がいつまで経ってもこれが戦争だということを理解しないからな。理解していただこうと、これを持ち出してみた」

そう言った時の雄平の表情は、酷く冷めたものだった。冷たい、機械のような目をして武装ヘリ アーサー を見つめている。

そして、アーサー の扉が開く。そしてそこから縄梯子が投げられ、人影が現れる。

それは、少女だった。小柄で、肩まで黒い髪を伸ばしたクールな印象を受ける少女だ。少女はヘッドホンとマイクを付けており、雄平たちに声をかけた。

「迎えに来た。みんな、乗って」

独特の喋り方で、少女が言葉を紡ぐ。ヘリの音がうるさい中、不思議とその声はよく聞こえた。そして、一成が最初に反応する。

「了解や。ほれ、《切り札》^{ジョーカー}。自分も乗りい」

「ですが」

「ええて。自分もここで戦う気はないやろ？ 樋浦宗次？」

笑みを浮かべ、一成が言う。宗次は数秒の沈黙の後、ゆっくりと頷いた。生身の人間が三人相手するだけならばよかったが、武装へリが相手では流石の宗次も拳銃一丁ではどうしようもない。

一成と《切り札》^{ジョーカー}がそれぞれ縄梯子を使ってアーサーに乗り込む。そして、雄平は乗り込む前に宗次の方を向いて口を開いた。

「ああそうだ。面白い答えを聞かせてもらった礼に、おれもお前に面白いことを教えといてやるよ」

「何だ？」

宗次が問いかける。雄平の表情が、ただの微笑から凶悪な笑みへと変化した。

「今から約一時間後。おれたちは改めて宣戦布告をする。そして、この街はその生贄となってもらう予定だ」

「なんだと!」

「何だも何も、言葉通りさね。生き延びたかつたら……いや」

雄平が縄梯子を掴み、アーサーが上昇を始める。

「守りたいのなら、今すぐ準備をしる。間に合わなかった時に涙するのは、お前だぜ？」

そして、アーサーはすぐに宗次の手の届かない高さまで飛び上がると、信じられない速さで移動し、すぐに見えなくなってしまった。

宗次は、一人その場所に取り残される。その背中に、遠慮がちに声かけられた。

「宗次……？」

敵がいなくなったことで、サクラが物陰から出てきた。その両手は、宗次が守った紙袋をしっかりと抱えている。

だが今の宗次には、それを見る余裕は無かった。

「どうした？ 何かあったのか？」

沈黙を続ける宗次に、サクラが問いかける。宗次は、拳を握り締めめた。

「サクラ。俺は、行かなければならない場所ができた」

「行かなければならない場所、だと？」

「ああ。戦場に、向かおうと思う」

どこに現れるかは聞いていない。時間と、戦場がこの広い街という漠然とした情報を手に入れたただけだ。

だがそれでも、樋浦宗次は動かなければならない。
あの手を跳ね除けた以上、行動しなければならぬ。

宗次が、静かな決意をその身に宿す。

「戦う理由が、見つかったんだ」

満足そうに、宗次は言う。

そして、宗次は戦う術を手に入れるために歩き出した。

四

武器を持った男が、一人。

見た目には、高校生ぐらいの青年が鞆を肩から提げて歩いている
だけに見えただろう。だが、その目は明らかに濁っていた。

しかし、人というものは意外と自らの周囲を見ないものだ。だから、往來を行く者たちの誰も、青年の異質さに気付かない。

そして、青年はとある中学校の前で立ち止まった。

「ここに、いるんだよな？」

校舎を見上げ、青年は呟く。声には、全くと言っていいほど感情
が乗っていないかった。

青年が、自分の口元に手を当てる。

それは、嘘えようも無く歪んでいた。

「ねえ、千里」

「うん？」

友人に肩を叩かれながら名前を呼ばれ、足立千里は振り返った。今は美術部の部活動中。だというのに、全く身が入らない状態だった。今日の朝の、臨時で行われた集会で伝えられた宗次の休学が効いているのだろう。

友人には悟られないようにしていたのだが、みんなわかっているようで、元気を出すように声をかけ続けてくれた。嬉しい反面、放っておいて欲しい気持ちもある。

今回もそうだろうと思い、千里は友人のほうを見る。だが、今回は自分を励まそうとしてのもものではなかった。

友人は、窓の外を指差しながら言葉を紡ぐ。

「あの人、誰かな？」

「え？」

友人に言われて　ずっと窓から外の景色を眺めていたというのに　千里は始めて気付いた。校門のところに、赤い服とジーパンを来た高校生ぐらいの青年がいる。

その姿を見た瞬間、千里の体に得体の知れない悪寒が走った。身体が勝手に身震いする。

一度目を閉じ、再度目を開ける。だがそこに、青年の姿は無かった。

「あれ？ いない」

友人が、首を傾げて言う。「帰ったのかな？」という勝手な想像を付け足していた。

千里は、その言葉をどこか遠くで聞いていた。体を襲う悪寒が、消えない。

……ポツ……ポツ……

不意に、窓を叩く雨粒。雨が、と思った瞬間には豪雨となっていた。二十年前ぐらいから度々起こるようになり、騒がれ始めたゲリラ豪雨というやつだろう。

今日傘持つて来てないのに、という声上がる。千里はぼんやりと外を眺めていた。

その、次の瞬間。

『きゃああつ！』

部屋中を、悲鳴と閃光と轟音が埋め尽くした。近場に落ちたのであろう雷のためだ。

千里も驚き、耳を塞ぐ。雷は、苦手だった。

そして、雷に混じって聞こえた銃声は。

幸か、不幸か。彼女に届くことは無かった。

|| || || || || || ||

空を飛ぶ、レーザーに映らぬ武装された兵器。その内部で、雄平は面白くなさそうな表情をしていた。

「雄平、どうしたの？」

そう問いかけるのは、小柄な黒髪の少女だ。雄平の正面に座っているため、雄平の放つ妙な雰囲気を感じたのだろう。

ただ、その手は休むことなく超が付くほど高性能な狙撃銃を手入れしている。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第八番、《サジタリアス射手座》丹羽鏡花。

十五という若さでありながら、狙撃の腕は五輪クラスと称される少女だ。その実力はあの樋浦宗次も認めている。

雄平は、身体を背もたれから離して首を横に振る。

「なんでもない」

「とてもそうは見えないけれど？」

間髪入れずにそうやってきたのは、操縦席に座る青年だ。微笑を浮かべながら、洗練された技術でこの最新鋭のヘリを操っている。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第五番、《ノット・ジーエカハシケンタロウ凡才》高橋健太郎。

少しだけ色素の薄いサラサラの髪と、優しげに細められた瞳が印象的な青年だ。健太郎は微笑を浮かべたまま、言葉を続ける。

「いつも飄々として言葉を受け流すのがキミという人間の本質だと思っただけだ、違ったかな？　今のキミは、どうも張り詰めているように見えるよ」

「張り詰めている、ですか？」

「そう。張り詰めている、だね。どうしたんだい？　キミらしくないよ」

らしくない　その言葉を聞いて、雄平は苦笑した。この人は、物事の本質を突いてくる。ある意味、一番やり難い相手である。

雄平は息を吐く。その雄平に、健太郎は言葉を紡いだ。

「まさかとは思っけれど、今回の作戦に怖気づいたかい？」

「いや、それはないです」

即答する。今回の作戦は、一年前から入念に準備されてきたものだ。今更怖気づくなど、ありえない。

その答えを聞き、健太郎は安心したように笑う。

「それはよかった。指揮官が迷っていると、こちらでも動き難いからね」

「全くやな。どないしたんや、自分？」

鏡花の向かい側の席で、日本刀の手入れをしながら半分どうでも良さそうに一成が聞いてくる。雄平は背もたれに身を預けると、ゆつくりと言葉を紡いだ。

「こちらの方はいいんですよ。別に、今更のことです。ただ、向こうの方がね」

「向こうの方、とは何ですか？」

それまでずっと黙っていた《切り札》ジョーカー 宝来が、疑問を浮かべて聞いてくる。宝来は助手席に座っており、健太郎の操縦の補佐をしている状態だ。

雄平は右手で頭を押さえながら、宝来の問いに答える。

「お前確か、何で光琳さんを連れてこなかったか、って聞いてたよな？」

「はい。聞きました」

「あれな、言ってることはすべて真実なんだが、足りないもんがあるんだよ」

そうして、雄平は話し始めた。

「実を言うと、お前は最初から連れてくるつもりだった。それで、光琳さんの代わりは潤平なんだよ。潤平よりも遥かに戦闘能力は上だし、単騎で《殺戮兵器》キリング・ウエポンとも互角にやり合えるぐらいの実力はあるって踏んでるしな」

そう、それだけの力を、あの男は持っている。

《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン 第四番、《悪鬼》デーモン 島村光琳しまむらみつりん。

人の業の果てたる鬼の名を冠し。

四の文字を 死の文字を背負いし、殺戮衝動の成れの果て。

「だから、最初はその人を連れて行くつもりだった。狂気に逃げ込んだ潤平とは違って、あの人は狂気を望んだ人だ。……自らの狂気を飼い馴らせる者。それは最早人ではなく、怪物だよ」

気絶したまま眠っている弟を一瞥し、雄平は言う。その雄平に、宝来は改めて質問を飛ばした。

「なら、何故光琳さんを連れてこなかったんですか？」

「光琳さん自身がそう言ったんだよ。『今回の作戦は万全をもって臨む必要がある。だから、オレは陽動をしよう』ってな」

「陽動、ですか？」

「ああ。元々そんな予定は皆無だったんだがな。一理あったし、その時には《殺戮兵器》キリング・ウエポンが戦場に出られないようにする策も成功前だったから、万一の場合に街の中であのバケモノを抑えてもらおうと思っただけに策に加えたんだ。もっとも決めたのは一昨日だけだな」

「そんな大事なこと、何で俺らに言わへんかったんや？」

そう口を挟んできたのは、一成だ。刀を鞘に収め、ナイフを磨きながら雄平に問っている。他の者たちも、同意見であるようだった。雄平は息を吐き、言葉を紡ぐ。

「頭目に報告して相談して、新しく組み直してたら知らせる時間がなかったんですよ。まあ、移動中に知らせる予定でしたけど」

「ふむ……なら聞こうか。その、新しい策とはどういったものなんだい？」

「そうやな。いくら光琳でも、陽動なんて一人でできるようなもんやあらへんやろ？ うちの人員とか使うんか？」

ようやく興味を持ったらしく、雄平が聞いてくる。《未知》アンノウンはすでに何千人という人員を抱えた組織だ。《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンを抜きにしても、テロリスト組織としては世界有数の規模を誇る。

また、世界の先進国と裏で繋がりがあるのは 秘密である。

「んー、まあそうですね。二、三十人ほど動員しました。といっても、あくまで陽動ですから爆弾仕掛ける程度ですけどね」

「ふーん。じゃあ、何がそんなに心配なんや？」

「目、ですかね」

ふう、と息を吐き、雄平は呟くように言う。

「陽動作戦の許可を出した時の光琳さんの目が、忘れられないんですよ。いつもと違ってあの目は 正気だった」

全員が、言葉を失う。それだけ、その言葉は信じられないものだった。

島村光琳。彼は、いつだって狂気を振り撒いている人間だ。自ら狂気に染まることを望んでいる風でさえあった。

狂気を伝染させる、狂気の塊。

そんな存在が、正気の間をしていたなど、俄に信じられる話ではない。

「おれだって、自信がない。けど……」

あの時だけ、狂気を感じなかったのは事実だ。

「……らしくないよな。忘れてくれ」

雄平は、思考を打ち切るためにそんなことを口にする。そして、健太郎に問いかけた。

「健太郎さん。射程範囲まで、どれぐらいですか？」

「もう射程内だよ。僕たちには無理だけど、鏡花くんならおそらく」

正確に狙い撃つことができる位置にいる」

「時間もやで。開始予定まであと三分つてとこやな」

腕時計を見ながら、一成が言う。雄平は頷いた。

「鏡花。宝来と入れ替われ。宝来は潤平を叩き起こして、突入の準備だ。一成さんも準備をお願いします」

テキパキと、的確な指示を雄平は出していく。全員がそれに従い、準備を進めていく。その最中。

「雨？」

ポツポツと降り出していた雨が、一気に勢いを増してきた。ゲリラ豪雨だ。

雄平は窓からその様子を眺め、笑みを浮かべる。

「好都合だ。これだけの雨なら、奴らも逃げられない」
「雄平。狙いは？」

その雄平に、鏡花が問いかける。鏡花が見ている画面は、遠視用の特殊スコープだ。アーサーのミサイルとガトリング砲を使用する際に必要になるものだ。

雄平も画面に目をやり、ある一点を指差す。

「狙いは、ここだ」

「わかった」

鏡花が頷き、座席に付けられたスコープを右目に装着する。操縦席の健太郎が操作すると、ミサイルとガトリング砲それぞれの引き

金が鏡花の座る助手席に現れた。

鏡花はそれを握り締め、呼吸を整える。

風向き、風速、天候……あらゆる条件を本能的に視野に入れ、鏡花は照準を定める。

そして、ミサイルが放たれた。

雨を切り裂き、ミサイルは飛来していく。そしてそれは、大勢の人々が集まる場所　国会議事堂の前に集まる、マスコミたちへと直撃した。

阿鼻叫喚の地獄絵図が展開される。一息に死ねた者はむしろ幸福だったのかもしれない。苦しむ必要が、なかったから。……苦しむ者たちの声が、聞こえてきそうだった。

「鏡花。もう一撃だ。そして健太郎さんは、俺たちが出た後に向かってくるであろう兵器の相手をお願いします。鏡花も」
「ああ。任せておいてくれ」

健太郎が頷き、ミサイルが放たれる。鏡花は息を吐くと、スコップを付け、正面を見据えながら口を開いた。

「大丈夫。美咲さんが来るまでに、終わらせるから」
「頼むぞ」

そして、雄平もパラシュートを背負う。
アーサー　が動き出す。雨を切り裂き、今回の目標　十七年前にも戦場となった場所へと直進する。

雄平は、笑みを浮かべる。
雷鳴が轟く。豪風が機体を襲う。
そんな中、空気を切り裂く爆発音が響いた。

街が 燃えていた。

雄平は、静かに呟く。

「狂宴の始まりだ。踊ろっぜ、世界中の敵たちよ」

どこか、芝居じみた口調で。

雄平は、宣言するように言葉を紡いだ。

五

人が、突然のミサイルの飛来によって大勢死んだ。

怨嗟が、呪詛が、憤怒が、恐怖が、ここからでもよく見える。

「中々、思い切った策をとる」

望み通りの展開に、思わず口元が綻ぶ。その姿はまるで、人が苦しんでいる姿を見て悦んでいるようにも見えた。

また、ミサイルが飛来した。そして今度こそ、苦しんでいた人々ごとく掃する。

そして、もう一つ。
空の向こうで、街が燃えているのが見える。

「実にいいよ」

ただ、笑みが零れた。

「期待以上のものを、キミは私に見せてくれる」

ただ、楽しかった。

「美咲くん。キミに会うのも、久し振りだね」

騒ぎ始めた、国権の最高機関にして唯一の立法機関である国会が行われている国会議事堂と呼ばれる場所。
その場所で、たった一人で笑っていた。

「楽しいよ」

心の、底から。

第二章「OS」（後書き）

というわけで、第二章です。宗次の戦闘能力は、正直理不尽です。

《名も無き子供たち》は、今後、全六話のうちで全員登場します。今後もお付き合いいただけると幸いです。

感想、ご意見お待ちしております。

ありがとうございました。

第三章「ファービドウン・フルーツ」（前書き）

【ファービドウン・フルーツ】（Forbidden fruit）

アダムとイヴが食した禁断の果実。また、大神美鈴が改良したシステムの名称。

知恵の木の実とも呼ばれる、原罪の始まり。開発者はアダムとイヴがかつてエデンの園から堕ちたことから、人を否応なしに墮とすことになるこのシステムにこの名称をつけた。本来なら封印され、消されるはずだったが、樋浦京一郎によって使用が強行される。

シンクロニティ・システムと呼ばれる機体と同化するシステムの能力をより効率的に発揮するために開発されたシステム。しかしその実態は、無理矢理に同調率を上げるため搭乗者の精神を壊していくものだった。

今現在は、フルーツにのみ搭載されている。

亀井俊彦【危険でも、やらねーといけねーことがあるんだよ】

第三章「ファービドウン・フルート」

零

殺すこと。殺されること。
それはきつと、同じことだと思う。
だって、こんなにも。
心が、満たされるから。

一

辺り一面に広がるのは、鮮血で彩られた壁と床。
立っているだけで血の匂いと臭気にやられそうな、かつては国の
代表が集っていた場所。今は、惨劇の場と化した場所。

だが惨劇は、まだ終わっていない。

「ヒヤハハッ！ 死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
えっ！」

潤平が狂ったように叫び、両手の銃を乱射する。議員や、《未知^{アンソウン}
》の襲撃に備えて待機していた警官たち。そのすべてが、物言わぬ
肉塊に変えられていく。

生きている者を見つけたら、殺す。それが今の、潤平の状態だっ
た。

(樋浦宗次に負けたのが、そうとう堪えてるみたいだな)

血の海を歩みながら、そんな弟の様子を見て雄平は心中で呟く。いつもより数段キレている。ああなると、熱が収まるまでは相当かかる。

(どうでもいいけどな。関係ないし)

潤平が奥へと進んでいく。雄平はその後に続かず、正面玄関から表へ出た。

そして、そこに待っていたのは、巨大な輸送ヘリ。全長が三、四メートル近くあるOSを輸送するために造られた巨大ヘリだ。そのヘリが、死体と壊れた車が転がり、あちこちで炎を上げている場所に着陸する。

そしてそこから、雨の中を二人の女性がゆっくりと降りてきた。

「雄平くん。遅くなってゴメンね」

最初に降りてきた女性　黒髪の、十五、六ぐらいの女性は雄平に向かって言う。雄平は笑った。

「いえいえ。待つのは好きですから、気にしないでください」

どこか嬉しそうに雄平は笑う。黒髪の女性　夕霧雅も、つられるように笑った。もうなんというか、二人の世界である。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第十二番、《スカライ研究者》夕霧雅。

戦闘能力は皆無に等しいのだが、生物学と医学方面の知識は専門家を遙かに凌駕する、《未知》^{アンノウン}の医療最高責任者である。今回は、この襲撃の後にある戦闘のバックアップのために来ることになった。もっとも、目的を忘れていそうな気配が二人からは漂っているが

「さて……」

その様子を微笑まじげに見ていた妙齡の女性が、時計を確認して真剣な表情を作る。そして、雄平に声をかけた。

「《指揮者》^{コンダクター}。現在の状況の報告を」

空気が、変わる。笑い合っていた雄平と雅の表情が引き締まり、雄平が一步女性の前へと歩み出た。

この女性は普段、《名も無き子供たち》^{ネームレス・チルドレン}の誰であつても愛称で呼ぶ。だが、任務の時だけは自らが授けた異名を呼ぶようになるのだ。そして、そんな違いがあるからこそ、異名で呼ばれた時、《名も無き子供たち》^{ネームレス・チルドレン}は気を引き締めるようになった。

雄平が、ゆっくりと報告を始める。

「はい。第五、八番にアーサーの操縦を任せ、マスコミを殲滅。そのまま浮き足立っている議事堂内部に第一、三、七番が三方向から突入。先程目視で確認して来ましたが、後数分もすれば制圧完了となるでしょう」

「成程、流石ね。……目的の人物は？」

「第一番に捕らえるように命じておきましたので、すぐに来るか」と

スツ、目かと細められ、声も低くなった女性の問いに、雄平は頷

いて答える。その答えを聞くと、女性も満足したように頷いた。

「わかったわ。ご苦労様。それじゃあ、《指揮者》^{コンダクター}は《鉄砲玉》^{フレッド}と《後継者》^{サクセサー}の二人とこの後の戦いについての打ち合わせに入って。

無論、アーサーに搭乗している二人にもよ。わかっていると思っけど、迅速にね」

「はい……って、ちょっと待ってください。第十一番は元々作戦に組み込んでいましたが、第十三番は本部待機のはずです。何故こちらに？」

確認するような口調で、雄平が問いかける。彼の作戦はよほどのことがない限り、忠実に実現される。だが、女性が持つ特殊な『勘』^勘でもいっべき能力によって策が微妙に変更されることはこれまでにあった。

だが雄平の予想は外れたらしく、女性は首を横に振る。

「大丈夫よ。私の？予感？は確かに働いてるけど、《後継者》^{サクセサー}は違うわ。何でも彼は、妹の成長した姿と自分の新しいOSの力を自分の目で見たいそうよ。それと、あの子のお迎えに《凶刃》^{アサシナイター}を出しておいたから」

「第十番をですか？ それに、第零番の居場所もよくわかりましたね」

「？予感？よ。今回は、いつもより強く訴えてくるの」

自らの胸に手を当てて、女性は言う。

「星が危ない。私たちにとっての凶星が、目覚めるって」

雄平の心臓が、高鳴った。

星が危ない　その言葉の意味は、命の危険が迫っているということだ。雄平は組織の者たちの中で誰よりもこの女性との付き合いが長い。その？予感？が外れたことがないことを、誰より知っている。

そして、この場合の星が危ないとは、おそらく

「俺たちのうちの誰かが、危ないってことですか？」

この戦場に来ているのは、この女性と《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンのみ。

？予感？がある限り、女性が命を落とすことは考え辛い。ならば、

《名も無き子供たち》の誰かがその対象となっているはずだ。

だが雄平のその予測は、またもや裏切られる。

女性が首を振り、言葉を紡いだ。

「誰か、じゃないわ。ここにいる全員が、危ないのよ」

「えっ……」

雅が、呆けた声を出す。雄平は、ただ黙ってそれを聞き、口を開いた。

「ならば、何故ここに？　事前に言ってもらえれば、策の変更は為せたはずです」

「そう怒らないで。確信がもてたのは、ここに来てからよ。それに、ここには必然と呼べる出会いがある」

微笑み、女性がそう言った時だった。

「ありゃ？　もう来てたんかいな、頭目。お早いお着きで」

のんびりとした口調の声が、雄平の背後から聞こえてきた。雄平が振り返ると、そこには全身を血で濡らした一成が立っていた。

「一成さん。終わったんですか？」

「まあな。残党は潤平と宝来が掃除しとる。抵抗はできんやろうから、じきに終わるやろ。俺は頭目の指令を果たしにきたんや」

そう言っつて顔に付いた血を右手で拭くと、一成は左腕で引き摺つて来ていたものを放り投げた。雄平は、数歩横に移動してそれを避ける。

ドチャリ、というぬかるんだ地面に落ちる音と共に、微かな呻き声が零れる。

「頭目。ご所望の品物 『総理大臣』、確かにお届けしました」

「ご苦労様」

女性が微笑む。女性の足下に転がっているのは、両腕を縛られて転がっている男。

この国で、『総理大臣』を名乗る立場にある男だった。

「う……………」

「無様ですね、相原総理」

呻き声を漏らす相原に、見下す視線を投げかけながら女性は言う。相原は、ゆっくりと顔を上げた。

「お前は、誰だ…………？」

「あなたの敵ですよ」

女性が微笑む。相原は、それで事情を理解した。

「そうか……貴様が《未知》^{アンノウン}の……！」
「ええ。そうです。一応、指導者を名乗らせていただいております」
「貴様」

ドンと、銃声が響いた。雄平が取り出した銃口から、煙が噴き出している。
打ち抜かれたのは、相原の右腕。水溜りの濁った水が、紅に染まっ
っていく。

「ぐっ……ああああああああああああぐっ！」

身体を弓のようにしならせながら、相原が叫ぶ。雄平は、冷酷に
言葉を紡いだ。

「おっさん。誰が囁くことを許可した？ 脳みそ沸いてんのか？」

そう言って、雄平は相原に近付いていく。
憎悪の色を、その瞳に宿しながら。

「ああっ……あああぐっ！」
「痛いかな？ 痛いだろうな。だがこれは、お前が他人に強制してき
たことの十分の一にも及んでない」

また、銃声が轟く。今度は、左腕。

その光景を、一人は冷静に。一人はどこか怯えたように。一人は
退屈そうに眺めていた。

「うっっ……ぐっ……」

あまりの痛さに、気を失いそうになっている相原。その瞳には、涙さえ浮かんでいた。

「泣くほど痛いか？ だったら、何故だ！」

雄平の蹴りが、相原に入る。雄平の瞳にも、涙が浮かんでいた。

「何故お前たちは！ それを他人に強制できる！ 何故手を差し伸べない！ 俺たちは、紙の上の数字じゃない！ 何故、貴様らは
ッ！」

胸倉を掴み、怒鳴りつける。ずっと押し殺してきた感情が、爆発していた。

雄平は、《未知》^{アンノウ}ができる前の一番最初の構成員である。指導者である女性に救われて、力を貸すことにした。そしてその過程で、彼は様々な惨劇を見てきた。

彼の『友達』が背負った、悲しみをずっと見てきた。だから

「楽に死ねると思うなよ。貴様は」
「雄平くん！」

感情が暴れ出した状態の雄平。その腕を、雅が掴んだ。

「雅……さん？」
「もついい……もついいから……」

そう言った雅の腕は、震えていた。言うまでもなく、雄平に怯えてのものだ。

雄平は、相原を掴んでいた腕を、離した。

「……すいません。取り乱しました。頭冷やしてきます」

そして、力なく雅の腕を振り切り、輸送ヘリの方へと歩いていく。その途中で、一言だけ雄平は雅に向かって呟いた。

「ありがとう。雅さん」

そして、雄平が輸送ヘリのところへ行つたのを見届けると、改めて女性は相原の前に立った。

「酷くやられましたね。彼は、優しいのですよ。我々が背負うものをすべて見てきたために、あなた方のことが許せないんです。身に覚えがあるでしょう?」

「何の……話……!」

相原が、荒い息を吐きながら言葉を紡ぐ。女性は微笑み、しゃがみ込んだ。

「思い出させませんか? ならば、語って差し上げますよ。丁寧にね」

そして、女性は紡ぎ始める。

世界を敵に回した、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》と呼ばれる天才たちの始まりを。

「まず、ある少年は唯一の家族である母親を事故で失いました。母親を轢いたのは、警察のパトカー。しかしその警察官は犯人を追うことに夢中で、急いで病院に運べば助かったかもしれないのに無視し、また、少年に対しての補償は何も無く、事件は無かったことに

されました。無論、新聞にも載りませんでした」

それを聞いた瞬間、一成が背を向けて議事堂内に入っていった。それを気にせず、女性は言葉を続けていく。

「また、ある兄弟は両親から毎日虐待を受けていました。兄弟はボロボロの体と心で何度も周囲に助けを求めましたが、誰一人助けはくれませんでした。そして、壊れてしまった弟は両親を殺害し、少年院へと入れられてしまいます。」

残された兄である少年はその事件の後、十に満たない年齢でありながら金を稼ぐための労働を始めました。そして、数日後。少年は自らが通う小学校に事情を説明しようと訪れました。十に満たぬ年齢でも、少年の頭脳は大人顔負けのものでしたから、そうすべきだと判断したのです。

しかし待っていたのは、名簿から名前が消えているという現実でした」

グイツと、女性が胸倉を掴んで引き寄せる。

「ほら、気を失うのはまだ早いですよ。まだこれで三人です。《名^ネも無き子供たち》に加え、構成員にもあなた方の被害者がいるんです。ねえ、相原総理？」

「う……ぐ……」

痛みで気を失いそうになっている初老の男は、呻くことしかできない。

そして、女性が言葉を紡いだ。

「私もそうなんですよ。十七年前、当時の防衛庁長官であったあな

たに、人生を奪われた」

「な……に……？」

「覚えていないのも無理はありません。あなたにしてみれば、今まで踏み台にしてきた人間の一人でしょうからね」

微笑みながらそう言って、女性は自らの名前を口にします。

「神崎美咲かんざきみさき」

この名に、覚えはありませんか？」

ビクリと、相原の体が震えた。その姿を見て、満足そうに美咲は笑う。

「そうですよ。神崎劉蓮の娘です。父の罪をすべて背負わされ、あなたに何もかも奪われ、あの白い研究所に閉じ込められた娘ですよ」

銃を、抜く。そしてその銃口を、相原の額へと美咲は押し付けた。

「待て！ やめろ！ 助けてくれ！」

「あなたは今までそう言って助けを求めてきた人を、助けましたか？」

かちりと、何かのはめられた音が響く。

「罪を犯してきたんです。これ以上生きていても、仕方がないですよ」

「やめろっ！ やめてくれえっ！ なんでもする！ 何でもするから、だから」

「さようなら」

そして、引き金が引かれる。

紅の飛沫が、地面を濡らした。

物言わぬ死体が地面に転がる。美咲は立ち上がると、扉の方を見た。

「再会の？予感？はしていたわ」

「ふむ。相変わらずその能力は健在のようだね」

そこには、一人の男が立っていた。白いスーツを来た、黒髪の男だ。

「私の演算能力とは違い、未来をただ直感で知ることのできる能力。やはり、私たちは対極の存在だ」

「ええ。けれど、一度は手を取り合った間柄よ。こんな風に向かい合うのは、できれば避けたかった」

「そうかもしれないね」

男が、雨の中をゆっくりと歩いてくる。そして、二人は向かい合った。

「樋浦京一郎。どうして、そちら側に？」

美咲が問いかける。この男は、彼女が一番最初に誘った相手だ。だがこの男は断った。その理由をずっと、知りたかった。

だが美咲がずっと抱えていた問いに、京一郎はあっさりと答えた。

「面白くないからだよ」

「え？」

「私と宗次とキミと……あの子。その四人が揃えば、世界を手にする

ることさえ容易だ。それはあまりにもつまらない。退屈してしまう」

微笑み、だから、と京一郎は言葉を続ける。

「私はキミの敵になったんだよ」

二

靴の音が響く。それもそのはずだ。学校という施設は今、授業中なのだから。

だが、靴の音は響く。

カッン、カッンとコンクリートの床と靴底に仕込まれた鉄のぶつかる音が。

ガラリと、扉が開く音がした。靴の音が、止む。

「ん？ キミは誰だ？」

靴の音を聞きつけた、教師らしき男性が靴の音を出していた者の許に歩み寄る。その表情はどこか、当惑していた。

それもそのはず。そこにいたのは、どう見ても高校生ぐらいの、私服を着た少年だったのだから。

男性教員が、表情を引き締めて少年に話しかける。

「何をして」

言葉は、途中で途切れた。その代わり、ドサリという何かが倒れた音が廊下に響く。

そして、再び廊下に靴の音が響き始める。

カッソ、カッソ、カッソ。

そしてその音が、止まった。

職員室　学校の教員たちが集まる場所の、扉の前で。

ガラリと、職員室の扉が開かれる。

「ん？」

偶然、扉の側にいた男性　おそらく体育教師だろう。ジャージを着ている　が、突然入ってきた少年に眉をひそめる。

「おい」

その言葉が、その教師の時世の句となった。サイレンサーが付けられ、銃声の消された黒い物体。そこから吐き出された鉛玉が、教師の脳を正面から貫いていた。

銃弾が貫通し、教師の後頭部から血が噴き出す。職員室の床が、紅に染まる。

だが、その時は誰も動けなかった。たまたまこの時間に授業が無く、職員室にいた教員たちは突然のことに反応できない。

頭を撃ち抜かれた教師が、倒れる。その音が響いた時、ようやく彼らは我に返った。

「うわああっ！」
「きゃああっ！」

そして、純粋な恐怖から彼らは叫び声を上げて逃げ出していく。だが、すぐに彼らの悲鳴は止んだ。

先程殺された男性教諭を合わせて、十一人いた教師たち。その数は、一瞬にして四人に減らされてしまった。

目の前に同僚たちの死体が転がる。それを見て、残された者たちは硬直した。

少年が、ゆつくりと歩み寄る。残された教師たちは恐怖で尻餅をつき、血に触れたことで小さく悲鳴を上げる。

その様子を冷めた目で見つめながら、少年は口を開いた。

「動かず、オレが許可するまで囁るな。そうすれば、寿命が僅かに延びるぜ」

教師たちは一斉に口を両手で塞ぎ、震えながら何度も頷く。その様子を見てから、少年は言葉を紡ぎ始めた。

「ここは、キリング・ウエポン《殺戮兵器》が通う学校だよな？」

「は、はい。樋浦宗次はこの」

口を開いた女性教師。その頭がすべて、吹き飛んだ。一瞬で叩き込まれた十発近い弾丸。それが、女性の頭を粉々に吹き飛ばした。残された三人が、目を見開いてその光景を見る。少年は、つまらなさそうに鼻を鳴らすと懐から弾倉を取り出して入れ替えた。

「誰が口を開いていいと許可したんだよ？ 囁るなど、確かにそう

忠告したはずだぜ」

口調はつまらなさそうで、どこか無気力な感覚さえ窺える。だが、その口元は例えようも無く歪んでいた。

少年は、自らが笑っているのにも気付かずに言葉を紡ぐ。

「成程。血の匂いを手繰ってここへと至ったが、間違いじゃなかったみたいだな。……だが、ここに血の匂いの起源がない。何故だ？」

真新しい血の匂いは部屋中に充満している。だが、これはあくまで少年が生み出したものだ。彼が求めるものではない。

「幾度と無く浴びたために染み付き、体に同化した血の匂いがない。ここに、あいつはいないのかよ？ そのお前、答える」

指名されたのは、残る三人の内、一番左側にいた男性教師だ。男性教師は体を震わせながら、震える声で言葉を紡ぐ。

「ひ、樋浦は、休学して、まして……今、ここには……」
「そうか」

また、音無き銃弾が吐き出される。男性教師は、脳みそを撃ち抜かれて苦しむ間もなく殺された。

狂っている。

残された、二人の女性教師は同時にそんなことを感じた。この少年は、まともではない。正常ではない。自分たちとは、世界を異にする存在だと。

歪んだ口元。冷めた瞳。

釣り合わない二つのものが、同時に存在するその不適合さ。世界に適合することを放棄した者が、そこにいた。

「そうか」

銃を下げ、もう一度その言葉を繰り返すと、少年は独り言を呟き始めた。

「成程な。世界から拒絶されたか。だというのに、オレたちと共に来ることを拒むとは。実にくだらないな。拒絶されたなら、拒絶し返せばいい。染まってしまえばいい。それをどうして拒むんだよ？」

少年が、天井を見上げる。そしてそのまま、固まった。そして唐突に、少年が口を開く。

「まあいい」

銃の引き金が、引かれる。

悲鳴は、上がらなかつた。ただ、無造作に新たな死体が二つ、床に転がった。

「あくまでそちらへいることに固執するというのがなら、それで委細構わない。同族は馴れ合えるもの。だが、オレたちは同属で似た者同士であっても馴れ合うことはできない種類だ。だって」

その先の言葉は、少年の口からは紡がれなかつた。

少しだけ体に付いてしまった返り血。それを拭い取り、歪んだ口元で舐め取りながら少年は職員室を出る。

その瞬間に、銃声が轟いた。

少年は、足下に着弾して傷を作った床と、鉛玉を放った男を交互に見る。

そして、少年は両手を広げて乱入者を歓迎した。

「よくここへ来れたな？ これもまた、必然か？」
「違うな」

全力で走ってきたために雨に濡れ、息を切らしている相手は言う。

「これはただの、偶然だ」

両手に銃を携えた相手。その銃口はしっかりとこちらへと向けられている。

「ここには何も起こっていないことを俺は願っていた。だから、ここへ来た。そして、お前に出会うことになった」

ギリ、とこちらにも聞こえてくるほど強く、相手が歯を食い縛る。

それに対し、少年は冷たい声で応じた。

「それは違うぜ。すべては必然だよ。間違いなく、な」

殺人鬼同士の殺し合いを求めてここへ来たオレと。
日常を守るためにここへ来たオレの敵。

ほら、見てみる。

オレと俺の出会い、必然だ。

「だがまあ、そんなことはどうでもいいだろ？」

サイレンサーを付けた銃とは別に、懐から少年は巨大な銃を取り出す。

デザート・イーグル
砂漠の鷲。

50AE弾という、規格外の弾丸を使用する、威力という点では最強クラスの銃。使い易さと軽量、小型であることが重視されてきた最近の銃とは比べものにならないくらいに扱いが難しい分、破壊力が根本的に違う。

それを構え、少年は言葉を紡ぐ。

「樋浦宗次。お前はオレと同種の存在だ。人を殺したくて狂いそうになり、最後には狂っちまう、ヒトの形をしたバケモノだよ」

「俺は、一度だって人殺しを望んだことはない」

自信に満ちた少年の言葉。それを、樋浦宗次は否定した。

少年が、笑う。

先程までの、無意識の悦楽に帰結する笑みではない。自らの意志で刻んだ笑みだった。

無意識に歪んでいた口元。

意識的に歪めた口元。

二つの歯車が、かちりと噛み合う。

「お前は、オレと同種だよ」

再び、少年がそんなことを言う。宗次は、不愉快そうに眉をひそめた。

「だって、お前は」

少年が、両手の銃を宗次に向ける。

そして、二人の指がほぼ同時に引き金を引く。吐き出された銃弾が、空間を裂いていく。

「オレを、殺したがってるだろ？」

宗次は、答えない。ただ距離を取り、殺し合いを始める体勢に入っている。

そして少年は 《悪鬼》^{デーモン}と呼ばれ、島村光琳という記号を持つ少年は、人を殺すための兵器を迎え撃つ。

口元に刻まれた笑みが、意識的なものなのか。無意識的なものなのか。

もう、どうでも良くなっていた。

「だから、オレとお前は馴れ合えない」

出会った途端に。

殺し合うから。

樋浦宗次の口元は。

晒っているように、見えた。

|| || || || || ||

緊急警報。十七年前の事件以来、一度も鳴っていないものが鳴り響く。

『繰り返す！ これは訓練ではない！ 総員、各々の全力を持って任を果たせ！』

十七年前に起こったクーデターの教訓から、東京都に置かれた自衛隊基地。そこへ、東京都の新宿に設置されている行政庁から指示が飛ぶ。

十七年前、焦土と化した東京都という場所。議会もそれ以来、ずっと仙台に置かれていたのだが、十七年振りに国会を東京都で開こうとしていた。そして、昨日に引き続いて開かれた国会。それが、狙われた。

すでに、十七年かけて修復された国会議事堂の前に集まっていたマスコミは全員殺されている。この司令室でその様子をモニターで見た者たちのうちの一人は、その惨劇を目の当たりにしたためにここから出て行った。

「……………」

残った者たちも、全員が平常心ではない。あんな 原型など少しも残っていない惨状を見せられて平気な者など、いようはずがない。

「戦闘配置！ 急げ！」

そんな中、一人の男が声を張り上げ、一人だけ平静を保っている。真田和人。陸自において大佐の地位に座る、行政庁の現場での指揮

官である。将軍職が勤めるべき役職だが、それぞれが臆病風に吹かれて拒否したため、彼が指揮を取っている。

行政庁。十七年前のクーデターの後に設置された、警察と軍事の両方に指示を出す機関である。現在は《未知》^{アンソウ}の対策本部としても機能している。

特殊部隊もまた、この行政庁の管轄にある部隊だ。

和人は一通り指示を終えると、無線を置いた。だが、彼が一息吐く前に事態はどんどん動いていく。

「大佐！ 戦闘配置完了しました！」

「戦闘機十二機！ OS クラフト 三機！ 出撃準備完了！」

モニターの前に座る、和人とは違い警察官出身の者たちが次々と準備が整ったという報告をしてくる。和人は頷いた。そして、無線を手に取る。

「ご苦労。……わかっていると思うが、国会に出席しておられた議員の方々の命は無いものとして考える」

低い声で、和人は言いきった。場の空気が、凍りつく。

和人は、言葉が行き届くようにゆっくりと言葉を紡いでいく。

「六ヶ所。街が爆弾によって破壊された。おそらくは陽動だが、爆破にも意味がある。設置された爆弾は高速道路と線路を破壊している。今現在、直接的な犠牲者は死者百人程度、怪我人は千人といったところだが、これより先はもっと増える」

言いながら、和人はある意味関心さえしていた。《未知》^{アンソウ}がこの

一年間にしてきたことには、それぞれが繋がることで連鎖的に被害が大きくなっていくようになってきているのだ。

「交通機関の混乱が生むのは、事故だ。そして、火は人の恐怖を煽る。放っておけば、狂ったように人は暴れ出す。さらには、それを止められる手段であるマスメディアも議会も壊された。これだけの条件が揃えば、まずいい結末には辿り着かない」

ごくりと、誰かが唾を飲み込んだ音が響いた。

和人は、結論を下す。

「千人だ。最低でそれだけの人間が死ぬことになる。それを覚悟しろ。これは最早、テロなどという生易しいものではない。生き残りたければ、一切の躊躇いも容赦も捨て去り、全身全霊を持って敵を殺せ」

残酷な真実を、和人は口にす。そして。

「出撃だ！」

和人が叫び、同時に地響きが起こる。基地から現れた、三機の迷彩柄をしたOS。それが走ることによって起こった振動だ。

重厚な鎧を巨人が全身に纏ったような外見。コクピットがある胸部が少しだけ突き出ていることが特徴であるそれは、OSと呼ばれる人型の二足歩行型起動兵器。現代では間違いなく最強の兵器である。

第四期型OS クラフト。自衛隊が標準的に使う機体だ。

そして、それに先行して雨の中を十二機の戦闘機が議事堂へ向かっていく。

それに対し、《未知》^{アンノウ}側の兵器は僅か二機。視認できているのにリーダーに映らないという、超高性能なステルスヘリと、全身を凄まじい分厚さの装甲で固めた灰色のOSだ。

戦闘機が、一斉にミサイルを発射する。それは、確実に灰色のOSに直撃した。

爆煙が立ちこめ、灰色のOSの姿が見えなくなる。そして、戦闘機が議事堂を通り過ぎ、旋回する頃に、煙が晴れた。

傷一つ、付いていなかった。

「なっ……！」

和人が、その表情を驚愕に染め上げる。間違いなく、すべて直撃だった。だというのに、傷一つ付いていない？

それが、エナジーシールドと呼ばれるOSがその機体の内部にまるで血液のように循環させている電気信号を用いることによって紡ぐことのできる盾だとは、彼らは知らない。

そして、敵の動きに変化が訪れる。灰色のOSの背後を飛んでいた武装ヘリ。それが、装備しているミサイルを放ったのだ。

武装ヘリが放ったミサイルは単発。旋回する戦闘機に当たるはずが無い。

そう、和人は判断した。だが、敵は彼の予想の上に行く。爆発が起こる。戦闘機が二機、墜落していた。

「二機、撃墜されました！」

「なん、だと……」

オペレーターの報告に、呆けた声で和人は応じる。戦闘機というものは、ミサイルの一発で墮とせるようなものではない。なのに、墮とされた。

(そんな非常識なことがあってたまるか！)

内心で和人が叫ぶ。だが、敵のへりはその『非常識なこと』をもう一度やって見せた。

今度は三機が、たった一発のミサイルで撃墜される。まるで、吸い込まれるようにミサイルは戦闘機へと直撃した。

そして、灰色のOSも動き出す。

近くにある、OSよりも巨大な輸送へり。そこから、OSの全長ぐらいの長さがある鋼鉄の棒を取り出すと、屈んだ。

そして、十分にタメをつくってから、飛ぶ。

後は、一瞬だった。

薙ぎ払うかのように振るわれた鋼鉄の棒。それは、冗談のように戦闘機をすべて叩き落した。

灰色のOSが着地し、大地が揺れる。

「全、滅……」

「なんだよ、あの動き……?」

その光景を見ていたオペレーターたちが、口々に言葉を紡ぐ。それだけ、今の一瞬で見せた動きは異常だった。

OSは、機体に血管のように走る靱帯というものが搭乗者の操作によって電気信号を受け、動くものだ。そのため、どうしたって夕

イムラグができ、限りなく伝達速度を上げた機体、レイヴンでさえも動きにぎこちなさが生まれる。

だがあの機体には、それがなかった。

まるで、舞を踊っているかのように自然に、演舞を踊るかのように華麗に、動いていた。

和人は、確信する。

あれは、自分たちが知る兵器ではない。

そして、確信した時に三機のクラフトが画面に映った。それぞれアサルトライフルとランスを両手に、議事堂へと突進していく。そして、その戦いも一瞬だった。

武装ヘリが三機の正面に現れたと思った瞬間、ガトリング砲を放ったのだ。だが、OSは戦車の砲弾さえ耐え切る兵器。撃ち抜かれるはずがない。

そう、誰もが思っていたのに。

相手はやはり、予測の上をいつていた。

全身を蜂の巣にされ、爆砕した三機のクラフトが、横たわる。

誰も 何も、言えなかった。

長い、長い沈黙。その沈黙を、和人が破った。

「……俺たちは、何と戦っている？」

常識を、軽々と超えていく敵。

為す術がなかった、自分たち。

こんな、理不尽な戦いがあった方がいいのだろうか？

相手は、本当に。

ヒト、なのか？

誰もが、共通の疑問を抱いた。ほぼ同時に、その疑問へと至る。普通なら、もたらされることなき回答。だが回答は、もたらされた。

「人間ですよ。普通より少しだけ優秀に過ぎない、人間です」

一人の、金色の髪を纏う少女によって。

「大神、美鈴か」

その中学生ぐらいの少女を認め、和人が言う。美鈴は、はい、と頷いた。

「ずっと、倉庫から外のことを見ていました。今の状況も理解しています。だから、準備をしてきました」

そう言うと、美鈴はオペレーターの座席に座り、持参したノートパソコンを繋ぐとディスクを取り出してそれを入れた。

司令室のシステムが、丸ごと変革させられる。

「おい、何が起こっている？」

一度画面がすべて消え、凄まじい数の文字が羅列していく光景を見、和人が問う。美鈴はキーボードを叩きながら、言葉を紡いだ。

「臨戦態勢にしているんです。援護のために、必要ですから」

そして、ものの数十秒でシステムは変えられた。

画面が変わる。そこに映っていたのは、倉庫にある鮮やかな蒼のOSだった。

「あれは？」

「私が開発したOSです。宗次さんが外されると京一郎さんが予測していたので、宗次さんの代わりに手駒として用意することになりました。名を、フルート。彼らに対抗できる、シン 以外では唯一のOSです」

口を開きながらも、美鈴のキーボードを叩く速さは変わらない。凄まじい速さでキーボードの上を指が動いていく。

和人は、その美鈴に質問を飛ばした。

「成程。流石は樋浦京一郎だ。弟の代わりに用意しておくとは。食えない男だ。だが、誰があの人材の代わりになれる？ 機体と同じでも、戦においては天才というしかない樋浦宗次と同格の力を発揮することは、不可能じゃないのか？」

「ええ。不可能ですよ。正直、後にも先にも宗次さんを超えるパイロットは現れないと思います。あの人は何もかも、規格外ですから。しかし、何も宗次さんの代わりになる必要はないんですよ」

少しずつ、美鈴の声が冷めていく。だがそれは、無理にそうしているように思えた。

「《殺戮兵器》キリング・ウェポン

でなくても、《未知》アンノウと

《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレン

と戦える。そう相手に思わせることが重要なんです。それだけで、相手の出足は鈍るようになる。使えば使用者が壊れる刃なれど、牽

制にはなりません」

「……ちよつと、待て。使えば、壊れる？」

「そうです。使用者の心を喰らい、それを代償に力を生み出す狂気の兵器。一度使ってしまったら、もう心は元に戻れません」

司令室が、俄にざわめく。そんな兵器が存在するのかという疑問と、その内容　人の命を馬鹿にした兵器に対する怒りからだ。

そして、その怒りを代表するかのようになり、和人が美鈴の肩を掴む。

「ふざけるな。そんな兵器、認められるわけが」

怒りの込められた言葉。だがそれは、乾いた音と少女の叫びによって、司令室を包んでいた怒りごと一掃された。

「誰のせいですかっ！」

叫び声が、無線を通じて基地や、行政庁の内部すべてに届く。

だが美鈴は、そんなことは微塵も気にしていなかった。

「すべて、すべてあなたたちのせいじゃないですか！ 《未知》^{アンノウ}が現れてからの半年！ 相手はそれこそ軍隊並の装備を投入してきているのに拳銃しか持たない警察官のみを派遣して、何百人と死なせて！ それをどうにかするために宗次さんが戦場に出て！」

美鈴の瞳からは、涙が零れていた。今の彼女は、純粋な感情だけで言葉を紡いでいる。

「なのに！ なのになのになのに！ 自分たちの無能は棚に上げて！ 宗次さんが戦場に出るのは良くない、なんて言つて！ あなたたちが初めから今日みたいに軍隊の力を投入していれば、宗次さんだつて戦場に出る必要はなかつたじゃないですか！」

戦いが始まつて、一年。実は、自衛隊が被災支援以外で戦争に関わつたことは皆無に近い。戦争をしない国。そう謳い、この国は何もしてこなかつた。OSを相手が投入してきた時でさえ、自衛隊は動かなかつた。

だからそのせいで、彼が戦場に出る回数は増えていく。

不器用で優しいあの少年は、たった一人で戦わなければならなくなつた。

「なにが、なにが戦争をしない国ですか！ あなたたちが言う『少年』を戦わなければならぬ境遇に追い込んでおいて！ 知つた風な口を利かないください！ 私だつて、宗次さんだつて、本当はこんなところにいたくないんです！」

それは、嘘も偽りも虚飾もない、純粋な叫び。だからこそ、聞かざる者たちすべての心に、突き刺さつていく。

宗次と出会い、少しずつ打ち解けていった時。美鈴は彼に話したことがある。

？私、歌が好きなんです。だから、歌手になりたいんです？

それは、戦いが始まつてから口にしたこと。誰にも言ったことがない、叶うことがないであろう夢だつた。

本当は、笑つて欲しかつた。無理だと、言つて欲しかつた。そう

してもらえればきつと、諦めることができただろうから。
でも彼は、言ってくれたのだ。

いいな、と。

応援する、と言ってくれたのだ。

「宗次さんは言っていました。『みんなが戦うと言う。俺だって、できればそうしたい』って。でも、できないって!」

その理由を聞いた時、彼は珍しく無表情を苦笑に変えて、こう言
った。

?世界が俺に望んでいる。戦え、と?

テロリストに太刀打ちできない日本の政治システム。殺されてい
く日本の民。そして、戦場に出ない軍隊と、責任を押し付けあう政
治家たち。

その現実が、あの少年を戦場へと送り出した。

「あなたたちは何なんですか! 何もせずに、安全圏から戦場で命
を懸けている人に『戦うな』なんて、よく言えたものですね! 何
もしないなら、黙っていてください! これは戦争なんです! こ
こは戦場なんです! いつになればそれを、あなたたちは理解して
くれるんですかっ!」

誰一人として、理解も、認識さえもしていなかったこと。

この国の人間が、認めようとしなかったこと。

戦場で命を懸けてきた、特殊部隊の者たちしか認識していなかつ
たこと。

それが。

これはもう、戦争だという現実だ。

『美鈴の言う通りだな』

声が、聞こえてきた。見れば、モニターに一人の青年が映っている。和人は、思わずその青年の名を呼んだ。

「亀井……俊彦か？ まさか、お前がそのOSに乗っているのか？」

モニターの向こうで、俊彦が笑う。どこか、空虚に。

『まあな。でもだからってあなたに言えることはあんのか？ 元上官であつたとしても、今の俺は自衛隊を抜けた人間だ。京一郎さんの誘いに乗って、な。あの時みたいに、あなたの静止を聞く理由はねー』

乱暴な口調だ。間接的にはあるが、和人は俊彦の上官である。普通なら許されるものではない。

だが俊彦は、和人に対して敬語を使う気はなかった。

一年前に起こった虐殺事件で、俊彦は行かせてくれと叫んだ。だが和人は、戦うことを許さなかった。

ただ、それだけの理由から。

間違っていたのは俊彦だ。それは、自他共に認めていることであり、誰であってもそれには頷くだろう。

だが、論理だけで人は動かない。

彼は、自らが間違っていると理解していながら、感情で動くことを決めた。ただ、それだけの話だ。

『それにな、やっぱり俺は軍人なんだよ。戦うことが仕事なんだよ。中学生のガキが戦場に出る時に、その背中を見送るだけなんて、耐えられねーんだよ』

「……………」

誰もが、沈黙する。それはきつと、ここにいる者たちの誰もが感じていたことだ。

中学生が戦場に出ているのに、軍人は何故戦場に出ないのか？

警察官という公務員が何百人と殺される中、自衛隊は何故何もしないのか？

一年前。《未知》^{アンソウ}が現れてから、自衛隊の隊員たちがずっと影から囁かれていたことだ。中には、正面から罵倒された者さえいる。

彼の言葉は、ここにいる者たちの胸中を代弁しているようであつた。

俊彦は、強い光を宿した瞳で言葉を紡ぐ。

『だから、俺は戦う。壊れる？ 上等だ。今まで散々サボってきたんだ。壊れるぐらいがちょうどいい。俺は、戦うことを生業にしたんだ。俺は自己犠牲が嫌いなんだが……まあ、あれだ。悪くねーと今は思える』

それに、と言葉を付け加えて、俊彦は言う。

『俺の理由はやっぱり、私怨だ。憎しみを持って戦ってる。だから、正直なこと言うと復讐さえ果たせれば、死んだって構わねーんだ』

そして、最後に俊彦は笑って、通信を切った。慌てて美鈴が繋ぐととするが、向こうが完全に切断しているようで、繋がらない。

画面が切り替わる。そこに映っていたのは、鮮やかな蒼のOSフルートが、雨の中を鋼鉄の棒を両手で持ってゆっくりと敵に迫っている姿だった。

そして、フルートが駆ける。敵のOSと同格の動きをしながら、フルートは敵のOSを無視して背後を飛ぶ武装ヘリに肉薄する。

ガトリング砲の音と、ミサイルの爆発音。それに加えて、灰色のOSが動く際に地面が揺れ、その振動が響き渡る。

だが信じられないことに、フルートは敵の武装ヘリを墜落させた。火を噴きながら、武装ヘリが落下していく。

「おお……!!」

「凄い……!!」

その様子を見ていた者たちが、感嘆の声を上げる。そんな中、誰も気付いていなかったが、美鈴だけはノートパソコンの画面を見ながら厳しい表情をしていた。

「同調率六八%……予想よりも高い。でも、相手の同調率は八十を超えてる……このままじゃあ……」

キーボードを叩く手を一切止めずに、美鈴は呟く。だが、彼女は逃げられない。生み出した者として。

そして、和人が動く。

「……若造が」

呟き、胸についた勲章をすべて取り去り、無造作に投げ捨てる。

そして、軍服の上着を脱ぐと和人は美鈴に声をかけた。

「俺の レイヴン は、基地にあるか？」

「え……あ、はい。自衛隊のOSはいつでも出動できるように整備してありますけど……」

指を止め、美鈴が言う。和人は頷いた。そして、軍服の上着を脱ぎ捨てる。

「俺もいい加減、我慢の限界だったんでな。議員の方々は生死不明。更に、一級厳戒態勢に入った今なら、俺がすべての決定権を持っている」

間違っているのだと思う。感情に流されていることは、自覚している。

だがそれでも、止まる気はもう、和人にはなかった。

呆然とする司令室の者たち。それに背を向け、和人が出て行くこととした時だった。

『初めまして。私は、皆様の敵です』

そんな声が、響き渡った。

そこには、まだ若い女性が微笑みながら映っていた。

『俺は、特殊部隊末席、樋浦宗次だ！ 校内に残っている者たち全員に告げる！ 今すぐ速やかに校舎を離れ、避難を！ 死にたくなければ、従ってくれ！』

職員室に備え付けられた、全校放送用のマイク。それを右手に持ち、職員室の数ある机の内の一つに身を隠しながら、宗次は全力で叫んだ。

学校という施設は、避難場所に設定される。今現在、街の各地が爆破され、街は混乱に陥っている。その混乱が少しでも落ち着いたら、学校が避難場所になる。おそらく、この学校にも人が集まるだろう。

しかし、この学校に避難させてはいけない。
ここには、爆弾よりも危険な存在がいる。

銃声が鳴り響く。宗次は床を転がりながらその場所を離れ、マイクを投げ捨てた。もう、放送をしている余裕はない。

宗次がいた場所は、完全に瓦礫の山と化していた。盾など通用しない、防弾チョッキでさえ貫く威力の銃。それが、デザート・イーグルと呼ばれる銃の力だ。

宗次は今、漆黒の特別製のコートで身を包み、全身を黒で固めている。黒であることは宗次の趣味。無論、コートと下に着ている戦闘衣には防弾チョッキ並の防御力が約束されている。しかし、その服を身に纏っていても宗次は正面からやりあうことはできなかった。

銃撃が止む。職員室と呼ばれていた部屋はもう、原形を留めていなかった。

「はっ、ご苦労なことだ。自分一人の面倒も見切れないような奴らの命まで気にするなんて、聖人君子かよ？」

宗次が今向かい合うべき敵が、苛立たしげに吐き捨てる。最初はまだ理性的な雰囲気があったのだが、今はもう感情のままにいや、衝動のままに動いているように思えた。

光琳と名乗ったその青年に、宗次は物陰から言葉を紡ぐ。

「お前たちと戦うのが、俺の仕事だ。戦えない奴の命を守るのもな」「ククツ、聖人君子の次は正義の味方気取りかよ？俺と同種のくせによ」

カチャリと、光琳が弾倉を入れ替える音が小さく響く。宗次は、腰に装備してある複数の武器からショットガンを取り出すと、引き金を引いた。

普通の拳銃とはまた違った銃声が響く。そしてその弾丸は、光琳ではなく彼のすぐ前にあつた机へと直撃した。

「ああっ？」

砕け散った机が、一時的に煙幕の役割を果たす。光琳は目の前に向かって反射敵に銃を乱射した。

巻き上がる粉塵と、響き渡る銃声。それが、宗次の姿を覆い隠す。

「誰が」

粉塵を身に纏い、あろうことか正面から宗次は光琳に肉薄する。

「同種だ！」

踏み込み、至近距離から腰の回転を加えた肘を叩き込む。光琳の体が、僅かに揺らいだ。

宗次は更に、脇腹へと左足の回し蹴りを叩き込む。光琳はたまらず職員室の扉を巻き込んで廊下へと投げ出された。

宗次はそれを追い、ショットガンを腰に収めると拳銃を二丁抜き、構えた。

「逃がさん」

「上等お！」

銃声が再び鳴り響く。流石に威力に差があるため、宗次は職員室のほうに身を潜める。その隙に、光琳は走り出した。

「くっ！」

宗次は、それを追う。だが、階段に差し掛かったところで、コツンという音が眼前から聞こえてきた。

そこからの宗次の判断は、流石に戦場を渡り歩いてきただけのこととはあっただろう。反射神経だけで、宗次は背後へと飛んだ。

瞬間、巨大な爆発が起こった。硝子が割れ、階段が砕かれ、廊下の一角が原形を失う。

「なんて無茶を……」

硝子で切ったことよって額から流れてくる血を拭い、宗次は唇を噛み締める。今のは手榴弾だ。大したダメージはないが、道を消されてしまった。

(回り道するしかない……！)

即座にそう判断し、宗次は駆け出す。ここは部活棟。爆発が起って、銃声が響いているこの状況だ。生徒は少ないはず。

宗次は走りながらそんなことを考えた。しかし、あることを思い出す。

「待て……部活棟……？」

知らず、足が止まっていた。この学校は部活動に力を入れていない。文化部など、片手の指で数えられるほどだ。そして、そのほとんどが真面目に活動などしていない。

だが、その中で。真面目に活動しているであろう、部活、が

「千里おおおおっ！」

美術部。宗次の友達が所属するその部活。この学校の文化部の中で唯一真面目に活動しているその部活動。

この棟の三階。今、光琳が上がって行った階段の先。一番奥にある部屋。

美術室と呼ばれるその部屋が、宗次の脳裏に浮かぶ。

「くそっ、たれがああああっ！」

宗次は、窓を割って雨の降る外へと転がり出た。

……

『初めまして。私は、皆様の敵です。名前を名乗ることのできぬご無礼、お許しください。』

本日は、《未知》^{アンノウン}の指導者である私自ら日本中の方々にお伝えしたいことがあり、こうして日本中の回線を一時的に乗っ取らせていただきます。ご安心を。所詮は数分のことですので。

……さて、ではまず、私たちの目的についてお話ししましょう。おそらく、疑問に思われている方も多はずです。私たちは、暴力に日本の再生を謳いながら、世にいう一般人を躊躇なく巻き込み、その命を奪っています。その理由からお話ししましょう。

よくある娯楽小説やドラマでは、暴力による変革の対象として命を狙われるのは大抵、国を動かす議員や警察の上層部です。その理由は、彼らこそがこの国の政治と法律を取り仕切っているから。私たちもそう思います。だからこそ、彼らも私たちの攻撃対象であることは間違いありません。現に、先程相原総理を私は殺害しましたが、ですが、それだけでは足りません。敢えて言いましょう。私たちの敵は、この国を腐らせ、数え切れない悲劇を生み出したのは、他ならない日本国民の皆様。あなたがたです。

この国は、実質はどうあれ民主主義、平等主義を謳っています。つまり、議員を選ぶのは国の民。ならば、責任は国民の皆様にある。私はそう考えます。

無論 納得できない方も数多くいるでしょう。ですが、それが事実です。あの議員が悪い。あの政治家が悪い。ならば、その議員や政治家を選んだのは誰ですか？ この国では、選挙を経てでしか議員になれないというのに。

そして、その選挙にさえ参加していない方々。皆様はおそらく、自分たちは関係ないと考えているのでしょう。ですが、それは間違いであると申し上げておきます。私たちの敵は、むしろそういった無関心な方々なのですから。

私たちは、その無関心さによって傷つけられました。自分の目ではなく、他人の目で見たものだけを一方的に信じ込み、罪なき者さえも平気で晒し者にする。そのようなことを、私は絶対に許せません。

だからこそ、私はこの場を借りて正式に宣戦布告をいたしました。う。一年前に私たちが初めて為したことです。あれこそが日本への宣戦布告のつもりでしたが、どうやら一部の方々しかそれを認識していなかったようですからね。

だから、ここで私は宣言します。

私たちの敵は、今の日本という国を腐らせた原因である国民すべてです。

平等主義。平和主義。そのような幻想は見飽きました。皆様の命を守るために戦っている中学生の少年を社会の粹組みから露骨に排除する行為といい、日本としての矜持だけでなく、人としての仁義さえも失ったあなたたちに、同情の余地などありません。

それでももし、生き延びたいと願うなら。

自分自身を見つめ直し、自らのあり方と自国の行く末を本気で考えてください。

それでは、日本の皆様。御機嫌よう』

.....

「どうかな？ 成功したかい？」

武装ヘリ アーサー から緊急脱出する際に鏡花を庇い、決して浅くない傷を負うことになった健太郎が、応急処置だけを為された体を無理に動かし、自らと同じように輸送ヘリの中で巨大なコンピュータに向かって雄平に問いかける。

雄平は、力強く頷いた。

「完璧さね。衛星放送のほうにも割り込んでおきましたから、おそらくですけど国連の《エイジス》にも届いていると思います」
「そうか。……良かった」

心から安堵したようにそう呟き、健太郎は背もたれに全体重を預ける。息が荒いところを見ると、かなり無茶をしていたようだ。

雄平は、キーボードを叩いて事後処理をしながら健太郎に言葉を紡ぐ。

「爆発する機体から脱出したんです。怪我は重いはずですよ。雅さんに治療の続きをしてもらってきてください」

「……いや、そういうわけにもいかないよ。これが僕の仕事だ。負傷ぐらいで休んではいられない」

そう言うと、健太郎は身を起こし、再びコンピュータに向かった。彼は雄平のように天才的な頭脳を持っているわけでもなければ、銃火器の扱いが上手いわけでも、戦闘能力が高いわけでもない。ただ少し器用なだけだ。

そんな彼が、天才揃いと謳われる《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の中に籍を置く理由。それは、己を知っているからだ。

天才ではないから、努力をする。足りないから、知識を手に入れる。

そして、己にできることを理解しているから、失敗がない。

特別であることを人は本能的に望む。だが彼は、本能を理性で捻じ伏せた。自ら、絶対的な普遍であることを望んだ。

そして、それこそが特別なこと。

だから、彼はここにいる。

「できることが限られているからこそ、できることをやるんだよ。それが、僕のような凡人ができる唯一のことだからね」

体が辛いだろうに、強い光を瞳に宿して健太郎は言う。雄平は、はあとため息を吐いた。

「だから、治療してくださいって言ってるんですよ。この後、撤退する時に健太郎さんの力が必要なんですから。あんたが倒れたら、誰がこの輸送へり操縦するんですか？」

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第十三番、《サクセサー後継者》おおがみせいしん大神清心。

テロ組織《アンノウン未知》の技術開発責任者でもある彼が作ったこの名の無い輸送へりは、OSを二機収容できるだけの格納庫を持ち、今二人がいる情報機器を集めた部屋や操縦室を含めて十近くの部屋がある。武器も装備してあるので、最早一種の要塞だ。

だが、そんな特殊な造りをしているためか、操縦はかなり難しい。そのため、操れるのは雄平と健太郎しかない。そして雄平は指揮官だ。撤退する際には状況を把握し、指示を出さねばならない。困難な操縦だけに集中はできない。

それを聞き、健太郎は少しだけ笑った。

「優しいな、キミは。……うん、それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

そう言うと、健太郎は立ち上がってふらつく体で部屋を出て行った。雄平は、その背中に「ごゆっくり」という言葉を送ると、再び

自分の仕事に集中を始める。

と、そこに健太郎と入れ替わるように白衣を着た一人の青年が入ってきた。黒髪でありながら、イギリス人とのクォーターであるために碧眼を持つ青年　大神清心だ。

「今高橋が出て行ったようだが、何かあったのか？　高岡兄」

「何もありませんよ。ある程度仕事が済んだので、治療のために下がってもらったんです。健太郎さんにはこの後、大事な仕事がありますし」

「そうか。なら問題はないな」

そう言っつて、清心は近くの椅子に座る。雄平は事後処理を終え、データを閉じると清心の方へ振り返った。

「それよりも、あれは一体なんですか？」

「あれというところ……アーサー　が敵の　フルート　とかいうOSに一瞬で撃墜されたさっきのことか？」

白衣のポケットから栄養ドリンクを取り出し、その蓋を開けながら清心が応じる。雄平はキーボードを見ずに外部へと映像を繋ぎながら頷いた。

「アーサー　はOSと戦うための兵器として造られたものはず。それがあんなに簡単に潰されるとはどういうことか、説明して欲しいさね」

「説明か。構わんが……不味いなこの栄養ドリンク」

「だったら美味しいの買えばいいと思いますけど」

「美味しい栄養ドリンクは認めん」

言いながら、清心は栄養ドリンクを飲み干した。おそらくこの人

物、まともな食事など週間単位で口にしていないに違いない。開発を始めると三日四日を寝ずに栄養ドリンクで過ごすことなど普通なのだ。

雅などは何度も注意しているが、聞き入れる様子がないので最近 は諦めているぐらいだ。さりげなく雄平に相談を持ちかけて来ているくらいである。

まあ、それはさておき。

空になった栄養ドリンクの蓋を閉め、白衣のポケットに入れると清心は口を開いた。

「で、何を聞きたい？」

「片っ端から、全部です」

そう言っつて、雄平はモニターへと視線を向ける。雄平と健太郎の二人がいた時は文字の配列だけを映していたそれが、戦場を映し出した。

そこに映っているのは、会話を傍受して機体名を先程聞いたフルートと、灰色のOS 《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》アンソウン第十一番、《ブ鉄砲玉》細木康太が駆る灰色の《未知》で最も分厚い装甲を装備し、最も重い城砦の如きOS、アンソウン回天。

その二つが、フルート回天は素手で、フルートは鋼の棒を用いてぶつかりあっている。

清心は、その映像を真剣に見ている。傍から見れば気だるそうにしているようにしか見えないが、雄平にはわかる。目が、笑っていない。

「片っ端から、か」

映像からは一瞬たりとも視線を逸らさぬまま、清心は呟く。そして、その状態で言葉を紡ぎ始めた。

「まず アーサー なんだが……あれは間違いなくOSと互角以上に戦える兵器だ。それは間違いない。高橋と丹羽のコンビならさっきの クラフト を三機叩き潰した時みたいに圧倒できる」

「ですが、敵の フルート とかいうOSに一瞬で蹴散らされましたよ」

「高岡兄。お前ならもう察しがついているはずだ。わからない振りはやめろ」

やはり視線は映像から逸らさず、清心は言う。雄平は口を閉ざした。その雄平に、清心が少しずつ言葉を紡いでいく。

「ただし、アーサー が通用するのはあくまで量産型のOSだけだ。いかに性能を格段に上げたとはいえ、アーサー はあくまで武装ヘリ。現代最強の兵器とは、元々のレベルが違う。だから、俺は アーサー に反応速度を求めた」

「……………」

「量産型は操縦桿を持って操作するため、どうしてもロスが出る。まあ、例えばれば人体だ。こうしよう、ああしようと思ってからの行動にはコンマ数秒の時間差が現れる。そしてその人間が操縦桿を握るんだ。一秒前後のズレがどうしても出てしまう。」

だから、俺はその一秒の隙を衝く速さを求めた。アーサーはその結論だ。アクションからアクションに移るまでの差。それをパイロットの反応速度と機体の反応速度で僅かに上回る。それがアーサーの秘密だ。まあ、差といってもコンマ数秒ってところだが」

平然と、清心はとんでもないことを言う。反応速度を高めるとい

うことは、相応のリスクがあるのだ。

事実、アーサーは操縦桿が少し風で揺れただけで機体が大きく揺れ動く。じゃじゃ馬という表現さえ似合わないような兵器だ。

ああ、そうか。と雄平は思う。

唯一、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の中で国を憎む理由を持たぬ存在。何故、こちら側にいるのか気になっていたが……

(パーツが……パイロットがいるからか)

おそらく、本人に言っても頷くだろう。高度な道具はそれを扱える人間がいて初めて意味を為す。おそらくそのために、大神清心は妹の敵になったのだろう。

「……だが、あのフルートというOSは普通とは違う。俺が造る兵器はパイロットの質にこそ注文をつけるが、あくまで『パイロットが操縦する』ことを考えてる。しかし、あれは違う。あれは、『道具が人間を使う』『兵器だ』

「どういうことですか？」

「説明もしたくない。俺の母親が、十七年前にとあるバケモノを止めるために生み出したシステム。俺は母親から妹と共にOSのデータを受け継いだ時にあのシステムのデータを全部消去した。見たくもなかった。母を壊したシステムなんて」

そして、そこで初めて清心は映像から視線を外した。

「なのにあいつは、使ったんだな」

天井を見上げ、清心が呟く。

「人を殺すのが兵器の本分だ。それは理解してる。でもな、人を兵器にするのは間違っている。そんなことも、わからないのか。あいつは……」

雄平は、何も言えなかった。

四

右脇腹が痛い。温かい感触が右脇腹から足へ向かって伝っている。

「……………ッ！」

気を抜けば、倒れてしまいそうな痛みが体を襲う。だがそれを、宗次は何とか歯を食い縛って耐え続ける。

そしてその正面に立つ光琳は、嘲るような笑みを浮かべている。

「雨で滑る校舎の壁をつたって三階に到達。そのまま窓を粉碎してこの部屋に入り、オレの先回りしたのは良かったぜ。でも、荷物を抱えた奴にやられるほど、オレは甘くない」

ククッ、といういかにも楽しそうな笑みを零し、光琳は言う。宗次は、言葉を返す余裕がなかった。全神経を張り詰めなければ、倒れてしまいそうでさえあった。

「宗次……」

美術室の物陰に隠れ、息を殺している数人の生徒たち　その中

の一人、千里が宗次の名前を呼ぶ。その表情には、宗次を氣遣う色しか浮かんでいなかった。

ことは、数分前に遡る。

階段を破壊され、遠回りをするしかないと思った宗次は、光琳が向かった先に千里がいることに気付いた。そして、ここからが常軌を逸した行動なのだが、彼は雨で濡れた校舎の外壁を窓と外壁の配水管を利用してよじ登り、美術室の窓を蹴り破って突入した。

そして、ちょうどその時に光琳が現れ、光琳はあるうことが自分の一番近くにいた女子生徒　千里に銃口を向けた。

宗次は咆哮し、千里に飛びついた。その際に右脇腹を撃ち抜かれたが、その代わりに千里を含めた部員たちを銃で牽制している間に物陰に隠すことができた。

そして、今の状況に至る。

片方は、特別製のコートさえも撃ち抜く銃弾で脇腹を穿たれており。

片方は、無傷で笑っている。

勝負はもう、ついたも同然だ。宗次は意識を保つことさえ難しい状況に追い込まれている。しかし、彼の目はまだ死んでいない。

「しっかし、お前も無茶する野郎だなオイ。そいつら庇う理由なんざ無いだろ？ オレと同種のお前だ。殺戮を本能とするお前だ。『誰か』と共に歩むことなんてできるはずがない」

「そんな……ことは、ない」

震える手で、右手の銃だけを持ち上げ、宗次は言う。血を吐いたら、少しだけ呼吸が楽になった。

「千里は、声をかけてくれた。ただ……それだけだ。本当にそれだけだったけど……俺は、救われた。踏み外さずに、済んだ」

そして、宗次が左手を上げる。両手に持つ銃の銃口が、しっかりと光琳を狙う。

光琳は、笑った。

「お前、何人殺したよ？」

宗次は答えない。ただ沈黙する。その宗次に、尚も光琳は続けた。

「ほらみる、覚えてないだろ？ オレだって覚えてない。当たり前だ。狂人がいちいち自分がしたことを覚えてるわけがないもんな。狂人がイカレたことすんのは当たり前だ。だからオレは人を殺した。殺し続けた！」

お前らは狂人ってのは高笑いして暴走する潤平みたいなのを指し示すとか思ってるみたいだけどよ、そりゃあ大きな間違いだ！ 狂人とは何かに狂った者！ そして、そこに善悪なんて単純な秤は存在しない！ 何故なら！ 狂人に常識は通用しないからだ！

そして、名も無き一人の狂人だったオレに、世界は名をくれた！ 悪鬼。そう、悪鬼だよ！ 実に的を得た名前だ！ あまりにもオレは嬉しくて、オレは期待に込めてやったよ！ 悪鬼は人の敵だ。なら鬼らしく、人を殺しまくらないとなあ？

あつ、はははははははっ！ わかってるぜ、《殺戮兵器》^{キリング・ウェポン}。お前だつて人殺しに溺れたいんだ。狂いたいんだ！

ああ、わかってる……！ お前と同種のオレだけが、わかってやれる…………！

徐々に、光琳が危険な空気を帯び始める。美術室の中に、危険な気配が漂い始める。

宗次は、何も口にしなかった。ただ、光琳の言葉はすべて聞いていた。

そして、光琳が触れてはいけないものに触れてしまう。

「ああ、そうか。これは迂闊だった。お前を繋ぎ止めてるもんがあるな？ それを殺してやりやあい。確か、そこに隠れてるお嬢ちゃんだったか？ お前が、脇腹貫かれてでも守ろうとしたのはよ」

宗次の眉が、微かに動く。だが光琳はそれに気付かず、笑いながら言葉を続けた。

「だったら、その原因を取り除いてやるぜ。そうすれば、お前は完全になれる。完全な殺戮兵器として、殺しに溺れられる」

あははは、と悪鬼は笑った。

だが、その笑みは一瞬で凍りついた。

「誰が」
「え？」

いつ引き金を引いたのか。宗次の右手にある銃の銃口が煙を吹き、光琳の左肩が撃ち抜かれていた。

光琳には、視えない。無表情で、視界から一瞬で消えた宗次の姿が、視えなかった。

樋浦宗次の 《殺戮兵器》^{キリング・ウエポン}の力は、常識を凌駕している。しかし、《悪鬼》^{デーモン}として同格の力を持っているはずだ。しかし、その動体視力を持ってさえ、宗次の姿を捉えることは愚か、視ることさえで

きなかった。

鬼の肩を貫いた弾丸を吐き出した銃口は、紫煙を吐き出したままに容赦なくその額に突きつけられる。

「誰を、殺すだと？」

引き金が引かれる。しかし、生存本能とでもいうべきものが光琳の体に働いた。半ば反射敵に顔を背けた光琳は、頬を銃弾で切り裂かれるだけに被害を抑えた。

だが、宗次は止まらない。額に向けていた銃とは別。左手の銃の引き金を、容赦なく引いた。

放たれた弾丸が、光琳の腹部に直撃する。しかし、防弾チョッキを着ているのか銃弾は致命傷となりえない。

舌打ち。宗次はその動作と共に、銃口の向きを変えた。

「ほら、見てみる」

それと同時に、懐から手榴弾を取り出した光琳は呟いた。

「お前は、晒ってる」

そして、手榴弾のピンが抜かれる。宗次は、唇を噛むと引き金を引くの止め、光琳に全力で裏拳を叩き込んだ。

光琳の顔の骨が折れる感触が宗次の右手に伝わる。だが宗次はそれをすぐに意識から切り捨てると、目の前の手榴弾を左手で弾き飛ばした。

光琳と手榴弾が、美術室の窓を割って外に放り出される。

瞬間　爆発が起こった。

爆風と衝撃が室内を揺らす。宗次は、倒れそうになる体を踏み止まらせた。

窓の外から、ドサリという音が聞こえた。宗次は一度息を吐き、窓に向かって歩き出す。その途中で、弾倉の入れ替えは済ませておく。

カシャン、カシャンと床に空になった弾倉が転がる。

宗次は、痛む体を引き摺って窓へとゆっくりと歩いていった。

その口元が例えようもなく歪んでいることに、宗次は気付いていた。

気付いて、しまっていた。

|| || || || ||

……幻想も、ここで終わりか。

三階から落下し、体を打ちつけて気を失っている光琳の側で、雨の降る空を見上げながらサクラは心の中で小さく呟いた。その頭には、宗次から贈られたバンダナがある。

できれば、もう少し長くあの男と共に普通の生活を送ってみたかった。

「やはり、夢は泡沫か。僅かに二日。久遠のように短く、刹那のように長い時間だった」

「姫君」

そのサクラの背後に、一人の女性が音もなく現れた。文字通り、湧いて出たような出現。だが、サクラは特に驚くこともない。いつものことだ。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第十番、《アサシネイト あらがみいおり凶刃》荒神伊織。

音無き暗殺者である彼女がこうして、突然現れるのはいつものことだ。

「我らの主君がお待ちです。戦場に来てください。 トウーランド
ツト もあと数分と待たずに到着します」

「よく、私がここにいとわかつたな？」

「主の？予感？です。我らの敵がいるところへ、姫君がおられると
「敵、か」

サクラは微笑んだ。敵。そんなことは最初からわかっていたことだ。彼が敵であり、いずれ殺し合いをしなければならぬ間柄だということとは、理解していたはずだ。

だがそれでも、サクラは未だ認められなかった。理性ではない。感情でだ。

彼が、平気で人を殺す外道であればよかつたのかもしれない。そうであれば、出会った時に躊躇なく切り捨てられたかもしれない。

でも、違った。

彼は、優しくかった。いつも通りの気まぐれで抜け出して、雨の中を裸足で歩いていて自分。その自分に、手を差し伸べてくれた。温かい寝床を貸してくれた。

共に、笑ってくれた。

組織内にいる、気のいい少年とその少年といつも共にいる女性。
あの二人がくれる、明るい温かさとは違う、不器用な温もり。

それを、彼は ……

「……私も単純だな。僅か二日。実質の時間にすれば一日に満たない時間を共に過ごしたただけだというのに、情にほだされている」
「姫君？」

「なんでもない。……銃を貸してくれ。一つでいい」

首を振り、伊織に対してサクラは手を差し出す。伊織は懐から一丁の拳銃を取り出すと、サクラに手渡した。

その銃の動作確認をしながら、サクラは伊織に言葉を紡ぐ。

「トウーランドット はどうやってここに来る？」

「ここまで輸送ヘリで空輸し、地上に降ろす手筈です。飛行ユニットを搭載しておりますので、姫君はそのまま議事堂へ向かってください。私はここに来る際に利用した装甲車で退却しますので、ご心配なく」

「そうか。ならばお前は光琳を連れてその装甲車で今すぐ撤退しろ。あいつの相手は、私がする」

そう言って、サクラは空を見上げる。その視線の先。三階の窓から姿を見せていたのは、《殺戮兵器》^{キリング・ウエポン}と呼ばれる少年だった。

その姿を認めた伊織が、表情を強張らせる。光琳を倒した相手
《悪鬼》^{デーモン}の力を知る彼女は、その事実で初めて戦慄を覚えた。

「しかし、この状況から察するにあの男は《悪鬼》^{デーモン}を一騎討ちで討ち取ったほどの男です。いかに姫君でも、単騎では――」
「大丈夫だ」

きつぱりと、サクラは断言した。その視線は、三階から無表情にこちらを見下ろしている宗次をしっかりと捉えている。

そして、サクラは右手に持った銃を宗次へと向けた。

「いいから、行け」

引き金が引かれる。しかしそれが当たることは当然無く、宗次は一度身を引いた後、三階から飛び降りてきた。銃は、抜いていない。

「行けっ！」

サクラが叫ぶ。伊織はまだ何かを言いたそうだったが、地面に転がって気絶している光琳を担ぎ上げると、走り出した。

そこへは視線を少しも向けず、サクラは宗次を見つめていた。

宗次もまた、サクラを見つめ続けている。

宗次は強い瞳を宿し、サクラは今にも泣きそうな表情をしていた。

五

沈黙が流れる。三階の高さから飛び降りたというのに、宗次がどこかを傷めた様子はない。ただ、今は止まっているが脇腹から流れ出ていた血が、彼の黒いコートと戦闘衣を濡らしていたが。

宗次は、銃を抜かない。サクラも、銃を下げていた。

「お前は、私を恨むのだろうか」

サクラが、寂しさと哀しさをない交ぜにした表情で宗次に言葉を紡ぐ。宗次は、首を横に振った。

「只者ではないことは、わかっていた。物腰。足運び。雰囲気。どう考えても、お前は戦闘訓練を受けた一級の戦士にしか見えなかった」

「そうか。何も言わないから気付いていないのかと思っていたが、違ったようだな」

「信じたく、なかったことだからな」

拳を、握り締める。最初から、出会った時からサクラが普通の少女でないことは気付いていた。しかし、証拠が無いからといって、見て見ぬ振りをしてきた。

いや、見たくなかったのだ。

こうして、自分に銃を向けるこの少女の姿を。僅かな時間を共にしただけ。しかし、この少女が救われる言葉をくれたのは事実だから。

「そして今も、信じたくないのが俺の真実だ」

やはり宗次は、銃を抜かない。もう、確率は限りない百であるというのに、僅かな可能性を信じている。

甘いのだろう。それくらい、宗次とて自覚している。

だがその情こそが、宗次を踏みとどまらせているものだ。先程、宗次が自覚してしまった、己の願望と、根源へ踏み込みそうになる

のを。

(俺は、殺し合いを楽しんでいる)

戦場に出ると必ず感じていた高揚感。心を逸らせるどころか、むしろ冷徹にしていくもの。あれは、喜びだった。

樋浦宗次という人間は、人殺しを喜んでいた。

それも、自分と同じで常識を凌駕したバケモノとの殺し合いを。一成と戦った時も、心が高揚していた。殺し合いを望んでいた。だから、認めてはいけない。

サクラを敵と認めれば。強い敵だと、そう認識してしまえば。

俺は、殺し合いを望んでしまう。

それこそが、先程の外れた男が宗次に残していった置き土産。いつもなら気付く前に終わるはずの殺し合いを長引かせ、宗次に自らが感じている快楽を自覚させた男の。

「そうか」

サクラは、微笑んだ。そこには純粹な温かさしかない。優しい笑みだった。

「お前は優しいな」

そう言って、サクラは銃を投げ捨てる。カシャンと、乾いた音が響いた。

「これでいい。これなら、私たちが殺し合う必要はなくなる」

「……それは、この場だけだ。戦場で向かい合えば、俺たちは殺し

合う」

唇を噛み締めて、宗次は言う。サクラは、彼にとっては友達と認められる数少ない存在だ。だから、望みたくない。望む状況になりたくない。

だが世界は、宗次の願いを許さない。

「そうだな。これは戦争で、私たちは敵同士。向かい合い、殺し合う日が必ず来る。それは運命だ。そしてそれはおそらく、抗うことも変えることもできない」

「その通りだ。だから俺は、お前から聞きたくない」

「だが、私はそれを口にしなければならぬ」

重なり合うことができない、意志と意志。その二つが、ぶつかり合う。

ぶつかり合って、しまう。

サクラが、言葉を紡ぐ。

「私は《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第零番、《無無》イクス。記憶も、名前さえも持たぬ未知なる存在。樋浦宗次。お前の、敵だ」

きつと、この言葉は誰にとっても不幸なもの。

理由を見出せず、組織から離れた少女も。

他者を守ることを糧とし、少女を守るべき人と定めた少年も。

こんな未来は、望んでいなかった。

第三章「ファービドウン・フルート」(後書き)

というわけで、バトルスタート。第二話は、あと二つで終わりです。過去編……榎浦兄弟や《名も無き子供たち》の因果が、少しでも伝われば幸いです。

ご意見、ご感想、お待ちしております。

メッセージなどもお待ちしておりますので、良ければ是非。

ありがとうございました。

第四章「願い」（前書き）

【願い】（Wish）

願うこと。願望。特に、神仏に望みごとを祈ること。

人間が掲げ、望むこと。それは基本的に願う者の主観によって構成され、その者にとっての正義。すなわち、その者にとって絶対的に正しいことであることが多い。また、度を越え過ぎたそれは時に人を不幸にする。

樋浦宗次や島村光琳が根源的に持つ破滅願望に近い殺人願望もこれの究極的な例である。ただし、前者の樋浦宗次が否定しようとしているように、これは生まれつきの宿業であり、本人の意志は関係ない願いと呼べる。

叶う叶わずに関わらず、人は時に『夢』とも呼ばれる願いに縋る。

【サクラ】自由に願うことを否定されれば、自由など存在しなくなる】

第四章「願い」

零

紅のOSが地面へと降り立つ。全身を紅で染め上げた、巨大な薙刀のような武器と飛行ユニットを背負った、冷たい美しさを纏う機体。

その機体を見て、サクラが言葉を紡ぐ。

「トウーランドット。残酷に殺されたとある姫君の復讐を果たすため、自ら冷酷且つ残虐になった姫の名を冠する、私の専用機だ」

「……………」

「これで、お前も納得しただろうか？ 私は、お前の敵だ」

まるで、自らに言い聞かせるように、サクラは言う。宗次は、トウーランドットには目もくれず、サクラを見つめながら言葉を紡いだ。

「そんなもの、証拠になりはしない。俺の敵はこの国の人間を傷つける奴だ。お前はまだ誰からも、奪っていない」

「甘いな。私は《未知》^{アンノウン}の幹部だ。これまでに奪った命は、数え切れないほどにある」

「だが俺は、一度もそれを見ていない。見ていないものを、信用できはしない」

先程までとは違い、迷いのない、ある種の覚悟を決めた口調で宗次は言いきる。サクラは唇を噛んだ。

この少年は、諦めない。諦めてくれない。きっと、自分との争いを避けるために最後まで認めようとしないだろう。

「お前は、笑っていた」

サクラに、宗次は更なる言葉を紡ぐ。

「初めてだと言って、本当に楽しそうに買い物をしていた。あれは、あの笑顔は嘘か？」

「嘘ではない！」

知らず、サクラは声を荒げていた。そのことに気付いてハツとなるが、しかし、それが自分の本心だということに改めて気付く。

樋浦宗次という少年と共に過ごした時間。あれは、ずっと願い続けてきたもの。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の第零番として見られるのではなく、ただ一個人として誰かと笑い合いたい。そんな、ささやかな願い。

あの短い時間だけは、それが叶っていた。
だから、あの時の気持ちは嘘ではない。

「本当に楽しかった。嬉しかった。誰かと並んで、誰かと話しながら買い物をする事など、私は一度も経験したことがなかったからだが」

「だったら、一緒に来い」

サクラの言葉を遮り、宗次が手を差し出した。彼の血に濡れた右手。しかし、確かな温もりを宿したその手を。

「俺もお前も一人きり。ならば、手を取り合っていけば、一人じゃなくなる」

宗次は、微笑んでいた。脇腹の傷は、決して浅くない。今は血が止まっているが、そのようなものは一時的なものだ。動けばおそらくまた血が溢れ出すだろうし、今彼の体を襲っている痛みも尋常なものではないはず。

しかし、それでも彼は笑っている。あの時、彼が名前を名乗り、手を差し出してくれた時のように。

サクラは、ほとんど無意識に手を伸ばしかけた。

しかし。

「ッ！」

サクラが突然手を引っ込め、トゥーランドットの陰に隠れる。その瞬間。

「いたぞ！ 撃て！」

「少年には当てるな！」

慌しい足音と共に、そんな声が聞こえてきた。宗次は弾かれたように振り返る。そこには、警察の突入部隊が控えていた。

その者たちが、銃を構える。そして彼らは、紅のOSに向かって引き金を引いた。

「くそっ！」

宗次は吐き捨て、その場から離れる。無数の銃弾が トウーランドット に当たり、しかしそのボディに傷一つ付けられずに弾かれる。

そして、銃撃が止んだ時。

トウーランドット の目に、銀色の光が宿った。

『OSが動くぞ！ 総員、下がれ！』

それを受け、宗次の後方にいる警察官たちが慌しく行動を始める。宗次は、叫んだ。

『サクラ！』

「これが、今の私たちの立場だ」

外部スピーカーで、サクラは宗次に言葉を届ける。その声は、涙で濡れていた。

「私たちは、敵同士だ。向かい合うことはできても、結局手を取り合うことはできない」

『そんなことはない。出会った時のように、手を取り合うことはできる』

「もう、無理だ。私は、敵としてお前たちの側に顔を知られてしまった。お前の友人のサクラとしてではなく、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第零番、《無》イクスとしてだ。……これが、私たちの運命だった。それだけのことだ」

ヴヴヴヴという振動音を響かせながら、飛行ユニットが稼動し始める。今現在の技術力では精々凡庸へり程度の速度と機動性しか出ないが、サクラのOS トウーランドット に装備されている飛行

ユニットは大神清心の会心の作品で、空中戦ができるぐらいの能力を備えている。

だから、ここから離れることなど造作もない。機体が浮き上がる。心残りは確かにある。だが、どうしようもない。

「宗次。お前との時間は本当に楽しかったぞ。ありがとう」

そして、サクラが飛ぼうとした瞬間だった。

『礼を口にする暇があるなら、涙を拭け』

宗次が、どこか優しい声でそう言った。サクラは、そこで初めて気付く。

頬を、温かいものが伝っていることに。

『涙で曇った言葉で強い言葉を紡いでも、説得力がないな。……確かに、お前と俺の立場からして、そう簡単に手を取り合うことはできないだろう』

微笑みながら、宗次は言葉を紡いでいく。すでに、警官たちの姿はここにはない。OSに生身で相対することはできないため、とつくに退避してしまっていた。

だから、宗次は周囲を気にせずにサクラと向き合うことができている。

宗次は、息を吐くと一言だけ言葉を紡いだ。

『死ぬな』

「え？」

驚きの声を上げるサクラ。そのサクラに、宗次は言葉を紡いだ。

『生きていれば、いつか手を取り合うこともできるだろう。共に戦うこともできるだろう。だから、死ぬな。俺からは、それだけだ。一つ言っておく。俺は、絶対に諦めない』

そう言っ、宗次は トウランドット に、サクラに背を向けて歩き出した。漆黒のコートが、 トウランドット が巻き起す風に揺らされている。

そして、サクラは機体を起動させた。シンクロニティ・システムと呼ばれるあまりにも異質なシステムは、機体と搭乗者を同調させることによつてOSを動かす。

だから、彼女が飛べと念じるだけで機体は空を飛ぶ。要は、体を動かす時とほとんど同じだ。

空を飛ぶ トウランドット 。その内部で、サクラは自らの頭に結んだバンドナに触れていた。

宗次から贈られた、形あるもの。

サクラにとつて、初めての贈り物。

どこか、温かかった。

—

金属がぶつかり、激しく火花が散る。二つのOSが動く度に、微

かに地面が揺れ動く。

「ちっ
」

回し蹴りを放った後、フルートの両手で握った鋼の棒を突き出し、そのまま回転させて叩き付けた。彼 俊彦が自衛隊でOSに乗っていた頃からの得意技だ。大抵のOSであれば、まともに喰らえば機体のどこかが損傷する。場合によっては、そのまま戦闘不能になることさえある。

だが、相手のOS 回天 というらしい。先程外部スピーカーで相手のパイロットがそう言っていた は、ほんの僅かに装甲が欠けただけだった。

「どんだけ硬いんだよ！」

叫びながら、俊彦はフルートに鋼の棒を振るわせた。しかし今度は、それを回天の右掌で受け止められてしまう。

そのまま回天は鋼の棒を握り締めたまま左の拳を作ると、全力でフルートの腹部 コクピットがある場所に拳を叩き込んだ。まともに喰らえば、コクピットを破壊されて俊彦は死ぬかもしれない。

だが、俊彦の判断は早かった。すぐに武器から手を離すと、全力で後方に退避したのだ。避け切れはしなかったが、後方に飛んだおかげでダメージは少ない。

「痛ってー……」

そんな中、俊彦は後退した機体の中で自分の腹を押さえていた。殴られたのは機体だ。彼に直接のダメージはない。

しかし、彼には確かにダメージがあった。シンクロニティ・シス

テム。機体と同調するシステムとは、そういうシステムなのである。

そして、彼の視線の先で 回天 は容赦なく フルートの武器である鋼の棒を両手で押し折った。特別硬く製造されているはずだが、関係ないらしい。

「どんな馬力だよ。しかも腕も足もこっちの二倍ぐらいの太さがあるし、装甲も硬過ぎるし……。どーしろってんだ」

苛立たしげに、俊彦は呟く。何度も攻撃を仕掛けているが、アサルトライフルは装甲を突破できず、通じない。打撃も効かない。唯一の救いがあるとすれば、相手のほうが二十近く同調率が上だというのに速度が同じだということぐらいだ。

ちなみにそれは 回天 が防御力を最優先し、格闘性能を下げることで城皆並の防御力を実現しているからである。シンクロニティ・システムでなければ動くこともままならないだろう。

それに対し、フルート は万能タイプの機体だ。従来型の運動性能の底上げを基本とし、シンクロニティ・システムによる機体反応の速度を上げたものである。宗次が駆る シン というOSには若干劣るが、能力は間違いなくトップクラスのものを有している。

だからこうして戦えているわけだが、向こうにはこちらを倒す馬力があり、こちらには向こうの装甲をぶち破る馬力がない。

「さーて、どうすっかな……」

腕を組み、俊彦はそんなことを呟く。とりあえず力押しでやってみようとノリで通信回線を全部切ってみたため、今更助言を貰うのは何となく格好悪い。

「正直、今の状態じゃどうしようもねーな。馬力が足りん。つーか、七十にも満たない同調率じゃこいつの真価は発揮できねーし」

軽口を叩きながら、しっかりと眼前のOSに対する注意は怠らない。互いに砲撃武器を装備していないので、どうしても戦いは接近戦になる。

そして、その接近戦でこの機体は本来ここまで押される機体ではないはずだった。

大神美鈴から与えられた資料。そこに記されていた機体スペックを見た時、俊彦は自分の目を疑った。単騎で、一個中隊ぐらいは無傷で壊滅させられる。それぐらいの能力を有していたのだ。

そして、その能力を引き出せていないのが現状だ。同調率。シンクロニティ・システムの発動率を示すそれは、文字通りシンクロニティ・システムの力を示す。例えるなら、自分の体をどれだけ上手く扱えるか、というものに近い。

一流の武芸者は、体を鍛えるというより、体を自分の思うとおり動かすことに主眼を置いて鍛錬する。意外と自分の体を動かすというのは難しく、身近なところであれば走り幅跳びの歩幅を合わせるとのさえ素人には難しいというのが例となる。

そして、シンクロニティ・システムの同調率とはつまり、『どれだけOSの力を引き出せるか』という意味を持つ。無論、機体と同調という側面もあり、機体が負ったダメージが同調率の高さに比例してフィードバックするという面もあるのだが。

まあ、要するに。同調率が高ければ高いほど、シンクロニティ・システムを搭載したOSは力を発揮するというわけである。

人間の肉体が、本来ならば鍛えることなどしなくてもトラックを持ち上げるぐらいの筋力を宿しているといわれるように。

要は、どれだけ自分の体を使いこなせるか、という話なのだ。

もつとも、人間の肉体でそんなことができないのは、それをすれば筋肉や骨に重大な傷を負うことになるからだが。

「で、俺じゃあ七割も汲み取れねーってわけだ。はつ。宗次の奴との才能差は理解してるけど、ちょっと妬けるな　　　とと！」

火花が、散る。こちらに突進してきた　回天　の体当たりを、フルートの両腕を交差させて防いだためだ。鈍い衝撃と痛みが、俊彦の両腕に走る。

「つうつ……！　無茶苦茶しやがんな。あつちだつてシンクロニティ・システムを使つてんだ。痛いはずだつてのに……」

体勢を立て直しながら俊彦はそんなことを呟くが、それは間違いである。シンクロニティ・システムによつてもたらされるフィードバックは、あくまで電気信号を受ける靱帯が逆に伝えるものだ。つまり、靱帯が付けられていない装甲などに傷がついても搭乗者には関係ないのである。

もつとも、　回天　のようにシンクロニティ・システム最大の利点である異常な反応速度による機動性を無視して鈍重な装甲をつけるというのは、いささか常識から外れているが。

「まあ、何でもいいか。とりあえず、こいつをぶつ飛ばしてやる」

そして、フルート　が攻勢に移ろうとした時だった。

『そこまで頑張る理由はなんですか？』

「あん？」

外部スピーカーを通して、向こうのパイロットがこちらに話しかけてきた。俊彦は動きを止めた相手と同じようにフルートの動作を止めると、外部スピーカーを開いた。

「いきなりだな、おい」

『当然の質問です。先程、自分たちの主張を頭目が話してくれました。あなたも、OSの中で聞いていたはず』

「あー、はいはい。あれな。確かに聞いてたぜ」

投げやりに俊彦は答える。敵方の主張だ。とりあえず聞いておこうと思って聞いてみたのだが、これが中々。あまりにも馬鹿らしい出し物だった。

「日本国民全員が敵。実に結構。お前らが言うことも理解できる。

でもよ、俺はお前らを許すことができねーんだよ。絶対にな」

『何故ですか？』

「一年前。俺の妹が、お前らに殺されたからだ」

俊彦の表情が、激しい憎悪に染まる。相手のパイロットが、静かに応じた。

『そうでしたか。しかし、それは当然のことですよ。どうせ、あなたの妹も将来キャリア官僚にでもなって楽に暮らしたいとでも考えていたのでしょうか？ その暮らしの下に、どれだけの犠牲がいるか考えもせずに』

「だから、俺はお前らを許せねえんだよ！」

言葉を遮り、俊彦は言った。そこには、聞いている者の身を無糸

件に疎ませる威圧感が込められていた。

「あいつが、あいつがどんだけ苦しい思いをしたのかも！ どれだけ裏で泣いてたかのも！ 何も……何も知らねえくせに！ あいつの未来を奪った！ 俺なんかより、俺みてえな出来損ないなんかよりずっと幸せになれたはずの未来を！」

俊彦が、吠える。その首元で、小さなネックレスが揺れた。

ところどころ、黒く変色した銀色のネックレス。錆びているわけではない。これは、血だ。彼の妹が死ぬ間際につけていたために、彼の妹の血がこびり付いた。

俊彦が、妹が小さい頃に唯一贈ることのできた誕生日プレゼントに。

そして、回天のパイロットは決して口にしてはならぬことを、口にする。

『それが、どうかしましたか？』

俊彦の心が、急速に冷めていった。怒りは度を過ぎると、爆発ではなく鋭くなる。

そして、自らが押しはいけないスイッチを押していることに気が付かず、回天のパイロットは言葉を紡ぐ。

『実にくだららない。家族が殺された？ だからなんですか？ その程度の悲劇一つで、怒る理由がわかりません』

その時、議事堂の側にある輸送ヘリの中で雄平が「馬鹿野郎！」と回天のパイロットに対して叫んでいたことは、一部の者たち

しか知らない。

そして、文字通りその言葉は俊彦からあらゆるものを捨てる覚悟を決めさせた。

「はは……その程度、か。」高説どうも、ありがとう」

思えば、この時既に彼は壊れ始めていたのかもしれない。一年前から続く自責の念。戦わせてくれぬ国に対する苛立ち。すべてが彼を蝕んでいた。

だからきつと、彼はこの時暴走すべくして暴走した。

「シークレット・システム、オープン。モード？ Fruit？
リリース」

そしてそれは、自らを《神》と称する男がそうなるように仕向けたこと。

自衛隊という身分を捨てた彼を勧誘し、わざと戦場に出すことを渋らせ、彼が気付かぬうちに彼のストレスを溜めさせて。

そして、彼を暴走させた。

「コード？ Kamei Toshihiko？
インプット。リ
ベレート」

搭乗者と機体が。

人と機械が一つになるシステム。意志あるものと、意志なきもの。その境界を砕き、人の心さえも壊す狂気のシステムが目覚めます。

十七年前、一人の女性が生み出し。
その心を、喰らったシステムが。

「モード? Forbidden fruit?!」

俊彦を囲む周囲の機器が、目まぐるしく変化する。そして、機体の内部を照らしていた白い光は、紅へと変化した。

俊彦の体に、全身を貫かれたような痛みが走る。思わず、叫びそうになった。

「ッ!」

だが、俊彦は歯を食い縛り、両手で自分の体を抱き締めて耐え忍ぶ。叫んでしまえば、何かが自分の中から消えてしまいそうだった。

壊れてたまるか……!

あいつの……亜矢の敵を討つまで!

そして、蒼い機体はその存在のあり方を変えた。

「……お前らには、死さえも生温い。だがそれしかくれてやるものがねえのなら」

蒼いOSが、身を屈める。そして、愚直に正面から突っ込んでく。

「それでいい。くれてやる」

「素晴らしい！ 実に素晴らしいぞ俊彦くん！ 期待以上だ！」

輸送へりの中で、計器に記されるフルートの数字を見ながら、京一郎は笑った。その側では、雄平が示されている数字を見て絶句し、清心が舌打ちをしていた。

樋浦京一郎は、武器の一つも帯びず《未知》^{アシノツツ}の指導者の前に現れた。そして言葉を交し合うと、勝手に輸送へりの中へと入ってきた。そして、邪魔をしないという名目で雄平と清心がいるこの部屋に来た。

追い出すこともありだったが、雄平としては動向がわかるので下手に遠ざけて向こうと連絡を取られては困ると思い、ここにいさせている。

そして、笑う京一郎に、清心が明らかな嫌悪の色を乗せた言葉をぶつけた。

「一体どこが、何が素晴らしい？ あんな人の尊厳を奪うシステムのどこが？」

京一郎は、清心へと視線を向けると嘲笑うように言葉を紡いだ。

「人の尊厳を奪う？ 今更何を言っているのかな？ 兵器の本分は人を殺すこと。人の命を奪うことこそが、尊厳を奪うという行為だ。その奪う相手が敵から自分に変わっただけ。何一つとして、問題はないよ」

「ふざけるな！ お前は知らないだけだ！ あのシステムで壊された人間が一体どうなるかを！ あんな、あんなものはあってはなら

ない！」

立ち上がり、京一郎に詰め寄りながら清心が怒鳴る。

京一郎は、楽しんでるように口元を歪めたままだ。

「随分と奇麗事を言うね。なら、キミに聞こうか。キミたちは、清廉潔白に戦っているのかな？ 人の尊厳を守り、それこそ大昔の騎士のように、正々堂々戦っているのかい？」

「それは……」

「ありえないさね」

言いよんだ清心に代わって答えたのは、雄平だった。彼は精神と京一郎の方には視線を向けず、冷めた瞳で戦場を見つめている。

「戦争とはそういうもの。卑怯も何もない。人知を超えた殺戮と、理不尽な死と、無限の悲しみが生まれるだけ。失うものは山とあるのに、手に入れられるものはないに等しい。あつたとしても、後悔がそれを手に入れたとは認めない。それが、戦争だ」

「ほう。中々話せるね、高岡雄平くん」

「どうしておれの名前知ってんのか、つてつっこみたいとこだが、まあどうでもいいか。今更あんたの言動に驚くのもどうかと思うし」

そこで、雄平は初めて京一郎の方を見た。その瞳はやはり、冷めている。

京一郎も視線を清心から離し、雄平を見る。

「その口調だと、私と何度も会っているように聞こえるね」

「何度も、ってほどじゃないさね。一度だけだ。あんたとおれは一度だけ出会ってる。六年前に一度だけ、おれがまだまともだった時

に
「……………」

京一郎は眉をひそめる。覚えていないのだろう。まあ、それは仕方がない。あの時の彼の興味は今現在《未知》^{アシノカン}の指導者をしている女性に向けられていたのだから。

それに、言葉を交わすこともしなかった。ただあの時、この男が恐ろしいと心の底から感じたことだけは覚えている。

「あれから六年。おれは人間として大事なものをいくつも失って、変わった自覚がある。けど、あんたは違うさね。六年前のあの日から、あんたから感じる気配は何一つ変わってない。前から聞きたかったんだけどな。あんた」

雄平の瞳が、スツ、と細まる。獲物を見つけた肉食動物のように。

「人間か？」

京一郎は、クスツ、と笑った。

「質問する側が答えを知っている質問は、質問とは言わないよ」「それもそうさね」

雄平が京一郎から視線を外す。

「あなたはおれと同じで、一番大事なものを失ってる。そんなことわかり切ってたな」

「違うよ。一番重要なものだけを、残したんだ」

快樂という感情だけをね　そう付け加え、京一郎は笑った。

雄平も、口元を僅かに綻ばせて笑った。
清心は、二人をまるで怪物でも見るような目で見ていた。

何故、この二人は笑っている？
自分が壊れた人間だと、そう口にしているというのに。

清心は、ただ体を震わせた。

|| || || || ||

地面が揺れ、同時に地面が砕けるほどの衝撃が走る。

「おおおおっ！」

咆哮し、愚直に俊彦はフルートを突進させる。それに気付いた回天は、フルートの拳を装甲を削られながら防ぐと、その頭部にカウンター気味の拳を叩き込んだ。

ぐしゃりという鈍い音が響き、フルートの頭部の半分近くが吹き飛ぶ。コクピットにいる俊彦の頭の右半分に凄まじい激痛が走り、バツン、という音と共に頭部の血管の一つが弾け、そこから血が噴き出してきた。

だが、俊彦は気にしない。仰け反らされた頭を元に戻すと、流れてきた血を舌で舐め取った。

そして、フルートの両手で回天の体を掴むと、信じられない行動に出た。

『なっ

』！

なかった。

心が壊れるとは、正気を失うこと。

壊れかけ、狂っていく心で、俊彦はそれだけは忘れないでいた。だから、せめてこの戦いに勝利するまでは。心を壊される　正気を失うことは、避けなければならない。

「あああああああああああああああああああああああああああああああつ！」

絶叫を続けたまま、俊彦は残された右腕だけで突撃する。フェイントをかけるなどということを考える心は、残されていないかった。

こいつを、殺す。

フルートの右腕が、回天のコクピットを覆う装甲を掴んだ。

そして、その後ろの奴らを殺す。

メキメキという音を立て、装甲が剥がされる。そして、コクピットを覆っていた装甲はすべて取り除かれた。

敵を、全部殺す。

たまらず、回天が蹴りを放ってフルートを弾き飛ばす。

その際に蹴られたコクピット　俊彦にとっての腹部が激しい衝撃を感じたが、口元から僅かに血が零れただけで。彼は少しも気にしなかった。

復讐だ。

狂おしいまでの自分にとっての正当性を掲げながら、俊彦は普通ならもう動くはずのないフルートを立ち上がらせる。そしてまた、フルートは愚直に突っ込んでいく。

死を。苦しき死を。

飛び上がり、フルートは回し蹴りを回天の頭部へと叩き込む。鈍い音と共に、回天の機体が傾いた。

シンデ、シマエ。

フルートが、右腕で拳を作る。空中から、フルートは容赦なくコクピットめがけて拳を叩き込んだ。しかし、OSで最も硬いところなだけはある、少々へこんだだけで破壊はできない。

シネ。

一撃でなければ何撃でも叩き込む。そんな思考が働いたわけではない。ただ本能的に、俊彦は何発も拳を叩き込み始めた。

回天のパイロットは、シンクロニティ・システムが伝える衝撃と痛みで動きが遅れる。だが、容赦なく際限なく続けられる攻撃に意識を持っていかれそうになるのを何とか耐えることしかできなかった。

徐々に、コクピットそのものの装甲が破られていく。あと少しで、回天のパイロットはその命を奪われる。

シネヨ。

恐ろしく簡素に、俊彦はそんなことを呟く。そして、装甲を打ち

破るうと フルーツ が大きく拳を振りかぶった時だった。

ドンッ、という衝撃音。同時に、俊彦の腹部に走る激痛。

「あ……」

呆けた言葉が、漏れる。

コクピットを、一本の巨大な紅の薙刀が背後から貫いていた。

『すまない。その男を殺させるわけには、いかないのな』

フルーツ の背後の空中に浮かぶ紅のOSから響き渡る、涙に濡れた言葉。

次の瞬間、フルーツ は爆砕していた。

三

「待て！ 今のお前は自衛隊基地に出入りすることは禁じられているはずだ！」

「引き返せ！ さもなくば発砲する！」

行政庁の側にある自衛隊基地の入り口。そこで、漆黒のコートを着、血に塗れた人間兵器は自衛隊の隊員たちに囲まれていた。

だが、宗次の方は恐怖など微塵も感じておらず。

むしろ、三十を数えるであろう自衛隊員たちが怯えていた。

「五月蠅い」

宗次からその言葉が発せられた瞬間、彼以外の人間は全員、誰一人の例外なく震えた。純粹な殺気。戦場を経験したことのない彼らにとって、それは恐怖でしかなかった。

「お前たちはわかつているのか？」

宗次が、言葉を紡いでいく。普段、彼は相手が誰であつても

京一郎は例外 年上であれば、苦手ではあるが敬語を使う。しかし、今の彼にそんな余裕はなかった。

「今戦っているのはお前たちの元同僚だ。たった一人で《名も無きネムレス子供たち》・チルドレンが駆るOSに戦いを挑んでいる。あの場には、他の《名も無き子供たち》・チルドレンもいる。手を伸ばせば届く場所で、もう自衛隊員ではない者が戦場に出ているんだぞ。それを何とも思わないのか？」

宗次の口調は、淡々としている。だが、だからこそ彼らの心へ染み込んでいく。

「お前たちの仕事は何だ？ 国を守ることじゃないのか？ 国とは、人だ。国民のことだ。今の俊彦さんは、その国民だ。お前たちが銃を向けるべき相手は、本当に俺で正しいのか？ 国を守るなんて大層なことは言わない。ただ俺は、俊彦さんを助けに行こうと思つている」

宗次が、一步前に歩み出た。自衛隊員たちは、手に持った銃を反射的に構えた。

向けられる、三十以上の銃口。いかに樋浦宗次とはいえ、引き金を引かれれば死ぬのは当然の状況。だが彼は、少しも臆していなかった。

向けられる三十以上の意志に、たった一人の意志で打ち勝つていった。

「出てはいけないという命令？ 知ったことじゃない。お前たちはこう思っているはずだ。『許可が出れば戦える。許可さえあれば』と。だがそんなもの、ただの言い訳だ。戦争が、戦場で殺し合うことが恐いだけなんじゃないのか？」

その言葉を聞き、何人かが明らかかな怒りの表情を向けて銃を握る手に力を込める。宗次はその内の一人のところまで歩み寄ると、目の前に立った。身長は本来なら中学生である宗次よりも、向こうの方が高い。だがその自衛隊員には、宗次が見た目よりも遥かに大きく見えた。

「撃てばいい」

宗次はやはり淡々と、言葉を紡いだ。

「本当に戦場で人を殺す覚悟があるのなら、俺を撃てばいい。安心しろ。俺は今まで何百人と殺してきた人間だ。殺人鬼を殺したところで、それは殺人にはならない。人殺しの鬼を殺すことのどこにも、罪などありはしないからな」

宗次の目の前にいる隊員は、震えている。宗次は、吠えた。

「撃て！」

そして、それに驚いた隊員は本当に引き金を引いた。吐き出された銃弾が、掃除の腹を撃ち抜き、貫通する。

「がっ……ぐっ……！」

襲ってきた衝撃と痛みにも、意識を持っていかれそうになる。だが、元々光琳から受けていた銃弾のせいで貧血に近い状態になっていたので、痛みはすぐに感じなくなった。

それが危険な状態だということは彼自身、身をもって知っていたが、止まることはできなかった。

「どっ、した……？」

口の中に溢れてくる血を吐き出して、宗次は言葉を紡ぐ。

「俺は、死んでいないぞ……。殺す気があるのなら、早く、殺せ……」

撃ち抜かれた腹を押さえながら、口元から血を滴らせながらそう口にする宗次の姿は、壮絶だった。

「あ……あああ……」

宗次を撃った隊員が、震えながら銃を落とす。他の隊員たちも、銃を取り落とした。

目の前にいる、僅か十五の少年。本来なら、受験だといって勉強して、友達と騒いでいるはずの少年。

その少年が見せる、常軌を逸した覚悟に、全員が恐怖していた。

宗次は血を吐き出し、歯を食い縛り、いつもの淡々とした口調で言葉を紡ぐ。

「殺す覚悟がないのなら、戦場に出るな。そしてそれを、誰かのせいにするな。戦おうと思えば、規律を破って戦えばよかった。それは決して、できないことじゃなかったはずだ。よく、覚えておけ。この戦いが、ここまで大きくなったのは、間違いなく、この国自身の、せいだ」

最後の方は、言葉が途切れ途切れになってしまった。もう一度齒を食い縛ると、宗次は畳み掛けるように言葉を紡ぎ続ける。

「俺は、この国が苦手だ。でも、この国には俺にとっては大事な人が、少ないけれど確かにいる。情けない話だが、俺が我武者羅になつて戦えば、みんなが死ななくてもよくなるんじゃないかと、そう思う。だから、俺は、戦う」

それが、サクラに出会い、周囲を見回して得た結論。

自分は、幸福だ。周りに、みんながいてくれる。なら、そのみんなを守るために戦おうと思った。純粹に、そう思った。

そして、そのみんなの中に、俊彦がいる。

だから、樋浦宗次は、先程街角で流れていたニュースで彼が戦っていると聞き、ここまで来たのだ。

「戦えないことを、責めはしない。だが、だつたら邪魔をするな。俺は、戦場へ行く」

体を引き摺りながら、宗次はゆっくりと歩を進める。

徐々に、隊員たちの列が割れていく。宗次を送り出すように。そして、宗次は基地の内部へ歩いていく。血を滴らせながら。

そして、満身創痍の体でどうやって辿り着けたのか。宗次は、OSの格納庫に辿り着く。しかし、そこには先客が待っていた。

「宗次さん……！」

表情を強張らせ、大神美鈴は驚きと悲しみをない交ぜにした表情を作る。そして、その隣に立つ男が厳しい表情を作った。

「樋浦宗次。どうやって……いや、聞く必要はないか」

そう言って、その男 真田和人は懐から銃を取り出した。その銃口は、宗次に向かって真っ直ぐに向けられている。

「どういう、つもりだ？ 俺は、俊彦さんを」

「亀井俊彦が搭乗したOS フルーツ は、突如現れた紅のOSによつて破壊された」

「ッ！」

宗次の言葉を遮って和人が口にした言葉に、宗次は言葉を返すことができず愕然とする。和人の隣では、美鈴が俯いていた。

「亀井俊彦の生死は不明。 回天 と名付けられているらしい灰色のOSは戦闘不能にまで追い込んだが、紅のOSには傷一つ付いていない。すでに 回天 は奴らの輸送へりに収納され、今にも奴らは撤退しようとしている」

淡々と言い切る和人。宗次は、怒鳴るように言った。

「なんだそれは！ 何もしないで、見逃すつもりか！」

「そんなわけがないだろう。今からOS クラフト 十一機とレイヴン 一機の部隊による紅のOSとの戦闘を行う」

「だったら、俺も」

パン、という銃声が響いた。宗次の体に、違和感が走る。徐々に体から力が抜け、自然と膝をついてしまう。

「あ……これ……？」

「麻醉弾だ。死に損ないの体をしている奴をOSに乗せて戦場に送り出せるわけがないだろう。休め。どんな結果になろうと、お前が目を覚ます時にはすべてが終わっている」

納得できなかった。しかし、体は動かない。休む理由を与えられた体は、急速に力を失っていく。

自分の体に触れるものがあつた。おそらく、救護班だろう。ここは基地内。応急処置の手段ぐらいいくらでも揃っている。

「真田大佐！ 出撃準備、整いました！」

「全機、すぐにでも出動可能です！」

「そうか。なら、今すぐに出動するぞ。あの若造の生き様を、無駄にはしない」

『はっ！』

そして、慌しい足音が響き始める。宗次は徐々に遠くなっていくそれを、薄れていく意識の中で聞いていた。

体も、意識も、眠ろうとしている。

宗次は、声にならない声で呟いた。

戦わせてくれ。

撤退の準備が始まっている。康太が駆っており、先程の戦いでロボロになったOS 回天 は輸送ヘリの中へと運び込まれ、パイロットである康太自身もシンクロロニティ・システムによるダメージの治療を受けている。

その様子を紅のOS トウランドット の中でぼんやりと、サクラは見つめている。もう、涙は流れていない。

雨を全身で受け止める トウランドット 。そのコクピットに、通信が入った。

『お帰り、リーダー』

「……雄平」

そこには、微笑を浮かべている仲間の一人が映っていた。だがサクラは、どこか悲しい表情のまま、その微笑に応えることはできない。

『今までどこにいたのかとか、どうしてそんな表情してんのかとか聞きたいことは色々あるんだが、まあいいさね。とりあえず、今はここから撤退することが一番重要だ』

「そうだな。……もう、ここにいる理由はない」

呟くように言葉を紡ぐ。その言葉に複数の意味が込められていることを、雄平は感じとっていたが、彼は何も言わなかった。

(私は、殺した)

先程、仲間である少年を助けるために、背後から敵のOSを貫き、破壊した。パイロットの緊急自動脱出装置は働いていたようだが、おそらくあれはシンクロニティ・システムを積んだ特異型OSだ。生きているかどうかは、かなり怪しい。

そしておそらく、あの機体に乗っていた人物は『彼』の知り合いだ。自衛隊がOSを動かしたことはこの一年間で、今日の一度のみ。OSによる《名も無き子供たち（ネームレス・チルドレン）》と政府との戦闘は二、三度ほどあった。しかし、その時に出てきたのは樋浦宗次のみ。

だが、彼の所属する特殊部隊には元自衛隊員のOS乗りがいると、雄平から聞いている。そして、サクラが先程命を奪った相手はおそらく、そのOS乗りだ。

「……やはり、これが運命か」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、なんでもない」

小さな声で呟いたはずなのに耳聡く聞きつけてきた雄平にそう返し、サクラは口を閉じる。雄平は怪訝に思ったようだが、すぐに切り替えてきた。

『とりあえず、ステルス機能はこつちも トウーランドット も抜群だし、海上に出てしまえばおれたちの母艦に収容できる。問題は、それまでに来るであろう追跡部隊だ。向こうも次々とやられてるからそこまで無茶なこととはしないとは思っけどな』

「いや、むしろ敵討ちとばかりに大量に送り込んでくるのではないか？」

『そうだな。向こうの指揮官が熱血系ならそうなる可能性はかなり高い。だから、そのための トウーランドット だ。本来なら ア

「サー も護衛についてもらおう予定だったんだが、撃墜されちまつてるし……負担が大きくなると思うが、頼むよ」

「ああ。構わない」

サクラは頷く。ここに来てしている意味を、彼女はしっかりと理解していた。

元々、この作戦にサクラは組み込まれていなかった。最初は雄平もサクラを加えるつもりだったのだが、いつものように突如サクラが姿を消したせいで仕方なく作戦から外した。しかし、美咲の？予感？がサクラを必要と感じ、彼女を呼んだ。

そして、それは的中した。康太の 回天 は半壊。武装ヘリ アーサー は先程、敵に情報が漏れることを阻止するために完全に破壊した。サクラが トウーランドット に乗って来なければ、おそらく《未知》^{アンノウン}は撤退さえまもなくっていただろう。

雄平にしてはらしくない。だが、ここで彼を責めることはできないだろう。よもや、敵側に樋浦宗次以外にシンクロニティ・システムを積んだ機体に乗れる者がいるとは、流石に誰も予測していなかった。

シンクロニティ・システムを扱うことは先天的な才能がに左右される。《未知》^{アンノウン}でさえ、指導者である神崎美咲を含めて《名も無き子供たち（ネームレス・チルドレン）》十四人のみしか使用できない。存在さえ一部の者しか知らない政府側に、一年経った今、突如現れるとは思っていなかった。

予測はできたはずだ 雄平はそう言った。しかし、回天 が一対一で敗れ、アーサー も撃墜されるとは誰一人として、夢にも思わなかった。

そんなことをサクラがぼんやりと考えていると、画面の向こうで雄平が頭を下げた。

『すまん。リーダー一人に負担を押し付ける結果になっちまった。おれの読みが甘かった。本当に、申し訳ない』

普通の、軽薄な独特の口振りを消し去り、雄平が真剣に謝っている。妙に義理堅いというか、真面目なのが彼の長所であり、短所だ。

サクラは、軽く首を横に振る。

「むしろ、感謝したいぐらいだ。こうしてここに来たおかげで、私も、諦めることができた。現実に行動を起こさねば諦められないというのは、私としても少々情けない話だがな」

自嘲するように、少しだけ笑う。そう、これで良かったのだ。

彼と自分は敵同士。そして、一度は繋がりがかけた手は、彼の仲間を殺すという行為のせいで血に濡れてしまった。これできっと、彼も諦めてくれるだろう。

そう思った瞬間、胸にちくりと小さな痛みが走った。その痛みの正体には気付いていたが、気付いていない振りをした。

画面の向こうにいる雄平はそんなサクラの様子をしばらく眺め、いつもの口調で言った。

『そうやって自分を追い込んでも、いいことなんて何もないさね。その先に待ってるのは、奈落のように深い後悔と、やるせない気持ちだけだ。リーダー、お前さんは本当に自分の判断が正しかったと、言い切れんのか？』

「……………」

卑怯だ、とサクラは思った。雄平は、そんなことぐらいわかって

いるはずなのに。答える言葉がこちらにないことぐらい、わかっているはずなのに。

雄平は、尚も言葉を紡いでいく。

『その赤いバンダナ。誰かからの贈り物かなんかだろ？ その服装もだ。自分自身に興味がなかったお前さんがそんな格好をしてる理由は、そんぐらいしか見当たらんさね』

「それは、違う。この服は、自分で買ったものだ」

『だったら尚更さね。今に興味を持たず、失った過去を見つけ出すためにお前さんはここにいる。そういう人間は、今の自分を見ることをしないもんだ。現に身だしなみなんて少しも興味なかっただろ？』

そのお前さんがそんな格好をしているんだ。察しはつく。少しだけ笑いながら雄平はそう言った。サクラは言い返そうと思ったが、言い返せない自分がいることに気付いた。

そして雄平は、核心を衝いてくる。

『向こうに、大切なものでもできたのか？』

表情を変えたつもりはなかった。けれど、雄平は読み取ったらしい。苦笑めいた笑みを浮かべ、言葉を紡いでくる。

『そうか。なら、しゃーないさね。リーダー、無理してこちら側に留まらずに、向こう側に行けよ』

「え？」

『元々、リーダーにはこっち側でなければならぬ理由、ってもんがない。でも、向こう側にいる理由ができたんだろ？ だったら、

無理する必要はない。こちら側にいれば、その大切なものを自分の手で壊す日が来るかもしれんしな』

雄平の口調は穏やかだった。本当にこちらを案じてくれているように思えた。

きっと、雄平の言っていることは正しい。こちら側にいれば、いつか彼と殺し合うことになる。彼は優しいから、自分に殺されることをよしとしてしまうかもしれない。

けれど、だ。

向こう側には行けない。行くことは、できない。

「いや……その必要はない。私はやはりこちら側にいるよ。心配するな。どうせ、私にはもう他に取るべき道も、権利も、残されてはいない」

『そうか。リーダーがそれでいいんなら、それでいいさね。本人が決意したことをどうこう言う権利なんて、おれにはない。出過ぎた真似をしてすまん』

「いや、礼を言いたいぐらいだ。燻っていたものが何なのか、自覚できたから」

微笑み、サクラは言う。そして不意に、彼女のコクピット内部にアラームが鳴り響いた。

「敵が、来たようだな」

無感動にサクラが呟く。雄平は頷いた。

『ああ。敵はとうやら熱血系だったようさね。第四期型OS クラ

フト 十一機と、第三期型OS レイヴン が一機。どうやら、向こうも本気みたいだな』

「だが、トゥーランドット には敵わない」

「誇張ではなく、歴然たる事実をサクラは呟く。大神清心の現時点においての最高傑作。それが トゥーランドット だ。」

サクラは トゥーランドット の背中にある紅の薙刀を構えると、雄平に告げた。

「私が相手をする間に、撤退しろ。後から追っ」

『りょーかい。 武運を』

通信が切れる。それを確認してから、サクラは大きく息を吸った。同調率 六一%。計器に記されたその数字が、一気に変化する。

凄まじい速さでコクピット内のモニターが示す数字が上がっていく。トゥーランドット に、力が満ちていく。

そして、数字が弾き出された。

同調率 九二%。

異端の天才が揃う《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の中でさえ、サクラしか辿り着けない九十の大台。《キリング・ウェポン殺戮兵器》と同格の世界へ彼女は踏み込む。

そして、トゥーランドット の背後で輸送ヘリが空へと飛び立ち始めた。それとほぼ同時に、敵のOSが現れる。

トゥーランドット は右手に薙刀を持ち、直立の状態で静止している。向こうも最初はそれを不審に思ったらしいが、輸送ヘリが飛び立とうとしているのを見つけると クラフト 十一機が膝をつき、

両手でアサルトライフルを構えると容赦なく引き金を引いた。

それに対し、トウーランドットは何も持っていない左手を突き出す。

銃撃の音が響き渡った。アサルトライフルの弾丸が、撃ち尽くされるまで放たれ続ける。

そして、弾幕によって巻き起こった煙が晴れた時。

そこには、回天の時のように無傷のトウーランドットと、飛び立ち、もうアサルトライフルが届かない位置にいる輸送ヘリがあつた。

「さあ、始めようか」

エナジーシールド。OSの標準装備であるアサルトライフルでは打ち破れない、本来であれば机上の空論である装置。《名も無き子^{ネムレス・チルドレン}》のOSにのみ装備され、樋浦宗次のOSシンにさえ搭載されていない絶対の盾。

打ち破るためには、エナジーシールドを展開しているOSの出力よりも更に巨大な力を叩き込むしかない。

しかしそんな装備を、ここにいるOSたちは誰一人として持つてはいない。

だが、現時点においてエナジーシールドは常時展開ができない。機体によっては両手で発動しなければならなかったりと、使い勝手が悪いのだ。もっとも、一度使つて見せるだけで面白いように相手は動揺してくれるのだが。

敵OSの集団が、アサルトライフルを捨てて両手で両刃の長剣、グランドセイバーを構えると、レイヴンを先頭にして陣を組んだ。

おそらく、レイヴンのパイロットが敵将。
そう判断すると、サクラは両手で薙刀を握り締めて突進した。突
然のことに相手の反応が僅かに遅れる。

最初に犠牲になったのは、真ん中にいたクラフト 四機だった。
正面から突進すると見せかけ、ギリギリのところまで飛行ユニットを
使って上昇した トウーランドット は、そのまま体を回転させな
がらど真ん中へ降下し、敵を薙ぎ払った。

緊急脱出装置が働き、爆発する前に クラフト のパイロットた
ちが吐き出される。それを一瞥すると、サクラは呟いた。

「まず、四機」

そして、サクラが薙刀を下段から思い切り斬り上げる。 トウー
ランドット の正面にいた クラフト 一機が、機体を縦に真っ二
つにされ、パイロットごと爆発した。

『つつ、つわあああっ！』

一瞬で五機がやられた その、普通ではありえないものを見せ
付けられ、恐慌状態に陥った トウーランドット の背後にいた
クラフト が、パイロットの雄叫びと共にグランドセイバーを振り
下ろす。

だがそれを、 トウーランドット は振り向き様に薙刀を使って
軽く受け流した。そして、薙刀から右腕を離すとその右腕を クラ
フト のコクピットめがけて突き出した。

爆発が起こる。コクピットを貫かれた クラフト は、またもや
パイロットごと爆発し、砕け散った。

「あと、六機」

トウーランドット の目が銀色に鋭く輝く。近くにいた クラフト が二機、それを見て少し背後に飛んだが、一瞬で詰め寄られ、薙ぎ払われる。

緊急脱出装置が働き、弾き飛ばされた二機の クラフト からパイロットが弾き出される。そして、信じられない馬力で腹部を叩かれた二機は爆発した。

まだ、トウーランドット の舞うような戦いは終わらない。左右から挟撃してきた クラフト 二機。その攻撃を屈んで避けると、薙刀を短く持って思い切り機体を回転させた。一瞬で クラフト 二機が深く切り裂かれパイロットが脱出する暇もなく機体が爆散する。

そして、動きを止めた トウーランドット は薙刀を長く握り直すと、ハンマー投げでもするかのように体を回転させた。

そして、近付いて来ていた クラフト が一機、一瞬で破壊される。それを確認するとサクラは トウーランドット の回転を止め、薙刀を槍投げの槍のように構えた。

薙刀が、圧倒的な機体馬力を乗せて投げられる。十一機あった クラフト のうちの最後の二機は、避けることもできず貫かれ、パイロットごと碎け散る。

残ったのは、大将機 レイヴン のみ。

「あと一機だな」

サクラが呟くと、トウーランドット は休む間もなく走り出した。途中で薙刀を拾い、正面の レイヴン に肉薄し、横薙ぎの一撃を叩き込む。

激しい火花が散り、凄まじい金属音が響いた。サクラにも少々予想外だ。薙刀が、レイヴン の持つグランドセイバーに受け止め

られていた。

だが、耐久力と機体の馬力が違う。薙刀を受け止めたグランドセイバーは、一瞬で砕け散った。

そして、今度は刃でなく、柄の方を レイヴン のコクピットの少し下。動力部のところへ叩き込み、捻り上げる。鈍い音が響き、バチバチという機械のショート音が鳴り響く。

そして、 レイヴン からパイロットが射出された。

大抵のOSの動力部は、コクピットの真下にある。そこがコクピットの次に装甲が厚く、攻撃を受け難いからだ。

だが トウランドット はその異常なまでの馬力を持って、無造作に動力部を破壊した。それだけで、この機体と他の機体の間にある明確な『差』が読み取れる。

静寂が、流れた。 トウランドット は、雨の降る空を見上げる。

「……これが、私だ」

自らに言い聞かせるように、サクラは呟く。戦闘に要した時間、僅か三十分弱。少し離れたところに報道ヘリがあるのを見ると、おそらく今の戦闘も報道されていたのだろう。

圧倒的な力を持つ、紅のOS。それに対して人々が抱くもの。そんなもの、想像せずとも答えが出てしまっている。

「これが現実だ。私は怪物で、敵。そんな私と手を取り合うことなど」

『サクラアアアアッ!』

サクラの言葉は、絶叫するような大声の前に掻き消された。振り返ったそこには、白銀の、サクラも何度か見たことのあるOSがいた。

「宗次か……」

相手の名を呟いて、サクラは トウランドット を現れた白銀のOS シン へと向けた。自分がどんな表情をしているのか、彼女自身にもわからない。

ただ、わかるのは。

きつとここで、何かが終わるということだ。

シン から、外部スピーカーによる音声が届く。

『お前が、俊彦さんを殺したのか？』

「俊彦、というのは誰だ？」

『蒼のOSに乗っていた、俺の友人だ』

友人。その言葉を聞いた時、胸が痛むのと同時にやはりか、という思いがした。

やはり、康太を助けるために殺した相手は、彼の知り合いだった。いや、それよりももっと強い繋がりを持つ、友人だった。

サクラは、揺れ動く内心を悟られないようにできるだけ冷静に答えた。

「そつだ。私が、殺した」

『……そつか』

向こうの声も、淡々としている。サクラは、トウーランドットに薙刀を構えさせた。

「さあ、殺し合おう」

そして、望んでもいないことを口にする。

向こうも、右手に小型化し、命中性能を犠牲にする代わりに威力を上げた銃、ガンライフルを構え、左手に日本刀のような剣、イーストブレイドを構えた。

紅と白のOSが、向かい合う。

心に、悲しみが伝わってきた。きっとこれは、彼のもの。

瞳から零れた一筋の雫を、サクラは無視した。

五

全身の感覚がボケている。痛みを感じないのは助かるが、これでは戦闘もままならない。

だが、それでも。樋浦宗次は退く気などなかった。あんなことを言ったが、俊彦の復讐に来たわけではない。ただ、気が付けば半ば強奪するように シン に搭乗し、ここへ来ていた。

麻酔弾。普通なら一時間近くは眠らされるそれを撃ち込まれた宗次は、一度意識を手放した。しかし、何の奇跡か、目を覚ました。

寝ている間に飲まされたのである。鎮痛剤のせいで体が上手く動かなかったが、そんなことはどうでも良かった。格納庫に設置された巨大モニター。そこに映っていた、次々と自衛隊のOSたちが

トウーランドット に破壊されていく姿。

それを見た時、行かなければと思った。行ってどうするのかはわからなかったが、ただ行かなければと思い、気が付けばここに来ていた。

「……………どうしてなんだ？」

外部スピーカーは切つてある。だから、言葉はサクラに届かない。だがそれでも、呟かざるを得なかった。

「どうして、俺たちは殺し合う？」

ここが戦場だから。敵同士だから。そんなありきたりな答えでは納得できない。何故なら、自分たちには前提条件が欠けているから。譲れないもの。向かい合う者同士が、重なり合わない理由となるもの。

それが、ない。

それぞれの中に、こうして向かい合うことを正当化するものがない。正義も、大義も、この戦いには存在していない。

なのに、向き合っている。殺し合おうとしている。

「道化だな。どうしようもないほどの」

苦笑して、宗次は呟く。ただ、彼は気付いていなかったが、今の彼に快樂という感情はなかった。

サクラと殺し合う時に感じると思っていた、殺し合いを楽しむ感情は、少しも湧いてこなかった。

「……………やるつか」

そして、樋浦宗次は シン を動かした。ガンライフルの引き金を引く。 トウーランドット はそれを察知すると、引き金が引かれる瞬間に前へと飛んでいた。銃弾が僅かに掠るが、ダメージというほどのものではない。

そして、 シン の眼前に迫った トウーランドット が下から薙刀を切り上げるようにぎて振り抜いてくる。宗次は避けようとしたが、反応が遅れガンライフルが砕かれた。

(体が、動かない?)

ガンライフルを失った右手をイーストブレイドの柄に回しながら、不意に宗次は思った。反応が遅い。動きが鈍すぎる。

そして、宗次は記された計器の数字を見て、愕然とした。

同調率 七一%。

その数字は、普通の宗次からはかけ離れた数字だった。最低でも八十を超える同調率を弾き出せる存在。だからこそ、彼は天才と呼ばれていたというのに。

しかし、それは当然のことだ。彼は腹部に二発の銃弾を受け、鎮静剤と麻酔によって意識が朦朧としている。そんな状態で動けるだけで、十分異常だ。

そして、機体性能と操縦者の腕前がほぼ同じである以上、体調の差は絶対的な差となってしまう。

トウーランドット が、動く。

薙刀を振り上げ、距離を取ると薙刀を回転させながら突進してきた。宗次は、反応が鈍い シン をどうにか動かし、イーストブレイドでそれを受け止める。

その、瞬間だった。

ピピピピピピピピピピッ！

コクピット内に響き渡る警告音。見れば、エナジーが尽きかけていた。もう、後数分ともちそうにない。シンクロニティ・システムを搭載した機体は普通の機体よりもエナジーの消費量が格段に多いのだ。その上、シン は十分なエナジーを積んでいなかった。

「ぐっ……っ？」

そして不意に、宗次の腹部と機体全体に衝撃が走った。トウーランドット の薙刀の柄に シン の腹部を思い切り薙ぎ払われたためだ。シン は宙を舞い、地面に堕ちる。

そして、傷口が開いた体を鞭打って機体を起こそうとした時。

エナジーが、尽きた。

「……くそっ」

同時に、宗次の意識も闇へと堕ちていく。

『さよなら』

薄れ行く意識の中で、そんな言葉を聞いた気がした。

第四章「願い」（後書き）

というわけで、過去編決着です。……第一話と第二話、逆でも良かったかもしれないか思ってみたり。

ある程度、人間関係がわかってきたのではないかな、と作者自身は思っておりますが……如何でしょう？ 特に隠すようなこともないので、質問などがございましたら遠慮なく感想やメッセージをください。

あと、《名も無き子供たち》のリストとかも提示した方がいいですか？

ご意見いただけると幸いです。

一章一章が長くてすみません。途中までであっても良いので、読んで頂けたなら感想をくださるとありがたいです。

次は、第二話の最終章。明日にでも出したいと思います。

あるがとうございました。

感想、お待ちしております。

終章「記憶」(前書き)

【記憶】(Memory)

物事を忘れずに覚えておくこと。生物体に過去の影響が残ること。人間という生物が、己を確立する上で最も重要となるもの。他者とは違う記憶、思い出を持つことで人は自己を肯定できる。ただし、その記憶や思い出が本当に正しいものであるかどうかは、定かではない。

一般に言う記憶喪失と、本来の記憶喪失は別物。一般の記憶喪失はただ『思い出せないだけ』であり、本来の記憶喪失は思い出す以前に失っていることを示す。失ったものは返ってこない。それが真理である。

人は記憶の上に立って生きている。故に、記憶がないというのは耐え難い地獄である。

神崎美咲【忘れると思い出せないは別次元よ。その間には、境界があるわ】

終章「記憶」

零

機体から降りると、整備のために慌しく職員たちが様々な機材をもって トーランドット の側に群がり始めた。サクラはそこから離れ、自室へ向かおうとする。

すると、一人の女性がサクラの前に立ち塞がった。

「お帰りなさい」

「……ただいま」

微笑んでくる女性 《未知》^{アンソウ}の指導者、神崎美咲へサクラは素っ気なく返事を返す。美咲は微笑んだまま、サクラに問いかけた。

「何故、樋浦宗次を殺さなかったの？」

その表情は微笑んでいる。責めている様子はない。だがサクラは、即答できなかった。

先程の戦いで、宗次のOSは燃料切れになっただけで、倒れたまま光を失った。そしてサクラは、迷うことなくそれを放置し、飛び立った。

何故か。改めて聞かれると、少し返答に困る。彼とは殺し合いをするに決めたのに、どうしてなんだろうか……？

だが、サクラの唇は勝手に言葉を紡いでいた。

「殺したくなかった。……そう、思った」
「そう」

咎めるわけでもなく、ただ微笑しながら美咲は頷いた。彼女にこの答えがどう聞こえたのかわからないが、間違っていないと思えた。少なくとも、自分の心の中では。

そして、サクラが再び歩き出し、美咲の横を通り過ぎた時、美咲が彼女の名を呼んだ。

「イクス。大切なものでも、できたの？」
「サクラだ」

自分でも意外なぐらいに強い口調で、サクラは相手が自分を呼んだ時の呼び名を否定していた。美咲は一瞬驚いたような表情をしたが、すぐにいつもの微笑を浮かべると、改めて聞いてきた。

「じゃあ、サクラ。大切なものでも、できたの？」

何を言っているのか、というのは愚問だ。どうせ彼女のことだから、？予感？でもあったのだろう。

サクラは、頷いた。

「まだ本当に大切なのかはわからない。幻想を、夢を見ているだけなのかもしれない。だが、悪くない気分だ。今は、そう思っている」
「そう。それはよかったわ」

何がよかったのかは、わからない。けれど、別にどうでも良かった

た。

「サクラが、歩き出す。」

美咲も、その背中には何も言わなかった。

—

「……ここか」

『亀井俊彦』とプレートのかかった病室の前で、宗次は呟く。戦いから二週間。重傷で見つかった俊彦と宗次は病院に入院させられていた。

宗次は入院して三日で目を覚ましたが（その回復速度は異常と言われている。普通なら目を覚ますかどうかさえ五分五分だったらしい）、俊彦は一週間前に目を覚ましてからも、今日まで面会謝絶だった。

俊彦が目を覚ました早さも異常らしいが、それは流石に樋浦京一郎が選んだ隊員だ。色々と常識離れしているのが常である。

一度息を吐く。ここに来る前に、彼は京一郎に俊彦がどうなったかを知らされていた。

「Forbidden fruit?」という、システムの内容も。

京一郎は、その説明の後に、宗次に言った。

「お前の知る亀井俊彦とは、もう二度と会えないだろう?」

それは、暗に行けば後悔すると告げていた。だが宗次は、ここへ来た。

大きく深呼吸をし、宗次はドアをノックした。数秒後、「どうぞ」という声が室内から発せられる。

宗次は扉を開け、中に入った。

「……………」

そして、絶句する。広々とした個室。その中央に、無数のコードを体に繋がられて、上半身を起こしてベッドに座っている俊彦がいた。しかし、今の彼からは生氣を感じない。部屋もだ。ここは、誰かがいる部屋に見えない。

「俊彦さん」

宗次は、彼に呼びかけた。彼は、いつものように「いや、いつもとは違い、笑顔ではなくどこか困惑した表情で、口を開いた。

「あの、どちら様でしょうか？」

嘘は吐いていないと、確信した。俊彦は嘘が得意な人間ではない。感情表現が宗次とは対極的な位置にあると思えるくらいに豊かな人間だ。すぐに怒るし、すぐに落ち込むし、感動的な映画なんかを見たらすぐに泣くけれど。

それを補うように、いつだって、素直に、心から笑っていた。

彼は、嘘を吐けない。吐こうとしない。だから、これは演技じゃない。

そして、困惑していた俊彦が、得心いったというように手を合わせる。

「ああ、もしかして僕の知り合いの方ですか？」
「はい……そうです」

声を、絞り出した。間違いなく、震えている。この感情が何なのか、宗次にはわからなかった。

記憶、喪失。

心が壊れる兵器の代償は、使用者の死ではなく、それよりももっと残酷な、使用者の自己を構成する？記憶？を奪うものだったということだ。

「俊彦さんには、本当に、よく、してもらってました」

「そうですか。そう言われると少しだけ照れますね」

俊彦が笑う。その様子を見ながら、宗次は拳を握り締めた。

記憶喪失。美談では記憶が戻るといっくらでも聞くが、そんなものは一割、いや一厘にも満たない奇跡だ。ましてや俊彦は、普通の記憶喪失の『思い出せない』ではなく、記憶が『壊れた』状態。

壊れたものは、返ってこない。

そう。京一郎が言った通り、もう二度と樋浦宗次が知る亀井俊彦には会えない。

「……また来ます。失礼しました」

何とかそう口にし、宗次は頭を下げる。俊彦は、そこで思い出したように口を開いた。

「はい。……あ、そうでした」

俊彦はゆっくりと手を動かすと俊彦のベットの隣にあるタンスから、封筒を一つ取り出した。そこには、『樋浦宗次へ』と書かれている。

「前の僕が書いたものらしいんだけど、誰なのかわからないですよ。看護士さんや先生に聞いても、知らないと答えるばかりです……」。知っておられればいいのですが、届けてくれませんか？」

「はい。大丈夫です。……ここに書かれている人のことは、よく知っていますから」

そう言つて、宗次は封筒を受け取った。そしてもう一度頭を下げると、逃げるようにして部屋を出た。

失ったものは、あまりにも大きかった。

|||||

樋浦宗次が去った部屋。その部屋の中で、俊彦は大きく息を吐いた。それを待ち構えていたかのように、ドアがノックされる。

「入っていいぞ」

宗次の時とは違い、いつもの乱暴な口調で俊彦は言う。相手は、ドアを開けて入ってきた。茶髪の、宗次と同じぐらいの年齢と思しき少年である。

「雄平……だったな。お早いことだ」

「おれとしても、時間をかけるわけにはいかないことですから」

そう口にした雄平の表情は、無表情だった。何の感情も浮かんではいない。俊彦は、僅かに微笑んだ。

「人生、何が起こるかわからねーもんだな。殺してやるうって憎みまくってた相手の一人に、まさか手を貸してもらうことになるとはな。手紙を書く道具を貸してくれて、ありがとうよ。出撃前に書いたようにしといたから、問題ねーだろ」

「……………」

雄平は何も言わない。無表情に、扉の前から俊彦を見ている。

「にしても、驚いたぜ。目エ覚ましたその日の夜に突然窓から忍び込んできて、第一声が『話を聞かせてくれ』だもんな。俺の知り合いにも一人、相当な無茶ばかりやらかす野郎がいるが、いい勝負だぜ」

「…………おれは、指揮官で参謀役です。この手で人を直接殺さない代わりに、義務が、責任がある。すべての憎悪を背負う責任が」

「自己満足だな」

「それでいいんです。そう嘘を吐けば、おれは戦える」

乾いた声で、雄平は呟くように言葉を口にする。俊彦はそんな雄平を見ようとしたが、不意にその視界が歪んだ。

…………どうやら、肉体も限界らしい。それを隠し、俊彦は言葉を紡ぐ。

「そついや、そこまですんのお前は謝らなかつたな？ 何でだ？」
「謝罪で解決できる程度のことをしてきた覚えはありません」
「確かにな」

薄く、俊彦は笑った。

「だが、俺の話を聞く必要なんてなかつたんじゃないのか？ 聞いたら重荷になる。そんぐれーわからなかつたわけでもないだろ？」
「それでも聞いておきたかった。自己満足でいい。おれたちが……
いや、おれが殺した人たちの生き様を」
「熱いなお前」

くくつ、と俊彦は笑う。もう、目は見えなくなっていた。

「ただ、俺に関しちやお前はもう罪に思う必要はねーよ。亜矢の……
妹のことに関しちや話は別だが、俺はもういい。俺は、お前を許すよ」

「……何故？」
「気付いたからだよ」

目を閉じ、上体が起こされた状態のベットに深く体を沈み込ませながら、俊彦は言った。

「最後の最後。相手を殺す寸前まで至った時に、俺はただ純粹な殺意しか持ってなかつた。妹のことなんて、綺麗さっぱり忘れてたんだよ」

「……………」
「笑える話だぜ。全くよ。……結局、俺は殺しがしたかつたに過ぎねーんだ。そして、ただ死にたかつた。死に場所を、求めていた」

妹一人守れなかった自分。そんな自分が、一番許せなかった。ろくな暮らしをさせてやれなかったというのに、守ることさえできなかったのが、何よりも許せなかった。

だから 死にたかった。

「だから、お前は罪に感じる必要はねーよ。自殺志願者が、自分で引き金を引いて死ぬか他人に背負わせるかの違いでしかねーんだからな」

言いながら、俊彦は自分の体が小刻みに震えるのを抑えられなかった。

コロシタイ。

そんな、過去も今も未来も無視した欲求が体の中で暴れ回る。正気を保っていられるのも、限界に近い。

俊彦は歯を食い縛り、言葉を紡いだ。

「俺を、殺してくれ。このままだと、俺があいつを、宗次を殺しちまう。それだけは、俺自身が、許せねえ」

語尾が震える。体が勝手に暴れ出そうとする。狂気が、全身を支配しようとする。

雄平は頷くと、だが、と言葉を紡いだ。

「おれはおれの都合であんたを殺す。？Forbidden fruit? あのスステムは危険だ。それを使うことのできるあんたを、捨て置けない。大神美鈴はシステムデータをすべて消去しようだが、それでも、だ」

らしくない嘘だ、と雄平自身は思っていた。すでに俊彦は正気を失いかけている。システムも消されたことを確認しているし、この男をわざわざ殺す必要などありはしない。

だがそれでも、彼はここに来て、俊彦の遺書を書く手伝いと、樋浦宗次という俊彦が一番心残りにしていたものを突き放す術を授けた。嘘を、吐かせた。

「恨んでくれ。おれは、あんたから奪ったんだ。命と、家族を。そして、友に対する最後の別れさえもだ。だから、おれを憎悪してくれ」

「あいつは友ってよりは、どっちかってーと弟だな」

薄く笑ってそう言うと、俊彦はもう見えなくなっている瞳を開けた。

「それに……悪いが泣いてる奴にキレる性格はしてねーんだよ」

笑って言葉を口にする。不思議だ。殺されるとわかったからか、狂気が静まっている。

雄平が、銃を構えた音がした。俊彦は、言った。

「妹が呼んでんだ。……早く、殺せよ」

そして、音を消された銃弾が吐き出された。

俊彦の首にかかっていた、所々黒くなっていた銀色のネックレスが、鮮血によって紅に染め上げられた。

扉が閉じられた病室に、生きている者は誰もいなくなった。

不意に、宗次は足を止めた。虫の知らせ……とでも呼ぶべきなのだろうか？ 微かに胸騒ぎがした。

背後の、病院を振り返る。だが、何かが起こった様子はない。

気のせいか。

そう切り捨て、宗次は歩き出した。右手に自分宛の手紙が入った茶封筒を持って、人ごみの中を歩いていく。相変わらず彼の側だけは人が空くが、気にしなかった。

そして、彼は公園に辿り着く。サクラと出会った、公園に。

「……………」

誰もいない公園。その中にあるベンチに座り込むと、宗次はゆっくりと息を吐いた。

そして、封筒から手紙を取り出す。

そこには、見慣れた字で宗次宛のメッセージが書かれていた

……………。

……………。

……………。

よう、宗次。

お前がこれを読んでる時は、俺は死んでいるか、お前に会うことができねえ状況なんだろう。冗談抜きでな。

さて、まず何でこれを書いたかを軽く説明しとこうか。お前も混乱してるだろうしな。

俺は、フルート って機体に乗ることになった。どうやらそいつは、使用者の心とやらをぶっ壊す代物らしい。心なんて曖昧なもの、信じ難いが……少なくともいい結果になりやしねえだろ。

で、だからこれを書くことにした。だってよ、こんなのを残しとかねえと、お前は俺の死を背負っちゃまうだろ？ 正直な話、そんなもんはいらねえよ。

俺はな、死に場所を与えられた。ただ、そんだけの話だ。悪い話じゃねえよ。戦場で散れるんだ。文句はねえ。

……そうだな。この際だ。俺がどうして特殊部隊に入ったのか、お前に話そうかな。理解しろとは言わねえけど、知つといて欲しいんだ。俺が、何のために戦ってきたかを。

俺の両親は、どうしようもねーロクデナシだった。親父はギャンブルで借金ばっか増やしてくるボケナス。母親は浮気性のアバズレ。俺は物心つく前から毎日虐待を受けて、体に痣のねえ日なんか一度もなかった。

正直、何度も何度も自殺しようとか、両親を刺そうとか思ったよ。けど俺が十五の時。中学卒業間近だった時、俺に妹が生まれた。

亜矢、ってんだけどな。正直あれだ。十五も離れてれば最早妹じゃなくて娘だよ。だから俺は、隠れるようにして亜矢の面倒を見続けた。そんで、中学を卒業すると同時に家を出た。3KだったからKだったか忘れたけどよ。凄えきつい仕事してたぜ。

朝早く保育園に亜矢を預けて、夜遅くに引き取りに行く。そんな生活が三年くらい続いた時だ。今じゃもう十七年前になる、例の東京崩壊のクーデターが起こった。俺はその時、真田さんに勧誘さ

れたんだよな。

……そういやあの人にも大分失礼なこと言っちゃまったな。後で謝つていてくれ。

とまあ、それはおいといて。

俺は体力には自信があつたし、給料も当時より格段に良かった。でもよ、俺には亜矢がいた。だからそれで断ろうとしたんだが、『それならその子と共に基地に住めばいい』って真田さんは言ってくれてさ。あの時は一度目の大敗のせいで死人と退役者が増えて人手不足だったからしゃーなしだったんだらうけど、俺はもの凄く嬉しかったね。

けどまあ、その戦いは俺が出る前に終わっちゃまった。それでも俺は留まることにした。真田さんから受けた恩もあつたし、脳みそのできが無茶苦茶悪い俺には軍人が性に合ってると思つたからな。

そして……ろくなモンを与えてやれなかったのに、亜矢はいつつも笑つて帰つて来てくれた。だから俺も笑うことにした。基地の奴らはみんな良い奴ばつかったし、俺は生まれて初めて、心から笑つてことをあの場所で知つたよ。

それで、俺は亜矢が小学校に入った時に借金してマンションに引っ越した。ほれ、住所的に問題あるだろ？ 自衛隊基地が家です、つて。

……亜矢の頭は俺と違つてかなり良かった。名門の進学校にも楽々進めるとあいつの中学時代の担任に熱弁されたよ。でもな。私立校となれば金がかかる。俺にはとても、そんな金を払う余裕はなかった。

でもあいつは笑つて、『公立校でいい』つて言いやがった。

そして、高校に入ってから亜矢は毎日死ぬ気で勉強をしてやがった。何で頑張るかを聞いても答えてくれなかったし、あいつの夢がなんなのかは最後までわからなかったけど、借金がある苦しい生活

を少しでも楽にする、って言って遅くまでバイトをしながらあいつは頑張ってくれてた。

これは後で知ったんだが、両親がいねえってのは進学とか就職において相当なハンデらしいな。俺は歳が離れてても所詮は兄貴で、叩き上げの軍人だ。親にはなれない。それは相当なハンデだそうだし、あいつは、いつも冷たい目で見られてたんだ。

で、そんな中であいつが高三になって、受験を終えた時。俺はほぼ無理矢理に発表について行かされた。その場所は、例の後にあの事件が起こった大学だった。

俺は勿論そんなことが後に起こるとは夢にも思ってたし、その日は休みを取れて言われてたから普通についてったよ。それで、合格発表を一緒に見た。

あの時のことは、忘れられねーなあ。社会からいつだって冷たい目で見られてた亜矢が、あの超名門校に合格。しかも、後から届いた書類によると学費免除。つまりは、主席合格ってことだ。

俺は本気で泣いて喜んだ。親がないこととか、借金とか、ろくに誕生日も祝ってやれねえこととか、辛い目に遭わせてばっかだったから、これで妹は幸せになれるって、本気で喜んだよ。

でも、だ。入学式の日、あれが起こっちゃった。

そこから先は、まあ、あれだ。察してくれ。

その後、俺はすぐに自衛隊から抜けたよ。妹がいるはずの会場で行われる大量虐殺。行かせてくれと叫んだが、真田さんに止められた。そして、俺が麻酔弾喰らって気を失ってる間に全部終わっちゃまった。……亜矢の死体は、原形を留めてなかったよ。

その後、自殺しようと思ったんだ。自分がしてきたこと全部、無駄だと思えたから。でも、京一郎さんに勧誘されて、復讐に走ることにした。それが俺の理由だ。

だからまあ、結局何を言いたいのかというのだな。

俺の死を背負わないで欲しい、ってことだ。

俺は、生きる理由を見失っちゃった人間だ。で、目の前にぶら下げられたニンジンよろしくの復讐、っていうモンに憑かれちゃった。言っちゃえば復讐を理由にした自殺願望者だ。そんな奴の命を背負う必要なんて、欠片もねえ。

だから、この手紙を書いた。お前は優しいからよ。俺が死んだら、絶対背負っちゃまうだろ？ だがな、この死は俺自身の問題なんだよ。お前は強い。けどな、その分脆くて壊れ易いってこと、自覚してるか？ お前は自分から死に行こうとしてる。俺みたいになっちゃまってる。だから、言わせてもらっせ。お前は、死ぬんじゃねえぞ。絶対に。

お前みたいなガキが、心も体もボロボロにして戦うんじゃねえよ。見てられねえんだよ。

だから、俺が言ってるのは、俺が死んでも、お前は生きろってことだ。生きて、生きて生き抜いて。恋人でも見つけて、結婚して、ガキを育てて、歳とって白髪になって、ツルツパゲになってから、笑って死ね。

銃なんざ、捨てちまえ。

銃を握る代わりに恋人の手でも握ってやれ。それで、腹の底から腹いっぱい、誰かと一緒に笑え。

戦場じゃなくて、誰かの側で笑って暮らせ。

俺の物語は、ここで終わりだ。亜矢も呼んでやがるしな。

泣くなよ？ 泣かれたら困る。安心しろ。見守ってやるから。それで、生まれ変わったらお前の友達になって、一緒に飯でも食うからよ。それまでの間は、お別れだ。

その時に銃を持ったら、俺はキレルからな。いいなお前。絶対

に銃を捨てるよ。

なーに、銃を捨てれば人も寄ってくる。お前は優しいからな。お前から拒絶しなけりゃ、いくらでも友達はできる。俺が保障するぜ。

……お前と一緒にいたのは一年間って、今考えればかなり短い時間だったけどよ。凄え密度が濃かったし、お前の側でなら少しだけ復讐を忘れられたよ。お前は俺にとって、弟みたいな存在だった。なあ、宗次。俺は、お前に出会えて良かったぜ。

本当に、ありがとうな。

そんで。

さよならだ。

終章「記憶」(後書き)

というわけで、第二話の最終話です。

この話を読んでから第一話をもう一度読み返すと、関係図がわかって面白いかもしれません。

次回は再び、現代へと時間軸が戻ります。

感想、ご意見、お待ちしております。

ありがとうございました。

序章「特別暴力主義対策機関」(前書き)

【特別暴力主義対策機関】(Aegis)

国際連合内に設置されている機関の名称。通称、《エイジス》。約二十年前の不況から急激に増えてきた暴力主義 テロリズムに対抗するために組織された機関で、各国の優秀な軍人たちが構成される国連軍へと指示を出す、世界最高の戦力を保有する機関である。

公にはされていないが、《エイジス》の所有するOSには数えるほどではあるがシンクロニティ・システムを搭載した機体が存在する。

樋浦宗次は《エイジス》の支部でもある特別戦後処理室に所属しているが、本部へ来ないかと度々誘われており、断り続けている。

樋浦宗次【抑止力と言えは聞こえがいいが、実際はただの軍事機関だ】

序章「特別暴力主義対策機関」

—

鳥の鳴き声が聞こえる。風が流れる。

騒々しい都会の中にありながら、静けさを保つ場所。二十年前のクーデターと二年前の戦争で傷ついた国だからこそ増えることとなった、墓地。

その中の一つの前で、少年は手を合わせていた。

「……………」

癖の強い黒髪。背は高くないが、衣服を着ていてもわかるほどに鍛え上げられ、絞り込まれた身体。黒いズボンに黒いシャツ。その上に黒いコートを羽織った、死神のような出立ち。

二年前の戦いにおいて、日本という国を《未知》アンノウンと呼ばれたテロリストたちから兄と共に護り、それまでも幾度となく戦場に現れては超人的な力を発揮した存在。

《殺戮兵器》キリング・ウェポンと呼ばれる人間兵器。名を 樋浦宗次。

その、誰よりも死に近い位置にいる高校生の少年は墓を前に膝を折り、目を閉じて手を合わせていた。

亀井家　　そう刻まれた、二人の兄妹が眠る小さな墓の前で。

どれだけそうしていたのか……宗次自身にもわからないぐらいの時間そうした後、宗次は閉じていた瞳を開け、立ち上がった。

「すみません。俊彦さん。銃を捨てると言われていながら、まだ俺は銃を捨てることができている」

苦笑しながら、宗次は呟くように言う。

三年前、何者かに殺された、戦友であり兄のようであった人。銃を捨てると、普通に生きると言葉を残してくれた人。だがその人の言葉に対して、未だ自分は何もできていない。

今から半年前、兄が敵として眼前に現れた時。その手駒となったネームレス・チルドレン《名も無き子供たち》との戦い。そして、それが引き金となったように増え出したテロ組織の活動に対する抑止力としての戦い。

両手を返り血で染めて、憎悪を向けられている。

英雄人殺しとして生き、己の目的さえ果たせない。

「怒られますかね、俺は？」

問いかける。答えなどないことはわかっているし、墓相手に言葉を紡ぐなど傍から見ればただの変な人だ。

だが、それでも宗次は言葉を紡ぎたかった。

「でも、怒られても俺は戦いますよ。思い出しましたから。何故戦っていたのかを」

そう言って、今度は手を合わせず、頭を一度下げ、宗次は墓へと背を向けた。

「この手を汚して、誰かを守る。俺は、そうやって生きていきます。銃を捨てるのはきつと、ずっと先になる」

宗次は、歩き出した。そして、彼はその途中で一度だけ振り返る。

一瞬、呆れたように笑うあの人の姿が、見えた気がした。

無意識のうちに宗次は口元に笑みを刻み、歩き出す。

墓地を出、人気の無い静かな道を　二十年の間に二度起こった戦いで廃墟となり、復興が進んでいない場所を歩いていく。

そして、宗次が顔を上げた先。

「よう。墓参りは済んだか？」

今の戦友が、宗次のバイクの側に立っていた。

二

「次の戦場？」

紡がれた言葉に対して宗次がそう聞き返すと、彼の戦友　高岡雄平は頷いた。

「すぐにじゃないけどな。九州地方に結構大規模なテロ組織があって、密偵に張らせてたんだが、最近どうも動きが不穏だ。それを上に報告したら、証拠は揃ってるから出向いて殲滅してこいだとさ」「殲滅だと？」

「そ、《イービス》から勅令」

肩を竦め、雄平は言う。彼らが所属する対テロ用の組織、特別戦後処理室 通称『特室』の大元に当たる組織、《イービス》。だが、国連に設置されるその組織は基本的に特室などの支部に直接指示を出すようなことはしない。

つまり逆に言えば、今は普通の状況ではないということだ。

宗次は思案しながら、雄平に問う。

「やはり、半月後の首脳会談が原因か？」

「まあ、そうだろうな。名目上は日本の治安維持になってるけど、んなもんこじ付けだ。テロ活動が急に活発になってきたことも、関係してるだろうよ」

「……………」

宗次は押し黙る。半年ほど前から、宗次や雄平。もう一人の特室メンバーである丹羽鏡花（にわ きょうか）は増員されたメンバーと共に日本各地に潜伏しているテロ組織の本拠地を叩くような行動をしていた。

その理由は治安維持とされているが、本当は違う。

半月後 現代の先進国がこの国に集い、世界各地で近年活発になってきているテロ活動への対処。即ち、報復戦争に関する会議が行われるのだ。

そして、その時にテロ活動を行われないようにするために宗次たちは今、戦っている。

「出立は明後日。山形から帰ってきたばかりのお前さんには悪いと思うけど、準備しといてくれ」

「ああ。わかった」

宗次は頷き、ヘルメットを被る。戦いに赴くとなれば、相応の準備がある。ボロいアパートに帰らねばならない。

そうしてバイクに跨った宗次に、雄平が不意に問いかけた。

「亀井俊彦……彼を殺した相手が見つかったら、どうする?」
「殺す」

簡潔に、反射的に宗次は答えた。記憶を失った彼。そんな、戦えなくなつた彼を殺した相手。未だに誰かさえもわからないが、絶対に許さないと彼は決めていた。

背負うなと言われても、宗次は背負つた。

あの日。胸騒ぎを覚えながらも戻らなかつた己を、責めながら。

「そうか」

宗次のその言葉に感情の乗っていない声で応じると、雄平はバイクから離れた。

アクセルを捻られた宗次のバイクが、走り出す。

その後姿を、雄平は見えなくなるまで見送っていた。

序章「特別暴力主義対策機関」（後書き）

第一話より、半年後からの物語です。予定では、全六話。要望があれば続けていこうかな、と画策している次第です。

感想、ご意見、お待ちしております。

ありがとうございました。

第一章「殺戮兵器」（前書き）

【殺戮兵器】（Killing Weapon）

惨たらしく多くの生物を殺す兵器の総称。樋浦宗次の異名。

万人の常識を遙かに超える戦闘能力を持つ樋浦宗次が、今より約八年前から戦場を渡り歩き、数々の功績を残してくる中でいつしか呼ばれるようになった異名。

樋浦宗次は戦闘技術以外においては凡夫の域を出ない（むしろ常人以下である）が、一度武器を握り、戦場に降り立つと鬼神の如き力を発揮する。その力はたった一人で戦場の形勢を逆転させてしまふと謳われるほど。

ただ、この名は功績と共に授けられる称号であるという話もあり、宗次よりも先にこの名を冠していた人物がいたという噂がある。

高岡雄平【断言する。アレは、異常だ】

第一章「殺戮兵器」

零

決して広くない、白い部屋。病院にあるようなベッドと、いくつかの機械のみが置かれた部屋。

その場所にある二つの人影の片方　雄平が、上着を着ながら言葉をついだ。

「どうですか？」

「……………」

相手は、すぐには答えず、ノートパソコンに映った数字を辛そうに眺めている。雄平は立ち上がると、相手　夕霧雅の側に行き、髪を軽く撫でた。

「おれ自身の体です。覚悟はもう、ずっと前からできていますよ」
「……………」　思っていたよりは、遅いわ

唇を一度噛み締め、雅は搾り出すように言葉を紡ぐ。

「けれど、遅いだけで進行はしてるの。私には、食い止められない」
「雅さんに無理なら、誰もできませんね」

苦笑し、雄平は言う。雅は、顔を伏せた。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第十二番、《スカライ研究者》夕霧雅。

かつて、日本という国そのものを敵に回し、二年もの月日を戦い抜き、敗北した最早伝説となっているテロ組織。その幹部であり、十代でありながら医療の最高責任者であった女性。彼女が救えなければ、誰であっても救えない。それが、雄平の見解だった。

「それで、実際どうなんです？」

苦笑を消し、どこか乾いた表情で、雄平は聞いた。

「……二十を超えるぐらいが、ヤマだと思うわ。それさえ超えられれば、あるいは……」

「生きられる。希望がある、と。随分なもんだ」

クツ、と自嘲するように雄平は笑う。これは、過去からの遺産。

無理を続けた肉体が負った、傷。背負わなければならない、罰だ。

「一%以下、コンマ以下の確率に縋り付くしかない。無様この上ない」

天才と呼ばれても、たった一つ、自分の命さえ自由にできない。こんなにも愚かなことが、他にあるだろうか？

「まあ、何にせよ、今はまだ死ねません。雅さんのこと、鏡花のこと、特室のこと、そして 宗次のこと。世界が出す答えを知るまでは、まだ死ねない」

「……………」

乾いた声でそう呟く雄平に、雅は何も言えない。いや、言えない。

自らの命に興味がない。それが雄平だ。だが彼は、自分たちを守るために脆く、儚い命を削ってくれている。そんな彼に、どんな言葉を送るべきなのか、彼女にはわからない。

誰よりも側にいるつもりでも、必要な時に彼を支えられない。ただ、寄り添うことしか、できはしないのだ。

雅は唇を噛み締める。その雅に、雄平は苦笑しながら言葉を紡いだ。

「そんな顔しないでください。どうなるかなんて、わかりはしませんですから」
「そう、ね」

雅は頷く。頷くが、まだ納得がいかない様子だった。

雄平は苦笑を深くし、更に言葉を重ねようとする。その瞬間。

コンコン。

部屋の扉がノックされる音が響いた。雄平は表情を引き締め、扉を見る。

「……どうぞ」

警戒の込められた声色で、雄平は許可の言葉を紡ぐ。ここは、弥生学園大学の研究室。大学の一回生であり、研究室の主任である雅のプライベート研究室だ。雅が大学にいる時は寝床ともなるこの部屋。政府に監視されている場所の一つなので、客など普通は来ない。

ましてや今は、雄平が来ている。ドアの向こうには、政府直属のSPたちが何人もいる。ノックしてくるとしたら、彼らだ。

だから、雄平は警戒する。彼らにとって、政府は味方ではない。飼い犬と飼い主。超法規措置である司法取引で結ばれた、主従だ。自然、雅の表情も強張る。そして、扉が開いた時。

「よっ。久し振りやな」

笑顔を浮かべ、背中に竹刀袋を背負った黒髪の青年は軽い調子でそう言った。雅が、驚きの声を上げる。

「烏丸くん！」

「おー、雅やないか。元気そうで何よりや」

その声に気楽な調子で青年　烏丸一成は応じた。そして彼は、雄平に視線を向ける。

「何やその顔？　戦友との再会なんやで。もっと喜べや」

「冗談でしょう？　今のおれとあなたは敵だ。敵に出会って喜ぶことができるとでも？」

「くくっ、敵かいな」

真剣な表情で言う雄平に、笑って一成は応じる。

「冗談はこっちの台詞やな。俺は、頭目から聞いたるんやで？　お前たちと鏡花が何故俺たちを裏切り、そちら側についたか。頭目は、俺にだけ話してくれたんや」

「……余計なことを」

ぼそりと、雄平は呟く。あの時の選択が間違っていたとは今も思わないが、自分で自分が気に入らないのは確かだ。

自己犠牲。自らが最も忌み嫌うものを、ことうして為しているのだから

「ま、そういうわけやから俺はお前らと敵対するつもりはあらへんよ。ことう見えて大学の三回生やしな。んなことしとる余裕もあらへん」

「へえ、そうなんですか？」

「白々しいやつぢやな。俺らを政府の監視網から逃がしといて。俺が大学に編入できたんも、お前が手え回したからやろ？」

「何の話か、全くわかりませんね」

「道化やな」

「褒め言葉として受け取っておきましょう」

しれつ、とした表情で肩を竦めながら雄平は言う。だが内心では珍しく焦っていた。

一成は《未知》^{アンノウ}に加わっていた時代から勘が良かったが、まさかそこまで見抜かれているとは思わなかった。やはり、侮れない。だがまあ、この男しか知らないのなら、それでもいい。

かつての仲間たちには、恨んでいて欲しい。

そうであれば、こちらも迷いを消せるから。

迷いを消して、迎え撃つことができるから。

いつものように深みに入りかけた雄平の思考。それを切り裂くように雅が言葉を紡いだ。

「でも、どうしたんですか？ いきなりこんなところへ来て。それに、外の見張りは？」

「そら、用があつて来たに決まつとるやる。それに、見張りやつたら何でかは知らへんけど寝とるで」

「寝てる、じゃなくて寝かせた、でしょう？」

「さあ？」

鋭い雄平の突っ込みに、肩を竦めて一成は応じる。

そして、一成は一度息を吐くと、真剣な表情を作った。

場の空気が、凍る。

「俺がここに来たんは、あることを伝えるためや」

「あること？」

雅が首を傾げる。一成は頷いた。

「せや。俺らの中で、二年前の決戦の後、海外に渡つた奴がおるやろ？」

「二人いましたね。第六番《死山血河》ブラリス・トゥ・ダイと第九番《解体屋》スクラップでしたか？」

先程一成の動向を知らない素振りを見せていたくせに、雄平はサリと答える。戦の後に《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンがどこへ行ったのか、彼は一応知っている。もっとも、今現在どうしているのかは知らないが。

一成は、頷いた。

「せや。茉里まりと高広たかひろやな。ゆーても高広はこの際、無視してええ。紛争地域である爆弾狂は相変わらずドンパチしとるらしいし、今回は関係ない」

「ということとは、茉里さん？」

「せや。あのアホ、二年間連絡一切寄越さんかったかと思えば、いきなり一昨日の夜に電話してきよってな。『帰国する』とかほざきよった。かなり思い詰めとったようだな。あの様子やと、どんな無茶するかわからん」

厳しい表情で、一成は言う。雄平も頷いた。

屍で築かれた死の山と、そこから流れ出る血液でできた河。それが、《死山血河》^{フリス・トラ・ダイ}。

快楽で人を殺すわけではない。むしろ、祈るように彼女は刃を振る。だが、彼女の歩いた道には必ず大量の屍が横たわる。

故に、その称号を六の文字と共に彼女は背負っている。

「それに、や。あいつが戦う理由は俺らと同じ怨恨とは別にもう一つある。多分、それも関係しとるんやろうな」

「……それで、どうするつもりですか？ おれたちに止める、とでも言っつもりで？」

「ちやう。逆や」

ヒュン、と風切り音が鳴った。

気づいた時には、雄平の喉元に抜き身の刀、その切っ先が突きつけられていた。

「手え出すな。そう言いに来たんや」

「そりやまた」

両手を挙げ、降参のポーズを取りながら雄平は応じる。

全く、見えなかった。

いつ竹刀袋から刀を取り出し、抜いたのか。一切が見えなかった。

(流石は、《名も無き子供たち》^{ネムレス・チルドレン} 最速の男ってどこか)

神速を謳われる居合い術。彼が親を失った後に一成を引き取ったとある老人が、彼に継がせた殺人剣。

それこそが、彼に 一成に一の文字を背負わせた。

「でも、おれにはどうしようもないさね。茉里さんが行動を起こした時にどうするかを決めるのは、あくまで政府。おれはそれに従うことしかできない」

「それを何とかせえ、って言うてるんや」

「無茶苦茶ですな」

「お前ならできるやろ？」

二人の視線がぶつかり合う。しばらく睨み合った後、先に視線を外したのは一成だった。

「とりあえず、俺の意志は伝えたで。それをどう受け取るかは、お前らの自由や」

「おれたちはともかく、宗次がどういう道を選ぶかはわかりませんよ」

「……………」

何も言わず、一成は背を向けて立ち去っていった。わかっているのだろ。深沢茉里 彼女の目的の先には、宗次がいることを。だからこそ、彼はここに来たのだ。

樋浦宗次を止めることを、頼むために。

「無理ですよ」

「え？」

ポツリと雄平が呟いた言葉に、雅が反応する。雄平は椅子に座り、力のない声で言葉を紡いだ。

「おれは、宗次から大切なものを奪った。そのおれが、大切だから奪わないでくれ、なんて言えるはずがない」

宗次にとって、戦友であった者たち。友達であった者たち。

それを、奪ってきた。奪い続けてきた。

そして、何よりも。彼の理解者を、おれは、この手で……

「悔いることはあっても、謝ることはできない。謝れば全て済むよ。うなことをしてきたつもりは、無い」

後悔は幾度となくしてきた。でも、後戻りは許されない。

戻る道など、すでに絶たれている。二年前。裏切り者の道を選んだ時に。

「だから、今は味方でもいずれば敵になる」

もつとも、この命が果てるのが先か、その未来が来るのが先かはわからないが。

「おれもあいつも、人よりも才能があったせいどころなつた。あいつは自ら望んで。おれは望まれたからここにいる」

「望まれた？」

「樋浦京一郎と同じ言い草になりますが、『そうあるしかなかった』んですよ。選択肢が無いなんてのは、強制と同じです」

持っている力を使うことを望まれ、生き残るためには使うしかな

かった。

それは、強制に等しい。

そしてその果てに人を殺め続け、今の選択肢を選ぶことになった。

「この道が最善だったのかなんて、今もわかりませんよ」

苦笑し、雄平は立ち上がった。十月に入り、外は肌寒くなっている。雄平の体はあまり強くない。だから、上着を羽織る。

着慣れた服の温もりが、ひどく空虚に思えた。

「ただ、選択の時は既に去りました。だから、今は今の最上を考えなければなりません」

今でも思う。あの時、最後まであの場所に残り、戦えばよかったのではないかと。

司法取引によって仲間たちの命の保障を望まずとも、仲間たちが命を落とすことはなかったのかもしれない。

そして、恩人を死なせずに済んだのかもしれない。

だが、それを今考えても詮無いことだ。

「おれと宗次は、いずれ殺し合う。おれはあいつの大事なものをいくつも奪って、あいつはおれの大事なものをいくつも奪ってる。殺し合う理由は、整ってる」

敵同士として、雄平は知略で。宗次は武力で己の敵を屠ってきた。それは即ち、相手の味方を奪うということだ。

そんな二人が仲間にいること。それが既に、奇跡なのである。

雄平は背伸びをし、扉へと向かう。
その背中へ、雅が問いかけた。

「……ねえ、雄平くん。味方から白い目で見られて、かつての仲間には裏切り者と思われて……。時々、叫び出しそうになったりしないの？」

雄平は、立ち止まる。

特室には間接的にしか関わっていない雅や、現場で狙撃手として単独行動をすることが多い鏡花きょうかなどは二年前に敵だった警察や自衛隊の者たちと行動を共にすることが少ないため、存在さえも知られていないことが多いが、雄平は違う。

常に人が集まる場所に顔を出し、参謀として行動する雄平は自然と顔が知られている。そして、彼が《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンの一人であるということもまた、秘密であるはずなのに知れ渡っている。

信じられる者が誰もいない場所で、孤独に立ち続ける。

それは奇しくも、味方が誰もいない孤独な戦場に立つ宗次と似た境遇だった。

「それは」

振り返り、雄平は微笑んだ。

「秘密です。それと、雅さんが思うほど今の場所は悪くないですよ」「どうして？」

「まあ、確かに立場は辛いですけど、この半年のおかげで特室のメンバーはおれたたちのことを認めてくれたようですし。以前の仲間に恨まれているのは少し辛いですけど、今は今の仲間がいますし」

微笑みながら、まんざらでもない調子で雄平は言う。

「生きていればいいことばかりではない。それを工夫するのが人間の知恵だそうですよ。人間兵器が言っていました」

雄平は、再び雅に背を向けて歩き出す。

「たとえそれが泡沫でも、それがおれの現在いまですから」

—

十月の海岸というのは、どことなく寂しい雰囲気を纏っている。

人がいないから、か。

最早彼の代名詞ともなった、漆黒のコートを主とした全身を黒で固めた衣服を身に纏う黒髪の少年　樋浦宗次は、そう結論付けた。

彼が今いるのは、九州のとある海岸だ。九州地方最大のテロ組織の本拠地を叩くために来たのだが、ここにきて上層部が中々決定を下さないので暇を持て余している。

宗次にしてみれば、結局攻撃するのだから迷うだけ無駄　いや、むしろ迷う方が危険だと思うのだが、結局のところ、彼は兵士である。上の決定というものを聞かなければ、動くことを許されない。

「……………」

誰もいない海岸。その砂浜を、宗次はゆっくりと歩いていく。

この半年。色々なことが、本当に色々なことがあった。

学校もろくに行けず、毎日のように日本中を飛び回った。半年前に東京都で起こった、かつての反逆者《名も無き子供たち》ネームレス・チルドレンによる

反乱 チルドレンズ・リベリオン 『子供たちの反逆』。

それをきっかけに急激に増えたテロ活動や凶悪な犯罪。

樋浦宗次は特室の戦闘員として全国を飛び回り、現場で彼らと向かい合った。時には殺し合うことも いや、常に殺し合ってきた。そして、その中で宗次は常に問われ続けた。

『何故？』

自分たちの正義をどうして否定するのか。

どうして、お前はそちら側にいるのか。

間違っていることを知りつつ、どうして

……

「正義は、この世にいくつも存在する。お前たちを否定しない。だがお前たちに今を否定する権利もまた、ない」

彼らの問いに対しての答えを、半ば無意識に宗次は紡ぐ。彼らの想いを否定することはできない。彼らの行為に正義はあるのだろう。だが、今がそこまで悪くないのも事実だ。

この国に生きる大半の者たちは、今の暮らしに多少の不満はあれど、毎日を一定の自由を保障されて生きている。

それを否定することは、世界を否定するに同じなのだから。

(いや、テロリズムというのはそついうものか)

そこまで考えて、宗次は気付く。今まで見てきたテロリストたちは誰しも世界に対して牙を剥いていた。あの《未知》アンノウンもだ。

「人というのは、現状に満足できない生き物なのかもしれないな」

呟く。それは、自分にも当てはまることだった。

英雄。そう呼ばれ始めてもう二年になる。だがその称号は、枷に
しかならない。

今の自分の願いは、銃を捨て、英雄の名を捨てることなのだから。
三年前。あの人が言ってくれたように。

「……宗次」

「ん？ 鏡花か」

海を眺めながら宗次が昔のことを思い出していると、不意に背後
から名前を呼ばれた。宗次が振り返ると、そこには長い黒髪の少女
が立っていた。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第八番、《サジタリアス射手座》丹羽鏡花。

かつては宗次たち、日本政府の敵として。今は、宗次と同じく特
室に在籍する少女だ。運動能力は平均より少し上といった程度だが、
狙撃能力は五輪級と謳われる射撃の天才。

「何してたの？」

独特の、物静かな口調で鏡花は宗次に問いかける。宗次は海に背
を向け、答えた。

「考え事だ。特にすることもないからな」

「考え事？」

「ああ。俺たちが今していることと、俺たちが消してきた思いについて」

「……………」

鏡花が沈黙する。彼女もわかっているのだろう。雄平と違い、鏡花は現場に出てくる。宗次のように最前線とはいかないが、狙撃部隊の一人としていくつもの現場を経験している。相手の言葉を、聞いている。

「宗次は、後悔してるの？」

「どうだろうな。ただこうして考えているくらいだから、割り切れてはいないんだろう」

人間兵器としての、自分の在り方を。

「鏡花はどうなんだ？　こちら側に来て、後悔はないのか？」

「私は、ある」

鏡花は頷いた。今度は、宗次が黙る。

「半年前、《ジェノサイド虐殺者》と《フレッド鉄砲玉》の二人が敵に回った時は、辛かった。雄平はきつと、それをわかってたから、あの戦いで私を外したんだと思う」

そう。半年前、特室の大きな戦力であるはずの鏡花は何故か戦列から外され、本拠地を叩く時も鏡花は後方支援だった。

疑問に思っていたが、宗次は宗次のことで手一杯だったため、聞けなかった。

「でも、そのせいで宗次にまた背負わせた。…………ごめんなさい」

「謝ることじゃないだろう。細木康太が死んだのは、結果だ。俺が戦い、そして奪った。それだけのことだ」

戦いに死はつきものだ。だが、割り切れるものではない。命なのだ。かけがえのない、一つの命。割り切れるはずが、ない。

「俺は忘れないだけだ。それしか、俺にはできないから」

「宗次は、そうやって耐えてるの？」

「俺は雄平や京一郎みたいに頭が良くないから、非効率な方法でしか動けないんだ。もつとも、俺に殺された奴にしてみれば俺のしていることは自己満足なんだろうが」

苦笑する。どれだけ謝られても、やられた側は痛いのだ。謝るという行為は、下手を打てばただの自己満足に成り下がる。

だが、それでも鏡花はそれを否定してくれた。

「そんなことない。宗次が覚えていれば、その人は死なない。それは、いいことだと思う」

「死なない？」

「前に、雄平が言ってた。人は、二回死ぬって。肉体の死と、忘れ去られることで迎える存在の死があるって」

「存在の死……」

鏡花の言葉を、繰り返す。忘れ去られることによって迎える、死。なるほど、そういう意味では確かに人間は二度死ぬ。

だがそれも結局、生き残った者の自らを庇う言い訳だ。

「確かに、そういう考え方もあるだろう。でも俺は、結局自分を許せないからな。俺がしてきたことを許せないなら、どんな行為も無駄なことだ」

開いた右手を見る。皮が擦り切れ、ボロボロになり、硬くなった手。

八年間。駆け抜けてきた日々を示し、己が罪人であることを語る手だ。

「いつそのこと、溺れることができたならよかったのかもしれないな」

苦笑する。三年前、殺戮に溺れ、狂気を望んだ鬼と殺しあった時に気付かされた、自分の本質。それを否定せずに受け入れていればこんな気持ちにならなかったのかもしれない。

機械として、戦うことができたなら ……

「それは、間違い」

再び、鏡花は宗次の言葉を否定する。

「宗次は、守るために戦うって決めて、ここにいる。だったら、溺れちゃいけない」

「……………」

「辛くても、きつくても、自分の意志を持たないといけない。私が知ってる英雄は、そういう人」

「英雄、か」

人殺しを誤魔化すための記号。免罪符になりつつあるその称号。だが、鏡花が言うようにその仮面を被り続ける理由はあるのかもしれない。

「そうだな。鏡花の言うとおりだ」

言いながら、馬鹿だな、と宗次は思う。
いつでも悩んでばかりで、前に進めていない。少しも成長して
ない。

「顔を、上げるか」

でもまあ、それでいいのだろうと思う。
辛いということは、生きて、背負えているということだから。

「本当に、俺は情けない。いつも誰かに迷惑をかけてばかりだ」

「そんなことない。私たちは、いつも宗次に助けられてる。こうし
て生きていられるのも、宗次のおかげ」

「買い被りだ」

宗次が薄く微笑む。しかし、本人はこう言っているが実際に鏡花
たちが特室の一員として生きていられるのは、宗次のおかげとも呼
べる部分が多い。

二年前。宗次とその兄、京一郎の活躍により《未知》^{アンソウ}が徐々に追
い詰められ始めた頃、戦場で雄平と向き合った宗次は彼と正面から
言葉を交わし、そして、雄平の心を動かした。

即ち、あの雄平相手に論理をぶつけて勝利したのである。

そして、組織を抜けた雄平たちが戦争の終結後、特室の一員とし
て生き延びることができるようにと奔走したのも、彼だ。

彼自身は大したことではないと思っっているが、テロリストを味方
に引き入れるなど普通のことではない。やはり彼は、あの《神》を
名乗る絶対者、樋浦京一郎と血を分けた弟なのである。

「俺はきっかけを与えただけだ。その先はお前たちで選んで、前に

進んだ結果。俺は少しだけ、ほんの少しだけ手を貸したに過ぎない」
「そんなこと、無いと思うけど」

鏡花が、若干不満そうに言う。この無表情な少女の感情表現が、最近ようやくわかってきた。

「まあ、それは受け取り方次第だ。……それで、どうしたんだ？
確か、雄平と一緒に例の戦艦で新兵器の確認をしてたんじゃないのか？」

そこで、思い出したように宗次は聞く。本来、宗次たちは東京から九州に来る時に使った戦艦で待機すべきなのである。しかし、宗次は暇という理由で抜け出していた。だが、鏡花は違う。彼女は、彼女専用のOSの新たな兵装の試運転があつたはずだ。

そして、その問いに鏡花はあっさりと答える。

「さつき終わった。今は、美鈴が機体の調整をしてくれてる。雄平は、寝るって」

「自由だなあいつは」

苦笑する。することなどいくらでもあるだろうに、あの男はいつも奔放に振舞っている。ある意味、一番強いのは彼かもしれない。

《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》コンダクター第二番、《指揮者》高岡雄平。

あの樋浦京一郎をして『本物の天才』と言わしめた、絶対的な頭脳を持つ天才。武において一騎当千を地で行く宗次とは対極の、知の天才。

宗次が今現在、最も信頼する戦友だ。

ただ彼はかなり奔放な部分があり、自分の気分が乗らない時は本

気で動かない。まあ、本当に必要な時は必ず動くが。

「だが、あいつらしいといえばらしいな。戦の……殺し合いの前に
昼寝をするとは」

「《未知》^{アンノウ}の時もそうだった」

「そうなのか？」

「うん。『おれは体力が無いから、寝とかないと体力が持たないんだよ』って言うて」

雄平の口調を真似して、鏡花が言う。それが上手かったためか、宗次は少しだけ笑った。

「言いそうだな。というより、今も言っているな」

「うん。雄平は、変わらない」

「そうなのか」

「うん。でも、宗次は変わったと思う」

ん、と宗次が鏡花に軽く問い返す。鏡花は頷いた。

「敵として向かい合ってた時は、もっと冷たかった。容赦が無かった。けれど、今の宗次は、敵であってもただ殺すなんてことはしない。できるだけ、生かそうとしてる」

私たちの時は、そうじゃなかったのに 暗にそう言いながら、

鏡花は言葉を紡いだ。宗次は海の方へと視線を向ける。

「それは、考え方が変わったからだろうな」

「考え方が、変わった？」

「ああ。俺はあの時、《未知》^{アンノウ}がしてきたことが純粹に許せないものであると、取り返せないものと断じていた。殺された者たちの

遺族はそれこそ、俺や京一郎に死による復讐を願っていたから、それを知ってその想いに拍車がかかった」

直接言われたことさえある。あの戦乱の時代、宗次が町を歩いている時、宗次に向かって敵を討ってくれと、何度も何度も頭を下げる人がいたのを覚えている。

そしてそれが、一人ではなく、何十人といたことも。

そして、あの頃の宗次はいくつもの戦争を経験し、戦争というものの異常性を知り尽くしていたから、それを背負ってもいいと思っていた。

憎悪からは、憎悪しか生まれぬ。

そんな単純なこと、今の時代ならば子供でも知っているといるというのに。

だが、そんな中で別に気付いたことがあった。

「だが、その途中で気付いた。復讐、倫理、正義。それもいい。しかし、俺の意志はどうなったのか、と」

人間兵器。そう呼ばれてきた。確かに宗次は兵器だ。そう呼ばれるだけの力を持っているし、本人もそれを受け入れている。

だが、彼はやはり？人間？なのだ。

意志があり、想いがあるイキモノなのだ。

「笑える話だ。その時まで俺は、強くなること以外を考えていなかった」

世界中の戦場を駆け抜けていた頃は良かった。ただ戦えばそれで

良かった。正義も思いも倫理も知ったことではなかった。あくまで宗次は傭兵で、雇われている側。その国の人間でない以上、感情移入など出来なかった。

もつとも、これは宗次のような人間だけに当てはまることだ。宗次は、彼自身が自覚しているように人として大事なものを失っている。そうでなければ、誰が望んで戦場などという人知を超えた殺戮を実現する場所へ行くというのだろうか。

しかし、日本の内乱に参加して、彼は気付いた。

己が育った国で、文化を知り、形態を知るからこそ理解できた。

「相手側の正義。こちら側の正義。二つがぶつかり合う中で、俺には正義がなかった」

悲劇を抱え、日本という国を変えようとした者たちと。

今の幸せを抱え、日本という国を守ろうとした者たち。

その渦中にありながら、樋浦宗次には何も無かった。だから、彼は考えて、考えて考えて、結論に至った。

「そして辿り着いたのが、守ること。強者の力は、弱者を守るためにある。元々、俺は守るために強くなるうとしていたんだ。それで、十分だった」

しかし、そこに矛盾があった。

守る相手。それこそが、矛盾だった。

「そう、あの時はそれで十分だった。だから、俺は《未知》^{アンノウン}と正面から殺し合った。それが、最初の半年だな。《名も無き子供たち》^{ネームレス・チルドレン}と直接対峙する前だ。サクラと出会い、俊彦さんが死ぬ前。『誰かを守っていた頃の俺』」

今思えば、愚かだったと思う。千里ちんりのような例外以外は、宗次を畏怖し、敬遠していた。そんな相手を守ろうとするなど、正気の沙汰ではない。

己を遠ざけ、望んでいない者たちを守る。これほど滑稽なことはないのだから。

「だが、雄平に言われて色々と考えた。だが、結論が出ないままに戦は続く。続いていく。だから俺は、間違っていると知りつつも守るために戦った」

孤独に、身を、心を削って戦う。それが、いかに滑稽だったか。

「そして、結論に辿り着いたのは戦が終わる直前。雄平を説得する直前だった」

あの説得自体は、偶然に近い。雄平と一対一で言葉を交わせたのは、本当に偶然だった。

もつとも、それはすべて京一郎が謀ったことであつたのだが、それは本人と今はもう亡き《未知》アンソウの指導者しか知らない。

「それは、どんなもの？」

ずっと黙って宗次の話を聞いていた鏡花が、口を開いた。宗次は海から視線を外し、鏡花の方を向く。

「今と、明日を守るために戦う」

宗次は、微笑んだ。

「悲劇に溢れてはいても、今を生きる人がいる。ささやかな幸せはある。だったら、俺はそれを守るために戦おうと思った」

この理由も、理想論ではあるのだろう。一部の者にしてみれば、考える価値さえない。

悲劇を経験した者にしてみれば、今は認められないものであり、明日の希望など無きに等しいのだから。だが宗次は、そういった人々だけではなく、毎日を過ごす人々にも目を向けた。

悲劇は、人を惹きつける。

それは、その者が幸福でないから。幸福でないからこそ、人を惹きつける。しかし、人は単純なイキモノではない。

悲劇を経験しながらも、歯を食い縛り、明日を望む人はいる。

そして何より、人は誰だって辛いものを抱えている。悲しい想いをした事がある。結局のところ、《未知》^{アンノウン}は過去にしか目を向けず、抗う今と、奇しくも彼らの名と重なる、未知なる明日を見ていなかっただけにしか宗次には思えなかった。

「人はやり直せる。俺みたいに手遅れな人間でも、こうして何とかやっていけているんだ。今が理想的などというつもりはない。だが、悲劇に抗った人たちの努力を無視して、暴力に逃げて駄々をこねるのは間違いだと思ったんだ」

「でも、それがどうして雄平に裏切りを促すことに？」

「何があいつを踏み切らせたのかはわからないが、俺はただ『誇れ』と言っただけだ」

あの時。互いに銃を持ちながら、決して銃を抜かずに言葉をぶつけ合った時を思い出す。

ただ純粹に互いの信念をぶつけ合った、あの時を。

「《未知》^{アンソウン}は、日本という国と戦った。理不尽に立ち向かった。だから、誇れと、そして生きろと言った。生きて、語り継げと。……それだけだ」

宗次の語る理想論において、犠牲者があまりにも多過ぎる《未知》^{アンソウン}のやり方は認められなかったが、彼らの思いまでは否定できないし、しようとも思っていなかった。

だが当時《未知》^{アンソウン}は半ば敗北に近い状況で、だからこそ宗次は雄平に言ったのだ。

内側から、少しずつ変えていけばいい。

暴力による変革など、結局は押し付けでしかないのだから、と。

宗次は、大きく息を吐いた。

「人が今を生きるためと、明日を願うために今を守る。それが、俺の戦う理由だ」

その言葉を聞き、鏡花が呟く。

「凄い」

そう、目の前に立つ少年の想いを肯定した。

ただ、一つだけ。

少女は、少年に問いかける。

「宗次は、どんな明日を願うの？」

少年は、微笑んで答えた。

「今更、俺に望めるものなんてないさ」

寂しそうに、そう

二

警報の音が館内に響き渡る。だが別に、この戦艦が襲われているわけではない。故に、直接的な危機が起こっているわけではない。だが、ある意味ではもっと厄介なことが起こっていた。

「どうした!」

鏡花と共に、宗次は戦艦の司令室に入る。そこには、十人近いオペレーターと艦長が座すべき場所に座る茶髪の少年がいた。

茶髪の少年　高岡雄平は椅子から立ち上がると、宗次に肩を竦めて見せた。

「どうしたもこうしたも、見ればわかるさね。想定し得る中で最悪の状況だよ」

言いながら、雄平は手元のキーボードを軽く叩く。すると、前方にある大画面に一つの映像が映った。

「……………」

「ナガサキ基地。知ってるよな?」

雄平が宗次に問いかける。宗次は頷いた。

ナガサキ基地は、九州地方にある自衛隊基地の中で最大のものだ。海沿いにあり、規模も大きいため海上戦力も充実していて、国防の拠点の一つである。

映ったのはその場所。しかし、それは明らかに普通の状況ではなかった。

「火の手が上がっているな。テロ組織の襲撃でもあったのか？」

「ご名答。おれたちが叩き潰すはずだった《革命軍》とか名乗る組織が先に動き出しやがった。鮮やかな手並みだったよ。ナガサキ基地が、僅か二時間で制圧された」

「二時間だと？ いくら何でも、それは」

「だが、真実だ」

あまりにも予想外の言葉を聞き、驚く宗次。雄平は言いながら、更に指を走らせた。

映像が切り替わる。それは、ナガサキ基地が制圧されていく様子を映したものだ。

「基地の各地の重要ではない施設を中心に十四箇所の爆破。重要じゃないところを狙ったのは、制圧した後に利用するためだろうな。まあ、爆破の目的が混乱を生み出すためだけだったってのもあるんだろうが」

映像を見ながら、雄平は言葉を紡ぐ。映像の内容は、雄平が言うとおりのものだった。

基地のあちこちで起こる爆発。突然のことに対応が遅れ、混乱する基地内部。だがそこで、宗次には気になることがあった。

「ちょっと待て。これはいくらなんでもおかしくはないか？」

「ん？ 何がだ？」

雄平が、指を止めて宗次に聞く。その表情はとても楽しそうだった。宗次はそんなことは一切気にせず、言葉を紡ぐ。

「軍隊は素人の集まりじゃない。確かに、いきなり基地のあちこちが爆破されるというのは特異なケースだとは思うが、それでも軍隊だ。今の日本の情勢を考えれば、テロ活動など、日常茶飯事ではないが起こり得ることではあつたはずだ」

そう。だからこそ、特室なるものがあるのだから。

雄平は頷き、宗次の言を肯定する。

「お前さんの言う通りさね。たしかに、軍隊なんてのは非常事態に統率が取れてこそ意味があるもんだ。確かに異常事態だったが、通信さえ使えれば何とかできたはずだ。……通信さえ使えればな」

「通信さえ、だと？」

「ああ。二時間で壊滅させられたのは、統率が取れなかったからだ。この時、ナガサキ基地では通信機器が一切使用できなかったらしい」

言つて、雄平は指を走らせる。画面が切り替わり、OSが一機、映し出された。

黄と蒼で染め抜かれた、標準より少し大きめのOS。

宗次の表情が、強張る。

「このOSは……！」

「そう。特異型OSだ。《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第五番、《ノット・ジー・モナス凡才》高

かはしけんたろう橋健太郎の専用機。名を

「

「ゴルゴネス」

ずっと黙っていた鏡花が、そのOSの名を紡ぐ。雄平は頷いた。

「ギリシア神話の怪物ゴルゴン三姉妹の名を冠する、特異型OSだ。その能力は、宗次。お前なら身に染みて理解しているだろ？」

「ああ。ジャミング、だったな？」

「そうだ。あらゆる機器に干渉し、不調を引き起こす。全力を傾ければ、半径5キロ四方の通信機器の使用を完全にシャットアウトすることさえできる。敵味方お構いなしつてのが、辛いところだけだな」
「だが、ある意味ではもつとも厄介な兵器だ」

全くだ、と宗次のその言葉に雄平は同意する。通信のシャットアウト。それは、使い方によっては最強の武器になり得る。

一騎当千の働きができる宗次ならば話は別だが、普通、戦場で孤立すれば生き残る術はない。それを防ぐ、そのための陣形であり作戦なのだから。

だが、通信手段を奪われれば、陣を維持することさえできなくなる。

「やってる側は、予め四機でワンチームになるように作戦を練っていた。統率が取れなくなり、混乱するだけの軍隊なんて烏合の衆もいいところ。ムカつく話だが、ずっと昔におれが使った戦法と同じだよ」

「そういえば、そうだったな」

「あの時はお前さんに戦況を覆されたけどな」

雄平が肩を竦める。奇しくも、今回の作戦は雄平が《未知》^{アンノウン}時代に一度使った作戦と同じものだった。ただ、以前は樋浦宗次という規格外が一人で大暴れして、痛み分けとも呼べる状況にもっていつ

た。

だが今回は、相手の策が的中している。

「連携を奪われた状態での、OSによる奇襲。成功しない方がおかしい」

「……それで、基地の人間は？」

「大半が退避した。向こうは人質を取ったなどとは言っていない。

……おそらく、逃げ遅れた奴は全員殺されたんだろうよ」

「……………」

沈黙が、空間を支配する。やるせない気持ちが、襲ってくる。

だが

「上の決定は？」

「俺たちに出動許可が出た。この、大神美鈴が造った戦艦 白浜で早急に基地を奪還しろ、だそうだ。雅さんには先に準備してもらってる。相手の生死は問わないんだと」

デッド・オア・アライヴ
「生死問わず、か。わかった。出よう」

宗次は、頷く。そう、立ち止まることはできない。

常に歩き続ける。それが、彼らの選んだ道だから。

そんな風に宗次が決意をする。すると、雄平がだが、と言葉を紡いだ。

「今すぐじゃないからな。基地に攻め込む以上、色々と準備があるし、まだ伝えてないこともある。大体お前、作戦も聞いていないだろ」

「む」

「即断即決もいいけどな、落ち着くべき時は落ち着け。……で、次だ」

雄平が再び別の映像を映す。そこに映っているのは、見慣れないOSたちだった。それを見て、鏡花が呟く。

「見たことないOS」

「ま、そうだろうな。こいつは日本じゃまず見ることがないOSだ。おれも大神美鈴から教えられるまでわからなかったしな」

雄平が苦笑する。そして、宗次に目を向ける。

宗次は、睨むように画面に映るOSを見ていた。そして、無意識にそのOSの名を紡ぐ。

「ヤグリム」

「さっすが。よく知ってんな？」

雄平が茶化す。宗次は、鋭い視線を雄平に向けた。

「第三期型OS クーロン の改造機 ヤグリム ……以前、戦場で向かい合ったことがある。六年ほど前だが」

「へえ」

「雄平。いい加減に茶化すのをやめろ」

宗次が鋭い言葉を飛ばす。だが雄平は、薄く笑ったまま。宗次は、その雄平に対して真剣な言葉を紡ぐ。

「あれは、シベリア連邦の軍が使用しているOSだ。資本主義の日本とは合わない共産主義国。その国のOSが何故、日本にある？」

「何故も何も、革命軍が取引してたってことだろ。シベリアと」

雄平が肩を竦める。だが、これは決して単純なことではない。

シベリア連邦　日本の北。ユーラシア大陸の北部にあり、世界最大の国土を持つ国家だ。現在、アメリカ合衆国やヨーロッパ諸国からなるEU連合を中心とした資本主義派と、中華帝国と共に共産主義派として半ば対立している国である。

無論、アメリカ合衆国、シベリア連邦、中華帝国、EU連合すべてが国連に加盟している。しかし、加盟しているからといって無条件に手を取り合えるわけではない。

冷戦。かつて火のない戦争と呼ばれたその状況が、再び起こっているのだ。

その中で、アメリカの属国に近い日本は、シベリア連邦や中華帝国にとっては喉元に突きつけられた刃に等しい。共産主義派にしてみれば、何とかしたい目の上のこぶだった。

そして、今の日本はテロによる混乱の最中にある。それを考えるともむしろ、干渉が遅すぎたぐらいであるのが現実だ。

「一応、世間的にはテロという形で報道させる手はずだ。だが実態は」

「代理戦争」

「『』明察」

宗次の言葉に、雄平が頷く。シベリア連邦　国力という点では若干アメリカ合衆国に劣るものの、冬將軍を知る屈強な軍隊を要する大國。

ここでもし、日本と同盟を結んでいるアメリカ合衆国が干渉してくれば。

日本は、アメリカ合衆国とシベリア連邦の代理戦争を行う地となる。そうなれば、二年前まで《未知^{アンノウン}》によって引き起こされた第一次テロ戦役とは比較にならない規模の戦いが展開される。

今の日本は、第一次テロ戦役を始めとするテロ活動によって人口

が一億人を切っている。この状況で代理戦争でも起これば

「もしこの国で代理戦争が起きれば、不死鳥みたいにしぶとく命を繋いできたこの国は、完全に命を絶たれる」

「……………」

雄平の発言は、誇張ではない。真実だ。この戦いは、それだけの危険を孕んでいる。

沈黙する司令室。オペレーターたちも、宗次たちの会話を聞いて危機感を募らせていた。

そしてそんな中、雄平が頬を掻きながら面倒臭そうに言葉を紡いだ。

「……………」だが、問題はそれだけじゃないんだよな」

「それだけじゃないだと？」

「一番最初の映像を忘れたのかよ？ いるだろ。厄介なのが。《名^ネも無き子供たち^{イムレス・チルドレン}》ってのがさ」

宗次はハツとなる。最初に見せられた ゴルゴネス の姿。それを思い出す。

そして、そこには矛盾がある。《名^ネも無き子供たち^{イムレス・チルドレン}》はあくまで日本の変革を願った者たちだ。しかも、彼らは総じて切れ者である。ゴルゴネス のパイロットであろう高橋健太郎などは、優秀と呼べる人物だ。二人の会話の図式を、読めないはずがない。

あそこに《名^ネも無き子供たち^{イムレス・チルドレン}》がいる必然性が、存在しないのだ。

「しかも、だ。ある意味健太郎さんよりも厄介な奴の姿も確認してる」

本気で鬱陶しそうに、雄平はキーボードを叩く。切り替わる画面。映されたのは、またしてもOS。

そしてそれは、何度目かもわからない驚愕を宗次と鏡花に与えた。

「……………」

「ナイト……………」

沈黙する宗次と、その機体の名を呼ぶ鏡花。画面に映ったのは、巨大な盾と剣を装備する、鋼の鎧で全身を包んだ重騎士のようなOSだった。

「そう、《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第七番《ジョーカー切り札》つるがほつらい鶴賀宝来の専用機

だ。ナガサキ基地が短時間で制圧されたのは、何十機という ヤグリム よりも ナイト によるところが大きい。元々、多数対一を想定して造られた機体だしな」

「美咲さんの護衛のための機体」

「そう、頭目の護衛が主な任務だったから、手に持っている盾アイギスの展開するエナジーシールドの硬さは半端じゃない。しかもあれ、砲撃もできるしな。手に持つてる巨大な剣、リパルサーも攻撃力って点じゃ相当なレベルだ」

うんうんと、雄平が頷く。宗次も、雄平の言には納得できる部分が多かった。

鶴賀宝来のOS ナイト。騎士の名を持つあのOSは、癖の強い専用機が多い中で一番バランスがいい。能力的にはサクラのトウランドット や烏丸一成の 武士道 などのほうが上であろうが、先の二機は近接戦闘しかできない。その点、近接、中・長距離戦すべてをこなせる ナイト のバランスの良さは随一だ。

指導者を守る騎士 それが、あの機体の存在理由であるから、それはある意味で当然なのかもしれないが。

「ノット・シーニアス ジョーカー《凡才》と《切り札》……何故シベリア連邦に協力しているかわからないが、楽な相手ではなさそうだな」
「全くだ。その上敗北でもしてアメリカが干渉してきたら、取り返しのつかないことになっちまうしな」
「負けられない」

鏡花が呟く。だが、その言葉は今更呟くような言葉ではない。

「いつだって俺たちは負けられない戦いを経験してきた。今回は少し厳しいだけ。問題はない。何も変わらない」

そう。辛い戦いは、今更だ。

いつだって、負けられない戦いをしてきたのだから。

宗次の決意。それを見た雄平は満足そうに頷くと、手を叩いて言葉をついだ。

「とりあえず、おれからは以上だ。作戦は追って連絡するから、とりあえず二人とも待機」

「わかった」

「うん」

宗次と鏡花が頷き、そして司令室を出て行く。その姿を見送ってから、雄平は呟いた。

「きな臭いよな……。この、不確定な因子が多過ぎる状況。まるで、二年前に戻ったみたいだ。あの男の相手をしていた頃に……」

思い出す。絶対者を名乗る至高の天才。彼の策は、いつだって複

雑に絡み合う蜘蛛の巣のように形成されていた。今回の状況は、良
く似ている。

「……一応、その辺の調査も依頼しとくか」

呟いて、雄平はポケットから携帯電話を取り出した。
電話が繋げられる音。そして、相手が出る。

『なんや？ 追加の任務でもできたんか？』

相手は、面倒臭そうにそう言った。

三

戦艦 白浜。半年前の戦いから、百人近くにまで増員された特
室。その技術者としてその才能を振るう大神美鈴の作品だ。

大きさは従来のイージス艦を遙かに上回っており、OSの最大収
容数は五十を超える。また、甲板に設置された巨大なレールガン
電磁投射砲を中心とした火力も圧倒的で、現時点の自衛隊が保有
するあらゆる戦艦よりも能力が上である。

普通なら、戦争放棄を謳う日本が保有することは許されないであ
ろうレベルの兵器だが、これを保有するのはあくまで特室であり、
使用するのも特室。即ち、保有しているのは《イージス》という扱
いになるため、現時点で問題はない。

その 白浜 の中で、半年前の『チルドレンズ・リベリオン子供たちの反逆』の後に自衛隊
などから新たに配属され、結果として百人近くになった 以前で
あれば行方不明の室長を合わせて僅か五人（別に一人、非常勤がい
る）だった 構成員たちが忙しく駆け回っている。

現代のテロ活動は組織的で人員を割いた大規模なものが多く、すくに対処できる立場にある機関、特室に増員が為されたのだ。

「……………」

無言で、宗次はその様子を眺める。そして、軽く息を吐いた。正直、宗次にとって今の状況はあまり好ましいものではない。

この半年。ろくに実戦経験もない者と共にテロの鎮圧に当たり、足を引つ張られた拳句に仲間が死ぬという現実を彼は何度も見せられた。彼自身はそんな彼らを足手纏いなどとは少しも思っていないのだが、現実は厳しい。

相手は死を恐れず、むしろ目的のためなら喜んで命を投げ出す者たち。それに対し、こちらはいくら訓練を積んでいるといっても死ぬ覚悟などない。そうなれば、覚悟の差が如実に現れる。

だが、二ヶ月もすれば味方側の死者は極端に減った。元々、第一次テロ戦役を経験している国である。二年の月日が感覚をボケさせたが、それを思い出しさえすれば自ずと動けるようになる。

だがそんなことは、問題ではなかった。

元々、宗次が一人で戦っていたのは、自分一人が矢面に立つためだ。守るために、巻き込まぬために。それが彼の戦う理由の一つであった。

だから正直、今の状況は歓迎できない。

自分一人が傷つくのならそれでいい。傍から聞けば、独り善がりですみしい想いだ、宗次はそれを実現できる。できてしまう。だからこそ、彼は一人だったわけだが

「宗次くん。 クライスト の調整、頼むよ」

「美鈴ちゃんと呼んでるわ」

「ほら、急いで」

半年間共に戦い、同じ経験を共有してきた人たち。最初は宗次のことを畏怖していたが、今では気安く話しかけてくれる。そして、慣れないその状況が余計に宗次の調子を狂わせる。

「……はい」

言われた通り、宗次は美鈴の許へと行く。黒い外装と翼を纏う、漆黒のOS。胸部に黒い球体が埋め込まれた、スマートでありながら威圧感を感じさせる、死神の如きOS。

救世主の名を持つ機体、クライスト。宗次の専用OSだ。そして、その機体のすぐ前では金髪碧眼の、イギリス人クォーターである、白衣を着た少女　大神美鈴がいる。

「美鈴」

「あ、宗次さん」

宗次が呼びかけると、美鈴は振り返って微笑んだ。年齢的には、宗次よりも一つ下の少女。普通なら高校生として過ごすべき年齢だ。しかし、彼女は学校ではなく、ここにいます。

OSという、規格外の兵器を理解できる数少ない人物の一人として。

「半年前は未完成だった重力砲も完成させました。連射することは無理ですが、十分間に三、四発ぐらいは撃てると思います」

「重力操作か。理論は読んだが、全く理解できなかったぞ？」

「あはは……」

呆れたように言う宗次に、美鈴は苦笑して返す。そう。クライストの主砲である胸部の重力砲は、重力操作という常識離れた

技術を用いている。

宗次にとつては自分の命を預ける兵器。故に、美鈴から理論を書いた論文を受け取って目を通したのだが、少しも理解できなかった。状況整理などの頭脳はともかく、単純な、俗に言う『勉強』と呼ばれる種類の頭脳労働が、彼は苦手なのである。というか壊滅的なのだ。

「ただ、仕方ないと思いますよ。この兵器が生まれたのは、偶然ですから」

「偶然だと？」

「はい。私の描いた理論は、確かに筋は通っているんです。でも、実現するにはもっと時間がかかるはずでした。しかし、シンクロニティ・システムと組み合わせることで現実に完成しました」

「偶然……」

「よくある話ですけどね。化学や開発の世界では」

美鈴が苦笑する。そして、チラリと、自分たちの後ろで動き回っている構成員を見た。

そして、宗次に問いかける。

「宗次さんの目から見て、彼らはどうですか？」

「どうと言われてもな。仲間だろう？」

「はい。私もそう思います。正直、手を貸してくれる人が増えたおかげで大分、私の負担も減りました。最初の頃は雅さんと二人でやってましたし」

美鈴が苦笑する。半年前の、『チルドレンズ・リベリオン子供たちの反逆』の後に特室に加わった美鈴は当初、雅と共にOSの調整及び開発を一手に引き受けていた。しかし、元々雅は生物学方面に秀でた人物であり、技術者タイプではない上、非常勤であるためにいつもいるわけではなかつ

た。

だから、美鈴の負担はかなりあったわけだが、今は改善されている。

しかし、それでも。美鈴としても辛い部分がある。

「仲間が増えたことは嬉しいです。一人ではできないことも、数が増えればできるようになり、時間も大幅に短縮できます。でも、数が増えたせいでこちら側に犠牲者が出てしまっんですよね……」

「ああ。そうだな」

宗次が頷く。特室側の犠牲者。発足より二年間、特室の構成員としては零だったその数は、この半年で数十人。正確には、二十四人となっていた。

「昔は、雄平が指揮する中で自衛隊や警察は俺と鏡花の援護に限定されていたから、まず死ぬことはなかった。『チルドレンズ・リベリオン子供たちの反逆』は例外的に自衛隊が前線に出たが、それは相手がOSを持ち出してきたから。武器を持った程度の者たちが相手なら、俺一人で事足りた」

無茶苦茶な論理であるが、それがすべての真実である。鏡花の狙撃を主とした、宗次への援護。それと条件さえ整えれば、宗次にとっては数だけのテロ組織など相手にならなかった。そもそも、彼の兄が望んだ宗次の力は、そういうものだったのだから。

だが、数だけでなく質を増えた者たちによる『チルドレンズ・リベリオン子供たちの反逆』のものをきっかけに、特室の構成員は増員された。普通、増員が為され、鍛えられた場合はそれに比例して犠牲者は減るものだ。無論、敵側の犠牲者は増えるわけではあるが。

しかし、樋浦宗次という特殊な存在と、高岡雄平という至高の指揮官の在り方が、その方程式を覆していた。

数が増える。それによって犠牲者は減る。だが、出てしまっのだ。

今まで出なかつたものが、出てしまう

「半年前までは、こんなことを考える必要はなかつたんだがな」

「でも、これがきつと本来の在り方なんでしょうね。樋浦宗次という一人の英雄に頼りきるのではなく、この国の人間がその信念を持って戦う。それが、本来の特室としての在り方なんでしょう」

「わかっているさ。俺は、神様じゃない。結局は、人よりも命を奪う術に長けた、ただの人間だ。何もかも守れるなどと、思つてはいない」

現実には、『チルドレンズ・リベリオン子供たちの反逆』以前の事件やテロ活動で特室に協力してくれた警察や自衛隊の人たちを死なせたことはいくらでもある。そして、テロ活動を行っている、同じ国の民の命などいくら奪ってきたか。

「だがそれでも、正直辛い」

名前は愚か、顔さえも覚えきる前にこの世を去つた仲間たち。残された者にできるのは、覚えていることだけ。だがそれさえも、満足にできない。

雄平などは全員の顔と名前を覚えているらしいが、宗次にそんなことはできない。今でさえ、十人も名前を覚えていないのが現状だ。

「割り切れれば楽だが、そうもいかない。……難儀だな。本当に」

そう呟き、宗次は クライスト のコクピットの扉を開く。そして、そこに足を踏み入れながら、美鈴に言った。

「だからせめて、俺は戦おう」

そして、彼がコクピットに座した時、計ったかのように通信回線が開いた。その先にいるのは、雄平だ。

『準備はいいか？』

「ああ。万端だ」

『そりゃ上等だ。鏡花も準備はいいらしいから、作戦の説明を始めるぞ』

「ああ。頼む」

宗次が頷く。そして、音声だけの雄平は宗次にこう指示を出した。

『お前は、単騎で敵陣のど真ん中に突っ込め』

四

策としては、正攻法を好んで用いる雄平らしい策といえただろう。

まず、戦艦 白浜 を洋上に出し、ナガサキ基地を攻撃できる場所へ配置する。無論、白浜 の射程内ということは相手の射程内ということになるが、白浜 はかの オーケストラ が装備するエナジーフィールドよりも強力なエナジーフィールドを装備している。ただし、前面に展開すれば甲板のレールガンが使えなくなるが、

白浜 の兵器はそれだけではない。故に問題はない。

そしてそれに対し、基地の正面からは雄平と雅が駆る特異型OSオーケストラ を中心に特室のOS合計三十四機で攻勢をかける。正面と背後からの挟撃。だがしかし、これだけではかなりの被害が予測される。故に、雄平は二つ、奇策を用意した。

そしてその一つが、宗次と クライスト による攪乱だ。かくらん

戦艦 白浜 に装備されている、OS射出用のカタパルト。それ

を用い、クライストを敵陣のど真ん中へ降ろし、相手が混乱している隙を叩く。

異常などというものではない。完全に常軌を逸した作戦だ。普通、考えさえしない。

だが、樋浦宗次という規格外にして最強の駒がそれを請け負う時、この策は最上の策となる。

『飛行ユニット、起動率安定。エネルギー流動率、百%』

『カタパルト、起動準備。……完了』

『クライスト、出撃準備完了です』

オペレーターたちが、雅と共にオーケストラに騎乗している特室の参謀、雄平にそう報告する。その音声は、宗次にも届けられていた。

宗次は目を閉じて、その言葉を聞いている。雄平が頷いているのが、音声だけの通信機の向こうから伝わってきた。

そして、雄平は宗次に向かって言葉を送る。

『宗次。わかってると思うが、最初から全力でいけよ。確認してるだけで ナイト、ゴルゴネスに加えて ヤグリム 四十一機もいるんだ。ナガサキ基地のOSと洋上戦力、航空戦力を合わせればとんでもない物量だぞ』

「わかつてる。だが、必要なんだろう？ それに、鏡花も援護してくれている。だったら、問題ない」

『まあな。……死ぬなよ』

真剣な声色で、そんなことを言ってくる。宗次は苦笑した。

「作戦を考えた奴が言うことじゃないだろう？ 大丈夫だ。俺はま

だ、死ねない」

そう返事を返し、宗次は クライスト に内蔵されたシステムを起動する。

「第一リミッター、解除」

シンクロニティ・システムと呼ばれる、人と機体が同調するシステムを。

「……第二リミッター、解除」

そして、『同調』から『同化』へと危険度と共に力を上げる装置を発動する。

オペレーターたちが、目を見開いて驚愕する。計器に映されていた、尋常ではなかった機体の力を表す数値。それが、更に大きく跳ね上がったためだ。

全長三メートル強と、OSの規格としてはむしろ小さい側に入るクライスト。しかし、その力はあらゆるOSの力を超えていた。そして、コクピットのみに見えるシンクロニティ・システムによる同調率が示される。

同調率 百十七%。

『よし、出撃だ！』

雄平が叫び、それによって我に返ったオペレーターたちがカタパルトを起動させる。

甲板が開き、そして、轟音が響く。

「クライスト 発進！」

オペレーターの声。それを聞きながら、宗次は クライスト で外に出た。射出の勢いを利用しながら、飛行ユニットを起動させ、体勢を立て直す。

そして、それとほぼ同時に クライスト に向かって凄まじい数の砲撃が浴びせられた。 クライスト は半年前の『チルドレンズ・リベリ子供たちの反逆』の際に出撃して以来、オーケストラ と共にいくつものテロ組織を潰してきた。姿が見えた瞬間に攻撃する それは当然の判断だろう。

だが、通常のOSならばともかく、クライスト を破壊するにはミサイルをただ叩き込む程度では足りない。

「エネルギーシールド、展開」

宗次が呟く。瞬間、クライスト の周囲の空間が一瞬、歪んだ。そしてその直後、クライスト を狙っていたミサイルが、着弾する。

爆発と、立ち上がる黒煙。OSは確かに現代最強の兵器だが、ミサイルともなれば一発耐えるのが精々だ。今 クライスト を襲ったミサイルは六発。普通なら、粉微塵に クライスト は吹き飛んでいるはずだった。

そう、普通なら。

漆黒の外装を纏う、死神の如きOSは、黒煙が晴れた中、無傷で宙に浮かんでいた。

そして、クライスト が動く。エネルギーシールドを消して、

「お返しをしようか」

呟くと同時、胸部の球体が輝きを放つ。漆黒の輝き。そして

漆黒のブラックホールが、空を薙いだ。

ミサイルの設置された砲台が、押し潰される圧力と解放される圧力と同時に襲われ、砕かれていく。この時、宗次は洋上の戦艦を敢えて無視していた。飛行ユニットはエナジーの消費量が多い。クライスト 自身も重力砲などの影響で標準より多くなっている。故に、本番ではない洋上戦をしている余裕は流石にないのだ。彼の目的は、OSたちとの地上戦なのだから。

それに、洋上戦力の駆逐も雄平の策には組み込まれている。そしてそれは、宗次の役目ではない。

地上戦の邪魔になるであろう、護衛艦を中心とした洋上戦力。それらを駆逐するのは。

そして、洋上戦力の照準が クライスト に向けられる。いかにクライスト のエナジーシールドが最新鋭でも、多方向から一斉射撃をされれば、崩される。

「……………」

だがそれでも、宗次は冷静だった。しかし、だからといってエナジーシールドの再展開さえしようとしないうところは妙だ。

洋上戦力 数々の戦艦と、基地の砲台が砲門を開ける。

そして、それらが クライスト に向かって放たれる瞬間。

白い閃光が、空を駆けた。

同時に、鋭い振動音も響き渡る。

そして、瞬きの時間の後、洋上に展開されていた十二隻の護衛艦の一つが、火柱を上げて爆発し、沈んでいく。

突然のことに、護衛艦を操る者たちは驚き、砲撃を中止する。そ

して、宗次が機体ごと振り返ったその先、戦艦 白浜 の上空に、クライスト の黒い翼のような飛行ユニットとはまた違った、白い翼のような飛行ユニットで浮遊する機体がある。

オレンジと黄色で染め上げられたその機体の名は、アルテミス。

狩猟の女神の名を冠する、丹羽鏡花の専用機だ。その右手はアルテミス の全長よりも長い、黒いランチャー ECカノンと呼ばれるものを持っている。撃った後の反動が強すぎるためにグリッブが付いており、左手でそれを握っている。

再び、閃光が迸る。今度は、基地内にある砲台の一つが火柱を上げ、吹き飛んだ。

「流石だ」

宗次はそう賛辞を贈ると、自身も左腰の装備された主武装の一つを抜いた。左右の腰に一本ずつ装備されたイーストブレイドとは別の、以前はガンライフルだった長距離武器。

ブレイム。レールガンの理論を応用し、大きさはアサルトライフルよりもやや小さめの、プラズマ化した弾丸を秒速七kmで撃ち出す兵器だ。その威力は、ガンライフルなど軽く上回る。

それを構え、宗次は引き金を絞る。

平行に並べられたレールのような銃身。そこにプラズマが生じ、そのプラズマは磁力を利用して放たれる。

一分間に六〜十二発。それが今のブレイムの限界だ。だが、それで十分。

ブレイムの弾丸を受けた護衛艦が、撃沈する。それを確認すると、宗次は クライスト を動かし、敵陣へと飛び込んでいく。

それを止めようと、護衛艦が クライスト を狙うが、アルテ

ミス が放つECカノンによる砲撃を喰らい、邪魔をされる。

クライスト は、護衛艦を完全に無視して基地内に入る。そして、胸部より重力砲グラビティ・キャノンを放って基地内の砲台をいくつか片付けると、地面に降り立った。

静寂が、流れる。たった二機のOS。それにより、護衛艦が三隻葬られ、二機のうち一機は無傷で基地のど真ん中に降り立った。

そんな、ありえない状況では流石に動きが遅れる。

そして、静寂の中、クライスト のコクピット内に雄平から通信が入る。

『流石さね。それじゃあ、おれたちは今から攻勢に入る。多分、』

ゴルゴネス のジャミングで通信はできないだろうから、こつから先は自分の判断で動けよ』

「わかっている。司令室を叩けばいいんだっただな？」

『余裕があればな。そっちには ナイト がいるだろうから、無茶すんなよ。じゃあな』

通信が切れる。そしてそれとほぼ同時に、クライスト を無数の弾丸が襲った。着弾寸前で反応し、クライスト はエナジーシールドを展開する。

見れば、数十機という ヤグリム と、ナガサキ基地に配備されていたのであろう クラフト、クローン といったOSの姿があった。

宗次は一度、大きく息を吸う。そして、クライスト の右手に持つブレイムとは別に、左手に逆手でイーストブレイドを構えた。

「来い」

短く、宗次は呟く。それが聞こえたわけではなかるうが、クラ
イスト を取り囲むOSたちも動いた。

宗次はエナジーシールドを解除する。展開した状態だと、動きが
制限されるのだ。

引き金が引かれるアサルトライフル。それをすべて流れるように
動くことで避ける。

そして、死神が攻勢に入った。

同じ頃、洋上では護衛艦と砲台を相手取り、アルテミス が戦
いを始めている。

半年前の『チルドレンズ・リベリオン子供たちの反逆』以来、最大規模の戦いが幕を上げた。

五

爆発によつて起こる振動。建物が揺れ、その振動が伝わってくる。

「おおー、派手にやっとなるなあ。どいつもこいつも。若いなホン
ト」

笑いながら、竹刀袋を背負った青年 烏丸一成は呟いた。無論、
音量を絞ることは怠らない。一応、隠密行動中なのだ。

もっとも、廊下に血塗れの死体をいくつも転がしておいて言うこ
とじゃないが。

(にしても、妙やな)

ヒュンという風切り音を響かせ、刀を振ることで血糊を取りながら、一成は内心で呟く。

（雄平の話やと、ここにおるんは《革命軍》とかいうこつ恥ずかしい名前乗つとるアホどものはずや。せやけど、これはどういうことや？）

一成が自分の足下。雄平に斬られ、絶命している男たちを見る。その者たちは、どう見ても日本人ではなかった。

（ハーフとか、そんなアホな話やなさそうやな。こいつら、シベリア語で話しとつたし）

先程、見つかってしまったので斬つた時、この男たちはシベリア語でこちらに話しかけて来ていた。まあ、銃を向けられていたわけで、話しかけられたといっても友好的なものからは程遠かったが。いきなり撃たれそうになつたし。

ちなみに一成がシベリア語を理解できるのは、彼が大学でそれを専攻しているからである。軽薄な態度が目立つが、実は運動神経だけでなく頭脳もかなり優秀なのだ。

そして、殺す直前の彼らが言っていた。

『何だ貴様は！』
《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》は今戦場に出ているはずだ！
何故、ここにいる！』

恐怖に震える声で、そう言っていた。それを聞いた瞬間、反射的に一成は彼らをぶつた斬つたわけだが……失敗だったかもしれない。

（俺を子供と呼ぶか。まあ、二十二やし、三十超えてるようになしか見えないこいつらには子供に見えるんかもしれんけど）

そんなことを内心で呟く。だが、彼は少し勘違いしていた。

一成の身長は高い。百八十近くはある。だが、彼は何というか、秀囲気が柔和なのだ。それに、顔つきも若干幼いので、男たちには二十に満たない年齢に見えたただけだ。

だが、だからといって《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》に行き着くはずがない。

まして日本人でなくシベリア人なら尚更だ。

（きな臭いな。何や、この状況？ 《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の二人は確かにここにおる。健太郎も宝来も何考えとるか知らんけど、OSがあるんやから間違いない。せやけど、手を組んでる連中が二人の顔を知らんやと？）

そう。それが疑問だ。おそらく、先程の男たちは『《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》と呼ばれる日本人の子供がいる』程度の情報しか持っていなかったのだらう。だから、一成を見つけた時に《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》かどうかを疑った。

だがそれは、あまりにも妙だ。

おそらく、シベリア軍人であろうこの者たちは、『《ネームレス・チルドレン革命軍》に協力しているのだらう。実際、ここに来る途中で何人か日本人も見かけた。

だが、協力関係にあるなら何故《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》の顔を知らない？

存在を知っているというのに、何故だ？

（ホンマ、意味不明な状況やな。本来やったら面倒臭いし全力で逃げるとこやけど、そうもいかんか。《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》も関わるとるしな）

いつもなら雄平の依頼であつても逃げているところだが、そうも
いかない。かつて、仲間だった彼らがしていること。それを見過
せない。

「ホンマに、何を考えとるんや？」

声に出し、一成は呟く。

「お前らがしとることの先にあるんは、他国による支配や。俺たち
以上の地獄を、他の奴らに見せる気か？」

その背中に、修羅の如き殺気と闘気が宿る。

「返答次第では、生かして返さんぞアホども」

彼の脳裏に浮かぶのは、二人の戦友。

想いは同じはずだった。バラバラの方向を向いていても、
《ヘレス・チルドレン無き子供たち》の根本的な想いは同じだった。

即ち、自分の地獄をもう誰にも味わわせないこと。

それが、自分たちの信念だったはずなのに。戦友たちは、それを
裏切ろうとしている。

だから、真意を確かめなければ。

そう思い、一成が歩き出した時だった。

「中々、過激な発言だね」

コツコツと靴の音を響かせ、一人の男が現れた。一成は、反射的
に柄に手をかける。

だが、男が誰かを認識した瞬間、一成の表情は驚愕に彩られた。

「久し振りだね。烏丸一成くん」

武装しないのを信条としているはずなのに、何故かその右手に拳銃を持った男が、微笑んだ。刹那、凄まじい音が響く。

床を砕かんばかりの勢いで、一成が床を蹴った音だ。

右手で柄を握り、左手で鞘を握り締め、居合いの体勢に入り、一成は絶叫する。

「樋浦、京一郎ッ！」

そこにいたのは、彼にとっては生涯の敵。

信念のすべてを砕いた、謀略の天才。

己が意のままに盤上を統べる、絶対者。

樋浦、京一郎。

|| || || || ||

流れ出る血。立ち上がる火柱。

轟く爆音。響く絶叫。

それを眺める少女は、ついに、その決断を下す。

「今こそ、約束を果たそう」

思い出の、紅のバンダナを頭に巻いて。

少女は、呟いた。

第一章「殺戮兵器」（後書き）

随分と遅くなりました。すみません。第三話第一章、楽しんで頂けたでしょうか？

今後は一週間に一度くらいのペースで進めたいと思います。

感想、アドバイス、お待ちしております。
ありがとうございました。

第二章「ECカノン」（前書き）

【ECカノン】（Electron Converge Cannon）

電子収束砲。電子砲をランチャー型に改良した兵器の名称。

丹羽鏡花の専用機 アルテミス の主武装。 アルテミス の全長が三・四四メートルなのに對し、ECカノンは全長三・六メートルと、アルテミス よりも巨大。無論、放たれる弾丸による反動も凄まじく、それに耐えるために左手で握るグリップがある。

理論は単純で、ランチャーに装着したバッテリーの電子を収束し、高密度のエネルギーとして放つというもの。また、オーケストラも名称は違うが機体内部に同じものを装備しており、こちらは機体内の電子を収束して放つようになっていて、

OSが装備できる兵器の中で、重力砲と並んで現時点最強の兵器である。

丹羽鏡花【これは狙撃じゃない。これは、爆撃】

第二章「ECカノン」

零

何が起きたのか、最初はわからなかった。
振り抜いた刃。確実に相手の首を落とすはずの、必殺の一撃は、届かなかった。

否。

届いてはいた。刃があれば、確実に相手の首を斬り飛ばしていた。
そう　刃があれば。

「なっ……!!」

一成の瞳が、驚愕で見開かれる。振り抜き、首の隣で止めた刃。
その刀身が、なくなっていた。
ガキンと、背後から音が響く。折れた日本刀の刀身が、床に突き刺さった音だ。

クスッ。

目の前の、白いスーツをその身に纏う男が、微かに笑う。一成は、本能的に距離を取った。その際、刃を失った柄を投げ捨てる。

「何をしよった？」

煙を吹く銃口と、それを持つ男を交互に見ながら、一成が問う。

男 京一郎は、薄く笑った。

「難しい話ではないよ。キミの刃の軌道と振り抜かれるタイミングを読み、それに合わせて銃弾を刀身に当てただけのことだ。大したことじゃない」

「ふざけるんじゃないで。そんな馬鹿げたこと、できるわけがあらへんやろ」

「できるから、こうしているんだよ」

一成を見下したような笑みを浮かべる京一郎。それを見て、再び一成の感情にスイッチが入った。

竹刀袋から、一瞬で二本の小太刀を取り出す。片方を逆手で持ち、一成は右半身の体勢になる。

その様子を見て、京一郎は感嘆の吐息を漏らした。

「小太刀二刀流かい？ これはまた、随分と珍しい」

「上辺だけの賞賛なんていらへんわ。今から力を見せたる。それから驚け」

「ふむ。それもそうだね」

言つて、何故か京一郎は銃を懐にしまった。怪訝に思う一成。それに対し、京一郎は大げさに両手を広げてみせる。

「来るといい。そして、キミこそ知るべきだ。キミが相手にしているものは人間ではなく、キミとは根本から意味を異にする存在だと」

一成が、駆ける。挑発に乗ったわけではない。ただ、今がチャンスだっただけ。

右の小太刀を振り抜く。だが、手応えは無かった。

(避けられた?)

一瞬の逡巡。京一郎は宗次と違い、運動能力は皆無のはず。避けられる道理はない。しかし、現実に避けられている。

偶然。そう判断し、一成は自身の体を駒のように時計回りに回転させ、逆手に持った左手の小太刀を叩き付けようとする。だが今回も、手応えはなかった。

更に踏み込み、右の小太刀を突き出し、左の小太刀で斬り上げる。だがやはり、届かない。ギリギリの、見切っているかのようなレベルで避けられている。

そして、京一郎が再び不敵に微笑む。その刹那、銃声が響いた。

一成の頬が、切り裂かれる。京一郎が右手に仕込んでいた小型銃。その弾丸が掠めたためだ。ほぼ零距离の射撃。それを避けるのは、抜群の身体能力を有する一成でもギリギリだった。そして、その表情に焦りが浮かぶ。

(何で届かへんのや!)

確実に斬れると読んで、刃を振るっている。それなのに、届かない。

再び、京一郎の持つ銃の銃口が一成に向けられる。撃たれる。そう直感し、不利になると理解しつつも一成は距離を取った。

それを見て、京一郎が笑う。

「不利と知りつつ、後退する。中々柔軟だね。でも、その判断は正しいよ。今のままでは、たとえ万年攻撃を続けようと私には届かないからね」

「それはまた、俺のことを舐めてくれとるな。やってみんとわからへんで」

「強がりと言うものじゃないよ。キミは優秀だ。故に、理解しているはず。私に、キミの刃は届かないことを」

「……………」

嘲笑を交えた京一郎の言葉に、一成は無言で返す。だが、それが肯定の証だった。

刃が届かない。武術の心得など欠片もない男に。その現実を、肯定する。

「無の境地」

不意に、京一郎が呟くように口にした。

「キミなら、この言葉の意味がわかるんじゃないかな？」

「……………あらゆる武術が最後に辿り着く境地。一切の思考、感情を排除することで周囲の気配に溶け込み、また、相手に動いていると気付かせずに動くことで相手の攻撃を誘導し、自身から外させる、奥義とも呼べる境地」

「流石だ。さて、ここで問おう。私の言いたいことがわかるかな？」

「あんたが、無の境地に至っているとしても言いたいんか？」

一成が京一郎を睨む。歴史上においても、そこへ至った武芸者は数えるほどしかいないとされている。そんなところへ、この男が辿り着くはずがない。そう思ってた。

そして、それは肯定される。

「当たり前だよ。武芸の心得など欠片も無い私が、そんな場所へ辿り着けるわけが無い。だから今私がしていることは、その対極に近い」

「対極やと?」

「そうだよ。未来を予測し、行動を予測し、思考を予測し、森羅万象すべてを計算し、相手を誘導する。これこそ、無とは対極の有だよ。違うかな?」

「……………」

京一郎の言が本当なら、確かにそれは無の境地とは対極だ。

卓越した演算能力。《神》を自ら名乗るほどまでに人間離れしたその頭脳を持って、相手の動きを予測し、誘導する。

信じ難い。ありえないと言いたい。

だが目の前にいるこの男なら、やれるのかもしれない。そんな思いが、一成の中を駆け巡る。

どうすべきか、対処に悩む一成。その一成に背を向け、京一郎は口を開いた。

「まあ、そんなことはどうでもいいことだよ」

「どうでもええやと?」

「キミは私に刃を届かせることができない。それで十分だ、と言っているんだよ」

京一郎は歩いていく。どうすべきか一成は迷ったが、距離を取って付いていくことにした。隙があれば、斬れるかもしれないという考えと、もう一つ。

何故行方不明であるはずのこの男が、ここにいるのかという疑問

から。

歩いた距離は、あまり長くなかった。京一郎が入った部屋。そこは、いくつものモニターが設置された場所だった。

「……ここは？」

「見ての通り、モニター室だよ。戦場の様子を私が見るためのね。まあ、見ることにしかできないからこちらから指示することはできないんだが」

「どういうことや？ あんたが指揮執つとるんとちゃうんか？」

「違うよ。私たちは手を貸したただけ。シベリア軍と連絡を取り、《革命軍》に協力するよう仕向け、ここを落とす作戦を授け、今の戦いについても少しだけ助言を与えただけ。直接指揮を執ってはいないよ」

クスツ、と京一郎は笑う。その視線は、外で行われている激戦を映したモニターをしっかりと捉えている。

キン、と金属音が響いた。一成が両手に持っていた小太刀を鞘に納めた音だ。

「何が、直接指揮を執っていない、や。あんたがしとることは、この国を代理戦争に巻き込むことやで。わかつとんのか？」

「代理戦争？ 実にいい話じゃないか。盤上が複雑になればなるほど、私の退屈は紛れる」

一瞬、この男の背中に深い闇を見た気がした。

「……前から思ってたけど、あんたも大概壊れとんな。《名も無ネームレスス・チルドレンき子供たち》なんかは誰しもどっか壊れとるけど、あんたの壊れ方

は尋常やない」

確信した。この男の中には、本来あるべきところにあるはずの感情が無い。それを人は、世間は、『壊れている』と呼ぶ。

自分や、戦友たちのように。

だから、一成は問うた。

「なあ、あなたは一体どんな地獄を見てきたんや？ 別に、俺たちが世界で一番不幸やなんて、俺は思ったことはあらへん。今日生きられない奴に比べたら、どんだけ辛い思いさせられても生きているだけマシなんやしな」

もつとも、不幸などというものは比べられるものではない。あくまで不幸とは主観で語られるものであり、他者から見た不幸と本人から見た不幸が同じものであるかを論ずれば、まず違う。受け止めている者と、それを見ている者では差が出てくるのだ。

だが、それでも。この男が抱えるものは、自分よりも遥かに重いと、そう感じてしまう。

だって、笑い声がここまで空虚な人間を、一成は見たことがなかった。

「あんたは英雄や。万人が求め、辿り着けないものを手に入れてる。せやのに、どうしてなんや？ 何であんたは、そんな風に笑う？」

「その問いに私が答えたところで、キミが得るものは何も無いよ。キミが知るのは、

大切な者に捨てられ。

大切な者の未来を壊し。

大切な者の命を奪った。

そんな、愚か者の話だけだ」

やはり空虚に、京一郎は笑った。一成は、何も言えなかった。

この人は、壊れるべくして、壊れたんじゃない。周囲に壊されたんじゃない。

壊れることでしか、己を保つことができなかったんだ。

モニターが一瞬、紅に染まる。見れば、クライストとかいうOSが何十機というOSに囲まれて苦戦していた。

その様子を眺め、京一郎は呟くように言う。

「真実は、どのような場合にあってもたった一つだ。どれだけ複雑であろうと、起こった事象に対する真実は一つしかない。だが、答えは一つでなくてもいい。そう思わないかい？」

「何が言いたいんや？」

「烏丸一成くん。キミに問おう。……真実を、求めるかい？」

再び、画面が紅に染まっていた。

—

肩の装甲が薄く削り取られる。両手持ちの剣、グラウンドセイバーによるものだ。

「……………ッ！」

宗次は唇を噛み締め、クライストの身を翻させる。その際、イーストブレイドで間近にいたヤグリムを斬り裂いた。

パイロットが脱出する暇もなく、爆発四散するヤグリム。すぐにそれから視線を外すと、宗次はブレイムの引き金を引いた。

吐き出される弾丸。それは、盾を持っていたクーロンを盾ごと貫き、破壊する。

「まだ、三十機も……ッ！」

息が切れる。自身の体を動かしているわけではないが、シンクロニティ・システムというものは体を動かすのと同等の負担を体を与える。宗次の体力は常人のそれを遥かに凌駕しているため、普段は問題ないが、ここまで来ると流石に体力が限界に近付いてくる。

戦闘が始まって、約一時間。最初は奇襲によって相手も混乱していたものの、数で勝っていることから冷静さを取り戻し、冷静に陣を組んでこちらに向かってきている。

海上での戦いも、アルテミス相手には護衛艦だけでは足りないかと判断し、戦闘機を放ってきた。そのせいで、巨大な一撃必殺の攻撃を主とするアルテミスは苦戦している。

また、基地の正面でも、雄平と雅が騎乗するオーケストラの電子砲によってゲートを破壊したまでは良かったが、現れたOSによって劣勢に追い込まれていた。

ゴルゴネスとナイト。

大神清心という、天才の後継者が生み出した特異型。片方は宗次のほうへ行くと読んでいた雄平はここで読み違い、そのせいで対応が遅れた。

そして、気づいた時には オーケストラ を除く味方側の三十三機のOSは動きを制限されてしまっていた。

その オーケストラ は今、 ナイト と正面からやり合っている。

雄平の策は間違っていないかった。むしろ、正しい解であったと呼ばれるだろう。普通なら、ここ半年でその力を見せ付けてきた クライスト に対し、量産型のOSだけで立ち向かおうなどという策は考えない。

だが、相手の策を練ったのはあの、樋浦京一郎だ。

兵を駒と考えるのではなく、人として考える雄平は『生存率が最上となる』という条件を課して策を練る。だが、京一郎は違う。

彼は、兵を駒としか思っていない。生存など、基本的に無視。どこへどう駒を配置すれば最大の結果が出せるか。それしか考えていない。

もっとも、その最大の結果というものに生存率の高さも含まれているため、結果敵に彼の策も勝てば死者は少ない。

つまり、二人の間にあるのは、経験の差。

いかに雄平が天才と呼ばれ、あの京一郎でさえ認める存在だとしても、彼が戦ごとに関わり始めたのは四年前だ。京一郎とは経験が違う。

そして今回は、それが出てしまっていた。

「
」

閃光が、 クライスト たちの戦場を駆け抜けた。基地内に設置された砲台から放たれたものだ。宗次はそれをギリギリで避け、重グラビティ

ティ・キャノン

力砲を放つ。

その、瞬間だった。

「ぐっ！」

宗次の体に、鈍い痛みが走った。瞬間、機体内のモニターに警告の文字が出る。

「オーバーヒートだと！ くそっ！」

グラビティ・キャノン 重力砲の発射を中止する。代わりに、最大出力でブレイムの弾丸を砲台へと叩き込んだ。流石に、砲台も碎け散る。

だが代わりに、ブレイムから煙が立ち昇り始めた。オーバーヒート。こちらにも、無理をしたツケが回ってき始めているのだ。

「まだ三十機もいるというのに……！」

苦々しく呟く。状況は、最悪だった。

元々、兵器の構造上グラビティ・キャノン重力砲もブレイムも連射ができない。それを無理に使ってきたのだ。頑丈であるからこそ、今までもっていたが、そろそろ限界が近づいている。

「ちっ！」

舌打ち。それと共に一番近くにいたクーロンとの距離を一瞬で詰めると、イーストブレイドで斬り裂いた。更に、手当たり次第とでもいうかのように近くのOSを斬り裂き、破壊していく。

だが、すぐにアサルトライフルの弾幕の前に退避せざるを得なくなった。建物を盾として、弾幕をやり過ごす。

「……数が減らないな」

自分でも焦っていると感じながら、宗次は呟いた。一時間で彼は既に二十に近いOSを葬っている。だがそれでも、敵はまだ三十機近くもいるのだ。

確かに、クライストは今敵に回している。ヤグリム、クラフト、クーロンといったOSに比べれば絶対的に能力が高い。次元が違うといってもいい。だが、所詮は兵器。人が操るものであり、そして、限界がある。

減ってはいる。確実に。だが、数の圧力は弱まらない。

孤軍奮闘とはよく言ったものだ、と宗次は思う。今の状況は、まさにそれだ。統率の取れた軍隊に囲まれた状況で、単騎でそれを迎え撃つ。普通ではありえない状況だ。

「何を、今更」

自分を奮い立たせる。絶望的、死ぬしかない、そんな状況には幾度となく飛び込んできた。そんな状況を自分で望んでさえた。

強くなるためには、相応のリスクが必要だと思ったから。だから今回も、いつもと同じにやればいい。

「ここで死ぬなら、俺は所詮その程度だったということだ」

クライストが動く。イーストブレイドと、熱の下がったブレイドを手に、飛行ユニットを用いて天へと飛翔する。

漆黒の翼のような飛行ユニットを装備したOS。

それは、黒い天使のように見えた、後に語られた。

雄平たちからの通信はない。こちらに ナイト も ゴルゴネス もいないことを考えれば、向こうにいるということになる。オークストラ のスペックは クライスト に比肩する。だが、専用機二機では辛いだらう。

ならば、こちらで状況を打破してやる必要がある。

「……………」

歯を食い縛る。シンクロニティ・システムの弱点は、機体のダメージがパイロットに伝わるといふ点だ。最初の頃に比べれば大分軽減されているが、機体の腕を斬り飛ばされれば肩が脱臼した時ぐらの痛みはある。

そして今行うことは、機体に無理を強いることだ。即ち、肉体に無理を強いるに同義。

どれだけ軽減しようと、機体と同調するシンクロニティ・システムの根本的な部分は変えられないのだ。

だがそれでも、口元から血を滴らせながらも、宗次は動いた。

「吹き飛べ……ッ！」

モニターにいくつも浮かぶ、警告の文字。鳴り響く警報。体を駆け抜ける激痛。だが、そんなものは知ったことではなかった。

己に与えられた最上の役目。それを、果たせばいい。

収束するエネルギー。胸部の黒い球体が、輝きを放つ。

そして、幾度目か、空間をブラックホールが引き裂いた。

一撃で砲台を叩き潰し、OSなど粉微塵に喰らい尽くすブラックホール。それが放たれた先にあるのは

「司令室を叩くのが、俺の任務だ」

エナジーシールドを展開しながら、宗次はそこを見つめる。基地の中心。相手の司令室へと。

だが、そのブラックホールは司令室を僅かに外れ、近くの砲台と司令室の下方部分の建物を喰らうまでにしか至らなかった。

「ふう……驚かせてくれる」

額に浮かんだ汗を拭い、ナガサキ基地の中心にある司令塔。その最上階にある司令室で男が呟く。異常に恰幅のいい男だ。その身に《革命軍》の制服である白い軍服を纏っている。百年近く前の、軍事国家であった頃の日本軍。その軍服のようにも見える。

青木慎介というその男は、襲ってきた危機を回避できたことで、小さく笑みを作った。

「恐ろしい機体だ。たった一機でここまで立ち回り、司令室に不発とはいえ攻撃を加えるとはな」

「だが、それもここまでだ」

青木の背後で、一人のシベリア人がそう呟く。レルズブルグ・カリーマン。少し前までは、シベリア軍の將軍職を務めていた、今は退役軍人となった男だ。

「しかし、よいのか？ あの黒い機体に乗る者は、この国の英雄で

は？」

「英雄？ 腐った国に尻尾を振るクズの間違いだ。あの者は亡霊よ。守る価値などない国を守り続ける、哀れな亡霊だ」

青木が笑う。

「それにしても、流石としか言いようがない。ここまで粘るとは正直予想もしていなかった。《殺戮兵器キリング・ウエポン》の名も伊達ではない」

「その上、あの樋浦京一郎の弟。恐ろしい兄弟だ。兄は単身で我が国の軍部と話をつけ、弟はその力で文字通り一騎当千の働きをするとは」

「だが、それもここまでよ」

ふん、と鼻を鳴らし、青木は言う。

「幕を下ろそうか」

言って、青木は彼の部下に命じた。

「殺せ」

「……………」

宗次の口元が、歪む。そして、機体は徐々に下降し、膝をついた。OSは、エナジーで動く。消費量は機体によって差があるが、尽きれば動かなくなるのは当たり前だ。しかし、クライストのエナジーは最低で後三十分はもつ。そして、機械である以上疲労などというものがあるはずがない。

故にこれは、パイロットである宗次の疲労だ。

シンクロニティ・システムはパイロットの肉体に軽くない負担を強いる。宗次はその常識離れた体力で耐えてきたが、グラビティ・キャン本来であれば一発放つだけでパイロットにとてつもない疲労を負わせる兵器だ。

美鈴は言った。十分間に三、四発と。だが、あれは機体の限界という点では嘘だ。機体の耐久力と性能を考えれば、その二倍撃つことができた。

つまり、この場合の限界とは、パイロットの限界である。

いかに宗次が《キリング・ウエポン殺戮兵器》と呼ばれる天才であろうと、天才的な戦闘能力を有していようと、肉体は人間だ。機械よりも上限値の低い限界がある。

そしてその限界を無視して、宗次は戦ってきた。そのツケが、遂に回ってきたのだ。

「……諦めては、くれないか」

宗次は呟く。OSたちが、こちらへ迫って来ていた。

実を言うと、宗次は最初から司令室を狙っていた。だが、距離が遠く、相手の数が多かったせいで手出しができなかった。

しかし、こちらが疲弊し始めていることに相手が気づき、僅かに相手の空気が緩んだ。

そこを衝き、ずっと使っていなかった飛行ユニットを用いて上昇。乱戦の中、気取られないように徐々に距離を詰めていた司令室を一か八かで狙った。

しかし、届かなかった。体を襲っていた疲労が、警告の意味で体に走った激痛が、照準を狂わせた。

「く……っ！」

無理矢理に機体を動かす。体の疲労は凄まじい。だが、立ち上がらねば殺される。

三十機近く 正確には二十七機のOSが、クライストを取り囲む。おそらく、もう二度と先ほどのような真似をさせないためだろう。

もつとも、こちらにはそんなことをする余裕など欠片もなかったが。

「……………」

戦略盤 光点によって戦場の様子を映すそれを見る。洋上では白浜 の大きな光点と アルテミス の小さな光点が二十近くの敵に囲まれながら戦っている。基地正面でも、オーケストラと思しき光点が率いる一団が敵二機と文字通りの衝突をみせていた。しかし、何故か オーケストラ と思しき光点と ナイト と思しき光点しか動いておらず、その二機が衝突している。

しかし、何にせよ、だ。

援軍はやはり、期待できそうにない。

だが、だからといって。

「諦めるわけには、いかないな」

それを確認し、覚悟を決める。諦めるなどということはない。どれだけみつともなくても、最後まで足掻く。

それが、宗次の矜持にして、信念。

イーストブレイドとブレイムを構え直す。どこまで抗えるかわからないが、やるしかない。最後まで、抗い続けよう。

エナジーシールドを解除する。そして、攻勢に映るうとした瞬間だった。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピッ！

機体内部に、警告音が鳴り響いた。宗次の動きが止まる。そして、起こる爆音。

刹那。

宗次を取り囲んでいた二十七の機体のうち、六機の機体反応が突如消失した。光点があった場所に『LOST』の文字が浮かぶ。

宗次は驚いて視線を上げる。するとそこには、懐かしい姿があった。

太陽の下、薙刀を持つ紅蓮のOS トウランドット の姿が。

「サクラ……？」

その機体に乗っているであろうパイロットの名を、宗次は呟く。すると、その声が聞こえたのか、向こうの方が外部スピーカーを用いて言葉を飛ばしてきた。

『宗次、遅れてすまない。三年前の約束を、果たしに来たぞ』
「約束？」

宗次も外部スピーカーを開く。三年前といえば、サクラと出会った頃だ。だがあの時はサクラと敵同士になるしかなく、銃を向け合うしかなかった。

その時に、約束などしただろうか？

宗次の脳裏に浮かぶ疑問。相手が、微かに笑った。

『約束といっても、私がそう思っているだけかもしれない。三年前、お前は言っただろう？ 生きていれば、いつか手を取り合える日が来ると。私は、お前と共に戦うためにここへ来た』
「……そうか。そういえば、そんな言葉を交わしたな」

苦笑する。三年前、自分の気持ちを直接言葉にしたあの時。確かに、そんなことを言った記憶がある。

視界の端で、ヤグリムの一団が僅かに動く。瞬間、タワーランドットの背中からホーミングミサイルが発射され、その一団を襲った。

降り注ぐミサイル。一発二発なら耐えられても、何発も叩き込まれれば量産型では耐え切れない。

瞬く間に爆発四散し、『LOST』していく敵のOSたち。それを見て、敵もタワーランドットを敵とみなしたらしい。陣形が組み変わる。

一方、タワーランドットは地面を滑るようにして移動すると、クライストと背中合わせになる位置で止まった。

背後から、言葉が聞こえてくる。

『大分苦戦しているようだな。らしくない』

「返す言葉もない」

苦笑する。不思議だ。先ほどまでの疲労が、嘘のように消えている。

背中を預けられる仲間がいる。頼もしいそれを感じるのは、いつ以来か。

ずっと一人で戦ってきたから、久しく忘れかけていた。

「ありがとう。サクラ」

『礼など。私は、私がこうしたいと思っているからここにいる。それだけだ』

「それでも言わせてくれ。本当に、ありがとう」

本心から宗次は呟く。相手の陣形は徐々に完成に向かっていく。だがそんなもの、今更意味を為しはしない。たった一人ならともかく、トゥーランドットに減らされ、二十機程度まで減らされたOSなど二人の敵ではない。

だがそれを聞いたサクラは、何故か小さな声で何事かを呟いていた。

『……その馬鹿正直なところが……全く、天然なのか……』

「どうした？」

『なんでもない！』

やや上ずった声でそう応じ、サクラは薙刀を構える。

『それと、言っておくが私のホームシングミサイルはすべて撃ちつきましたからな。遠距離はお前の武装に任せるぞ』

「何だ。相変わらず遠距離用の武装はないのか？」

『この機体に馴染まんのでな』

サクラが苦笑する。だが、二人の間に和やかな空気が流れていたのはここまでだった。

「来るぞ！」

宗次が叫ぶ。瞬間、二機はそれぞれの正面へ向かって飛んでいた。数瞬後、砲台から放たれた光線による火柱が地面を穿ち、OSたちが動き出す。

圧倒的な運動能力を見せ、一瞬で敵に接近し、薙刀で薙ぎ払うトゥーランドット。大神清心の最高傑作に恥じない力を、その機体は存分に発揮していた。

そして、先ほどの疲れがなかったかのように軽快に動き回るクライスト。死神の如きOSが、戦場を蹂躞する。

相変わらず、不利ではあった。
だが。

負ける気は、しなくなっていた。

二

戦略盤に大きな変化が訪れる。突如現れた正体不明のOSが、次のOSに味方して、基地中心で行われていた戦いの戦況を覆した

のだ。

それを見、雄平は微かに微笑む。

（誰かは大方予想がつくが、この際誰かなんてどうでもいい。この機に動かなければ、戦況は変わらない。なら、賭けてみる価値はあるか？）

雄平は眼前の状況を見る。オーケストラとナイトを除き、一切のOSが動きを停止している。少し離れた場所で、ゴルゴネスが両腕を広げて突っ立っているが、今あの機体は動けない。無視している。

問題は、今現在空中で競り合っている鋼のOS ナイトだ。

オーケストラのクロスレイント、ナイトのリパルサーによる何度目かの激突が起こる。そして、衝突の衝撃で二機が離れた瞬間、ナイトはアイギスを横に傾け、左腕で固定すると、内蔵された砲身をこちらに向けた。

「雄平くん！ 砲撃が来るわ！」

「ッ！ 早い！」

雅の叫び声に反応し、雄平は即座に眼前のキーボードを叩く。複雑怪奇なシステムが多いオーケストラ故の複座式。

操縦は前の座席に座る雅が。内臓兵器及びシステムの統括は雄平が。

二人で一つ。それが、オーケストラの理念。故に必要とされるのは、二人の迅速な連携。そしてそれを為すのは、雄平の高速演算能力。

大人数十人、数百人をかき集めても及ばないとされる頭脳。それを宿す故に彼は、天才と呼ばれる。

アイギスに内蔵されたバズーカ砲が、火を噴く。

「
」

エナジーフィールドを展開し、アイギスに内蔵されたバズーカ砲から、ナイト よりも二回り以上大きい オーケストラ を守る。

その、瞬間だった。

「
ッ！」

ズクンと、大きく心臓が高鳴り、激痛が体を襲った。一瞬、意識が飛びそうになる。

(ふざけるな！)

雅に聞こえないよう、内心で自分を叱咤する。

(ここで倒れるような、軽いものを背負ってきた覚えはない！ 動け！)

口の中に広がる、鉄の味。それを強引に飲み込み、意識を無理矢理固定する。

雄平の異変に気付いた雅が、振り返る。

「雄平くん？」

「大丈夫です」

強い口調で、そう言った。そして、雅の言葉を待たず雄平はシス

テムを起動する。

「アナライズ・システム起動。　ゴルゴネス　のジャミング電波を解析」

まるでピアノでも演奏するかのようには、雄平はキーボードを叩いていく。凄まじい速度で、今現在OSたちの動きを奪っている装置の解析が進められていく。

何かを仕掛けてくる　直感でそう感じた　ナイト　のパイロット、鶴賀宝来は即座にバズーカ砲を放った。だが、エナジーフィールドの前に阻まれる。

続いて、リパルサーを振り抜く。だが、僅かに障壁が歪んだだけで、破壊には至らなかった。しかし、それは当然である。

エナジーフィールド　すでに現存する防御兵器、エナジーフィールドを広範囲、高密度で展開できるようにした兵器だ。その防御力は、《イージス》内に存在するあらゆる特異型OSの防御力を大きく上回る。

だがそれは、当然のことでもあった。そもそも、雄平は雅が戦場に立つことを望んではいなかった。しかし、雅の性格上、雄平が一人で戦場に立つことを認めるとは思えない。

それ故の折衷案でもあるのだ。オーケストラ　は。互いに相手が戦場に出ることを臨んでいない。だが、出るしかないのなら、二人で共に出る。

そして、だからこそ雄平はその防御力に一番の力を注いだ。オーケストラ　が傷つけられた時、苦痛を負うのは雅だ。負わせないためには、傷つけられないようにするしかないと判断して。

そして、かの天才技術者・大神清心が造ったOSといえども簡単には打ち破れないエナジーシールドを超える障壁、エナジーフィールドを完成させた。

ナイト は、リパルサーを何度もエナジーフィールドに叩き付けている。太刀筋は冷静だが、おそらくパイロットはかなり焦っているはずだ。何故、超えられないのか、と。

エナジーシールドならば、リパルサーで何度も斬りつければ抜けるじゃないか、と。

「無駄だ」

雄平は呟く。呟きながら、キーボードを叩き続ける。

二年前すでに、かつての仲間たちが用いていたOSの攻撃力は把握している。その上でエナジーフィールドを造ったのだ。相手が改造でも施していない限り、抜かれはしない。

もつとも、展開中は動けない。その点が少々難儀だが、今はそれでいい。

雄平の座る座席の左右にある画面に、ほぼ同時に『完了』の文字が走る。雄平は横目でそれを確認すると、雅に言った。

「雅さん。こつからが正念場です。お願いしますよ」

「ええ」

雅が頷き、その表情を引き締める。

そして、雄平はエンターキーを押した。

そこから起こったことは、上手く形容できない。

敢えて表現するならば、人間には聞こえない高周波が放たれ、聞

こえないはずなのにそれを感じとっているという感覚。

違和感、といってもいいかもしれない。

ともかく、普通とは違う異質な気配が オーケストラ から放たれ、そして、周囲を覆った。

戦場の様相が、大きく変化する。

『何をしたんだい？』

外部スピーカーを通じ、戦場の変化にいち早く気付いた ゴルゴネス のパイロット、高橋健太郎が、雄平に向かってそう言葉を紡いでくる。

雄平は、笑って答えた。

「貴方のジャミングの電波を解析し、それを打ち消す電波を放っただけです。元々、この オーケストラ は情報戦を主体とする機体 ゴルゴネス に搭載されているジャミング装置と似たような装置も搭載されています」

と、雄平は語るが、これは嘘である。いかに オーケストラ が巨大で容量が大きくとも、そんな装置まで積んでいる余裕はない。

雄平が行ったのは、相手のジャミングの相殺。突き詰めれば、通信に使うのはすべて電波である。故に雄平は相手のジャミング電波 OSの核となる、機体内部を血液のように流れる電子を統括するシステム？オリジン？に影響を与え、狂わせていたものを解析し、相殺できる周波数を割り出し、放ったのだ。

理論的には簡単でも、実行はかなり難しい。しかし、 オーケス

の一手がすでに準備され、放てる状態だった。

『問いに答えようかな。 あるよ』

二年前と変わらない、余裕のある健太郎の声。
そしてそれが、放たれた。

ゴルゴネスの背中より放たれたのは、一発のミサイル。だが、その速度は遅い。

そして、異常に遅いそのミサイルを見た瞬間、雄平はシステムを起動させた。アナライズ・システム。情報戦を得意とするオーケストラの核とでもいうべきシステムで、いかなるパスワード、兵器情報でもその凄まじい演算能力をもってすぐに解析してしまう。

先程、ゴルゴネスのジャミング電波の周波数を解析したのも、このシステムだ。

「……………」

同時に、雄平は味方全員を守るためのエナジーフィールドを展開する。だが、広範囲となると時間がかかる。

そして、雄平の周囲のモニターに走る『完了』の文字。それを視界の端で確認し、キーボードを叩きながら雄平は叫んだ。

「雅さん！ 機体を降ろしてください！ 少しでもエナジーフィールドの範囲を狭く！」

「わかったわ！」

雅が叫ぶ。だが遅い。すでに、敵の放ったミサイルは内部の熱で紅に染まりつつある。もうすでに、爆発寸前だ。

それでも、雄平は解析した敵兵器の情報をエナジーフィールドの展開と同時進行で理解しにかかる。かれもまた、樋浦宗次と同じで死ぬ時まで諦めない類の人間なのだ。

いや、少し違いかもしれない。

彼一人であつたならば、ここまで必死にならなかつただらう。彼は自らの命に興味がない。故に今生き残ろうとしているのは、彼の命ではなく、彼の前に座る女性の命のため。

彼女を生かすためであるならば、彼はどれだけみつともなくても這い回る。

たとえ、恩人を殺した国に飼われるという屈辱に塗れようとも。

だから、彼は諦めない。視線を走らせ、指を走らせる。

しかし、間に合わなかつた。エナジーフィールドも、相手のミサイルに対する対応も、間に合わない。

「くそっ！」

雄平が唸る。その、瞬間だつた。

白い閃光が、空を薙ぎ払つた。

三

ようやく、慣れてきた。

二十機近くの戦闘機と、それこそどこぞのロボットアニメのような空中戦を繰り広げながら、アルテミス の内部で鏡花は呟いた。

今日初めて使用したECカノンと、その反動に耐えるために開発された新しい飛行ユニット。今までとは大きく違うその二つが、鏡花に負担を強いていたのだ。

飛行ユニット。制御が異常なぐらいに困難なため、シンクロニティ・システムという操縦桿ではない方法で機体を操る術を持つ、特異型OSにしか装備されていない兵器だ。凡庸化が進められているという話だが、この際それはどうでもいい。

問題は、それを操るのは技術ではなく感覚ということにある。

鏡花は元々、狙撃手である。狙撃手の感覚は繊細で、僅かに集中が途切れただけでも狙いが狂ってしまう。そんな、繊細という言葉ではとても語り切れない感覚の持ち主に、いきなりぶっつけで今までは大きく違うものを使わせたのだ。上手くないのは、自明の理である。

新しくアルテミスに装備された飛行ユニットは、空中でECカノンを放った際、反動でひっくり返らないように自動である程度姿勢制御が為されるようになっていた。

しかし、自動というのは『思い通りにならないこと』である。普通のOSのパイロットであれば、自動姿勢制御システムや自動照準補正システムなど、『自動』な部分も多いから問題ないが、特異型のパイロットはそうもいかない。

思う。念じる。願う。そんな、いわゆる『感覚』に近いものでOSを操るのだ。すべて、思うがままに操作する。それが、シンクロニティ・システムの真骨頂。

しかし、そこにいきなり『自動』などというもので水を差されたのだ。戸惑うのは、当然とも言える。

しかし、それもここまで。

「感覚は掴んだ。後は、私に腕があるかどうかだけ」

鏡花の目が、細まる。彼女の顔に装着されている、彼女が愛用するゴーグルの中で、その目が輝いた。

アルテミス の翼が、静かにその力を増す。

刹那、だった。

マツハという速度で飛行する戦闘機。隊列を組んでいたそれらの背後に一瞬で アルテミス が移動したかと思うと、ECカノンを放ったのだ。

放たれる閃光に飲み込まれ、撃墜でも爆散でもなく、消滅する戦闘機。

戦略盤に映る『LOST』の文字だけが、彼らがいたことを教えてくれる。

「遅い」

呟く。それと同時に、アルテミス の脛の部分が開き、そこからミサイルが放たれた。突然の高速移動に驚き、旋回していた戦闘機たちは、避けられず爆撃される。

戦闘機が全滅し、静かになる空中。しかし、アルテミス に休む暇はない。

コクピット内に鳴り響く警告音。見れば、護衛艦から放たれたミサイルが アルテミス を狙っている。鏡花は アルテミス をミサイルの間を縫うように飛行させ、紙一重で避けながらそれをやり過ごす。既に戦力は アルテミス だけになっていた。

戦艦 白浜 は、すでにミサイルを撃ち尽くし、エナジーシールドを張るだけになっている。レールガンがあるが、それを使うにはエナジーシールドを解除せねばならず、そして、指揮官がいらない（・・・・・・）今の 白浜 でそんなことは絶対に起こらない。

元々戦艦 白浜 は母艦としての意味合いが強く、OSなどの兵器を戦場に運搬することを目的とされている。戦場に出る以上、エナジーシールドを始めとする武装も無論されているが、それはあくまで艦を守ることが目的で、敵を倒すための物ではない。

それでもやりようはあったはずだが、今は、ほんの一時間と少し前に雄平が座っていた指揮官のところに誰もいないため、どうにもできない。

本来ならそこには、特室の室長、樋浦京一郎が座るべきなのだが、彼は今現在行方不明で、副室長の真田和人も今回の作戦に参加していない構成員と共に、東京都の外縁にある行政庁で他の地域に目を光らせているため、ここにいない。

おそらく、この作戦で特室の弱点が浮き彫りになったといえるだろう。

樋浦宗次を始めとする、初期からいる優秀な人員たち。また、増員された者たちもかなり優秀で、この国の組織としては今や、最も有能であると言える。

だが、現実には統率さえまともに取れていない。

幾度となく共に死線を超えてきているため、特室の《名も無き子供たち》^{チルドレン} 三人に対する恐怖心などは消えているが、問題はそこではない。

その《名も無き子供たち》^{ネームレス・チルドレン} と優秀な人員。そして何より、樋浦宗

次を御することが出来る者が少な過ぎるのだ。

英雄にして、《殺戮兵器》キリング・ウエポンと呼ばれる人間兵器。

彼自身は無能でなければ上官など誰でもいいのだが、彼に指示を出すとすると大抵の者が足踏みする。切れ過ぎる切り札。それを扱える者など、限られているのだ。

故に、特室の弱点ははっきりしている。

指揮官の欠如。もしくは、不足。

それが、特室の弱点。しかし、それを今言っても始まらない。

「……………」

無言のまま、いつものように冷静に。

鏡花は、己の相棒と共に戦う。

しかし、護衛艦から放たれるミサイルはレーダーによる誘導が行われているため、しつこい。アルテミスは可視領域まで近付かなければレーダーに映らないほどのステルス性能を宿しているが、一度見つけられてしまえば意味がない。

ECカノンのエネルギー残量を見る。後撃てるのは、二発のみ。予備のバッテリーも、既に使い尽くしていた。

残る敵の護衛艦は七隻。横に並び、アルテミスを狙っている。

何とか相手の横に回り込むことができれば、一気に片を付けられる。しかし、襲ってくるミサイルを避けるだけで精一杯だ。

「……………十秒あれば」

口調は淡々としながら、眉を僅かに寄せた焦りの表情を鏡花は浮かべる。ECカノンと、新しい飛行ユニットとは別。《未知》^{アンノウン}の時代からこの機体に搭載されているシステムが使えれば、この状況をどうにかできる。

準備はできている。いつでも起動はできる。
だが、成功させるには時間がある。

「……………」

チラリと、横目でエネルギーの残量を見る。激しい動きを繰り返したためか、本来三時間近く動けるはずの機体のエネルギーは、一時間で三分の一にまで減っていた。

唇を噛み締める。何か、一手があればいい。状況を少しだけいい、変えてくれる一手があれば、それでどうにかできる。
そう、鏡花が思った瞬間だった。

轟音。

空を駆け抜けた閃光と、一隻の護衛艦から上がる火柱。鏡花が振り向く。見れば、白浜のレールガンが起動していた。

驚く鏡花。その鏡花へ、音声だけの通信が入る。

『こちら、白浜！ 基地内部にて、正体不明のOSが現れ、クライストと共闘を始めた模様！ また、オーケストラの1団は敵影ごとその姿をリーダーから消しました！』

次から次へと紡がれる事実。ゴルゴネスのジャミングのせいで通信が完全に遮断されていたのだが、今はもう問題なく機能して

いる。

それがどういう意味を示すのか　それを考える余裕は、鏡花にはなかった。

『以上のことから、総参謀の指示により　アルテミス　を援護します！』

鏡花の眉が、怪訝そうに寄せられる。依然　アルテミス　は護衛艦のミサイルを避けているが、一隻減ったことで大分楽になった。

総参謀　それは、雄平を指し示す言葉だ。特室内には軍隊のような階級こそないものの、班という形でチームを作っている。しかし、宗次と雄平はどこにも属してはいない。それぞれ、班を統括する立場での役職があるのだ。

そして、総参謀とは、前線指揮官の宗次とは対極に位置する立場にある、雄平の役職。そのの、指示？

「どういう、こと？」

『作戦が始まる直前、総参謀は　白浜　に指示を出されてきました。戦局が動いた時、アルテミス　を援護せよと。その指示に則り、戦況が大きく動いた今、　白浜　の全力を持って援護を致します。指示を！』

オペレーター　おそらく女性であろう　の音が響き渡る。納得できない部分が多少あったが、鏡花は頷いた。

「どれくらいの余力がある？」

『最初の撃ち合いで七割近く消費しましたが、ホーミングミサイル

はまだ残っています。レールガンも問題ありません』
「でも、エナジーシールドを展開したら、レールガンは使えないんじゃない？」

そう、それが 白浜 の弱点だ。前面に張り出されるエナジーシールド。それを展開している間は、レールガンを使えない。だがオペレーターは、問題ないと言い切った。

『僅かな時間であれば、迎撃ミサイルで耐え切れます』

少し声が上ずっていた。当然だろう。ずっと守ってくれていたシールドを解除して、鏡花の援護をするのだ。迎撃ミサイルとて、完璧なわけではない。

だが鏡花は、それを無視して言葉を紡いだ。

「十秒、相手の気を引きつけて」

『十秒でよろしいのですか？』

「うん。お願い」

言つて、鏡花は アルテミス を飛行ユニットの限界ギリギリまで上昇させる。護衛艦はそれに気付き、照準を合わせようとしますが、白浜 から放たれたミサイルでそれを邪魔された。

アルテミス は何もしない。ただ、空中で制止している。

その行動は不可解ではあるが、護衛艦にとってはずっと沈黙を続けていた 白浜 の攻撃に対する迎撃のほうに優先事項だったため、すぐに アルテミス から意識を外した。

そしてそれが、《革命軍》を名乗る彼らにとって最大のミスだった。

一瞬、アルテミス の姿が揺らめく。まるで、陽炎のように。誰も気付かぬ中、アルテミス は徐々にその姿を消していく。ゆらゆらと。

そしてその機体は、両陣営のレーダーから姿を消した。

|| || || || ||

「どついうことだ!」

ナガサキ基地の司令室で、青木が叫んだ。突如現れた紅のOS。それによって息を吹き返した樋浦宗次が駆る漆黒のOS。更には、ネームレス・チルドレン《名も無き子供たち》の機体が、基地の正面で敵の一団ごとレーダーから消失。まともな状況ではない。

そして、それに加えて洋上では 白浜 が急に攻撃を開始したかと思えば、オレンジと黄色で染め上げられた、圧倒的な火力を持つOSも消えた。

そして、司令室の前では戦況が覆されつつある。元々、ヤグリムのパイロットはこの国の人間ではなく、シベリアの人間なのだ。命を懸けるほど、この戦いに必死にはなれない。その弱点が、形勢が傾き始めたことで表に出始めた。

自国の変革に燃える《革命軍》のメンバーならばともかく、シベリア軍の元軍人という扱いになっているレルズブルグを始めとしたシベリア人は、この戦いは祖国の資本主義派に対する牽制ぐらいにしか考えていない。

勝ち続けることができれば士気も保てただろう。だが、雰囲気で《革命軍》が押しきっていても、実際は特室の被害はリーダーから消失した正面ゲートの一団を除けば零であり、逆に漆黒のOSによって尋常ではない被害をもたらされていた。

そんな状況では、兵たちも士気を保てない。そもそも、何十機という数でOS一機を仕留められなかったのだ。紅蓮のOSが加わったことで、《革命軍》の者たちはともかく、シベリア軍人たちの戦意は消えたと言ってもいい。

それに気付かず、青木は課を真つ赤にして身を乗り出す。

「砲台準備！ 急げ」

青木が叫ぶように指示を出す。だが、その指示が実行される前に。

「なっ　　！」

青木の少し後ろに立つレルズブルグが、驚愕の声を漏らす。洋上で戦闘を行っていた護衛艦。半分にまで減らされていた六隻の光点。そのすべてがほぼ同時に、『LOST』の文字を浮かべて消え去ったのだ。

それが、ミラーージュ・システムと呼ばれるシステムを用いて姿を消したアルテミスが、横一列に並ぶ護衛艦の側面に回り、ECカノンを撃つたためとは誰もわからない。

「バカなっ！」

青木が叫ぶ。それは司令室にいる彼ら《革命軍》の内面を如実に示しているものであった。

しかし、それだけだ。
叫んだだけで戦況が変わるのなら、誰も苦勞はしない。

『武器を捨て、投降しろ！ さもなくば、司令室を砲撃する！』

そして、いつの間にか司令室の目の前に浮遊していた漆黒のOSのパイロット 樋浦宗次が、外部スピーカーを用いてそう叫んだ。その背後では、紅蓮のOSが薙刀を持ち、他のOSを牽制している。

もう、決着は着いたも同然だった。

「チェックメイトだな」

背後で、ため息と共にレルズブルグが呟く。

青木は屈辱に塗れた顔を紅潮させながら、拳を握り締め、小さな声で呟いた。

「……武器を捨て、投降する」

四

「おやおや。意外に脆かったな」

戦場の様子と、クライストによる降伏勧告を聞き、京一郎は微笑みながら呟いた。彼から少し離れた場所では、一成が難しい表情をしている。

そんな一成の様子に気付き、京一郎は彼の疑問を消し去ってみせる。

「ああ。雄平くんたちなら無事だよ。安心するといい。あと数分もすればリーダーに映るんじゃないかな？ 健太郎くんのOS ゴルゴネス が放ったあのミサイルは元々、攻撃用のものじゃないからね」

「そうなんか？」

「そうだよ。名前は忘れたが、あのミサイルはスタングレネードに近い効果を持つと聞いたことがある。半径約五百メートルを煙と閃光で包み、同時にとても強い磁場を発生させて機器類を一定時間、一切使用不可にするそうだ」

肩を竦め、京一郎は言う。それを聞き、一成は表情にこそ出さなかったが内心では驚愕を覚えていた。

半径五百メートル。即ち、直径一キロ。それを僅かな時間であっても計器上は空白にしてしまう兵器。使い方によっては、かなり凶悪なものになり得る。

二年前まではあのような兵器、存在していなかった。ならば、誰が開発した？ あれほど凶悪なものとなると、一人しか思い当たらないが……。

などと一成が思考していると、ちなみに、と京一郎は言葉を続けた。

「キミがああ兵器をどう受け取ったかはわからないが、あれは一度の戦闘に一度しか使えないよ。ゴルゴネス の最大出力でのジャミング電波を、短時間であれ上回る磁場を生み出すんだ。精密機械の塊であるOSが何度も耐えられるわけがない」

「……そういやそうやな」

一成は頷く。忘れがちだが、OSは最新鋭の技術を注ぎ込まれた精密機械の塊である。そもそも、一度戦闘を行う毎に整備が必要なぐらいの兵器だ。計器がすべて飛ぶような磁場の中に短時間でも放り込まれては、平気なはずがない。

「もつとも、オーケストラなら耐えられるかもしれないけどね。あの機体はどうやら、他とは戦場を異にする機体のようだ。情報戦OSがそんな場所にまで進出するとは、時代が変わったものだね」

「……………」

「まあ、そうでなくては困るが」

黙り込む一成に特に気分を害した様子もなく、京一郎は言う。そして、不意に京一郎の内ポケットから電子音が鳴り響いた。

京一郎は内ポケットから携帯電話を取り出すと、メールを開いた。そして、微かに微笑む。

「宝来さんと健太郎くんは無事に離脱したようだ。そろそろ、私もここを去ろうか」

京一郎がもたれかかっていた壁から身を離す。その京一郎に、一成は話しかけた。

「あの二人も、真実を知つとるんか？」

「一応、知っているね」

「それで、あんたに手え貸すことにしたんやな？」

「そうなるね」

背中を向け合い、少し距離を取って、両者は言葉を交わす。一成

の心に、何か、重いものが宿った。

知ったこと。知らされたこと。そのすべてを鵜呑みにするつもりはないが、今まで自分が見てきた事実が、それを裏付けている。そして何より、あの鶴賀宝来があちらにいたことが、すべての真実を肯定している。

「あなたはあいつの素顔、知つとるんやろ？」

「知っているよ。彼が見せてくれた。それに私は、あの場所の関係者だ。あの、閉ざされた白い研究所のね」

珍しく、含み笑いも何もない、静かな声色で京一郎は言った。

それに対し、一成も静かな口調で言葉を紡ぐ。

「せやったら、わかつとるんやろ。あいつは」

「違つよ」

はつきりと、京一郎は一成が紡ごうとした言葉を否定した。

「彼は、ただのそつくりさんだ。似ているだけに過ぎない。……その言葉を使うのはよしたまえ。その言葉は、彼のすべてを一撃で粉砕するほどの意味を持つ。たとえ神であろうと、人の価値を否定することは許されない」

自ら《神》を名乗る男には似合わない言葉だった。快楽を求める狂人。それが、京一郎に対する一成の印象であったのだが、それが崩れ始めている。

もっとも、京一郎の場合、今の姿が演技である可能性もある。やはり、信用できない。

そんな一成の心情を知ってか知らずか、京一郎は言う。

「ままならないものだね。世界とは。私はただ、普通の暮らしができればよかったのに」

「英雄になつて、今まで何千、何万とその脳みそで殺してきた男が言うことやないな。今更、俺らにそんな道を選べるとでも？」

「思っていないよ。だからキミも、ここに来たんだろう？ 雄平くんの依頼 断ることもできたろうに」

「……知つとつたんか？」

「まさか。そうじゃないかと思っただけだよ」

京一郎は言い、歩き出した。そして、

「最後に問おう。キミは、どちらにつく？」

一成は一度唇を噛み締めると、悩むような口調で答えた。

「……あなたのほうには、つけへんよ。あんたが言うことはわかるし、理解もできる。せやけど、無理や。俺はあんたを、肯定できひん」

「キミなら、そう言うと思ったよ」

京一郎は微笑み、歩き出す。その背中に、一成は声をかけた。

「樋浦京一郎。一つだけ約束せえ。嘘を吐くなら、その嘘、最後まで吐き通せや」

「言われずとも」

不敵に、万人が知る彼らしい笑みを浮かべて京一郎はそう答え、立ち去った。

その背を見送り、一成は呟く。

「真実なんて、知ったところで何もええことあらへんよなあ……」

五

戦闘は、終わった。《革命軍》のリーダーである青木という男を先頭に、彼らは連行されていく。

結果的に、特室側の死者は零だった。負傷者はオーケストラと共に撃したOS乗りのうちの一部に出たが、ナイトによって機体が破壊される際に脱出できていたので、重傷者もない。

奇跡的だ、と宗次は思う。

これだけの規模で戦闘を行いながら、誰一人味方側に死者がいない。こんなことは、初めてではないが珍しい。

そして、だからこそ妙だと宗次は思う。

「……上手く行き過ぎている」

呟く。そう、あまりにも上手く行き過ぎているのだ。

結論からいえば、雄平の策は僅かに読みを誤っていた。ゴルゴネススによる妨害はあると思っていたが、まさかナイトと二機だけで撃し、オーケストラ一団の動きを止めるとは予測していなかった。

本当の意味で、必要最低限の戦力を必要な場所に配備する。その相手の策が、クライストを危機に陥れた。サクラが駆るトウ

ーランドット が現れなければ、宗次は今頃どうなっていたかわからない。

だが、これは別の見方もある。

雄平は トウーランドット が現れたことによる戦況の変化を利用した。だがそれは、鏡花の アルテミス によるものでも変わりはない。

飛行ユニットに慣れた鏡花が、 白浜 と共に護衛艦を駆逐する。それは十分過ぎるほどの戦況の変化だ。もう少し トウーランドット が現れるのが遅ければ、雄平はそれを利用しただろう。

そして、敵を駆逐した アルテミス は クライスト の救援に入れた。

(サクラが来てくれたから大分楽になったのは確かだ。だが、結論から言えば、サクラが来なくても切り抜かれた。あれだけ不利な状況だったのも関わらず)

こちらは己にできることを最大限の力を持ってやっている。己の意志で動いている。だというのに、誰かの意志で動かされているような気分になる。

「まさかな」

切り捨てる。考え過ぎだと断じた。
すると。

「久し振りだな。宗次」

背後から、声をかけられた。振り返ったそこには、銀色の髪と瞳を携えた少女、サクラがいた。

「ああ。久し振りだな。それと、助かった。ありがとう」

「全くだ。相変わらず、無茶ばかりしているようだな」

「返す言葉もない」

呆れたように、サクラは言う。それに対して宗次は苦笑し、サクラの表情を見た瞬間、奇妙な違和感を覚えた。

「サクラ」

「ん？」

「何かあったのか？」

サクラの表情が、一瞬、引き攣った。だがすぐに平静を取り繕い、サクラは言葉を紡ぐ。

「何を言っている？ 私はいつも通りだぞ」

「……それなら、いいんだが」

引き下がる。元々、ただの勘だ。確信を持って言ったわけではない。

そんな宗次の様子を見て、サクラが何事かを考え込む。そして、彼女が言葉を紡ごうとした瞬間。

ガチャツという、無機質な音が二人の周囲に響いた。

「なっ」

「！」

それに反応し、宗次が驚愕の目で周囲を見渡す。宗次とサクラを囲むようにして立つ特室の構成員とOSたち。

それらが持つ銃が、真っ直ぐにサクラへと向けられていた。

「何の真似だ！」

懐から二丁の銃を抜き放ち、宗次が叫ぶ。だが、この状況ではいかに《殺戮兵器》キリング・ウェポンの言葉であったとしても抑止力にはならない。

そして、宗次の叫びに答えるように、茶髪の少年が歩み出てくる。

「何の真似もクソも、当然の反応だろ？」

「雄平！」

「睨むなボケ。感情で先走ったことすんな」

鬱陶しそうに、雄平は言う。宗次は、ゆっくりと銃口を下げた。

この男相手に銃など意味はない。脅しにさえなりはしないのだ。

「正体不明のOSを駆る、同じく正体不明の乱入者。それを野放しにできるわけがないだろうが」

「……お前の言う通りだ」

「サクラ？」

サクラが一步前に歩み出る。宗次は戸惑うが、そんな宗次のことなどお構いなしに雄平は言葉を紡ぐ。

「今回の協力は感謝する。だが、身柄とそのOSはこちらで拘束させてもらう」

「なっ！」

「わかった」

驚く宗次とは違い、無表情にサクラは頷く。それを見て、雄平は彼の近くにいた者たちへ指示を出した。

「白浜へ連れて行ってください。客人用の部屋がいくつかあったでしょう？ そのどこかへ。OSのほうも格納庫へ」

「おい！ 雄平！」

冷静な口調で指示を出す雄平。その雄平の胸倉を掴み、宗次は怒鳴った。

「どういつつもりだ！ サク」

「しっ！」

雄平が、宗次の口を塞ぐ。彼にしては珍しく、少し焦っているようであった。

「その名を出すな。後々ややこしいことになるだろうが。こっち来い」

雄平は簡単な指示を構成員たちにくつつか出すと、宗次を彼らから少し離れた場所まで引っ張っていく。そして、ため息を吐いてから呆れたように言う。

「お前は馬鹿か。せっかくリーダー……ああ、もう違うか。まあいい。とにかく、俺の考えを読んで向こうが乗ってくれたことを台無しにするつもりかよ？」

「どういうことだ？」

「……お前さん、ホントにあの樋浦京一郎の弟だろうな？」

本気で呆れたように雄平は言う。宗次は言葉を詰まらせた。

絶対者、樋浦京一郎。人を遙かに超えた頭脳を持つあの男の弟で

ある宗次は、周囲から頭もいと見られがちである。確かに回転は速いがそれは戦場限定で、戦場以外ではそこまで頭が回らないのが実情だ。

雄平はため息を吐くと、いいか、と言葉を紡いだ。

「お前はその辺の感覚がボケてるみたいだが、おれたち《ネームレス名も無き子供たち・チルドレン》ってのは今でもこの国の敵なんだよ。そして、おれたちは顔こそ割れていないがOSっていう目印があるさね。トゥーランドットなんてのはその最右翼だぞ？」

雄平が肩を竦める。紅蓮のOS トウランドット。その圧倒的な能力は、二年前まで宗次が使っていたOS シンをも凌駕していた。幾度となく戦場に現れては圧倒的な武力で敵を屠ってきたため、その威容は広く知られている。

そして、それを駆るのが《ネームレス・チルドレン名も無き子供たち》第零番であることも。

「その場凌ぎだが、とりあえずあのOSは正体不明。パイロットも正体不明にしていた。すぐにばれるだろうが、そうになったらそうなったでおれたちと同じように司法取引でもすればいいさね。そもそも、第零番は最後の決戦の前に離脱してる。そこも加味されれば、そこまで難しいことじゃないさね」

「司法取引……」

雄平の言葉を、繰り返す。それは、宗次が彼らに勧めたものだ。結果として彼らはそれを受け、国に飼われることとなった。

今思えば、何と残酷なことをしたのだろうと思う。恨み、憎む相手に飼われる 生きるためとはいえ、それは彼らにとって苦痛で

しかないはずだ。

雄平は沈んだ宗次の表情を見、苦笑する。

「気にすんな。おれは感謝してるさね。きついつちやあ、きついでどな。でもまあ、おれはおれにとって大事なもんを守ることができてるんだ。文句は無いさね」

「……………」

「お前さんはやっぱり英雄で、無敵だ。自分を殺そうとした奴まで許すなんてこと、普通はできないさね。……だからこそ、英雄なんだろうが……………」

雄平が、宗次の隣を通り過ぎ、歩いていく。

「ただな、これが現実なんだ。おれたちはこの国にとって脅威ではない。そして、恐怖を隣人にできないのならば、支配するか、されるか、もしくは根絶やしにするしかないんだよ。これはもう、人の業だ」

雄平の言葉は、冷たい現実を示していた。

去っていく雄平の背を見ず、宗次は空を見上げる。

「無力だな」

英雄と呼ばれても。たった一人の少女が連れて行かれるのをみていることしかできない。

手を貸し、助けてくれた相手が保護という名目で拘束されるのを、見ていることしかできない。

本当に、無力だ。

幾度目かもわからないその想いを抱き。
宗次は、空を見上げていた。

第二章「ECカノン」(後書き)

随分と前回から間が空き、申し訳ありません。

感想、お待ちしております。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0799w/>

救世主 メシア

2011年10月21日02時08分発行